

がんばれ掃除屋ちゃん

灰の熊猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の裏側、息衝く悪意と狂気。

右手に銃と異能を、左手に知恵と意志を。

立ち向かうは、怪異解決専門の掃除屋——
スライパー



同人ゲーム「Evening Starter」の二次創作作品です。

本作品になるべく忠実に、ありそうな事件をそれっぽくでつち上げてます。

作者様を応援するという名目の元に不定期に書き連ねていきます。

第三部完結につき連載完結扱い。

※短編集「I t h | V i d e o は観測する」始めました、R | 1 8 カテゴリよりお探
し下さい※

目次

欲望の船編

1.	二つのパッドニュース	1
2.	ろくでもない希望	8
3.	薄幸と発航	19
4.	見世物小屋の二兎	28
5.	欲の坩堝の中で	38
6.	動けず、動かず	48
7.	習うより慣れた	60
8.	その眼は鋭く	71
9.	荊棘	84
10.	毒を制すモノ	93
11.	成果は必ず現れる	104

幕間・高値と花 人食い山編

1.	ハイキングへ行こう	126
2.	備え無くして憂うのみ	137
3.	白い狭霧の中で	149
4.	牙を剥く森	162
5.	輪を組んで	174
6.	澱みの奥へ	185
7.	悪意の抜け殻	196
8.	無尽の悪夢	209
9.	侵喰	220
10.	帰るまでは遠足	232

巡る魔石編

1.	当たるか八卦	247
2.	タダより安い事無し	258
3.	音は劈き渡る	270
4.	夜よりも早く	283
5.	睡蓮は連なり	296
6.	窮させば逸す	310
7.	風を突き抜けて	325
8.	その刹那を止める	336
9.	過ぎ去りし物	349
10.	茫漠を追い	362
11.	来由と行末	376
12.	月華の暴威	390
13.	光満ちて	405

14.	満天へ至る	423
15.	跳ねる狂笑	435
16.	杭討	450
17.	最後の一枚	465
幕間	境界の狭間にて	477

欲望の船編

1. 二つのバッドニュース

「金がないわ……」

長い二つ結びにまとめた黒髪を両側の側頭に揺らし、野曾木蓮のそぎれんは視線を地面に落とし、
て独り言ちる。

表面的に平和に見える世界には、常に表からは見えない裏がある。人間関係、政治、国
際、勢力争い——そして、超常オカルトの物。

テレビ番組で語られる様な胡散臭い目撃証言や怪奇現象などの様な曖昧なものでは
なく、太古の昔より存在する古き神々——旧支配者とも呼ばれる、異形の神とその眷属
たち。

そういった、存在そのものすら正気を疑う化物は確かに存在し、その力に魅入られる
者も決して絶えない。超常を利用する者・される者、奪う者・奪われる者……それらは
確かに存在し、平和の陰で動き続けている。

犯罪に対して警察が在るように、それら超常の物に対しても抑止力は存在する。公的
組織未所属扱いの隠密部隊、退魔機関に属するエクソシスト、事情を知り裏側そちらがわに住む備

兵、超常を利用し扱う魔術師……そして、掃除屋^{スイーパー}。

「……どこかに数億円とか、ポンツと落ちてないかしらね……はは……」

夢みたいな事をぼやき、とほとほと哀愁を生み出しながら歩くこの少女もその一人であり、その道では知られた怪異事件を専門に処理する、凄腕の掃除屋である。

怪物や魔術師にも臆せず身一つで戦い抜いてきた彼女にも、打ち倒せない障害がある。金銭トラブルだ。

彼女はある日、唐館市^{からだて}の倉庫街に棲まう異形と戦った。人の身に余る程の再生力を持つ異形の群体に対し、単身で乗り込んだ蓮は対抗する手段を持ち合わせていなかった。

その為、彼女は己む無くその倉庫街に密輸され持ち込まれていた多量の爆薬を使い、倉庫街ごと異形の群れを焼失させた。

一般人への被害もなく、異形は撃ち漏らす事も無く完全に消滅。敵の規模を考えれば奇跡的な戦果であつたが、倉庫街に対する被害も相応に甚大。損害賠償の為に、当時の蓮は二十億の借金を背負うこととなつた。

「……政次郎くんからの仕事の連絡も……この所なし。情報屋も教団の最近の動向についてはわからない、裏流^{ブラックマーケット}しするブツも無い……金が、ないわ」

現在も蓮はその借金の返済に奔走しており、最近は専ら政府から秘密裏に依頼される“邪神教団”と呼称しているカルト集団関連の処理をメインに、その身を投じている。

文字通り命を賭け、勝った見返りは莫大な報酬。一歩間違えれば死体すら残らず、あらゆる公的な記録にも残らず行方不明——そんな綱渡りを彼女は何度も行い、そして生還してきた。

だが、政府から支払われる莫大な報酬も、彼女の借金の前では焼け石に水。常人ならば既に一生分の大金を得ているにも関わらず、借金は彼女の身から未だ離れない。

政府からの依頼のみならず、様々な超常絡みの問題の処理に奔走していた彼女だが、ここ最近になってついに裏側の情報が途切れる。有り体に言って、平和なのだ。

「はあ……絶対どこかにいるはずだと思うんだけど、ね……」

全ての問題が解決したのでこの街にはついに平和が訪れた、などという事はありません。数々の事件を蓮は解決してきたが、まだ邪神教団のトップを潰した訳でもなく、それ以外のカルト信者も暗躍している。だが、単純に見つからない。

表立つての行動や、不自然な動向も無ければ、情報も流れて来ない。情報は最大のアドバンテージである事を理解している蓮は、逐一自身のコネから怪異事件やその情報を探している。それでも今は「待ち」の時で、裏で動く者の尻尾も掴めない。

本来こういった隠匿されている情報は数週間に一度、何らかの違和感のある事が流れていけば良い方であり、蓮はむしろここ最近においては大活躍と言っても過言ではないほどの事件に対処してきた。

故にインターバルが発生する事も至極当然であり、それ自体は本来歓迎すべき事なのだが……如何せん、状況が悪かった。

「……また物価が上がるなんて、ツイてないわホント……」

命の関わる彼女の仕事において、医薬品は欠かせない物だった。銃器を持つ者と戦えば致命傷を避けても銃創は残るし、人を超えた異形の力で殴られればその衝撃で動けなくなる。

外傷を塞ぎ傷口を保護する医療キット、出血を止める止血剤、異常事態における集中力を繋ぎ止める栄養剤……これらの切れ目が、命の切れ目となる。

命あつての物種であり、こういった消耗品をケチる事は後になつて後悔を死という形で行う事になる。それを理解している蓮は、常に準備を怠らず、十全以上に薬品を抱えて仕事に向かう。

だが、ここに来てその薬品類の物価が上昇した。薬局で売られている様な簡単な物ではない、様々なルートを通じて裏側で流れる違法ラインの品物達が、である。

軍でも使われているような高級品を自身のツテから購入している蓮だが、いつも通りそのツテへと薬品の補充をしに行った時、こう言い放たれたのだ。

『オウ、野曾木の。悪イんだが、“いつもの”は不況で数揃えんのがキツくなつちまつてなア……。つーわけで今日からこの値段な』

文字通り吹き出す羽目になった値上がりにより、蓮の財布は死角からの攻撃で多量の被害を被る事となった。利息を払う為にある程度の備えはしていたとはいえ、相当に厳しい出費となつてしまい、今蓮は手持ちに不安を覚えている。

生活費は確保出来ているのだが、目下最大の問題は借金の利息の支払いだ。

週一度に来る利息の催促。これを支払えなければ、蓮は文字通り体を売らなければならないという、肉体的にも精神的にも厳しい状況にある。

今回の利息分を払った後、手持ちが殆ど残らない。どう計算しても、その結論に至る。よつて蓮は、自身の身の保全の為に一刻も早く仕事が必要だった。

「……いっその事、政次郎くんの爆弾とかこつそり抜いて横流ししちゃおうかしら……ダメね、バレて何言われるかわかったもんじゃないわ」

仕事仲間の所有物にまで思考に手が伸びる程、切実な悩みだった。このまま仕事が無く金目の物も見当たらなければ、蓮にとっては考えたくもない事態となる。それを考えずにはいられない程の状況だ。

「……ダメね、こういう時は良くない事ばかり考えちゃうわ。流れを切りましょう、うん。弱気でいたって仕方ないし、セーフハウスえに帰って寝ましよう、うん」

良くない考えを振り切り、問題を先送る事を選択する。

きつと明日は良い事が待つてるハズ、ちよつと今は流れが良くないだけ、こんな事が

ずっと続くなんてある訳ない。暗示に似た都合のいい思考を浮かべ、蓮は自分を慰める。

絶望的な状況に頭は逃避していても足は問題なく動いており、今の住居——蓮の元住んでいた屋敷は、借金の取り立ての際に差し押さえられており、現在は仮の拠点を置いている——まで、もうすぐの所だった。

かつて家のベッドの感触も忘れ、すっかり仮住まい先も生活の一部となつている。寝心地のイマイチなシーツの感触を思い出し、鬱屈とした気持ちに再び頭を落としながらも、蓮はセーフハウスの前に着いた。

「む、遅かつたな」

声を聞き、蓮が頭を上げる。セーフハウスの前に、一人の少年が立っていた。整った顔立ちを持つ、汚れたマントとスカーフが特徴的な男。

ある意味最も顔を見たくないが、最も顔を見る必要があるその少年。今の蓮にとっては、一つの救いでもあるその人物。

「政次郎くんじゃない。噂をすれば、つてヤツかしら」

政府の隠密であり、非公式な案件を上から通達されては蓮に斡旋してくる、お得意様。それが目の前にいる、この少年だった。

本来、蓮が借金を背負う事になった倉庫街での事件の責任は、一歩間違えればその当

時蓮の協力者だった政次郎にも降りかかりかねかった物であり、事件の規模を考えれば政次郎が処理すべき案件だった。

とはいえ、当時は一步対処が遅れば被害が倉庫街一つで済まなくなる程の状況であり、蓮自身が責任を負うことを覚悟の上で、被害が拡大する前に早期処置する事を選んだ為、責任の所在については既に決着がついている。

蓮自身も政次郎を通して政府から相応の扱いを受けている為、この二人にその事に関する蟠りは無い。

共に異形やカルト信者と戦う事もあり、軽口をお互いに飛ばし合う程度には仲は悪くない。最も、どちらも立場や性格上、お互いのテリトリーに深く関わろうとする事もなく、どちらかと言うと同意の上でお互いに利用しあっている、という関係なのだが。

「……で、何かしら。単に茶をせびりに来たってわけじゃないわよね?」

「安心しろ、お前の出廻らしの茶を啜りに来る程僕は暇じゃないし貧乏でもない。そもそも茶菓子すら出せない所に世間話をしに来る様なヤツはそういない」

「誰のせいだと思ってるのよ。……ってことは、やっぱり?」

「想像通りの仕事だ。お前向けのな」

「仕事の知らせに蓮は口角を上げて、” やっぱり日頃の行いが良いと違うわね” と思
い、ここまでの考えを全て忘れて、掃除屋としての思考に切り替えた。」

2. ろくでもない希望

「それでは仕事についてだが」

「ちよつと待つて政次郎くん」

セーフハウスで、蓮と政次郎は椅子に座りお互い向き合う。生死を賭ける仕事の話をするので、細かい打ち合わせも必要であり、腰を落ち着けて話すのは当然な事だ。

腰を下ろしていざ話そう、といった矢先に蓮が政次郎に静止をかける。

「……なんだ野曾木。もう一度言うが茶はいらんぞ。コーヒーなら許すが」

「そのふてぶてしさには怒りと呆れを通り越すけど、そうじゃなくて」

政次郎は一切動じず、泰然と座つて嗜好品まで要求する。彼もまた政府の隠密として数々の事件を秘密裏に処理してきた紛れもない裏側の人間であり、少年の見た目にそぐわない自然な落ち着き様は不自然ですらある。

だが蓮が言いたいのはそんな異様ないつものこと風格とは関係無く、今の蓮にとつてはそれなりの高級品であるコーヒーを要求された事に対する文句でもない。

「なんで政次郎くんがソファァに座つて、私がパイプ椅子に座つてるのかしら」

「空いていたからな」

蓮は外出から戻ってきた時、今回の補充品である薬品や護身用の銃器類——蓮は警察や政府に話を通し、非常時に備えて銃器を携帯している——、情報屋から受け取った暗号化された書類など、荷物を一旦下ろしてきた。

その時間の間に、さも当然の様に政次郎はこのセーフハウス内唯一のソファアールに腰掛けていた。差し押さえられる前の屋敷にあった、蓮お気に入り家具である。その座り心地は今や質素極まりない暮らしであるこのセーフハウスの家具において、まさしく最高級のものだ。

政次郎もまた、その事は知っている。蓮がこのソファアールをいたく気に入っている事も、このセーフハウス内において最も座り心地が良い場所である事も。

「まあ悪くないソファアールだ。このまま売り飛ばしても足しにはなると思うぞ」

「わかってて言ってるんだから最高にタチ悪いわ政次郎くん」

挙句の果てに品評して嫌味を飛ばしてくる。さすがに蓮のこめかみにも怒りマークが浮き出るレベルだ。当の政次郎はそれを見ても一切動じず、ソファアールに深く腰掛けているが。

「そんな事はどうでもいいだろう。仕事の話をするぞ」

「“そんな事”なら私とポジションの変更を要求するわ。私がソファアール、政次郎くんがパイプ椅子よ」

「断る。無駄な手間を取るほど僕は暇では無い」

「何かしら、てめエ……」

ついつテの診療所の強面の院長の顔と口調をトレースしてしまふ程には蓮は怒つていた。とはいえ、この二人の間ではいつもの延長線上のやり取りであり、このふてぶてしさがマントを着込んで内に爆弾を仕込んでる様な男の前ではどんな怒りも柳に風だ。

こちらのペースに引き込む事が不可能な以上、こちらが折れるしかない。蓮にとつてはソフアーはこのセーフハウス唯一の癒しであり、帰宅前には常にソフアーに沈みながらダラける事を考えている位には大事な物なのだが。せめて“おのれ政次郎くん”と思念を込めた睨みを飛ばす。

「まず、邪神教団に関連しているかどうかは不明な案件だ。今回の仕事はどちらかと言うと、調査に近い」

蓮が睨みつけた所で政次郎のステータスしせいが変わるわけも無く、一方的に話を切り出される。

「……調査？」

「ああ。調査対象はとある客船。ある国内クルーズ会社社長の個人所有こじんの豪華客船ゴッで、不定期で日本のあちこちを回っている。まあ、金持ちの道楽用だな」

「……」

「心の中で僻んだ所でお前の借金は変わらんぞ」

「勝手に人の心を読まないでくれるかしら」

金というものはある所にあり、平等に回らない。そんな実例を身を以て知っているつもりだが、やはり自分に無い物は羨ましく、妬ましい。心に感じた不平等感を言い当てられてさらに悲しみが増す。

「この客船はこの社長のコネクションのみが乗船を許され、国内あちこちの社長・重役・その他関係者の遊び場と化している。ここまでは何ら問題が無い」

「そんな船の調査って事は……行方不明者か、何らかの輸送？」

「不明だ。だが諜報班は、その両方を疑っている」

個人所有の大型船、という事はそれだけの人が出入りし、また人や物を運ぶ事が出来る。その上で蓮の分野に関わるとなると、最も考えられうるのは人身の誘拐や違法物の運送の二つだった。

超常現象、特に邪神関連で頻発するのが「生贄」だ。人を憑代に化物を作る、魂を捧げて邪神を呼び出す、力の維持に血肉を必要とする……同様に、表面上では出回らない違法な物も必要とする。

そうやって「利用」された犠牲者は、警察の捜査の届かぬ所で命を奪われ、殆どが「行方不明」となる。真実を家族に知られる事は永遠に無い。裏側で起きた真実は、表では

歪曲し虚実と化す。この手の話の、いつもの知られぬ悲劇。

「客船の乗務員は公的な手続きを済ませていない。あくまで社長が個人的に金で雇った、契約書無しの人間だ。その分給料は破格で、金に困った人間を捜して声をかけているらしい。——……」

「その“そう、お前のような”みたいな間を生む必要あるのかしら」

「随分な言いがかりだな」

「言葉より伝わる沈黙ってあるのよ」

「被害妄想というヤツだな、十分な睡眠を取りストレスに備えろ。お前が使えないと多少困る」

「……………マジで首輪の鎖のネットワークスはめてぶん殴ってやろうかしら」

“暇が無い”などとアピールしつつ、政次郎は忙しい様な節を見せない。この男が十分な余裕も確保せずに行動するなどまず無く、こうして目の前に姿を現しているという時点でじゃれ合う程度の時間は確保できているという事だ。

本当に暇も無く緊急な要件ならば、一方的に電話で要件と場所のみを伝えてくる。“報酬は用意した、伝えたぞ、行け”といった感じに、だ。……正直寝てる所を叩き起こされるのは勘弁なのだが、こちらの身を考えると文句は言えない。

「話を戻すぞ。今回の行方不明者は、その船の非正規雇用に集中している。船の上で

いなくなったか、船から降りた後でか、全体像はまだ把握しきれていない。だが、無視できる程の人数でもない」

「……それだけなら、まだ」買われた」つて事もあるんじゃない？ 脂ぎった人間の集まる場であら、無い話じゃないでしょ」

「無論そのケースは想定済みだ。行方不明の中には、船内での「取引」によつて移動した雇用者も少なからずいるし、一部は保護済みだ。……だが、その逮捕者かんけいしやから聞いても不明瞭な行方不明者がいる」

「……さつき言った、船の上で、つてやつ？」

「その通りだ。船上で姿を見せなくなった雇用者が多数いる。自身を案じての身投げ、と見て暫くは調査していたが……調査の結果、それも無かつたらしい」

船の外でお持ち帰りされた、船から海へ投身……これらが無ければ、考えられるケースは一つ。

「船の運行中に、消えた」

「調査の結果、そう考えている」

人が掻き消える、などという事は本来あり得ない。証拠も無ければ、誰かの罪を証明できない。だが、その「ない」事こそが、紛れもない証拠となる事象もある。

「それに加え、その船の運行のタイミング……船が着岸して少し日を置いてから、その付

近で怪異関係の事件がいくつか起きています。各地の隠密部隊だけでも処理できる程の些細な物だが、な」

「犯人はその船に乗り合わせ、人を消し、また怪異の種を運んでいる……または、船内で与えている、つてトコね」

「船の運行との関連性は未だ立証できていないし、各地の犯行も犯人が捕まっていないが……これ以上大掛かりな事になる前に、その客船を確認する必要がある、という訳だ」
「……なるほどね」

政次郎の情報は不確定な部分が多いが、本当にあやふやな情報であればわざわざ蓮の所に回すような事はしない。野曾木蓮という個人は高い能力を保有しているが、まだ人として逸脱こそはしていない。本気で問題を解決しようと思えば、政府の隠密部隊に事を回すほうが余程確実である。

だが、非公認の部隊を動かす事にはリスクが伴う。あまりに大人数で派手に動きすぎれば、隠密部隊は秘匿性^{その意味}を失い、情報が光の速さでやり取りされるこちら側においては察知される危険性もある。

また、警察などの公的組織を動かせるのは「踏み込まない」段階までだ。超常に対する理解の無い表の組織がいくら束になっても、ミイラ取りがミイラになりかねない。そんな問題が公に知られてしまえば、警察や政府に対する民衆の不信感^{おおきなこえ}は現体制への批判

として降り積もる。

……よつて、政次郎が蓮に仕事を頼む場合、その仕事は確実な案件か、限りなくグレーに近いブラックだ。蓮は政府から暗黙されているだけの非関係者であり、失敗した所で「代わり」がいる。そしてその中において、単独での状況処理能力に優れ、何よりも身軽な身だ。

最初に動かす駒として、蓮は自分の身軽さを売りにしている。金さえ払えば仕事はする、逆らう事はしないし、監視も了解する。そういった「都合の良さ」によつて、蓮は仕事を得ていた。

「……で、その客船に忍び込めばいいわけ？ 私に切り出すつて事は、その客船が次に来る場所はあんまり遠い場所じゃないんでしょ？」

「察しが良くて助かる。次に到着するのはここより隣の市の港だ。日時は三日後、深夜二時頃。それまでに準備を整え、潜入しろ」

「かなり急ね……まあいいわ、準備自体は整つてるし。……それより」
「報酬については調査内容次第だ。とはいえ、犯行が明らかで元を根絶出来たなら……このぐらいは堅いだろうな」

政次郎が報酬の頭一文字を指で表す。

「……桁は？」

「百だ」

「受けたわ」

「悩む必要は無い。未来の懐が既に一桁万円になる事が確定している以上、蓮に選択の余地は無かった。」

「成功報酬では、と言つてはいるが、調査するだけでもある程度は保証してくれるだろう。カルト信者の違法物が輸送されているなら、少しぐらいの臨時収入も見込める。」

「そう言つてくれると助かる。それと潜入の手続きだが、今回は何分急な事だな。潜入まではこちらで用意した通りに従ってもらおう」

「そうなの？ま、船が来るまでの時間的猶予も少ないし、私の負担が減る分には構わないわよ。……で、どうすればいいの？」

「まず、客船に潜入するのはお前とシスターと僕の三人。伊達、真魚は潜入できない。今回お前達は、非正規雇用者として乗船してもらおう」

「……………」

十三と真魚が潜入出来ず、ユーリヤと共に客船で非正規雇用。

政次郎のその説明から、何故か蓮の脳裏には理由のない嫌な予感が走った。

「…………」一応聞いておくけど、なんでそんな事に？」

「社長による個人的な非正規雇用だが、若い女性に集中している。男性雇用者は既に足

りているらしく、また昨今の行方不明者も主に女性が多い。穴埋めとしてお前達二人は申し分ない訳だな」

「……」

「また、船の発着場の警備は十全で、僕だけなら潜り込めるが他二人は厳しい。とはいえ、大型客船とはいえ狭い船内で僕が表立って調査するのは厳しいだろう。必然的に僕は無線によるサポートが主となる」

「……うん、なるほどね」

確かに政次郎の話には筋は通っている。なるほど、たまたま女性雇用者が必要とされていて、大人数の潜入はリスクがある。

容疑に過ぎない”確認”の為、客船に対して荒っぽい手段は取れない。それで表面上は雇用者として潜り込み、隙を見つけて船内の調査をするのがベスト。なるほど。

「それに加え、非正規雇用者は主に借金で首が回らない者が多い。お前達のプロフィールを公開しろという訳ではないが、雇用されるにあたりお前達の雰囲気はこれ以上なく有効だろう」

「雰囲気」

「……うん。いや、わかるけど。」

蓮の心中には言いようの無い靄がかかったが、そこはまあ納得は出来る。

しかし「借金」と「若い女性」という二つの単語の隙間にあるだろう何か、どうにも蓮の頭で警鐘を鳴らして止まなかつた。

「さらに言えば、船内の主だった施設は娯楽施設……小規模なカジノで、そこで調査するならば実際に従業員として居合わせるのが望ましいだろう」

「カジノの、従業員」

……なんか、未来が見えてきたような気がする。

大型客船、非正規雇用者、若い女性、カジノ。全ての点を、蓮の嫌な予感が一筋に繋げていく。

「……政次郎くん、ちなみにその客船の名前って、何かしら」

「「ホーフニユング」と呼ばれているらしい、「希望」という意味らしいな」

希望の客船。名前だけなら明るい未来を予感させる、よくある名の一つ。

しかし当の蓮にとっては、ろくでもない未来しか予想出来ない名だった。

3. 薄幸と発航

「へえ〜……君たちが、新しい」お手伝いさん」？」

「……ハイ」

「……そうです」

蓮に仕事の話が降ってから三日後の深夜二時、某港の発着場にて。蓮とユーリヤ・ミハイロフスカヤ——政次郎の話にあった「シスター」であり、蓮の仕事仲間の退魔師^{エクソシスト}である——は、中年太りと乏しい頭髪が特徴的な初老の男性と会っていた。

今回の潜入にあたり、蓮とユーリヤは政次郎の手回しにより、偽ったプロフィールで雇用希望を社長に飛ばしていた。先日逮捕されたこの船の人身取引者——隠密部隊が身柄を抑えている為、現状は逮捕されているとは公表されていない——の「オススメ」として、社長に直接雇用されるように仕掛けたのである。

来歴の偽装は完璧で、協力者もボロを出す事は無かったのだが……元々、この船の従業員は社長の好みの女性を集められており、最終的に雇用するかどうかは船が到着し、社長自らが二人と会ってから、と言われたのだ。

「うう〜ん……いいねえ実にいい……顔立ちも、スタイルも、写真以上に見えるねえ〜

「！」

「…………ど、どうも…………」

「…………お褒めいただき、ありがとうございます、ございます」

そしていぎ会つてみて、今に至る。目の前の中年——社長は、舐め回す様に視線を下下に動かし、蓮たちの横に回り込んで体つきを眺める、と肉欲に染まった動きで見定めている。

今の蓮たちはいつもの服装——動きやすいボンテージ服と対魔用の修道服——ではなく、最低限の私服でここにいる。蓮はゆつたりとしたニット服にいつもよりは気持ち長めのミニスカート、ユーリヤはジャケットとワンピース服、といった風に。

これは社長からの要望であり、曰く“かつちりとした服より普段着の時の方が人となりは現れる”といった建前で、私服姿で来るように言われていた。…………しかし。

（何が“人となりを見る”よ…………どう考えても、このスケベオヤジの趣味じゃない……………！）

いやらしい目つきで体の起伏を確認し、足をゆつくりと下から眺めている目の前の社長の様子から、人となりを確認する気などは少しも感じられない。あるのは単なる下衆な肉欲と、服の下に対する勝手な想像だ。

横目でユーリヤを見れば、口を閉ざして顔を赤らめている。これから雇用してくれる

相手に対して文句が言えるわけもなく、今はただ好き勝手に見られる羞恥に耐え忍ぶしか無い。

そうして見る蓮もまた、目の前の中年の歪んだ目つきと口元に対し、嫌悪感を抱きながらも何も出来ず、羞恥心に顔を染めていた。

「うおおつとお、いけないいけない。あんまりにも君たちが綺麗だからつい、ねえ？ 悪く思わないでくれよお？ はっはっはっは！」

「……いえ、気にしてませんから」

「……私も、大丈夫、ですのぞ」

「んうういいねえ！ 実にいい！ 恥じらいもある、それでいて反抗する気もちゃんと抑えてる！」 オススメ” などはあるねえ、まるで生娘のようだ！」

(悪かったわね……！)

実際、蓮は身売り寸前の身だが、まだ” そう” という事にはなっていない。そうならなないように動いているし、そうならない為にここにいる。しかし、そういう事を他人に指摘されるのは気恥ずかしい。

「それで、蓮花ちゃんとりーシャちゃん、だったね？ ちゃんとあの人から聞いてると思うけど、この船で聞いた事・やった事、ぜんぶ口外しないでね。あ、脅しとかじゃなくて、君たちの身の安全の為だからさあ？ はっはっはっは！」

「……ハイ、わかつてます」

「……聞いてきました、から」

“蓮花”と“リーシャ”は、今回の任務にあたり二人が考えた偽名だ。元の名前を大きく変えない程度にしておく事で、お互いに呼び名を間違えない様にする為の処置である。

社長に提出された偽造文書では“蓮花”はいい所の令嬢であったが、自殺した親が抱えた多額の借金を肩代わりした、という設定になっている。“リーシャ”の筋書きも似たりよつたりだ。……親が遠洋漁業に行った所は変わらなかつたが。

「いやーほんと助かつたよお。うちの船、最近なんだか従業員が少し減っちゃつててさあー。元々その場限り、つて子も多いんだけど……皆、どうしちゃつたのかなあ。給料足りなかつたのかなあ」

この客船は不定期運行の為、運行が一周終わるごとにそれまでの日給が即金で支払われる様になっているらしい。参考の為に政次郎に蓮が聞いた所、日給で数万円、働きによつては臨時ボーナスもあり。食事も客船内で賄いが振る舞われ、船内の客に気に入れば重役と同じ豪華料理を口にする機会もあるらしい。

その時、蓮は必ずかの豪華料理を口にしなければならぬと決意した。蓮には貯金が無い。蓮は金の関わることに對しては人一倍に敏感にならざるを得なかつた。

……というのは半分冗談にしても、不定期である事を除けばそんな高待遇を自ら捨てる者はいないだろう、と真剣に悩んでいる社長を見て思う。同時に、社長は客船の中で何が起こっているか把握する気がない、という事もわかった。

(金で解決しようとする、その場凌ぎの考え。結局の所、"残念に思う"というだけで、致命的な問題になるまではどうするか考える事もしない、って感じね)

掃除屋の目で、"悩む"フリ"をする社長を見定める。本当に困り、問題を根本的に改善する気があるのなら、原因の究明は必須だ。原因を突き止めないままの対処療法でその場その場を補修していても、本来の傷口から新たな血が流れ続けるだけ。

政次郎は金持ちの道楽と評していたが、道楽にそれほど細かく気を使う必要も無い、ということなのだろう。行方不明者と、その家族の事は"道楽"である以上、思考の隅に置く必要もない。

(……とはいえ、それがこの社長を長生きさせてるのかもね)

ただ、今回の事象は未確認だが、超常絡みである可能性は高い。もしもこの社長が消えた従業員の行方を細かく捜していれば、良くて失踪、悪ければ洗脳されて外面のみが人間のまま、中身がまるで別物に変えられる、などという事もある。

この社長が有能であればそもそもこんな形での潜入など出来まい。そういう意味では、この社長の無能さには蓮も社長自身も助けられている。複雑な気分だ。

「んじやあ今から軽くお手伝いについて君たちの指導役から説明があるからあ、船に乗ったらすぐ近くにいるタキシード姿のイケメンについていつてねえ」

(イケメンて)

(イケメンですか)

人を指し示すには随分変な表現だが、まあタキシード姿の男性などそう見紛う事は無いだろう。わかりやすいというのは助かる。

「はっはっは、いやあこれからの夜が楽しみだなあ！二人がうちの制服に着込んで目の前に現れる時がもう待ちきれないよ、はっはっは！」

(絶対ろくでもない制服着せられる)

個人的に集めたカジノの女従業員、という時点で嫌な予感止まらなかったが、この社長の態度を見てその予感は既に確信に変わっている。二人の作り笑いもいい加減ひきつつてきた。

乗船すればより事態が悪化するかもしれない——いやするのだろう——が、今はとにかくこの社長の目の前から去りたい一心の二人は、愛想笑いを浮かべながら「また後で」と心外極まる言葉により社長と別れ、乗船した。

「……新入りの方々ですね。蓮花さんとリーシャさんで宜しいでしょうか」

「あ、はい。蓮花です」

「リーシャと申します。貴方が、社長のおっしゃっていた……」

「指導役です。リーダーとでもお呼びください。名前は明かせませんので」

乗船して蓮たちを迎えたのは、鋭い切れ目が印象的な、タキシードの似合う青年だった。確かにイケメンと言われるだけの顔立ちをしている。

「仕事については着替えてから説明します。更衣室はこちらです、荷物もそちらにお置き下さい」

時間が惜しいのか、社長と違い手短に顔合わせを済ませ、「リーダー」はキャリーバッグを引いた蓮たちを更衣室へ案内する。

本来、「異界」——異形な者が棲まい、現実が変容した地——にも訪れる蓮たちは、十分な武装と医療品を持ち運び仕事に臨む。だが、今回の仕事は従業員として潜入する為、蓮愛用のシヨットガンや、ユーリヤの神の鉄槌スレッジハンマーなどの大型の武器は勿論の事、医療品も多くは持ち込めない。

拳銃ならば着替えを入れたバッグの底にでも仕込めるのだが、バッグ内の検査でもあればそれだけで潜入が終了する以上、不要なりスクは背負えない。結局二人は文字通りのほぼ身一つで潜入する事となった。

必要な時は別口で潜入した政次郎から予備の銃を借りる、という事も出来る為、余程の緊急事態でも無ければ問題無いだろう。それに、蓮にもユーリヤにも武器に頼らず自

衛する異能ちからはある。

(……と言つても、やはり銃が無いのは少し落ち着かないわね)

と言つても、頼れる相棒あいつが手元に無いのは先の読めない怪異絡みの事件では心細さを感ずる。ここに潜入する前。政次郎にシヨットガンやアサルトライフルなどの最大火力いっものも持ち込めないか、と蓮が頼んだ所。

『却下だ。潜入に支障が出る』

と、〃何をわかりきつた事を〃と言うような無表情と共にコンマ二秒で切り返された。既に人気の無い異界にいつもの五人で突入する時ならば、各々が重武装した上で医療品・弾薬もそれぞれが分担して持つていけるが、今回は内二人が未出動、内二人が空手である。政次郎一人で背負いきれる武装・弾薬にも限りがある。

最初は『現状の規模から言つて大事にはなりにくいだろうし、そもそもお前に過剰な武装そんなおもちゃは必要無いだろう』と言つて、蓮の分の拳銃まで持ち込もうとすらしなかつた。蓮の異能は素手でもなんら関係が無く使えるもので、銃よりも強力である事は仲間内では周知の上である。

しかし、ある程度の集中でできる状況でなければ味方も識別せずに巻き込む危険性も孕んでいるし、緊急時にはまどろっこしい。引き金を引くだけで暴力が音速を超え、ある程度の障害を排除できる銃というのは随一の存在であり、欠かせないものだ。

「……蓮花さん」

「ん、何？リーシャ」

リーダーに先導され、更衣室へ歩いている最中にユーリヤが小さく話しかけてくる。

「嫌な感じがします。……微妙ですが、魔術的な残滓が残っている、ような」

「……本当に？」

「ええ。……本当に僅かなもので、どれぐらいの規模かはわかりませんが」

「当たり前」

退魔機関のエクソシストであるユーリヤは、魔術的な感知能力——主に異界の神々の呪術や霊的存在に対してだが、それ以外にも精通している——は際立つて高い。

こと魔術知識に限定すれば蓮より僅かに劣るが、こと感知・察知という点においては仕事仲間内でもトップクラスであり、その精度は蓮の知る中の他を寄せ付けない。蓮が感じられない事象でも、彼女ならば感じられる。ユーリヤが感知したならば、この船は“当たり前”だ。

「……これから、長い夜になりそうね」

出港を手短かに告げる船内アナウンスが聞こえる中、汽笛すら鳴らさず、客船は街の僅かな光からも離れて夜に消えていく。出港を周囲に感じさせない船の静けさが、夜に潜む不安を煽り立てた。

4. 見世物小屋の二兎

「これが今度の新入りさんかね」

「ハイ、資料では元良い所の令嬢だったらしいですよ」

「……なるほど、例のルートからか」

「負債は相当な額だそうですよ」

“制服”に着替え終わり、新入りの担当する簡単な仕事と一連の流れをリーダーから聞かされた蓮とユリーヤは、顔通しとしてまず乗客のいるラウンジに案内された。

二人が訪れた時点で、このラウンジにはそれなりの人数がこの場に集まっていた。今回の乗客はおよそ三十名ほど、今ラウンジに来ていない者も数人いるらしいが、それでもいかにも一部の裕福層といった余裕のある風体を持つ、仮面を被った男性達——この場にいる乗客に女性はいない——が集まっていた。

ラウンジと一緒に訪れたリーダーは蓮たちの事を乗客に対して、よく通る声で名前と新入りである事のみを簡潔に紹介した。“これ以上の情報は不要”というように、極めて短くりリーダーは切り上げ、蓮たちの後ろに二歩下がる。

今この場に訪れている乗客たちにとって、興味は十割がた新入りの確認と、それに対

する”品評”である事は事前にリーダーに説明された。

「夢、破れたり——か。フツ、だがこのクルーズで生まれ変わるさ」

「お持ち帰りされなければ、ですが……」

「ま、そういうことだ。では始めようか」

ラウンジの中央に立っている蓮たちは、手が届かない程度の距離まで近寄ってきた乗客に眺められ、あちこちから好き勝手に言われていた。乗船前の社長まではいかないものの、客たちはそれぞれ仮面の内側から下卑た視線で二人を眺め、それぞれの反応を見せている。

感嘆の籠った吐息を漏らす者、後ろ側に回り確認をする様に視線を投げてくる者、数人で互いに二人を比較して蓮たちの風貌を語り合う者、椅子に腰掛けて愉快そうに拍手を飛ばしてくる者——反応は多種多様であったが、そのどれもが女性を素直に褒める印象を一切含んでいない。

……彼女たちの現在の服装を考えれば、男としては当然の反応ではあるのだが。

（予想通りとはいえ、これ結構際どいわね……ああもうつ、そんな眺めないでよつ……！）

二人が制服として渡されたのは、それぞれ黒と臍脂で染められ、胸元から肩・腕にかけて上体を露出し、胸から局部にかけてひと繋ぎとなっている下部のV字ラインが特徴

的なボンテージ服。それに足全体を軽く締める細やかな網タイツとの組み合わせ——いわゆる、バニーガールの衣装だった。

奇しくも色合いこそはいつもの服に類似しているが、その実態はまるで違い——蓮がいつも着ている極度に脚を見せつけるミニスカートや、上半身を強く強調するボンテージ服は傍から見ればそう変わるものではないのだが——、女性の羞恥心を煽る様に仕組まれたこの制服の面積と組み合わせは、着替える前から今まで二人の顔を赤く染め続けていた。

「んんん……この子達、〃ウリ〃はあるのかね？する予定は？」

「申し訳御座いませぬ〃十六番〃様、現在はこちらも無い、としています。何分初乗船です、次回があるかどうかも……」

「んんん……！勿体無い、実に勿体無いぞ、この子達……！これだけの逸材ならば始まった直後にオークシヨンとリになるだろうに……！」

「不躰かつ此方の都合で申し訳ないのですが、昨今ここの従業員も減っています。あまり強いれば、二の舞かと」

「んんん……ならムリは言えん、なあ……」

“ XVI ”と刻まれた仮面の小太りな男性が、リーダーに窘められ心底残念そうに前のめりした体を下げていく。どうやらこの船においては乗客を名前で呼ぶ事は無いらし

い。

不本意ながらも乗客たちと視線を交差させれば、ラウンジ内の客と思われる全員が、同様に目元を覆い、仮面の何処かに番号が刻んであった。仮面舞踏会マスカレイド気取りという事だろうか。

(大方、免罪符つてところね)

見る人が見れば誰なのか丸わかりな、陳腐なデザインの仮面。これもまた、社長がこの場集っている何者かが考えたお遊びの一つなのだろう。

この船上では普段の立場しがらみを忘れ、隠している自分自身を出す為はこの場で許される為の異様の仮面。あくまでここでやり取りし、ひけらかすのは“仮面”であり、その裏側にはノータッチ。そういう了解なのだろう。

ただ、どうせなら目つきも隠せるようなデザインの仮面に変えてほしいというのが、視線で体を撫で回されている二人の正直な心内ではある。これではまるでペットシヨップの動物だ。……より立場は悪いか。

「ねえキミキミ、名前は？なんていうのかな？外国の人なの？」

「り、リーシャと申します……生まれはロシア、です」

「へえ〜ロシアから！いいねえ、肌が白くって！スタイルも……ほほお……？」

「……………う、ううう……………」

ユーリヤは既に耳まで真っ赤に染め、体の前で両手を恥ずかしそうに重ねて指を擦っている。衣装と姿勢によって突き出るように強調された胸部を、言葉も出ないと言うように“二十五番”の男が眺めている。

下手をすれば欲望に突き動かされ、その肌色に手を伸ばしそうな空気が口から漏れている相手に対して、ユーリヤは“見ないでください”と言うような困り顔を見せるしか出来ない。そういつた姿こそが、男にとって逆効果ではあるのだが。

蓮の方にも頭の中でこの集まりについて冷静に評価を下している最中に、こういつた輩が何人も近寄り、軽い質問とユーリヤ同様の“鑑賞”を受けていた。だが、この場でこういつた人種はユーリヤの方に多く流れていた。

「リーシャちゃんさ、この、これいくつぐらいあるの？90はあるよねえ……う？」

「いやいや、それよりもこの腰つき……これは、いけませんよ……」

「まるで人形の様に完成されている美に、この体つき……これは久々の“最上”とは思わないか、諸君」

「その中でも群を抜いている、と言ってもいいだろうな……おお……」

「……………っ！」

蓮もユーリヤもどちらも容姿は万人に一人というレベルの美女であり、タイプこそ違えど百人が百人「美人」と答えるだろう女性で、比べてお互いに見劣りする様な事はな

い。

ただ、この場に集う者たちにとつても、異国出身の美人というのはそう拝めないものだった。蓮もまた日本人離れた容姿とスタイルを持つていたが、“物珍しさ”という点においてこの場では一つ落ちた。

……決してユーリヤの方が人気を集めているので少し悔しいとか、そんな心理は蓮には無い。無いと心で言葉にしている。こんなのが集まる以上むしろマイナスだと思つてゐる。そう思いを頭で考えている。

「気に入つてもらえたようで何よりですが、皆様質問も程々に。スケジュールはいつも通りに進行、これ以降は新入りもカジノ内で働いて頂きます。個人的なお誘いや深入りについては、その際にお声掛け下さい。……また、カジノ内での“オイタ”は罰則です。必ず、当人と私に許可を取るようにして下さい」

その場で乾いた音を両手で二度鳴らし、リーダーがその場の全員に告げる。リーダーの話は鵜呑みにするならば、危惧していた最悪の事態はどうやら避けられるらしい。……実際の所はどうなのかわからないが。

リーダーの合図を皮切りに、蓮たちを取り囲むように集まっていた乗客たちは渋々といった様子も端々に滲ませながら、散り散りになった。一端離れたというだけで、未だに遠目から蓮たちを見比べて話題としている者たちも多いが、聞こえなければ精神的に

は問題ない。

「……お二人とも大人気ですね。この調子でいけば、ボーナスも間違いないでしょう。お客様の機嫌を損ねないように頑張ってください。それと、お客様に望まぬ事を強制された時はお呼び下さい。度の過ぎた事であれば、対応します」

「……ハイ、ガンバリマス」

「あ、ありがとうございます……」

蓮の境遇を考えると思わぬ形での臨時収入が手に入るかもしれない事は嬉しいことなのだが、状況が状況なだけにいまいい気がしない。ユーリヤも立場的には似たような——彼女もまた、蓮とは別の理由による借金持ちである——ものだが、蓮以上に関心を集めてしまっていた以上、比べて気疲れが目立っている。

とはいえ、こんな場でまで“お相手”をする必要が無いのは助かる。目の前の男が対応する、という事はこの場での乗客の暴走が起きた場合、それを抑え込めるという事だ。恐らくは武道などの心得があるのだろう。政次郎ほどではないが、そういった人種特有の落ち着きを感じる。

「では、カジノへ案内します。これからは長い仕事となります、お手洗いの方も今の内にお済ませ下さい」

「あ、それじゃあ私、行ってきても」

「どうぞ。リーシャさんは……」

「いえ、大丈夫です」

蓮は潜入前に予め決めていた簡単なサインをユーリヤに送り、手洗いに向かう。『政次郎へ報告』のサインだ。潜入直後、余裕が出来たら必ず一次報告をする様に政次郎から言われていた。万一政次郎が潜入に失敗したなら、連絡が取れない状態である事を確認する為のこともある。

手洗いに入り、まず真つ先に監視カメラや盗聴器を確認する。倫理的にアウトな事でも、こういった場なら起こりうる。政次郎せんもんかから事前に聞いた怪しい場所を手早く調べ、問題が無い事を確認。奥の個室に入り、蓮のツイントールを結ぶ髪飾りから、事前に仕込んだ小型イヤホンとマイクを取り出した。

小型だけに音質や有効距離は通常の無線に一步劣るが、その分隠密性はピカイチな一品だ。最悪の場合は、蓮の力で“溶かして”証拠を隠滅する事も出来る。いつものスマートフォンも持ち込めない服装な以上、連絡はこれ頼りだ。

「はあい政次郎くん。潜入は失敗したかしら」

「——随分なジョークだな、僕がお前の様なヘマをするとと思うか」

「……通話感度は良好。無事みたいね」

『ああ。船内は持て余した区画が多い、僕一人ならなら問題なく隠れきれらるだろう』

「さすがは政府の隠密、かくれんぼはお得意ね」

『お前のように無駄に派手ではないからな』

「お望みなら派手な見た目にしてあげるわよ政次郎くん」

小声で怒気を伝える器用な真似をしつつ、お互いの潜入の成功と無線の有効を確認する。

「こちらは二人とも今のところ順調。乗船直後にユーリヤが“痕”を感知、場所・規模は不明。これからカジノに入るとこ。そっちは？」

『潜伏にあたり人気の無い都合の良い場所を探索しているが、現状それらしい物は未発見。引き続きこちらで調査する』

「オーケー。次の連絡までそっちはよろしく、政次郎くん。オーバー」

『無論だ』

お互いの一次報告を済ませ、手早く切り上げる。基本的に蓮かユーリヤが自由な時以外は、連絡は出来ない。よって、常に情報を共有する際には二人の方から連絡し、政次郎はそれを待つ、と事前に決めていた。

連絡の際はなるべく不自然にならないよう、蓮とユーリヤが交互とまではいかずとも、ある程度連絡を取る人間を入れ替えるよう言伝もされている。あまりあつてはいけない状況だが、二人の間で情報が共有できない……分断された状態の時、連絡先を介し

てお互いの状況・情報を伝える為だ。当然その為、ユーリヤも同様の通信手段を所持している。

「……はあ。情報収集する為とはいえ、今から気い重くなってきたわ……まーた見られなきやならないのよねえ……」

通信を終えて自分のやることを再確認すると、再びあの伸びた鼻面や生温い視線を思い出す。どの程度までのセクハラなら拒否していいのだろうかと、蓮は個室内に座りながら項垂れた。

5. 欲の坩堝の中で

「ははっ、今日はきてますなあ！今日は勝たせてもらいますぞお……？」

「なんのなんの、まだ序盤ですからな！勝負は長いもの、野球はツアアウトからですな！」

「くくく……ご無礼、5から9までのストレートです……！」

「ぬうう!? ええい、次で取り返す！ベツトだ！」

「ロンツ……！ロンロンツ……！ロオンツ……！駆け巡るわしの脳内物質……！」

「聞こえなかったか？頭ハネです」

「う、うう、おううう……!?!」

客船内、カジノフロア。船内で最も広いこのフロアに、恐らくは乗客の殆どは集まり、それぞれの遊戯に興じていた。

カジノと言っても、ここで行われている競技はブラックジャックやポーカーなど、この華やかな場に合ったものもあれば、麻雀やチンチロリンなどあからさまに場違いなものも多い。

また、この場にディーラー役はいない。この場での勝負は客対客の直接勝負のみで、

カジノ内にいる船の従業員は蓮たちのような給仕代わりに配置されているバニーガールと、リーダーを含んだいくらかの男性警備員のみだ。

乗客はカジノ内でチップを購入し、それを賭けて客同士による勝負をする。不当なディーラーのイカサマを根本的な存在から消すことにより、気楽に素人同士での勝負を楽しめる、という触れ込みらしい。

中にはなんでもありのテーブルもあるらしく、そちらの方には暴力沙汰に備えて警備員が近く配置されている。とはいえ、イカサマをした所で船側から退場勧告がされたり、何らかのペナルティが与えられる事はない。そういった問題は全て当事者に任す、という放任的な姿勢らしい。

(ただ眺めるだけなら結構気楽なんだけど、ね)

リーダーから言われた仕事は、なるべく笑顔でいること、お客様からの注文があったら持つて来る事、お客様から傍にいる事を指示されればしばらくはじつとしていた事、といった簡単なものだった。

ディーラーを任せられたり、客の監視や何らかの特殊な仕事があるのかと身構えていた分、少し肩透かしを食らった。とはいえ、ディーラーの経験があるわけでも、こういった勝負事に慣れているという事もない。思った以上に楽が出来るのは素直に助かる。

また、定位置についている必要もなく、むしろ積極的にあちこちの台の近くを回るこ

とも推奨された。これは嬉しい誤算で、客同士の会話を自然に盗み聞いて回る事が出来る。あまり露骨に動き回れば怪しまれるだろうが、上司からの公認ならばある程度の動きは問題にもならないだろう。

……ただ、この「言われたらじつとする」、「台を回る」のが少々悩みどころだった。「んんん……やはり運氣がまだ足りん、なあ……？失礼するよお」

「っ！」

ゲーム中の「十六番」の男が、唐突に蓮の太腿を撫で回す。蓮がこの台に回ってきた所、この男に『しばらく勝負を見ていてくれないか』と頼まれたのだ。

言われた通りにゲームの調子を眺めていた所、十六番の男はツキも腕もまいちとといった印象で、このゲーム内で最下位に落とされたまま、大きく勝つことも出来ず彷徨うろついてていた。

そこにきて、負ける度に蓮の体を許可なく触るようになったのだ。腰回りや太腿、臀部など……ある程度満足するまで、無遠慮にただ感触を掌で確かめる。

“じつとする”とはこういう事だった。リーダーにわざわざ仕事として言われた時点である程度は予想していた事ではあったが、実際にされれば不快さは抑えられない。今まで軽く撫でる程度の力加減ではあるが、どこまでされるかはわからない。

“度の過ぎた事であれば”と、リーダーは言っていたが……逆に言えば、明らかな行

為になるまでは耐え忍べ、という事も言外に含んでいたのだろう。判断はこちらに委ねられているが――

「んんん！やはり来ましたなあ、運氣！キングのスリーカード、ここは一人勝ちですぞお！」

十秒足らず撫で回した後、男はゲームに戻る。長く触り続ける必要も無い、感触が欲しい時はいつでも得られる。不快にさせすぎれば、蓮が台から離れてしまう事も有り得る。

そういつた思惑からか、男はソフトタッチの範囲内に適度に繰り返していた。こういった光景は蓮のみならず、他の女性従業員にも散見される。蓮と同様に初めての事なのか、恥じらい縮こまる者もいれば、慣れているのか澄ました顔で体を自由に触らせている者もいる。

中には複数の客の間に立ち、あちこちを同時に触られている者もいた。こちらもこの仕事の先輩のような慣れた印象が見えるが、さすがに恥ずかしいのか表情は変えないまでも顔を赤らめている。

この状況下でも、リーダーは眉一つ動かさず平然とフロア全体を眺め、巡回している。客の中には従業員を触りながらもリーダーに薄っぺらい笑顔を飛ばす者もいた。リーダーはそれに軽い礼で答え、無表情で巡回に戻る。

(つ……あのぐらいの事は、“度”を過ぎてないわけ、ね)

勝ちに喜んだ男が『君のおかげだよ』と笑いながら、再び体に触ってくる。感謝を表しているつもりなのだろうか、少し感触は強い。わかつてやってるのだろうか、感謝されても嬉しくもなんともないし、不快感はより強い。

とはいえ、これもまたすぐに手を離してゲームに戻る。ある程度の不快感は色付けとなり、その分反応が楽しめる——といったような、支配感の滲む笑いが見えていた。

「いやあ、いい手が入りますなあ。勝利の女神というやつですか……ワタクシどもも、その運氣にあやかりたいものですか？」

「んん……確かに、運氣を独り占めするというのも巡りが良くない。何より、幸せは皆様と共有すべきものですからなあ！」

「違うない！はっはっは！」

(……少しは自制しなさいよねっ……)

この調子では、暫くの間はこのテーブル内の客同士で“共有”されて、他の台を回することは難しいだろう。遠くのユーリヤの方も流し見れば、そちらもまた同様の状態のようでかなりの間同じテーブルに留まり続けている。

拒否をしようにも、他の従業員と比べれば蓮たちに対するそれは軽度なもので、周囲の扱いと場の空気を考えると文句は言いにくい。不快ではあるが、離れづらい。そう

いった心境にさせられている。

……考えるに、これも“遊び”の一つなのだろう、別のテーブルでは行き過ぎた接触を繰り返しすぎて従業員に逃げられる客もいた。“どこまでいけるか”という欲の我慢比べだ。

考えれば考えるほど、片方の口角が不自然に吊り上がる。とはいえ未だ初日、他の従業員よりも遙かにマシな現状に文句を言うわけにも、ましてや目立つた問題を起こすなど以ての外だ。情報収集については今日は捨てるぐらいの気持ちで、この場に慣れる事を優先すべきだろう。

「ひあつ——」

「ほっほっほ！これはいい運氣ですなあ！ん〜いい！」

「黒い兎は凶兆などとも言われていますが、こんな兎ならば毎日見たいですなあ！」

「んんん、心配せずともこれからの夜にはいくらでも見れますぞ！」

「はっはっはっはっは！」

(ぶち込んで昏倒させるわよエロオヤジども)

“十八番”が蓮の内腿の深い所を指で一瞬なぞり、意図せぬ声を上げてしまう。他人にあらぬ声を引き出され、怒り半分、それを超える恥ずかしさが顔に現れる。それを横目で見て、客たちはさらに愉快そうに笑う。もはや盤上の勝負より、蓮で遊ぶ事に心が

いつている事は明らかだった。

怒りの感情に合わせ、無意識下で体の中で異能が準備され、見えない様に軽く攻撃してやろうかと頭に過る。とはいえ、自制できない程の状況でもない。体の内で一度は燻つたものが、分解されて元に戻る。

(……厄日だわ……ほんツと、厄日だわ……)

こんな事がこれから毎日続くのかと思うと、さすがに作り笑いに影が下りた。



「——という感じで、ろくに回れずエロオヤジの他愛もない雑談と笑い声ばつか聞かされて、こちらは収獲無しよ」

『シスターの方も同様だ。大人気だな』

「イヤミかしら政次郎くん」

『そうだが』

「マジで次会う時を楽しみにしなさいよね」

日が昇り始める頃にカジノは一時お開きとなり、従業員は休憩時間となった。船の中では常に制服を着用する事を命じられているが、各々与えられた個室内ではその限りはない。現在蓮は制服を脱ぎ、下着と上着一枚を着ただけのラフな格好で寝具に転がり、政次郎に現況報告していた。

よほどこの客船はスペースを持って余しているのか、従業員にも一・二等級ほどの部屋を個室として与えていた。リーダー曰く、『評価を得るために従業員がお客様を誘う事もありませんので』との事らしい。かんがえたくない。

『規模の割に従業員の数も少ないのは隠れる側にはメリットだが、こうも区画が多いとこちらの調査も全体からすれば進んだと言いたい辛い。未だこちらも収穫無しだな』

「とはいえ、これだけ時間があれば政次郎さんの近くはあらかじめ調査済みでしょう?」

『ああ、あからさまに人気の少ない場所は精査済みだ。この調子では、人通りの多いフロアにある可能性も無視できまい』

「ユーリヤがなんとか感知できる程には小規模の、もしくは隠蔽された魔術だものねえ……私だとさっぱりわからないし」

『いつもは頼んでもないのに魔術知識を語るくせに、肝心な時に使えん』

「耳がいらぬなら聞こえないようにしてあげるわよ……」

心労の絶えない中で見せかけだけでも笑顔を続ける仕事有一段落した所で、一言言われるとさすがに苛立ちは隠せない。とはいえ、怒りよりも疲れの方が大きく、いまいち語気が弱くなるが。

『……その声色だと、相当だな。仕方あるまい、こちらの探索範囲を広げる。こちらは無理は出来んが、動ける時間は多い。存外、僕のが先に見つけられるかも知れん』

「……それはそれで、今までの苦勞が無駄になってやな気分になりそうだわあ……」
 『目的を見誤るな。大事おぼしにしなれば、過程などどうでもいい。お前らが動く分、こちら
 も事態を把握しやすく動きやすい。仮に僕だけで解決したとしても、報酬は問題なく掛
 け合おう』

「そおーだけどそおーじゃなーあーいー……」

寢具の上を力の抜けた様子で左右に転がりながら、蓮がぼやく。ゆつたりとした上着
 は転がっている内に肌蹴へそて、裾は臍へそのあたりまで持ち上がっている。男が見れば情欲を
 掻き立てそうな様相だが、止まらない溜息と死んだ目つきが色気を全て相殺していた。

『……まあいい。とにかく、集められるだけでいいから情報を集めろ。無理なら従業員
 の移動状況や大まかな配置などを寄越すだけでも構わん。ボロだけは出すな』

「わあーかーつてるわよおー……あ、あ、あ、あ……」

声を泥に浸けた様な音を喉から鳴らしつつ、通信を終了する。正直、思った以上に面
 倒な状況だ。フリーな政次郎は人の目を気にして消極的な動きを強制され、自然に情報
 収集できる蓮たちは多くの制限こえがかけられる。

第一印象がなまじ良かった分、蓮たちには注目が集中している。次は次で別のテーブ
 ルに呼ばれて、足を止めさせられるだろう。カジノの業務時間外に動くにも、睡眠・着
 替え・入浴を除き、食事の時間やラウンジの歓談時間なども、カジノ内と同様に乗客か

らの注文や忍耐を要求されるらしい。

入浴時間はローテーションに従い順に多人数で入浴する事を求められ、清掃は女性従業員には回つてこない。睡眠時間は室内以外は完全消灯、暗い通路での頼りは読みにくい船内地図と備え付けの懐中電灯のみ。詰まる所、うまく抜けての単独行動が難しい。

「……はあ……とはいえ、なんとかしないと、いけないわよ、ねえー……」

正直今はセクハラに耐えながらも慣れない愛想を絞り出して、気力が底の底だ。とにかく寝よう、寝る時だ。明日はきつと好転するさ、きつと、おそらく、たぶん。

そんなペラペラの慰めを心に貼り付けながら、疲れに引かれるようにして蓮は眠りに落ちた。

6. 動けず、動かさず

(マジで何も出来ないわこれ)

乗船して二日目の夜のカジノフロア、昨日と殆ど同じ状況に作り笑いの角度が徐々に削られる中、蓮は軽く絶望していた。

結局起きてからも懸念していた通り、個人で動ける状況はほぼ無かった。食事中は給仕として飲み物を注ぐ途中に胸元を近くから覗かれるし、食事を運ぶ最中にテーブルの傍を歩いている最中に臀部を撫でられるし、挙句の果てにわざとフォークやナイフなどを落とし、自身の目の前で拾うように命じられた。

それ自体が問題なのではなく、命じた客は椅子に座りながら拾っている蓮に体を向け、妙に膨らんだズボンを見せてきた。さすがに不快感も隠しきれなかったので、早々にその場を離れたが。

どうも例の遊びはいつでも絶賛開催中らしい。あちらにとつてはなんら賭けるものも失うものもなく、単なる余興の一つなのだろう。反吐が出る。

リーダーが人員管理において有能なもの向かい風だった。ここで働く女性従業員の把握は完璧で、蓮やユーリヤが心労で忘れそうになっていた予定も、ローテーション時間になればきち

んと告げてくるし、必ず同時刻のローテの従業員を数人つけて行動させてくる。

『船内は無駄に広いので、初めの内は迷う従業員が多いです。移動時は必ず先輩方と行動し、質問はすぐ彼女たちか私に聞いて下さい』との事だ。迷子のフリも許されない至れり尽くせりっぷりに、涙が止まらない。

(……というよりは、警戒されてる、のかしらね)

ここまで無表情で何かと二人に細かく指導してくれているが、言葉は定型化されているように温度が無い。手厚いサポートに、自動的なやり方。どうにも、自由を制限されているとしか思えない。

蓮やユーリヤが特別警戒されている、という事でもなく、どうも従業員全てに対し問題を起こさせないように動かしている節がある。他の従業員の扱いを見ても、一切の温度差が無い。

(目の届くよう駒を配置してる、って感じかしら)

最も近い表現がそれだ。通常の業務内で一切の他の突出を許さず、自分の視野と時間割に全て置く。問題や面倒を考えられうる限り排除出来るよう、決まった動きに収めようとしている。

こういった重役の集う秘密裏の場所においては、何かとトラブルが付き物なのだろう。携帯電話での密告や盗聴など、考えてみればキリは無い。それを警戒してか、昨日

制服に着替えた後に荷物や衣類は一時押収されている。

荷物はスマートフォンなどの通信・記録が出来るものは預かられた。衣類には何か仕掛けられて戻ってきたという事はなく、綺麗に洗濯されていた。恐らく、衣類に盗聴器やレコーダーなどを隠していないかを疑ったのだろう。ボディチェックで髪まで確かめられていたら危なかったが、そこまでは無かった。

ただ、入浴時に他従業員にしろじろと見られていた。何もスタイルに見惚れられていたということでもなく、何か隠し持っていないか見るようリーダーに言われていたらしい。とはいえチェックが遠目な素人目の為、通信機は問題なく隠し切った。

(……多分、昔“そう”いった事があつたんでしようね。で、問題に対処する為に
テンプレートの仕事を徹底した、と)

現在の仕事のしやすさはそういう事と見て間違いない。考えられる範囲で事前に対処し、目に映る範囲は全て対応できるように動く。

リーダーを無力化する事自体は問題なく行えるだろう。どれほどの腕前かはわからないが、仮に武道の達人だったとしても見えないように攻撃したり、察知されない様に抵抗力を奪う事は蓮の得意分野だ。向こうが一般人の範疇である限り、どうとでも出来る。

ただ、無力化した所で行動するアテがない。どこが怪しいのかすらわからず、犯人の

所在も一切絞れていないこの現状では、このローテーションを無効にした所で何も出来ない。

また、リーダーを仮に無力化しても、常に客の近い場所で働いている彼が唐突に倒れたり不調を訴えれば、近くに犯人がいた場合に警戒を促す事となる。

(……)「ボロは出すな」、って言われちゃってるしねえ)

こうなると、犯人側が動くか、情報がこちらに勝手に転がってくるのを待つしかなくなる。何らかのイレギュラーが起きない限り、積極的な行動は取れない。

動きがあるまでは政次郎に任せる事にしよう。……正直な所、さつきからたまに体を感じる無遠慮な感觸の事を考えると、どんどん気力が萎えてくる。

「いやあしかし、やはり美人がいると違いますなあ！心まで華やかになりますのう！」

「もう来なくなつた子達を含めて思い出しても、どこもトップクラスというのもいい！」

「出来れば次回のクルーズもよろしくお願いしたいものだねえ、蓮花ちゃん！」

「……………」

何一つ華やかさや清らかさを感じさせない外面と内面を見せつけながら、よく喋るものだと思う。なんかもう怒りと呆れを一周してセカンドラップで追いつくレベルだ。

……とはいえ、これは好機だ。

「ねえおじさま方？本人を目の前にして別の子の話をするとするのは、少々妬けちやい

ますわよ」

「おおつと、それは失礼したねえ。いやはや、今日の前にあるこの瑞々しい果実を大事にせねばなあ！」

「……いえ、別にいいですわ。それよりも、少し気になるのですが……これだけおじさま方に大切にされて、楽しくお金ももらえるお仕事ですのに……何故いなくなる子がいるんですの？」

もうこの場の客の放つ言葉のセクハラは、慣れというフィルターによってある程度とどかなかく、濾過されてきている。思つてもない言葉を精一杯盛り付けながら、情報を聞き出し始める。

「ふうむ……まあ大抵の場合は大金を積んだ誰かが、個人的に気に入った子を掛け合つて買——いいや、〃雇う〃んだが……」

「思えば最近は妙ですなあ。雇つた場合なら大抵自慢したり、あるいは〃教育〃して再びこの場に連れてきたりするものですが……それ以外の、離れたらしい子が多い気がしますな」

「〃離れた〃というの？おじさま」

「単純に必要な分を稼ぎ終わつたという子や、あるいは嫌気が刺して自分から二度と来なくなつた子の事をそう呼んでるんだよ、蓮花ちゃん」

「へえ……そういった子は多いんですの？」

「いんやあ？稼ぎ終わるには相当な時間のかかる子が大半だし、”こんな所二度と来るか！”なんて啖呵切っちゃった子が、首が回らなくなつてまた乗りに来る事もあつたねえ」

「あの子は良かったですなあ！あのギラギラした目を我々が徹底して無視したあの航路で、”お願いします、買って下さい”と屈辱に震え懇願してきた時はいい歳して震えませんでしたぞー！」

あまり知りたくない歴史が脳内にストックされる事に頭の重さを感じつつも、話を続ける。

「おじさま方の口ぶりでは、そういう事もなく離れた子が最近になって多い、という事ですか？」

「そうだねえ……僕達も気をつけて接してたつもりだったんだけど、近頃の若いコにはちよつと刺激が強すぎたのかなあ？」

「はっはっは、蓮花ちゃんはその点違いますな！ほれっ……こんな事をしても楽しくお話してくれていますからな！若いコもそれぞれ、という事でしょう！」

「んうっ……お褒め預かり光栄ですわ、ほほ、ほ」

“十一番”が背中の素肌部分を這う様に撫で上げる。話の途中で唐突に触れられ、意

表を突かれて声が漏れる。油断するとこれだ。

「気をつけた方が良くお客様とか、おられますの？おじさま方は優しいですけど、皆が皆そういうわけではないのでしょうか？」

「はっはっは、安心してよ蓮花ちゃん！僕達は皆紳士だからね、そこんところやあんと弁えてるよお！」

「昔はこんな場という事で結構な事をやった者もいましたが、今ではすっかり平和なものですなあ……いやはや、催しとしては良いのですが、やはり他の子達に悪影響ですからなあ」

「どうしてもああいう事がしたいなら、“雇って”別荘にでも招待して、それから皆ですればいいですからなあ！」

「「はっはっはっは！」」

（わ、笑えないわ……）

どうも相当ろくでもない事が昔あって、雇かわれると同じ目に会いかねない事はわかった。それと、特に目立った危険な男もいないらしい。さすがにそう簡単に見つかるものでもない、か。

「ああでも、最近は何んだか目がやらしい者たちもいますなあ」

「ああ、ですなあ。やれやれ、寂しくさせてはならないといっても、あんなにも睨ねめつけ

ては兎も逃げ出してしましますぞ」

「……その人達は紳士と言えるんですの?」

「問題ないよ、“室外”で襲うような欲求不満なヤツもいない。ただ絶対、“室内”は激しくされるだろうねえ」

「蓮花ちゃんも試してみるかい?僕達と彼ら、どっちがいいか……お金が欲しければ、僕達いつでも歓迎だよ?」

「……ま、前向きに検討させて頂きますわ」

いや、おじさま方の目も十分以上にやらしい。常に弧を描いている目の醜悪さはわざとなのか、それとも本当に気付いていないのだろうか。露骨なお誘いを、定型文で丁重にお断りする。

「はっはっは、これは遠回しにフラれてますなあ、“十一番”どの!」

「いやいや、勝負はまだまだこれから、ですぞ?とここで“二十五番”どの……これでアガリ、ですぞ!」

「ぬう!?……いやはや、話に夢中でついカードが滑りましたな。こっちは私の負けですか……まあ何、次で取り返させてもらいますかな」

このテーブルは先程からトランプを使うゲームを、数戦ごとに様々なものに変えていた。ポーカー、ブラックジャック、大富豪、神経衰弱、ババ抜き——少しずつルールが

簡単で、手軽に楽しめるお遊びのような物に流れていく。

とはいえ、賭けられるチップはそれほど大差無い。真面目に勝ちを狙えば、このテーブルだけで現金換算で百万に届くチップが動くだろう。だが、この台はどうやら勝負をする集まりではないらしく、以前のゲームで勝った者が意図的に勝利を逃す場面すら見られる。

あまり勝ちすぎると良くない印象を持たれかねない為、世間話や女遊びに興じるタイプの人種が集まっているのだろう。事実、昨日の台より蓮に対する接触が多く、こちらに話題を振ってくる事も多い。……半分ぐらいは言葉のセクハラにシフトしていくが。「……やらしそうな目の方たちの番号だけでも教えていただけませんか？ 仮に」訪れる「事があれば、気にしなければならぬもの」

「おおつとお!?!これはまだまだ僕にも逆転の芽があるかもしれないなあ! いいともいいとも、教えてあげよう!」

「お相手する事があるなら、それより多くを積み重ね奪えるかもしれないからなあ!」
「うむうむ、跳ね除けられるものと思っていたから思ったより乗り気で嬉しいよ、わしら!」

蓮からすれば大差無くとも、こういった場の者達のコミュニケーションで知られる違和感という事は、ある程度は信憑性がある。仮にこれまでの話が蓮を買う為のお為ごかしだと

しても、別の客へ“こう聞いたのですけれど”といった噂話程度に振れば印象の真偽は
 図れる。

傍から見れば自身を案じつつ、最大限上手く金銭を得る為の立ち回る為の世間話の範
 疇は逸していない。このぐらゐの動きならば、特に知られた所で問題は無いだろう。

仮にこの動きを見て犯人が接触する事があれば、その時は最大のチャンスだ。従業時
 間では完全に管理下に置かれているが、乗客からの誘いで動く分にはリーダーの目を逃
 れられる。

……単にスケベオヤジからのお誘いであれば、上手い具合に眠らせる必要があるが。
 一緒に寝る事も無くやり過ぎすなら、アルコールなどを持ち込んだ上で仕込めばいいだ
 ろう。そうせずとも、一方的に酔い潰すのは蓮にとつては容易い事だ。

結局怪しい数人の番号を聞き出したその後、先日と同様にろくに他のテーブルを回る
 ことも出来ず、中年達のご機嫌取りの為に体と心を削り与えて、この日の業務は終わっ
 た。



「——“実験”に支障は無い。多少の違和感は感じられているが……こんな船だ、元々
 女が離れる理由には事欠かない。理由でも流してやれば、お互いの不信感に目が行く」
 カジノから戻った男は、深く椅子に沈みグラスを煽る。少し離れたベッドには金を求

めてのこのこと来た女が、薄いシーツのみに包まり寝息を立てている。

この所、“実験”の為に少々動きすぎた。少々の失踪はこの船では絶えない事だが、行方も知らず戻つてこない従業員が多ければ、さすがに違和感はある形のある謎となる。今はまだ小細工で誤魔化せるが、さすがにもう前までのペースでは動けない。

とはいえ、やり口を急に変えれば不審がられる。“いつも通り”を見せるために、女を連れ込む事はやめない。発散になるというのも確かであるし、財布に余裕もある。

「……今回は、一人までにしておくか」

気分も乗らない為、今の女に実験は出さない。今回の運行で誰を使うか、頭の内で考える。

さすがに新入りの二人はまずい。“次の予定が無い”というのは対象としては適しているが、あれだけの上物だ。行方知れずとなった時、腹の探り合いが始まる事は想像に難くない。

また、売りも無いと言った女が即座に買われて消えるのも妙だろう。疑念や不信感はなるべく排除したいのが本音だ。此処は、絶好の隠れ蓑フラスコなのだから。

「……ふん」

従業員達を思い出し、売女ばいたの顔を思考の内で比べていく。どうせ使うのなら、それに外面が良い者が好ましい。また、人気過ぎるのもダメだ。クルーズの度に複数人を

相手するベテランが失踪する事は有り得ない。

そういった者は金さえ積みあげれば船内の情報屋としても申し分ない。“実験”で対象を失う危険性も大きい現状では、選択肢は自ずと限られていく。

男はグラスに新たにワインを注ぎ、水面に映る無表情を眺め続けた。

7. 習うより慣れた

(——人間、慣れるものねえ)

体を触られながら、局部に近付いてきた手をこちらから手を重ねて外へ流しながら、作り笑いの角度は変えずに蓮は仕事を続ける。

あれから数日。毎日の業務中の客に対する情報収集と、それを悟られぬ様に適度な無駄話を振られる様に会話を誘導しながら、蓮はすっかり慣れた様子で毎日を流していた。

ユーリヤの方を横目で確認すれば、まだいまいち慣れていないような様子で、蓮と同様に“お話”している。こういった腹芸が苦手なのが見てわかるが、とはいえ傍から見れば恥じらいが多く身持ちの堅い子という印象を抱かせる程度で怪しまれる様子は無い。

「いやあ蓮花ちゃんわかってくれるかい!?僕もね、好きで面倒抱えてるってわけじゃないの!でもね、人の上に立つってのは僕が悪くなくても悪いつて事にされる、そんなばつかなのよ!……ああ、もう!」

「ええ、ままならないものですわね。おじさまの苦勞は察するに余りあって、私にはその

痛みが全部はわからないですけども……こうして、口にするだけでも違いますわよね」
 「二十一番」殿の所も大変ですな……正直な所、うちも内部でのゴタゴタを表に出さないよう毎日毎日面倒なものでしてなあ……はあ」

「まあ、そちらも大変ですのね……でも、おじさまの会社はそのおかげで」立派な会社」として知られていますわ。全部、無駄なんかじゃないんですよ」

蓮のテーブルの会話は、割と冗談にならない社内問題の暴露合戦となつている。弱気に付け込む形になるが、こういったデリケートな問題について語る時には警戒の閾値は下がり、思わぬ隠し事や言い辛い事も心から口へこぼれ出す。

そこにどういった形でもいいから、正しくその人の求める聞こえのいい言葉を投げかけてやれば、人は案外簡単にこちらを信用する。人は弱味を見せる時、必ず味方が欲しいのだ。それが近い者に明かせぬ事であるほど、赤の他人である事が望ましい。

こういった手が有効だとわかってしまえば、蓮のやる事はハッキリした。話を盛り上げ、気持ち下ががるプライベートな話題に誘導し、同意を求められれば必ず味方をする。(こんな場所ふかにいるってだけで、味方が少ないのは当然よね)

仮面を被らなければ自分を出すことも出来ない、そんな厄介な肩書を背負った人間が、世間の目から逃れられるこの船上で存分にストレスを解放する。

欲に走った目つきや性的な接触も、欲求不満から来るものよりはストレスの解消を目

当てにしたものが多いのだろう。そういう立場の人間が欲求不満を抱えるのであれば、それは陸地ですぐに解決出来る。

非日常シチュエーションによる興奮もあるのだろうが、大元が心労によるものとわかつてしまえば対処は簡単だった。あからさまな接触を拒否する代わりに、こちらから話題や接触を振る。気持ち盛り上げ、言葉を吐かせる。

「あらあらおじさま、本当に疲れていましたのね……こんなにも凝つて、かわいそうに」「おおう……これだけで疲れ吹っ飛びそうだよ……あ、もうちよつと上……」

「蓮花ちゃん、次はわしも頼むよ！ チップは弾むから！」

「もう、余裕のない人は嫌われますわよ、おじさま？」

いかがわしい事は一切必要ない。首や肩、腕や足を軽く揉んだり、手を両手で包んで話に大袈裟に同意を打つだけでもある程度は代用出来る。

たまに盛り上がりすぎて劣情が勝るお客様がいるが、目の前で体を屈めたり、体を寄せて耳元で囁くなど、寸止めを駆使して乗り切る。嫌な気持ちはあるが、好き勝手に触られるよりは遥かにマシだ。

暴走しそうな客についても概ね情報収集により把握済みな現在、どこまでやっていいかの線引きも慣れと表情で概ねわかってきた。

余裕があれば、この船で取引されるチップがもらえる様にも集めている。無事に事態

を收拾したり、今回のクルーズにおいて一切問題が起きなければ、これが臨時収入にもなる。

また、“持つ者”の一部は“持たざる者”に与えることに快感を覚える事もわかつている為、そういった人種に対しては多少サービス多めに奉仕してやり、少しずつ胸元に輝きを集めていた。

(——……いやほんと、人間って慣れるものねえ……)

尽く自分の思い通りに動かせる現状に、船に乗った直後の苛立ちと憂鬱はもはや無かった。



『任務の事を忘れてはいないか、野曾木』

「……そ、そんなこと、ないわよー?」

ここ数日で味を占めて集めたチップを自室内のテーブルに積み上げ、指先で転がしながら運は今日の連絡を取っていた。

少々耳こそ痛い、情報収集自体は極めて順調だ。最初こそ管理され尽くした状況にどう動いていいかわからなかったが、逆手に取れば居なくなつた人間がいれば即座にそれを把握出来る。

リーダーに対して“よく人がいなくなると聞いて不安で”と、仕事が一段落する度に

従業員の欠けが無いか聞けば、仕事中に軽く眺めるだけでも従業員の概ねの動向は把握出来る。

その情報を元に乗客と“お話”すれば、どの従業員がどの番号にお相手かわしているかで判明する。さすがに完璧に情報を集めきれている訳ではないが、その夜にどの従業員が乗客の所に行ったかは確実に判明している。

この状況で誰かが事件に巻き込まれて居なくなる事があれば、そこから逆算して犯人が誰なのかわかる。後手に回るのは癪だが、最もリスク無く察知出来る手段なので仕方ない。

「今日お相手してる従業員は14人、買ったのは8人。三番・五番・十二番・十四番・十六番・二十一番・二十七番・三十一番。内訳はわからないけど、買った乗客については確定済でこれ以上は居ない」

『シスターの情報と照らし合わせても問題無いな。と言つてもシスターからの情報では人数不確定、お前の報告の方が細かい。任務を忘れていないようで何よりだ』

「当然よ。こちとら来週らいしゅうの返済かへしかかってんのよ、なんとしても成功報酬はふんだくるわ」

『頼もしい金汚さだ』

「帰つたらチップの分の札束でピンタするわよ」

語調は強く、口元は笑いながら今日の報告を終える。あしらい方を覚えてからは、気

疲れは最低限に抑えられている。元々常時気を張る様な仕事内容でも無く、話の流れで気に入られれば客の飲み食いする食事をもらえる事もある。

話術で巧みに場を盛り上げる蓮と、庇護欲を駆り立てるユーリヤは今では毎回のように客から食事を分けられていた。「あーん」を要求し、お互いに食べさせ合おうとする客もそれなりに多いが、変な所を触られるよりはずっと気が楽だ。

というより、ここ最近食べられていなかった豪華な料理を毎日食べられるというだけで大体の気疲れを分解して余る。ユーリヤに至ってはもう一度に神に祈っている始末だ。そういった大袈裟な態度がまた男達を喜ばせ、それが目に入らない程にこちらも嬉しい。

いやだつて、借金のせいで毎日節約生活を強いられていたんだもん。そんな中、命を賭ける事も無く、軽い労働で毎日豪華料理が食べられるんだもん。そんなん堕ちても仕方ないもん。蓮花ちゃんハムスターみたいだね」とか言われても無理も無いもん。

「……とはいえ、動きがあまりにも無いわね。このクルーズ中には動かないのか、そもそも今回は乗船していないのか……」

ユーリヤの感知した魔術痕は、蓮で感知できない程微細なものだった。原因が近くにあるか、最近のものであれば知識のある蓮もそれを感知する事は出来る。

だが、どれだけ集中しても蓮には感知出来なかった。ユーリヤもまた違和感レベルの

僅かな感知のみで、その時感じた以上のものは現状感じていない。

となると、かなり前に行われた魔術がその時に隠蔽されたきりの可能性もある。これで犯人が今回は船上ではなく内陸で活動しているとしたらさすがに手上げだ。今回は空振り、次の機会に再度潜入する事になる。

「ま、先のことなんてわかんないわね。……寝ましょ」

それならそれでおいしいもの食べれるしいつか、程度の軽い気持ちで今日を終えた。

◆ ◆ ◆
「おはよ」

「お早う御座います、皆さん」

「あ、蓮花ちゃんにリーシャちゃんおはよー」

朝のラウンジ内、食事時間になる前に起きてきた女性従業員と挨拶する。乗客についての情報集めは主観が混じらない従業員達の方が率直な印象が聞けるし、何より彼女達は犠牲者候補だ。

昨日買われた従業員が欠員していないか、それでも様子がおかしくなっていないか、観察する事は客との“お話”以上に肝要な事である。仕事の仕事だけに、長話が出来ないのが手痛い所だが。

「二人は昨日も売らなかつたの？身持ち固いねえ……とはいっても、あれだけ人気なら無理もしないでいっかー」

「は、はは、出来れば遠慮願いたいかな、って」

「私も、その、そういうことは……」

「お客さん言つてたよ、”高嶺の花”って。まあそういう初心な演技もウケてるんだろーけどさー。はあ、私達の身にもなりなよー」

（……演技じゃないわよ……）

「この従業員は進んで此処に来るだけあつて、殆どが経験が豊富な者ばかりだ。ユーリヤは”もしかしたら”と思われる程態度にムラがないが、蓮に対しては雰囲気も相まつて”どう考えても同業者”といったような目を向けられる事が多い。

……実際の所はこの中で最もそういった経験が浅いというか、皆無なのが蓮なのだ。本人がそういった様子を見栄で必死に隠しているので、そういう目で見られる事は仕方なかつた。

「……ん？」

ふと話途中にユーリヤの方を見ると、何やら別の従業員を見つめていた。

「どうしたのリーシャ、なんかあつた？」

「あ、蓮……花さん、いえその……なんだか、あの人がボーツとしていたもので」

視線を追つて見ると、話にも参加せずただ遠くを見つめる同僚。この後に話を聞こうとしていた、昨日買われていた一人だ。……これは。

「リーシャ、何かある?」

「……いえ、わかりません」

もしか何か異常を感じしたのかと聞いてみれば、そうでもない。とはいえ、様子が変な事になりはない。早速二人で話を聞きに行く。

「あの、すみません」

「はあい、ご機嫌いかがかしら? 何やら元気が無いみたいだけど、大丈夫?」

「……?」

声をかけてみれば体はこちらを向かないまま、顔だけがこちらを向く。

「……あ、え、ええと、蓮花ちゃん、たち?」

蓮達はその目を見た。まばたきをする程の僅かな時間であったが、確かにそれは在った。

……声をかけた従業員の瞳孔が、歪んでいた。一瞬ですぐに真円に戻ったが……二人にとつては“気の所為”で済ませる事が出来ない、明確な異常。

「——どうかしたかしら、そんな“眼”で。いくら新入りだからって、顔も忘れちゃった?」

「い、いやいやそんな事ないよ！つていうか此処の従業員で今や蓮花ちゃん達を知らない子なんていないって、すっごい目立ってるし！」

わたわたとしながら、目の前の従業員は両手を横に振る。今さっきの眼の異常はもはや見られないし、敵意も感じず“いつも通り”といった感じだ。

ユーリヤに視線を飛ばしたが、ユーリヤは右手で左の頬を触れた。ハンドサインで“感知出来ない”という意味だ。蓮から見ても、この子に何か人並み以上の魔力を感じたリという事はない。

「あの、大丈夫です？なんだか遠くを見てらしたので……ちよつと心配になりました」「あ、ああうん、大丈夫だよ？昨日は夜遅くまでお相手させられてたから、寝不足なのかな？……なんだか、目が疲れてて」

何か隠しているという風にも見られず、むしろ蓮たちが感じた眼の異常について自分から話してくる。この子が“犯人”という事は無いだろう。

この後も注意深く体調を聞いたり様子を観察したりしたが、最初に眼を見た時以上の異常は発見できず、本人も“目以外はむしろ調子が良い方”とアピールしていた。

「……どう見る？」

「この時点ではわかりませんでした。ただ、“気のせい”とは言えないでしょうね」「被害者か、それとも候補か。……これからはあの子に特に気をつけましょう」

「はい。何かされていたとしても、まだ大丈夫です」

二人の中で、一つのスイツチが入る。たつた一つの違和感が、紛れもなく確信させる。あの子は“踏み込んだ”。どんな些細なことであっても、これまで多くの超常異常と関わってきた彼女達には無視出来ない。

“人ならざる力”の関わる、自身の頭を疑う様な非常識。正気の外にある、狂気の世界。あの子の眼は、僅かだがそれを感じさせた。

(……ようやく見せた尻尾、つてわけね。上等よ、どこだろうと関係ない。私の居る場所でふざけた真似をするなら、全部ご破算にしてあげるわ)

僅かに平穩に緩んでいた思考が、再び引き絞られる。鋭さを取り戻した琥珀の眼差しが、ここにいない誰かを睨んだ。

8. その眼は鋭く

(あの子は昨日まで平常だった、それは間違いない。何かされたとするなら、客室に連れ込まれた時に……だけど、されたのが昨日とは限らない)

夜、いつも通りのカジノでの業務中。仕事に対し意識を片手間ほどに裂きつつ、蓮は状況を整理する。

(急激な体調の不良を訴えなかったという事は、遅効性の何かの可能性もある。“仕込み”は昨日以前、初日から行われた可能性はある。これまであの子を買った全ての客を疑ってかかるべきね)

変なちよつかいをかけられて思考を中断させられるのは避けたい。これまでの情報収集の様に下手に話を盛り上げればこちらに思わぬ意見や手が飛んでくる可能性がある。

いつもより話を単純化させ、ただ首を振って同意するだけで済むような状況にしながら思考を続ける。触れてくる手に関しては際どい所以外を一切意識の外とした。

(……さつきからどうも遠くを見てる事が多いわね……朝にラウンジで会った時もそうだったけど、目の疲れというなら常にそうならないのは妙だわ)

ユーリヤは片手間で仕事をこなせる程に器用な立ち回りが出来ないもので、余裕のある蓮が朝会った従業員の様子を主に観察していた。ただ、何か術的な要因を感知したなら、ユーリヤからはサインを送ってもらおう事になっている。

ここまで観察していてわかった事は主に二つ。しきりに遠くを見るような様子が見られるが、常にそうなっている訳ではない事。それと、何やら過敏になっている事。

「ひゃんっ!？」

「つと、そんなに強く触ったつもりじゃないんだが……大丈夫かい？」

「い、いえっ、大丈夫です！なんだかその、今朝からこうでして……」

「ほうほう、今朝から？いかなあ、そんな様子では。まるで夜だけでは物足りない、というようにも見えますなあ……?」

「そ、そんなことは……あっ、ふっ……」

……声だけ聞くとちよつとこちらが恥ずかしくなるが、実際の所彼女は大した事はされてない。軽く手や頬などの素肌を触られているだけで、悩ましい声が漏れていた。

いくらなんでもこういう場に慣れている人間が、ソフトタッチであれだけ声を上げるのはおかしい。昨日の晩に変な薬でも盛られたのかもしれないし、異常とは断言出来ないが……。

(……難しいわね。ユーリヤの感知も無しとなると、変調を起こしてるだけとしか見え

ない。何か仕込まれてるにしても、判断材料が少なすぎる)

“観察”ではなく“監視”出来るのなら、もう少し何かわかるかもしれない。だが、あまり露骨に見過ぎていれば敵に気取られる可能性もある。“様子が変なので気にかけていた”というラインを逸する事は出来ない。

また、従業員に声をかけたり触れたりする様子を眺める限り、特定の誰かが極端に接触するという様子も見れない。少なくともこの場において、怪しい行動を起こす者はいない。

(やっぱり、室内で“仕掛けた”可能性が高いわね。特等客室のエリアは原則として乗客以外の立ち入りが出来ないし、私達の寝泊まりする所からもある程度離れてる。政次郎くんが目につかない場所を、私達が人通りの多い場所を見てる以上、最も怪しいのはそこ)

となると、次の調査は特等客室のあるエリアに行くのが望ましい。距離が離れていて感知出来ないなら、近くに行けば問題は無くなる。

ただ、どうやって特等客室のエリアに行くか、どこが犯人のいるエリアなのか。目下最大の問題は、この二つだ。

リーダーの監視がある以上、シフト外の独断行動で客室へ行く事は出来ない。客室フロアまで行けなければ、まず調査も感知もしようも無い。

仮に行けたとしても、三十を超える乗客の部屋を一人二人で総当りするのは時間的にも物理的にも現実では無い。政次郎を動かせるなら倍の効率で調査出来るかも知れないが、客が多く訪れるエリアへあてもなく潜入してもらうのはリスクが大きすぎる。

(とはいえ、あんまり時間もかけてられないわよね。もし既に犯人が動いているなら、早く対処しないと手遅れになるし)

朝に従業員の様子を全員確かめた所、自分たちが観察している従業員以外は全て立った不調は訴えなかった。腰が痛いとか関節が痛いとか筋肉痛だとか、そういうのはあったが。

ただ、観察中の従業員と同様の症状や異常を訴える者はいなかった。多数の従業員あるいは乗客に手を出している、という事は考え辛いだろう。

規模が小さく隠せるという事は、一度に狙う対象を絞らざるを得ないという事でもある。現状表面化している異常は観察中の従業員一人のみであり、複数人が何かさされていたとしても感知出来るほどの進行度でもない。恐らく、犯人が意図的に対象を絞っている。

(……となれば、あの子を複数回買う客がいる筈。この航行中にゆつくりと“仕込み”を完了させて、何かの狙いを達成する。そう考えていい)

無論ただの考え違い、あるいは誤誘導デコイの可能性もある。興味をそちらに向けさせてお

いて、本当の狙いが別の所で進行している事も考えられ得る。

異常の見える従業員に注意しつつ、情報収集は怠れない。中々に骨な状況ではあるが、手を抜く余裕は無い。敵が何を考えているかはわからないが、必ず見つけ、倒す。

「……………」

観察している従業員が、客に手を引かれフロアを後にする。従業員を買っただろう客は、昨日一夜を要求した乗客の一人だ。ここまでの遠巻きな情報収集では、あの客が先日もあの従業員を買ったかどうかまではさすがに判明していない。

ただ、それを確かめる必要がある。蓮は今いるテーブルでの会話を適当な所で打ち切り、その場から離れて先程までその従業員が留まっていたテーブルへ向かう。

「はあい、おじさま方。少し寂しそうでしたので、お飲み物をお持ちしましたわ」

「おお、蓮花ちゃん。いやはや、気が利くねえ」

向かう途中に注いできた適当な飲み物を数杯持ち寄り、テーブルの客に配る。

「さっきのお客様は、もうお部屋に？」

「ああ、少々負けが込みすぎたので、今日は失礼させていただきます」

「着いて行った女の人は？」

「大方、負け分を発散するつもりなんだろう。どうも彼の今回のお気に入りのようだし

……………余程具合が良いのかねえ」

「……今回のお気に入り、というと？」

「ああ、彼は昨日も彼女を雇ったんだよ。大体の人は毎日取替え引替えするものだけど、彼は数人の女の子に集中するタイプでね、毎回数人としか夜を過ぎさないんだ」

……怪しい。変調をきたした従業員を連続で買う、少々変わった乗客。先程の後ろ姿をパツと見ただけでは特に変な所は見られなかったが、状況が揃い過ぎている。

となると、早い内に上手くこの場を抜け出し、先程の客を確かめに行く必要がある。

……最も手っ取り早い手段は……。

「——ねえ、おじさま？」

「ん、なんだい蓮花ちゃん」

「……」お相手”すると、一晩でいくらぐらいもらえるもの、なかしらう？」

「——……！そ、そうだねえ……さ、最後までしてくれる、なら、その、10……いや、15万は、出すよ？」

「まあ、そんなに……？」

近くの客に囁く様に、“それ”を聞く。普通に抜け出すのが難しい以上は仕方ない。先程の従業員と同じ様に、客室へ連れていってもらう。

「……」一晩で、15……」

「い、いやっ!?他の子ならともかく、蓮花ちゃんぐらいの子ならそのぐらいだって……」

きよ、興味、あるの?」

「……その……優しく、してくださいる、なら……」

「——っ!」

(……ううう……恥ずかしいわね、これ……!)

ごくくり、と大きく目の前の男は唾を飲む。一方、演技とはいえしおらしい態度で男を誘う蓮は恥ずかしさのあまり顔を反らして耳まで赤くしていた。

自分から誘うような言葉など、経験のない蓮にとつては想像の内のそれらしいものしか考えつかない。結果的に言葉少なになってしまったが、その様子がかえって男の欲を煽った。

「……す、すみませんな皆さん、わ、私どももこれで失礼、させてもらうよ」

「なっ!ちよ、蓮花ちゃんナシなんじゃなかったの!?!し、してくれるんだったら僕だつてお金を出すよ!」

「う、いえ、その……最後まで出来るか、わかりませんし……まずは、おじさまに、教えてもらつて、からで……」

「ほ、ほっほっほ!と、いうわけでしてな!?!大丈夫だよ蓮花ちゃん、おじさまが優しく教えてあげるからね!……頑張ろうねえ……?」

(……流されたら本気で最後までされるわコレ……)

◆ ◆ ◆
内心の冷や汗を隠しながらなんとか場を収め、乗客の後ろを歩き特等客室の並ぶ廊下を歩く。カジノから離れる際、ユーリヤにはサインで“単独で調査する”“政次郎へ代わりに連絡して欲しい”と伝えておいた。

これで通信機で場所を伝えれば、政次郎が援軍として来るだろう。……問題は、見るべき場所だ。

「……おじさま、初めてここに来たのですけど、部屋の配置とかはどうなっているんですの?」

「……ん?と、いうと?」

「いえその……そういう事をするのなら、変な声を聞かれましたありませんし。その、先程のお客様の部屋が近くにあつたりしたら、恥ずかしいというか……」

「なるほどお、見た目によらず蓮花ちゃんは恥ずかしがり屋なんだねえ」

(見た目は余計よっ……!)

なんとしてもこの乗客の部屋に着く前に、あの客の部屋の凡^{おおよそ}その位置は聞き出さねばならない。とはいえ直接聞くわけにもいかないのです、慎重に言葉を選ぶ。

「そういう事なら安心してよ、基本的にここの室内は防音になってるし、かなり大声を上げててもそう聞こえなくなってるんだ。……蓮花ちゃんには、出来ればいっぱい声を上げ

てほしいしねえ?」

「……っ。で、でも、隣り合わせとかだつたりすればいくらなんでも聞こえちゃうんじゃない? 防音だからって、変な声を聞かれるのは、その……恥ずかしいですわ」

「うんうん、そういう恥じらいは大事だよねえ……でも安心してよ、あいつの部屋は番号を考えればも少し離れてるし、隣の部屋の人はまだカジノフロアで勝負してると思うし」

(……番号、ね)

どうやら仮面の番号に応じて、割り当てられる部屋の位置は決まってるらしい。出来れば割り当ての法則も聞けると助かるのだが……その前に、時間切れらしい。

「……」が私の部屋だよ。……大丈夫、不安がらないでも……優しくするから、さあ……?」

肩に手を回され、抱き寄せられる。ちらりと顔を見上げれば、他人の前では隠していた欲求をもはや隠そうともせず目と口が歪んでいる。

もはや待ちきれないといった様に体をうずうずとさせながらも、それを悟らせないように男はゆつくりと扉を開き、足を部屋内に進める。

「……っ! いきなりは嫌、ですわ。するのなら……こちら、でしようっ!」

部屋に入ってから力が急に込められた手を、指を重ねてやんわりと制止する。心中の

生理的な悪寒を隠すべく、口元だけでも笑って顔を向け、蓮は男をベッドの上へ誘う。

「……い、いいんだよ、ね？もう、我慢しなくて、いいよね？」

「……ええ、いいですよ」

もはや飛びかからんばかりの様子の子の乗客と、ベッドに並んで座る。そう、もういい。

「——ごめんなさいね、おじさま？」

自分から顔を寄せ、吐息を軽く口へ吹きかける。

「——ッ!?お、ア……はっ——!?!」

ただそれだけで目の前の男は体から力を抜かし、意識を手放した。

重力のみが意識の無い体を引っ張り、蓮がベッドに押し倒される形になる。蓮は男の意識が無い事を確認し、体をよじってベッドから抜け出す。

「……ふう、まあこんなもんでしょ。さすがは“紳士”なおじさま、ベッドまで我慢してくれてありがとね？」

同じことをするにも、部屋に入った直後にいきなり襲われていけば、意識のない成人男性をベッドで寝かすのに一手間かかる。楽に寝かせられた事に少々安堵しつつ、蓮は部屋を出る。

部屋から出て、早速先程の従業員を連れ乗客の部屋を探し始める。わかっている事は仮面の番号に応じて……恐らくは番号順に、それぞれの客室が割り当てられている

事。それと、隣の部屋は無人という事。

今眠らせた男が「十七番」、先程の男が「十二番」。単純に並んでいると考えれば、五つ離れた手前か奥のどちらかの部屋となる。まず、奥側の部屋から調べてみる事にした。

(……何か、違和感があるわね)

その部屋の前に着いた途端に、言い様のない何かを感じる。通常の間人であれば覚えの無い様な、というよりは覚えを抱かせない感覚。

(——「人除け」)

ごく小規模なものだが、人除けの魔術の感覚だ。本来は建物一つの周辺まるごと敷く事も出来る、無意識の内に場所を他者に避けさせる魔術。

この部屋の前にのみ働いている所を見る限り、この部屋が大元である事は間違いない。他にも隠蔽の術が働いているのか、こうして部屋の前に立っていても何か感じる事は無いが。ともあれ、政次郎に連絡を取ってからすぐに突入すべきだ。

「政次郎くん、客室の百二十一」

髪から小型マイクのみを取り出して、要件だけを告げようとした時。

ぼとり、とマイクを持つ手に細長い物が落ちてくる。

「ッ!!」

咄嗟にマイクを持つ手を振るえば、それはマイクに噛みついて地面に落ちた。手ほどの大きさで、指よりも細い姿。それが静かに地を這い、うねっている。

姿を判断する前に、目の前の扉が静かに開き、部屋の奥から影が飛び出してきた。

「くっ！」

体が反射的に頭まで左腕を跳ね上げ、丁度その位置に飛び出した影が絡み、腕を締め付ける。腕に巻き付く様にしたそれが、部屋の内側へ強く蓮を引きずり込もうとする。

無理に逆らえば腕が折れてしまうと一瞬の内に理解させられた蓮は、引つ張る力に従い自分から室内に飛び込んだ。

「——ほう、新入りの蓮花とか言ったな。何やら誰かと連絡していた様だが、わざわざこんな部屋に何か用かな？」

部屋の内に入り、この部屋の主の声が蓮を出迎える。そちらを見れば、最低限の照明が部屋を薄暗く照らし、部屋の主と横たわった従業員が奥にいるのが見える。

だが、その男は明らかに通常の間では無かった。魔術師であるという前提を除いても、彼には身体的に既に異様だったのだ。

微かな明かりを男の鱗が反射し、その眼の中の瞳孔は針の様に細長く縮み、こちらを見据えている。

「……『蛇人間』……！」

人の形と、蛇の特徴を備えた異形。それが今、蓮の目の前にいる者の正体だった。

9. 荊棘

「……ふむ、さして驚きもしていない所……同業者、か」

「一緒くたにされるのは心外ね」

蛇人間は蓮の顔を無表情に眺め、面白くもないといった様子で椅子に背を深く沈める。

蓮を部屋に引き摺り込んだ影——男の使役しているであろう大蛇は未だに蓮の左腕に絡みつき、生理的な嫌悪感を与え続けている。だが、すぐに襲い掛かってくる様な様子は無い。

「……何をしに来たか、およその予想はつくがな。大方、政府か何かの回し者だろう。仕事熱心なものだな」

「そういうアンタはお遊びが過ぎたわね」

「享樂に耽るのはそう悪徳でもあるまい。とはいえ、妙な虫がたか集るのは確かに困り物だな。次回からはまた別の場所で“遊ぶ”とするか」

男は蓮と会話しているようで、その視線はどこか合っていない。まるで独り言を述べするように、蓮の存在を考えずに自身の考えを述べ続けている。

今この状況を“想定外”と捉えず、“危機”とも考えていない、その様子。

「……随分と余裕みたいね？自分の正体も、隠し事も露見した。結構な窮地に追い込まれてると思うんだけど？」

瞬間、左腕に絡む蛇が動いた。獲物を一瞬で捉えて動きを止める様な、人の反応を遥かに超えた“捕食”の動き。

腕に絡んでいた蛇が体全体を押し込めるように足、腰、胸、肩、首に絡み直し、その牙は首元に添えられる。この一連の動作において、蓮は思考する間も無かった。

「——ッ！」

「“窮地”とは何のことかな。この状況に窮しているのは貴様の方だ、鼠が。……いや、兎だったか」

男は座った姿勢を変えず、近くのテーブルにあるワイングラスを取る。

「私の中では既に貴様の処遇は決まっている。どこと繋がっているかわからん以上、貴様は使い捨てのモルモットとして死ぬまで実験台だ」

「……実験……？」

「そうとも。光栄に思いたまえ、私に“使われる”事をな」

蓮の首筋を細い二又の舌が数度触れ、嫌悪感から首が動く。逃れようとしても、体に巻き付いた力がそれを許さない。その様子を見て男は一笑し、話を続けた。

「知っているとは思うが、我々は貴様ら人間と違い今や少数しか存在していない。祖先はかつて地球を支配する程の栄華を極めたが、我らが神であるイグを怒らせ、数を大きく減らしていた祖先は大昔に人間共に負けた。今や、大いなる力を持つ我々が弾圧を恐れて細々と隠れ住む有様だ」

男は無表情のまま、話を続ける。声色は平坦なままで、恨みを含む内容に反して感情の動きは少なくとも表には無く、特に気にしていないという感じを抱かせる。

「我々には力があり、人間には無い。それでいて、人間は我らを支配する……そういった現状に納得のいかない同族が、支配体制に密かに挑み続けている。なんとまあ、面倒な事をするものよ」

「……アンタは違う、って言い草ね」

「そうだが」

手に持ったワイングラスを指で弄び、男は口角を上げる。

「我らは確かに人間を凌駕する力を持つが、それは優れた知性あつての事。知性の行き着く所は、本来一つ。探究心だ」

「……探究心……？」

「そう、探究心。知識欲と言ってもいい。自身の頭脳の研鑽、謎の追求、想像の具現化。貴様らの及びも付かぬ、前人未到の領域へ手を伸ばす事」

グラスを持ち上げ、暗い照明に翳す。僅かな光を通し、中のワインが揺らめく。

「これらに比べれば、貴様ら人間の支配など詮無き事よ。むしろ、我らの知識欲を満たす環境を勝手に用意してくれるのだから、感謝すらしよう」

「……感謝してくれるんなら、この首の子を下げて欲しいんだけど」

「そう邪険にしてやるな、これから同胞になる者にそう言っていては何をされるかわからんぞ、ククッ」

笑いをこらえきれぬといった様子で、男は笑いを漏らす。

「……待ちなさい、〃 同胞になる〃？ どういう意味かしら」

「その通りの意味だ。貴様はこれから、蛇人間どうぞくとなつてもらう」

「——何を、言ってるのかしら」

蓮の眉間に皺が寄る。聞き間違いも無く、男は、「蓮を蛇人間にする」と言った。

「我々は貴様らが地球上に生を受ける前から、遺伝子というものに着目している。我らが神であるイグが与え給うた力、それは〃蛇〃の遺伝子に強く関わりと見ていた。そこで、遺伝子に手をかける事によって我ら同族を増やす事が出来るのではないかと考えた」

「……………」

「蛇より進化した蛇人間われわれと、猿より進化した人間きまらひ。元が違えど、収斂しゅうれんにより同様の形に

至った。知能も魔力も大きく異なるが、構造は共通する所がある。……ならば、人間を蛇人間へと後天的に“改造”する事も出来るだろう」

男は口元だけが笑い、獲物を睨む蛇の様に蓮を見据える。

「我々は数の少なさから同族同士による交配が難しく、妥協して人間と交配しても血が薄まり種としての退化は免れん。……ならば同族を“調達”すればいい。上手く作れば人の勢力は少しずつ削れ、我らが勢力も増える。私は知識欲を満たせ、良いこと尽くめという訳だな」

「……人をなんだと思ってるのかしら」

「さつきも言っただろう？ かわいいかわいい実験動物だ」モルモット

「不愉快ね」

吐き捨てる様に蓮が告げる。そんな蓮を見て、男は心底愉快そうにしている。

「ククツ、命を握られているというのに強情な物だな。まあ、すぐにその虚勢も失われるだろうが……話に付き合ってくれた礼だ、なるべく気持ち良く“変えて”やろう」

「……ついでもう一つ聞きたいのだけど。アンタの“実験”で、行方不明になった子達はどうなったのかしら？」

「良く言うだろう、発展の為に犠牲はつきものと。“失敗作”は廃棄済だ」

「——そう」

冷たい声が蓮の口から一言だけ出る。もはや話をする必要も無い、概ねの事態は把握出来た。……ここからは、「掃除」の時間だ。

「さて、そろそろこつちに来てもらおうか。今日の実験は彼女の代わりに貴様が務めてもらう。久々に命の気兼ね無く手を加えられる実験体だ、この際——」

「——なんとまあ、相手が悪かったわね」

「……何？」

男が蓮の体に絡みつくと大蛇を手招き、こちらに来るように指示をするが……大蛇は絡んだまま、びくりとも動かない。こちらに蓮を引っ張ってくるどころか、身動きすらしない。見れば、先程まで体を締め付けていた力もまるで見られない。

怪訝な顔を男が浮かべた途端、変化があった。蓮の体に絡みついていた蛇が、縄が解けるように床に落ちる。その眼は既に生気を失っていた。

「——ッ!? 貴様、何をした!」

「何を、ね。そのご自慢の知性とやらで考えてみれば?」

「貴様……!」

挑発された男が合図を送るように手を動かす。即座に部屋の物陰から、再び別の大蛇が現れて蓮の体へ向かっていく。

蓮はそれに対してさして動くこともせず、今度は数匹の蛇が蓮の体のあちこちに絡

み、噛み付く。体に食い込んだ牙を通して、生み出された毒が蓮の体へ送られる。

「舐めた態度を取りよつて……どんな魔術タネを使ったか知らんが、これだけの神経毒をぶち込めば減らず口も——」

「ああ痛い。噛み傷が痕になつたらどうしてくれるのかしら、全く」

「ッ!!」

男は心底信じられないといった顔で、蓮を見る。常人であれば即座に体の自由が奪われ、指一本動かすことも出来なくなるような毒を送られておきながら、目の前の女は平然と立ち続けている。

そして最初に絡んでいた蛇と同様に、噛み付いていた蛇達が気を失うように床に落ちる。噛みつかれていた本人は傷口を軽く撫でるだけで、毒の影響などまるで感じさせない。

「貴様、何者だ……ッ！人間ではないのか！」

「失礼な事言うわねえ。アンタ達と一緒にしないでくれるかしら、こんな美人がアンタ達のご近所にいるの？」

「恍ほけるな、魔術を行使すらせずに体内に直接毒を送られておきながら、平然としていられる人間などいる訳がないだろう！」

「ま、世の中は広いつて事よ」

「ほざけー」

再び物陰から大蛇が二匹這い出て、今度は男の目の前に集って蓮と向き合う。どこに身を隠していたのかすらもわからない様な巨体が鎌首をもたげ、舌先を揺らして威嚇してくる。

「毒が効かないのならば、仕方あるまい。首を締めて意識を奪わせてもらおうぞ……！」
「あらコワイ。……とところで、ご存知かしら。蛇の毒が、どんな風に体の自由を奪っているのか」

まるで怖がる様子も見せず、蓮は人差し指を立てて尋ねる。

「……何のつもりだ」

「毒の中に含まれる化合物が、筋神経の受容体や神経接合部にくつつく事で伝達物質を阻害して、筋肉を動かす邪魔を……神経信号を伝達させなくする。その結果、筋肉から力が抜けたり、逆に筋肉が著しく収縮・麻痺を起こす。——こんな風にね」

立てた指を握り込み、話の終わりと同時に指先を広げて腕を振るう。その直前、黒い霧の様な物が蓮の掌に集まり、振るわれた勢いによって大蛇にぶつけられた。

それが蛇に当たった直後、蛇の体からは力が抜け落ち、床に横たわる。僅かに身動きこそすれど、体が麻痺した様に起き上がることが出来ない。

「……き、貴様ツ……!?!」

「自己紹介が遅れたわね。私は野曾木蓮、ちよつと毒操作能力を持つ掃除屋よ」

「……毒操作能力、だと……!?」

「そ。勿論、アンタ達の信じる神様は無関係の身よ?」

毒操作能力^{トキシキネシス}。あらゆる薬毒に対する耐性と、毒の生成能力を兼ねた能力。それが幼少期より彼女が備え、怪異に立ち向かうべく振るっている異能の正体。

ある程度は自身の意識によつて耐性を下げる事も出来るが、平常時の蓮に対して地上で生まれ、使われているあらゆる毒は通用しない。さらに生み出す毒の種類によつては、生物はおろか形持たぬ怪物すら溶かす猛毒を操る事も出来る。

——つまる所、毒を操る者に対する天敵中の天敵なのだ。

「……そんなバカな人間がいるワケが……ッ!」

「イグから毒を預けられてる蛇人間^{アンタたち}が言えた義理じゃないわよ。……さあて、これまで

は散々好き放題してたみたいだし……」

蓮が徒手のまま、男を睨み付ける。構えた手からは毒の靄が湧き出て、蓮の周囲を渦巻いて漂い始める。その靄の様子は奇しくも、獲物を睨み付ける蛇を彷彿とさせ——

「——痛い目、見てもらうわよ」

魔女めいた佇まいで、蓮は薄く笑った。

10. 毒を制すモノ

体内で生成し周囲に漂わせた神経毒を、手で一振りして男へ飛ばす。

直撃する直前に、男の背後からさらに大蛇が飛び出し、男の身代わりとなる。だが、これまで蛇と異なり昏倒する事はなく、そのままこちらを睨み付けてくる。

「……まさか、こいつが必要になるとは思わなかったぞ」

「……今までの蛇とは違う、って感じね」

部屋の暗闇ではつきりと全長はわからないが、これまでの蛇の倍近く……恐らく、人の身長などゆうに超えるだろう巨体を備え、幅広の頸部くびを見せてつけて威嚇してくる。

「……キングゴブラ、かしら。にしても随分大きいわね」

「私直々にDNAを弄り完成した自信作だ。これまでのペットとは違うぞ」

男が合図を送ると、目で追えない程の速度で大蛇は蓮へ接近する。目で追うことを放棄し、一歩下がってそれまで蓮が居た場所に濃度を増した毒を放って置き去りにしていく。

その場に踏み込んだ大蛇は少しの間動きを鈍らせたが、再び動き出して蓮に飛び掛かる。一瞬の停止と予測していた分の余裕により、それを回避した。

「……毒蛇すら平気で食べられる、とは聞くけどね。さつきとはまた別種の毒なのに、それでもほぼ問題無いつてのはどういう見よ」

「言っただろう、自信作と。毒への耐性というのは、元より蛇人間の専売だ。その因子を埋め込まれたそいつに、貴様程度の毒が通用すると思うなよ」

初撃の神経毒が防がれた時点で、蛇の使う毒に対する耐性があるものと踏んで全く別種の酵素毒のガスを放ち、相手が飛び込む様に仕掛けた。

だが、目の前の大蛇の動きはそれですら止まらず、今現在も警戒する様に再び体を起こして一定距離で威嚇をしている。影響は無いらしい。

「程度の毒、ねえ。……なら、試してみましようかー」

「むっ!？」

体の中で再び毒を配合する。この感じでは蛇の使う出血毒・神経毒を始め、生体活動を阻害する様な毒は大蛇にも、おそらく耐毒因子の大元である蛇人間にも効くまい。

それならばアプローチを変え、というよりはいつも使うモノにする。何も敵の動きを鈍らせ止めるだけがこちらの全てではない。

少し集中し、毒を生み出す。先程までのガスの様に薄く広げる事はせず、生み出した数々の毒がそれぞれ内側へ向かい、濃度を増していく。明確に混ぜ合わせるイメージが、体内で生み出す毒の濃度を加速度的に高めていく。

高めたそれを右手に移して放出し、禍々しさすら感じさせる黒さを孕んだ飛沫を投げつける。それを見て、蛇は咄嗟に飛沫を持ち前の瞬発力でかわす。飛沫の当たった床が、焼ける音がした。

「……どうい毒だ、それは」

「受けて確かめればいいじゃない、のっ！」

次弾を装填する様に、今度は左手から飛沫を投げ飛ばした。今度はかわされるであろう蛇ではなく、蛇人間へ目掛けて。

自身に手が振るわれる挙動を見て、咄嗟に男は大蛇を自身の前に呼び戻し、飛沫をその巨体の腹で全て受けさせる。直後、黒い飛沫の当たった蛇の腹が焼け爛れた様に溶けた。

「——濃硫酸……とも違うか。とんでもないモノを平気で使うものだな」

「お褒めの言葉として受けておくわ。いくら耐性があるうが外側から溶かしてしまえばいいでしょ、アンタの自信作もこれで台無しね」

「さて、それはどうかな」

「……」

毒の直撃を受けて体を溶かしていた蛇が、再び起き上がる。溶けた腹部は皮が剥がれ落ちるように体から離れ、剥がれた部分を見る見るうちに再生していった。

「……どういふ蛇よ、それ」

「何、脱皮の様なものだ。とはいえ、元々の皮の厚みも細胞分裂の速度もまるで通常の生物の比にもならんがな。……だから言つたらう？」

“脱皮”を終えて腹部が綺麗に戻つた直後、男が再び合図を送る。

「貴様程度の毒は通用しない、と」

直後、大蛇が再び突進してくる。外側を溶かしきれずに脱皮を許せば、確かに毒が体を溶かす前に対処する事は出来る。だが、それならば脱皮も再生も許さない程の量と密度で叩き込んでやればいいだけの事。

蓮は即座にそう判断し、先程よりも濃度の高い毒を蛇の動きに合わせてカウンターで打ち込むべく用意した。あちらは蛇の持つ毒がこちらに効かない以上、先程言つた通り肉体的な接触——絞殺や骨折を狙つてくるだろう。動きは速いが、絡みついてくるというのならそこに合わせればいい。

と、考えていると。大蛇がこちらにたどり着く前に、足に何か絡み付いた。

（別の蛇！）

先程と同じく、物陰から再び別の蛇が飛び出して絡み付いてきていた。一体何匹いると言うのか、それとも随時召喚でもしているのか。一瞬詮無い事を考え、用意した毒を咄嗟に足へ流して放出した。

大蛇ほどの耐久力の無い蛇だった為に、ただの一当てで絶命した。だが、足に絡み付いた一瞬の力により、少し蓮の体勢が前のめりに崩れる。

——凄まじく、嫌な予感がした。これまでも何度も潜ってきた、“死”そのものの感覚。本能的な危険が、蓮の思考速度を鋭敏にし、ある毒を生成させる。

生成と同時に自身の毒への耐性を下げる。同時に自身の神経の速度を加速させる、麻薬に近い毒が生まれ、体内に溶けていく。死の予感が鋭敏にした思考速度を無理矢理に維持させ、自身の感じた予感を確かめる。目の前の大蛇が、体を捻っていた。

「ツッ!!」

崩れた姿勢のまま首と体を強引に曲げ、同時に横に飛ぶ。直前まで自分の首があつた場所に、光る線が一閃する。ギリギリの所で見送つた直後に、大蛇に生成した毒を放つ。先程の足の蛇を追い払った分だけ毒が薄まっていた為に、毒は直撃して再び大蛇の身を溶かしたものの、先程と同様に体がすぐさまに生え変わっていく。とはいえ、無意味という訳でもない。

再生するまでの僅かな間だが、無理な体勢による横飛びで崩れていた体勢を再び戻すぐらいの猶予は生まれた。再び男と蛇に向き合い、毒の耐性を戻して体内の麻薬を分解した。

「……………つはあ……………。つたく、なんで蛇の尻尾に針が生えてるわけ?」

「自信作だからな。無論、それも毒針だ。とはいえ貴様相手には効かんのだろうが……首を掻き切るには十分な切れ味はある」

「笑えないわねえ」

狙われた首に指を添え、血液の感触がしない事を確認する。思った以上に厄介な手合だ。あれだけの巨体に加え、神話生物並の再生速度を持ち、速さも力もこちらを超えている大蛇。

酸毒を周囲に纏えば接近は拒否できるが、先程の針による一撃はその巨体も相まって、まるで鞭の剣だ。一瞬しか相手が近付かない以上、ただ酸毒を纏うだけでは溶かされまい。

考えている間に天井から影が落ちてくる。再び別の蛇が蓮に絡み付こうとしてくるのだらう、思考もせずに毒で迎撃する。その一瞬の隙を見て、大蛇が再び近付いて来た。その瞬間、体が硬直する。自身の意志が、何者かに直接縛られるような感覚。……自身に対しての、直接的な魔術干渉。

「くっ！」

即座に精神を強く集中し、影響が体に染み渡る前に感覚に抵抗する。体の自由を取り戻すと同時に、頭を腕で庇って攻撃に備える。

ほぼ考えもせず、先程と同様に首から上を狙つてくると見ての防御。刹那、腕が切り

裂かれる。痛みに耐えつつも、追撃を封じる為に自身の周囲に毒を撒きつつ、男に向かつて視界を遮る為の靄を放つ。

大蛇は男に呼び戻され、その体を振り払い靄を切り払った。

「……ペット、ちよつと多すぎるんじゃない？」

「そちらが遊び足りないように見えるからな。しかし、私の“支配”を跳ね除けるか。ますます常人とは思えんな」

「アンタの魔術がへボいだけじゃないかしら」

「それは傷付くな。……ならば、物理的に叩きのめそう」

男は魔術の詠唱をする。抵抗される恐れのある精神干渉のものから、物理的な干渉力を持つ術に切り替えて大蛇と共に畳み掛けてくるつもりだろう。

こうなると厄介だ。どれだけストックがあるかわからないが、この部屋には未だに蛇が多く潜んでいる。それ自体はさしたる支障にもならないが、放っておけばこちらの体勢が崩され、そこに針や魔術が飛んでくる。

こちらからの毒は生半可なものでは蛇人間にも大蛇にも通用せず、足止めに放たれた小蛇に対処する為にあまり集中力を要する強力な毒も生みにくい。狭い室内では逃げ回る事もし辛く、部屋の外に出ることも許さないだろう。

とにかく隙を見て毒の濃度を高め、適度に相手に対処しつつ一発で勝負を決めるだけ

の猛毒を叩き込むしかないか——

「——当たり前か」

と、考えていた矢先。声に次いで、乾いた炸裂音が後ろから三つ発せられる。

ほぼ同時に、目の前で再び飛び掛かろうと構えていた大蛇の首に三つの穴が開いた。

「……何ッ!？」

「……随分遅かったじゃない? 待ちくたびれちゃったわよ」

「どこぞの女が正確な場所も伝えんまま通信を切ったからな。お陰様で手間取った」

蓮が視線だけを後ろに向ければ、見飽きた無表情の男が銃を構えてそこにいた。

「野曾木、そいつが犯人か?」

「ええ。大体やつてた事も自供済よ」

「成程。ならば、わざわざ確保する必要も無いな」

男を一瞥した政次郎は蓮に最低限の事だけを質問し、腰から事前に預かっていた蓮のガバメントを取り出し、そのまま蓮へ投げ渡す。受け取った蓮は即座に安全装置を解除して構えた。

政次郎も同様に拳銃を男へ向ける。二人の狙いは共通して、ただ一点のみ。

「止めッ——」

男が魔術や指示を飛ばすよりも早く、二人がかりで発砲する。容赦無く脳幹へ向けて

放たれたそれらは男を貫通し、物言わぬ骸と変えた。

数秒ほどその姿を見て男が起き上がって来ない事を確認し、蓮が一息をつく。やはりまどろっこしい術や異能を持つ敵にはこの手に限る。正直、素手でやり合うには面倒な相手だった。

「野曾木。状況を説明しろ」

「問答無用で射殺直後、いきなり状況説明を求めらるって結構滅茶苦茶よ、政次郎くん」
「お前と違つて無駄話は好かんからな。説明は終わつてから聞く、合理的だと思うが」
「政次郎くんは私を馬鹿にしなきゃいけない誓約でも立ててるのかしら」

蓮は部屋の奥で寝かされていた従業員を介抱、政次郎は慎重に死体と周囲に潜む蛇達を処理しつつ、蛇人間のやつていた事やその目的を説明した。

従業員の様子を見ると、一応は人間のままであるが、体の一部に蛇の鱗の様な模様が浮かび上がっていたり、意識の無い時だと瞳孔が蛇の眼の様に細くなっているのが確認出来た。恐らく、男の言っていた実験の影響だろう。

とはいえ、この位の事であれば多少違和感を覚える程度で問題無く日常生活に戻れるはずだ。眼や皮膚感覚はそのままでが……魔術的ではなく遺伝子学的に体を弄られた以上、治癒の魔術も効能は期待出来そうにない。一応は後でユーリヤに診てもらおう事にする。

「蛇人間とその量産、か。……人への因子の埋め込みは恐らく一部は成功していたのだろうな。船から降りる人間に自身の因子を埋め込む事で、魔術師を作っていたのだろう。各地で起こっていた小規模な事件も、量産された魔術師が力を試したと考えていい」

「突然身に降ってきた力を使いたくなつた、か。それまで一般人だった人間が魔術なんて急に

「使える様になつたら、そりや試したくなるわよねえ」

「使う術の系統も規模もバラバラだったが、恐らくは様々な“実験”によつて意図的に変えていたのだらうな。とはいえ、大元を抑えてしまえばもはや問題あるまい」

大方の処理と隠蔽を済ませ、二人は立ち上がる。人除けが働いている以上この部屋に踏み込む者はそういないだらうが、万が一の事もある。さつさと現場から立ち去つておきたい所だ。

「……そういうえば、通信は途中で妨害されたのによくこの部屋がわかつたわね」

「頭二桁までは聞こえたからな。最悪総当りするつもりではあつたが、マイクの破片がこの部屋の前に落ちていた。それで真っ先にここを見たというわけだ」

「咄嗟に投げ捨てておいて正解だつたわね……ほぼ反射的だつたけど、ナイス判断だつたわ私」

「陸に上がったら弁償してもらおうぞ」

「……そこは必要経費って事にならない？」

「〃 札東でビンタ出来る〃 程度には余裕があるのだろうか？ むしろその程度で助けてやった貸しをチャラに出来ると考えれば、安いものだと思うが」

「……うう、折角出費ほとんど無しで終われると思つたのに……」

完全勝利と思つた矢先に突きつけられる思わぬ出費に、蓮は肩を落とした。

11. 成果は必ず現れる

蛇人間との交戦を終えた後、蛇人間の亡骸や部屋内にいた蛇——実験の事を考えると何が仕込まれているかわからないので、戦闘直後に部屋の隅々まで潜んでいた蛇を全て探して処理した——は、それぞれゴミ袋に入れた。

政次郎は蛇人間の亡骸を自身の潜伏する場所まで持つて行き、蓮は被害者の従業員を自身の部屋まで連れて行って介抱する事にした。

蛇の方はそのまま海に捨てられるが、男の方は客室の窓からでは海に捨てるにも手間取るし、魔術師の死亡によって人払いの魔術の効力が消えた以上はこの部屋に目立つ物は残していけない。

また、航行中に海に捨てられた蛇人間が、後になって発見されるような事があれば、新種のUMAとしてテレビ特集物だ。なのでしっかりと隠密部隊が行方不明にする必要があった。

政次郎もさすがに死体と暫く潜伏するのは嫌なのか、眉間に僅かに皺を寄せて嫌そうな様子を珍しく見せていた。一番の問題は腐敗臭の為、部屋に転がっていたワインボトルに蓮が臭いを防止する為の酸毒をストックし、政次郎に渡した。

「塩酸でも作ればいいんだろうけど、さすがに危ないからクエン酸ベースにしといたわ」
「……その力も今回ばかりは助かるな」

「正直、毒性の薄い物質は作るの難しいんだけどねえ……」

一口に“毒操作能力”と言っても、毒そのものを作る能力という訳でも無い。能力の本質は自身の体を媒介に化学物質や化合物を生み出し操る事であり、蓮の場合はそれが薬毒に特化しているだけという事だ。

戦闘においてはそれ程役に立つという訳ではないが、時間と集中力さえあれば毒性の無い物質に似せた毒^{もの}も作れる。あくまで“似せた物”である以上、本物ほどの効果は得られないが。

そうした後処理を済ませ、政次郎は人一人を担いでるにも関わらず誰にも遭遇せずに元の居場所まで戻り、蓮はここに来る前に眠らせた男のいる客室まで戻った。男が無事眠っている事を確認し、適当に部屋内の冷蔵庫にあった食べ物や飲み物を口にするだけ口にし、適当に時間を潰した所で自室に戻った。

何も蓮が意地汚いという訳ではなく、「昨夜は室内で酒盛りをしていたらお客様が泥酔してしまい、行為どころでは無くなった」という状況証拠を作る為である。不自然ではあるが、男の記憶には何も残さなくしている為、真実はわからない。

なのでここぞとばかりに夜食を食べたのも仕方ない事であり、高級なワインの味を堪

能していったのも仕方ない。全ては証拠の為の事であり、何ら後ろめたい事は無かった。



事件の大元と思われる男は倒したが、複数犯である可能性や被害者が他にいないかを見る為にそれから蓮とユーリヤは情報収集の為の業務を続けた。

結果だけ言ってしまえば、どちらも無し。蛇人間との交戦の後はそれまで同様、客からのセクハラをいなしながら仕事をこなす状態に戻った。

蛇人間がいなくなった直後は搜索騒動が起きて一時は船内もざわめいたが、乗客からすれば他人の行方よりも自分達が享楽に耽る方が余程大事であったし、従業員側も軽く探して見つからないとなると、乗客の考え方を尊重して停泊してから本格的に探す方が良い、と結論付けられた。

蛇人間が居なくなった事で行動を変える人間もいなければ、体調が悪化した従業員も他には出ない。対象となっていた従業員は、蛇人間の実験前による処置なのか助けられた辺りの記憶も曖昧となっており、表面的に見る分には体の違和感にも慣れていった。

とはいえ、蛇人間の因子を埋め込まれた事で後々にどんな影響が出るかはわからない。暫くは政府が秘密裏に監視し、動向を見る必要があるだろう。

「——今回の仕事は次の停泊に伴い終了になります。蓮花さん、リーシャさん、お疲れ様

でした」

そうして日も経ち、日本各地の港でそれぞれ乗客を全て下ろした後、女性従業員もそれに次いで船を降りることになった。

乗客の目も無くなり、ようやく元の場所へ戻るとリーダーから言われ、ようやく仕事と制服から解放されるという思いからか、蓮は大きく息をついた。

「……お疲れの様ですね。とはいえ、初めてであれだけ動いていれば無理もありませんか。実際、お二方はかなり好評でした。働きに応じた給与は用意しましたので、安心して下さい」

「……すみません、ありがとうございます……」

「こちらこそ、慣れていなかったので大変ご迷惑おかけしました……」

蓮は力が抜けた状態のまま項垂れる様に頭を下げ、ユーリヤは恭しく礼を述べる。実際、蓮から見てもユーリヤの接客は危ない所があったというか、ちよつと流れのままに押し切られそうな所がいくつも見られた。

そういった所での確にリーダーが止めに入った為、大事には至らなかつたらしい。従業員の管理といい、つくづく仕事量の多い人だった。蓮も仕事の中で何度かアドバイスやフォローをされた事もあった為、素直に感謝している。

「お二方はこの先乗る予定は無いとの事でしたが……希望されるお客様も多かつた為、

働きたくなったらいつでも言つて下さい。高待遇で迎えます」

「か、考えておきますね……」

絶対もう乗らない。二人はそう思いつつ、リーダーから乗客からのチップ分を含めた給与を受け取る。短期間の労働としては異様の厚みの封筒をいくつかもらい、二人は破顔した。

「良かった……ホント良かったわ……私の頑張りは、無駄なんかじゃなかった……！」

「これだけあれば、しばらくは普通のものが食べられます……！」

「…………本当にお疲れ様です」

なんだかリーダーがこちらを見る目がえらく優しく感じたが、もうこの際どうでもいい。結果だけ見れば最低限の消費で、任務の報酬に加え臨時収入も確保出来た。いっそ政次郎とユリーヤを誘つて打ち上げしてもいいぐらいの気分だ。

そうしてリーダーと別れ、船が停泊したので降りる為にタラップの近くまで来ると、そこには初日の顔とほぼ同じような表情を浮かべた社長が待つていた。

「蓮花ちゃん、リーシャちゃん、お疲れ様あ」

「げ……お、お疲れ様でした」

「社長さん、この度はありがとうございます」

気が緩んでいた事もあつて蓮の口からつい嫌そうな声が漏れてしまつたが、小聲に留

めた分なんとか聞かれずに済んだ。にこにここと笑いながら社長が話を振ってくる。

「いやあ、今回はほんつとありがとねえ！二人が頑張ってくれたおかげでお客様喜んでたよお！いやあ次回が楽しみだなあ！」

「……いえ、今の所次乗る予定は無いんですけれども」

「ええ!? そんなあ、何か嫌な事でもあったのかい? お金足りなかつた?」

違う、そうじゃない。心底こちらの心情をわかる事の出来ない社長を見る視線の温度が下がりがきるが、社長は考え込んでいる様子でそれに気付かない。

「まあ乗りたくなつたらいつでも連絡してねえ。皆待つてるから、さあ?」

「……ハイ」

「……善処します」

この船最後の作り笑いを浮かべ、もう二度とこのにやけた顔は見まいと誓いつつ二人は船を降りた。船から少し離れたコンテナ地帯に立ち寄ると、既にそこには先客がいた。

「任務はこれで完了だ。ご苦労だった、二人共」

「……いつ降りて先回りしたのかわからないぐらい早いわね、政次郎くん」

「脱出までが潜入だ。人目も少ない以上、簡単だったぞ」

「そんな”帰るまでが遠足”みたいな」

ゴミ袋を背負い深めに黒笠を被った不審者……もとい政次郎が何食わぬ顔でいた。ユーリヤの通信機経由で事前に最終合流地点を決めておき、お互いの無事を確認するのだ。

とは言つても蛇人間以上の脅威が無かった以上、あくまでも念のためという程度の顔合わせだが。実質、ここでやる事は顔合わせと――

「で、政次郎くん」

「あの、政次郎さん」

「……報酬の件だろう。上にはちゃんと伝えておく、死体しやうこもわかりやすい形で回収出来たからな、心配せずとも後日両者に渡す」

「……っしー！」

「こ、これでしばらく頭を下げずに済みます……！」

こっちの確認だ。今回の船の上で稼いだ分はあくまでおまけであり、本命はこちらだ。政次郎からの確認を得て、蓮は小さくガツポーズした。これで莫大な利子に悩まされる事はしばらく無い。

「……まあいい。ともかく、今回の任務はここで終了、解散となる。また何か仕事が出来たら、優先して回す」

「あら、もう行くの？ 任務も一段落したことだし、もう少しゆっくりしてもいいでしょう

に」

「言つただろう、「暇ではない」と。死体こいつの処理や上への報告書、僕のやることはむしろこれからの方が多い」

「釣れないわねえ。ユーリヤはどう？この後ちよつとした打ち上げとか……」

「すみません蓮さん、しばらく教会を空けていたものですから早く戻りたくて……」

「……そ。なら仕方ない、か。またね、二人共」

「ああ」

「はい、お疲れ様でした」

政次郎もユーリヤも蓮と違い、怪異を倒して終わりという身ではない。どちらも相応の機関に所属している身であり、別の仕事もある。無理には誘えない。一人で打ち上げというのも絵的に物悲しいので、蓮も自分のセーフハウスに戻ることにした。



「~~~~~」

鼻歌交じりに帰路につく。今回は久々に実入りのいい事件だった。何よりも損耗が少ない、というのが気分が良い。壊した通信機の分とマガジンにも満たない銃弾、これだけで済んだ事件というのはここ最近ではあまり無い。

さすがに実際にはしないが、心の中でスキップしているような気持ちの軽さだった。

実入りの良さもそうだったが、何よりも今バッグの中に入っている封筒の束が嬉しい。

警察・政府由縁の依頼は、どうしても正しい事実確認や報告のタイムラグの為、金銭が手に入るのがワントンポ遅れる事がある。政次郎の仕事は極めて早く、裏稼業においては確実かつ迅速に報酬は振り込まれるが、そのわずかな遅れで利子の返済が危なくなったり、食事が切り詰められる事も無くはない。

それを考えると、手元にまとまった金があるというのは気分が良い。金がなければ自由ができない、金があるなら余裕は出来る。単純な事ではあるが、気持ち的には雲泥の差である。

「——見つけたぞ、掃除屋」

突如、声と共にキャリーバッグを持っていた手に衝撃が伝わる。

衝撃を受けた方向を見ると、それまで傷一つ無かったバッグがボロボロに破壊されていた。

「……………はっ?」

「掃除屋の野曾木蓮だな。我らが教団に対し何度となく牙を剥いてきたハイエナが、こんな夜中に一人で出歩くとは……不用心だったな」

声のした方向を見れば、フードを被った男が数人いた。恐らくは魔術師だろう。

次いで足元を見れば、中身ごと切り裂かれ、路上に無残に散らばった蓮の荷物だった。

ものがあつた。状況から考えれば、後ろから攻撃され、それでバツグが破壊されたのだらう。

……えっ？

「……は？あ？」

「既にこの地域は結界で遮断済みだ。貴様と行動を共にしていた愚か者どもの救援は望めんと思え。そして我らにこれまで立ちほだかつた事を後悔し、朽ち逝ゆけ」

何やら目の前の布切れの塊みたいなモノがべらべらと言葉を喋喋っているようだが、全く耳に入らない。足元を何度確認しても、そこにはポロポロになつた服や封筒しか転がっていない。

……何？なんだって？何が起こつた？コイツらは、何をしでかした？

「——……あ、ああ……ああ——……」

「……ふん、絶望的な状況に言葉も出ん、か。存外つまらんヤツだつたという事か……まあ、所詮はそんなものだろ」

「何を、して、くれ、てんの、よおおおッ!!」

全てが頭で噛み合つた瞬間、体の中を巡る毒が総動員される。

自身の怒りのままに猛毒が体から吹き出し、ほぼ無制御に打ち放つた毒の嵐が感情を代弁し、目の前の男達に襲いかかる。次々と産まれては吐き出される黒い風が、あらゆる

る抵抗を許さずこの場にいる全てを呑み込んでいく。

「があああツ!?か、体がツ……なんだこのツ、お、あ、ツ——」

「馬鹿な、ルーンによる抵抗がツ——ご、お、ツ」

「死にたくなア、ツ——」

相手の姿が人の形をしなくなるまで、毒の嵐が次々に叩き込まれる。蓮の中の激情が無くなる頃には、道に蓮以外の人影は無く、それまで魔術師がいた場所には生ゴミの様な何かしか残っていないかった。

それを確認した蓮は、再び足元のバッグに目をやった。自身が撃った毒の嵐による余波も相まって、服も札束の入っていた封筒ももはや見る影もなく崩れて落ちていく。

荒れ狂う激情が過ぎ去った後、現実を前に蓮の心に残されたのは、喪失感だけであつた。

「……わたしの、おかね……」

立つこともままならなくなった蓮は、荷物だったものの目の前で膝をついた。

その数十分後、蓮は魂が抜けた様に自身のセーフハウスへ戻り、二時間眠った。そして、目を覚ましてからしばらくして臨時収入が死んだ事を思い出し……泣いた……。

幕間、高値と花

「これなんてどうかしら、蓮」

「……値段、高くないかしら」

「ちゃんとした服なんてこんなものよ」

シヨップینگモールの一角、婦人向けの服屋にて。蓮は数少ない友人である蜜柑と共に、服を買いに来ていた。

先日の潜入事件の帰り道、唐突な襲撃によりキャリーバッグごと船での給与といくらかの着替えを失った蓮は、急ぐほどでも無かったが替えの服が必要だった。

そこで前から「時間でもあつたら一緒にシヨップینگにでも行こう」と誘って来ていた蜜柑に事情を説明し、こうして服を買いに来ていたのだが――

「じゃあこのドレスなんてどうかしら」

「さつきより高いわよお！蜜柑さんさつきから分かつて高いの選んでるわよね!？」

「そう見えるかしら」

「そうにしか見えないわ」

「まあ、そうだからね」

ふふ、と薄く微笑みながら蜜柑は次々に高値のタグ付きの服を見せてくる。「お勧めのものは何か」と聞いて、こちらの事情を知る身——むしろこちらの事情と一心同体にも等しい——でありながら、楽しそうに高値の服ばかりをチョイスしてくる辺り、本当にいい性格をしていると蓮は思う。

しかし、微笑みながら服を見せつけてくるその様が妙に可愛らしく見えるのでどうにも嫌気が差さない。……恐らくその辺りも計算の内、こちらをからかいに来ているのだろう。

「やれやれ、折角半分ぐらい真剣に選んでるのに傷ついちゃうわ」

「……蜜柑さん、実は結構はしゃいでない？」

「あら、そう？」

「なんとというか、いつもより楽しげに私をからかっている気がする」

「心外ね。私はいつも蓮で楽しく遊んでるわよ」

「蓮で？」

こちらの反応を見て、再びくすくすと笑う。いつも表情を崩さないこの人にしては、今日はよく笑っている。目の形はあまり変わらないが、口の端が上がっているのを見るだけでも蜜柑の内心は十分に察せられる。

シヨッピングに行こう、と言われたのは借金を背負った直後の事だったが、それから

しばらくは借金や利子の返済の為にひたすらあちこちの事件の解決に奔走していた為、その口約束は長らく守られていなかった。

何気ない口調で言った事とはいえ、蜜柑本人はずっと覚えて気にしていたのかもしれない。そう考えると、少々申し訳無さが湧いてくる。

「……今回のショッピング、実は楽しみにしてたの？」

「別にそうでもない……と、思っていたのだけれど。いざこうして来てみると、新鮮だからね」

「新鮮？」

「ええ。ウチの仕事柄、こうして女友達とショッピングなんてそうそう機会が無いもの」

「……ああ、納得」

蜜柑の仕事とは、この市一帯の裏を取り仕切る「弥武組」……いわゆる極道稼業の事である。

その規模と発言力は警察すらも無視できず、この市内の裏稼業に関わる者なら知らない者は居ないという位の大規模な組だ。

また、蓮の背負った借金の肩代わりをし、現在進行系でその返済の要求をしている所でもある。

「お互い……この所忙しかったからねえ……」

「どこかの誰かさんのせいだね」

「……ハイ、スイマセン」

「冗談よ。半分は」

「スイマセン」

蓮の背負う事になった二十億という借金は、本来は総額で七千万ドル——六十億円相当という、現実感すら湧かせない程の物だった。それをあちこちのツテを使い、あらゆる方法によって肩代わりし、蓮本人の借金を二十億にまで抑えたのが、現組長代理である蜜柑だった。

蓮以上の金の工面と返済に加え、蓮が任務の際に手に入れた真つ当でない品物の処理、銃器類の横流しなど、本業を含めると蜜柑の最近の仕事は考え切れない程に多い。

本来ならばどうの昔に見限られていても当然な立場の蓮にとつて、こちらを庇つてくれた上にまだ面倒を見てくれる蜜柑は頭の上がない存在だった。

「そんなに気にしなくてもいいのだけど。最近は返済のペースも良かったんだし」

「……ここに来てヤマが見つかからないの、蜜柑さんも知ってるわよね……」

「昔からこの手の仕事はこんなものじゃない。あまり慌てるから、変に焦れちゃうのよ。もう少しどっしりと構えちゃえばいいのに」

「どっしりと構えてる間に利子の請求が来て金が無くなっちゃうんだけど」

「人間、ヤッチャええば出来るものよ」

「待つて今変なニユアンスなかつた？」

蓮以上に頭を抱える立場である筈だが、蜜柑の顔にはいつも不安だとか焦りだとかは浮かばない。常にポーカーフェイスで、余裕を持って淡々と仕事をこなしていく才女。それが蓮から見た蜜柑という人物だ。

実際、蓮はこういつたシヨツピングに来る予定は少なくとも暫くは無かつた。多額の借金を抱えた身でありながら、趣味嗜好に投じられる金も時間的余裕も無いと考えていたからだ。ここに来たのもあくまで仕方のない事だからという思いが大きい。

「全く、少ない機会なんだから楽しんじゃえ方がいいのに。買う気が無くとも、こういつた服を見て着て楽しむのもまた服屋の楽しみの一つなんだから」

「……蜜柑さんほどのメンタルも余裕も無いのよ……」

だが、それ以上に余裕の無い筈の蜜柑はこうして楽しげに服を物色している。切り替えが上手いというか、仕事^{オン}と休み^{オフ}の住み分けが頭の中できっちりされているのだろう。

蓮も目の前の服を一つ取り、真つ先にタグを見る。四桁の後半にさしかかった数字を見て、一瞬思考が停止し、すぐにこの金額でどれだけの生活用品や食料が買えるかが頭をよぎる。その後、手に取った服を真顔で元の場所へそつと戻した。

「さつきからそんなのばかりよ、蓮。手に取っては顔を引きつらせて、元に戻す。そんな

んじや何しに來たんだかわかないわ」

「……仕方ないでしょ……今の手持ち、利子一月分も無いんだし……こういう所で慎重にならなきゃ、金なんてすぐ無くなっちゃいそうだし……」

「いつも装備だとか弾薬だとかざつくりと買っていていくのに。変な所貧乏性よね」

「あれは……その、仕事で何があるかわかったものじゃないし。準備はしっかりするべき、っていうか」

「それも本当だろうけど、単にそういう時だけ金銭感覚麻痺してるだけでしょ？」

「……ハイ」

蓮の仕事は準備だけで何百万円とかかる事がザラにある。弥武組からの横流し品である銃器類・弾薬・防弾ジャケット類を始め、魔術や異形対策の品など、表では流通しない分信じられない程高価なものを買うことが多いからだ。

ただ、こういった品に金を惜しむ事で痛い目を見ることは多々ある。まともな生物相手ならば凶悪極まりない蓮の能力は、決して万能ではない。

以前に蓮の毒で対抗し辛い敵に多く直面した際、愛用のショットガンの弾切れを起こして「邪魔だから下がれ」とバツサリと政次郎に言われたのは記憶に新しい。

そういつた経験もあつて、蓮は準備の際には一切金に糸目はつけないのだが……何十万とする品を一度にいくつも買ったり、銃弾や薬品を「買えるだけ」と総額も考えずに

買おうとする為、高額の買い物に限っては金銭感覚が完全に死んでいた。

「そうやってまごついてたら、本当に全部私が選んじやうわよ。……あ、ほら、このワンピースとかどう？絶対かわいいわよ」

「いやいやいやいや、何そのヒラヒラなの。絶対似合わないわよ」

「そう？結構あつちのビデオとかでは着せられてる女優多くないかしら」

「そんな所で同意を求められても困るし、さらつと私を売りに出そうとしてないかしら」
蜜柑が見せてきたのは、いかにも清楚系といった薄い色を基調としたワンピース服だった。いかにもティーンエイジャー向けといった可愛らしい印象の服で、いつも着ている服とは正反対の印象を抱かせられる。

というか、仮にも一般人がいる前で変な事を言うのはやめて頂きたい。言つた蜜柑は何事も無いように振る舞っているが、一緒にいるこちらが恥ずかしくなる。

「まあそれは冗談として、たまにはこういう可愛らしい系の服もいいんじゃないかしら。いつもこういう服着ないんだし、案外着てみたら気に入るかもしれないわよ」

「……いや、やめておくれ。蜜柑さんには悪いけど趣味じゃないし、それに……」
「それに？」

蓮は蜜柑から少し目を逸らして呟く。

「ちよつと、嫌なことを思い出すから」

「……そう」

それだけを伝えると、蜜柑は何も言わずに服を戻した。多くを伝えずとも触れて欲しくない所には踏み込まない、そういった蜜柑の心遣いを有難く思う。

こちらにとつて、別に“嫌なこと”は思い出したくもないという程の事でも無い。この稼業に入る前の、人並みの思い出。ちゃんとした家族がいて、悩み事があつて、普通の幸せがあつたというだけの事。

ただ、ある事件に巻き込まれた事を境目にそちらへは戻れなくなつた。今更その事に對して恨み言がある訳でもなく、自分の中では割り切つたつもりでいる。だからこそ、自分から昔へ戻ろうとは思わなかつた。

「じゃあこれはどうかしら。ちよつと前に流行つたらしいわよ、このニット」

「いやそういうのもちよつと」

空気が少し淀みそうになつた直後でも、蜜柑はさつきまでと同様に服を勧めてくる。それが氣遣いなのかどうかは、その変わらぬ表情からは読み取る事は出来そうになかつた。



「結局、かけた時間の割には全然買わなかつたわね、蓮」

「こんなものでしょ、元々失つた分の着替え買いに来たんだし」

「色気が無いわねえ。そんなんじや受け良くないわよ」

「別に、見栄えを気にするような相手なんていないわよ。蜜柑さんもわかつてるでしょ？」

「いや、男優から」

「だから売る予定は無いわよお!!」

結局あれから蓮は半ば押し切られる形で蜜柑の勧めた服を試着させられては戻すという事を繰り返し、最終的にはシンプルな部屋着と下着の替えだけを買う所に落ち着いた。

「どうせだから蜜柑にも同じ目に合わせてやろう、と思い少女服を取った矢先に「私の方はもう買ったわよ」と、いつの間にか服を確保していた蜜柑を見た時は流石に面を食らったが、何はともあれシヨツピングは終わった。

「どうせだし色んな所を見ましようか」という蜜柑からの提案で、シヨツピングモール内の他の服屋や生活用品店などを回っていたら、気付いた時には日が暮れ始めていた。蜜柑の言う通り、買った物の数の割に随分と時間をかけてしまった。

「今日は結構楽しかったわね。次はいつにしましようか」

「悪いけど、当分その予定は無いわよ……今回だって事故みたいなもんだつたし」

「あらそう。残念ね」

實際、そんな余裕は無い。前回の任務による報酬は預金に入ってはいるが、利子の支払いや緊急時に何か物資が必要になった時の事も考えたと心許ない。しばらくは財布の中身と相談しながら、情報収集に走らされる毎日となるだろう。

そんな事は付き合ひの長い蜜柑にしてもわかつているだろうが、それほど今日が楽しかった、という事だろうか。

「……結構意外だわ。蜜柑さん、こういう無駄な休日って嫌いそうなものだけど」

「あら、心外ね。こういった休日は全然無駄なんかじゃないわよ。人間、張り詰めてばかりだとパンクしちゃうもの。仕事の合間には息を思いつきり吐いて、また吸う。何よりも必要な事よ」

「……今の私にはちよつとキツイわ……」

蜜柑が胸に手を当て、深呼吸する振りを見せて諭してくる。その言葉は実際間違いではないと思うが、余裕のない今の身の上では少々実践し辛いものだ。

「それに、お互い危険な仕事をやってるもの。明日にはどうなるかわからない、だけど今はこうして遊んで、話してられる。それはとても幸せな事よ」

「……そう、ね」

ただ、二つ目の言葉だけは身に染みだ。確かに、こうして日常にいられる事自体が幾度も命の駆け引きをしている蓮にとっては何よりも掛け替えのない事だ。蜜柑も方向

性こそ違うが、一步間違えれば生活を失いかねない稼業の中に身を委ねている。

非日常に身を置くからこそ、日常を大切にしなければならぬ。危険な戦いにばかり身を置いてしまうと、どうしてもそれを忘れてしまい、思考が偏っていく。

そういう状態が、最も危うい。……蜜柑は、そう伝えたかったのかもしれない。

「蓮が居なくなつちやうとうちの抱えてる借金の返済も困るからね」

「……ソウネ」

流れで一緒に少しの間でも忘れられた事情ところにきつちりと釘を打ち込んでくる辺りは、蜜柑らしい厳しさだと思つた。

人食い山編

1. ハイキングへ行こう

「全員集まったな」

蓮のセーフハウス内には現在、五人の人間がいる。一人は言わずと知れたこの家の主の蓮、一人は呼び出した者が集まった事を確認する声を上げた政次郎。

前回の仕事と違い、本来の服装……シスター服を身に纏った聖職者、ユーリヤ。腕組みをして目を瞑る筋骨隆々の大男、伊達十三だてしゅうぞう。黒のパーカーを着て、携帯を弄り続けている少女、北神楽真魚きたかぐらまな。

どこを見ても統一感の全く無い、蓮のいつもの仕事仲間がこの場に揃っていた。理由は先程の通り、政次郎からの招集連絡によるものである。

「……ではこれより、依頼の説明を——真魚。何をしている」「ソシヤゲだけだ」

可能な限り表に出てこず、人付き合いを好まない政次郎がこの面子を一同に呼び出す案件は政府からの仕事の依頼ただ一つしか無い。“詳細は集まってから話す”と、全員に簡潔な呼び出しのメールが先日届き、今に至る。

だが、政次郎が説明を始めようとしても真魚は自らの携帯を弄る手を止めていなかった。

「……後にしろ」

「ここ片付いたら丁度スタミナ使い切るから待って」

「後でいいだろう」

「時間経過でデバフ切れちゃうし、レア泥アップも丁度切れちゃうから今じゃないとダメなんだけど」

「……………」

「あー」

政次郎が真魚の持つ携帯を没収する。没収された真魚は、緩慢な動きで携帯を持っていた手を伸ばして取り返そうとしているが、のらりくらりと政次郎はその手をかわす。

「別に大した事しないから、ちよつとあと数秒ポチれば終わりだから」

「……本当だろうな」

「うん。そのゲーム、ぶっちゃけ作業だし。それで一区切りってだけだし」

「……………説明はちゃんと聞く事。いいな」

「うん」

政次郎が真魚の携帯を伸ばした手に置く。その直後、真魚は気怠げな印象から予想の

つかない速さで携帯を操作していく。無表情で指だけが凄まじい速度で動く姿は、少々異様だった。

五秒にも満たない操作の後、真魚は携帯をテーブルの上に置いた。

「NK T……」

「何だそれは」

「長く 苦しい 戦いだっただ」の略」

「……………そうか」

心底どうでも良さそうに政次郎は答える。操作を受けた携帯は未だにゲーム画面が動いているが、独りでに進行していても真魚が触る必要は無いらしい。

無表情ながら心なしかやり遂げた感を漂わせる真魚に対して、政次郎はこれ以上触れようとはしなかった。これ以上の話の脱線は防ぎたかったからだ。

「今度こそ仕事の説明をするぞ」

「あ、あのー……」

「……………なんだ、シスター」

再び政次郎の話が、おずおずと手を挙げたユーリヤに止められる。さすがに二度も話し始めを潰され、政次郎も多少の苛立ちを言葉に混ぜた。

眉間に一本の皺を作り、わざわざ遮ったユーリヤの言葉を待つ。その様子を見てユー

リヤは申し訳なきように体を縮める様な姿勢になりつつも、その理由を話した。

「……伊達さんが、寝てるみたいなんですけど」

「……………」

腕を組んで今も立ち続ける十三の様子を見る。一見静かに話を待っている様に見えるが、呼吸の音が所々喉を震わせるような雑音が混じっている。はつきり言うとは、小さいいびきをかいていた。

よく注意して見れば、先程から首の角度も少し変わり、前に倒れつつある。器用な事だが、この大男は立ちながらにして眠っているらしい。

政次郎はそれを見て、懐から自身の刀を取り出す。そのまま十三に近付いて、刀の柄で思いっきり鳩尾を突いた。

「がっ!? あ、つてえー……オイコラ! 何すんだ政次郎!」

「何をしてる」は僕の台詞だ。お前は説明を夢の中で聞けるとも言う気か」

「……あれ? もしかして俺寝てた?」

「自覚なくその言葉を吐く奴の十割が寝てるな」

「……………うん、寝てたわ」

十三は眠そうな顔で頭をぼりぼりと掻き、自らの状態を思い返す。

「やべーいつから寝てたっけ……真っ先にセーフハウスに来て、暇だなーとか思ってた

のは覚えてただけど……」

「そういえば、ここに一番最初に来たのは十三さんだったわね。集合時間の三十分ぐらい前に来てたけど」

「時間にはとにかく余裕があるのがその無職だからな」

「無職言うなや」

「わかった、誰よりも暇人の童貞」

結局オブラートに包んだ言い口をより悪く直接的に言い変えただけの政次郎の言葉を受け、顔を抑えて十三は落ち込む。この面子の中では“十三が無職で童貞”というのは共有認識となっており、何かと十三はこの事について言及される。

十三は怒ってもいい立場ではあるのだが、今回の事で悪いのは話す前に眠っていた十三であり、反論できない事実でもある為に結局無言で顔を伏せる事しか出来ない。

「……いやでもお前、もうちよい優しい起こし方無いのお前。鳩尾はガチで痛いんだぞお前」

「銃把で額を殴る、こめかみに拳銃を当てて撃鉄を起こす、胸を鞘で強打する。好きなものを選べ、次からそうしてやる」

「起こし方がどれもバイオレンスすぎるコイツこわい」

政次郎は常に本気である事は知っている為、十三はビビって身を引いていた。大男が

頭一つ以上身の丈が劣る優男に脅されているのは、傍から見れば異様な光景だった。

「……政次郎くん、その辺にしときましよう。いつまで経っても話が進まなくて、真魚ちゃんがまたゲームを始めようとしてるわ」

「……真魚。一区切りついたんじゃないかったのか」

「別ゲー。こっちの方は単なるアイテム周回だから、おじさんが弄られてる間にも十分できる。だからもつと辱められていいよ、おじさん」

「俺の扱いホント酷くね？」

真魚がまた携帯を弄り始めようとした所で、蓮が政次郎に話を促す。

仕事仲間の自由過ぎる振る舞いに政次郎は諦めたような溜息をついた。このアクの強い面子——政次郎自身もそれに含まれているが——に対し、逐一まともに取り合っていないでも無駄だからだ。

「……今回の依頼は、山内の調査だ」

「山あ？」

「そうだ」

緩んだ雰囲気を引き締める為に、強引に政次郎が話し始め、十三が訝しんだ様な声を上げる。

「（こ）より離れたある山岳地帯で、一ヶ月ほど前に数人の登山客が行方不明になってい

る。その家族から搜索願が出て、遭難事件であるとした警察は救助隊員をそこに向かわせた」

「……わざわざ私達の所に出回ってくるって事は、まさか」

「野曾木の想像通り、その救助隊員も行方不明だ」

淡々と政次郎は事件の説明を続ける。

「その山は森こそ広域に広がっているが、勾配が急な訳でも、プロから見ても大きい山という訳でも無い。そういった場所で救助隊員が単に二次遭難というのは考えにくい」

「でも、それだけだと私達が必要な事件とは思えません……気を付けた上でもっと大規模な搜索隊を組んで、救助に向かえばいいのでは？」

「その通りだ。だが——」

ここで政次郎は背負い持ってきた荷物袋の中から、小型のボイスレコーダーを取り出して机の上に置く。

「この救助隊員から搜索本部への連絡が一度あった。この連絡以降、救助隊員は行方知れずとなった。実質、唯一の手がかりという事になる」

話を継がせる様に、レコーダーのスイッチを入れる。そこから発されるのは雑音が混じり、その奥から人の声が聞こえてくるような品質の悪い音で、政次郎を除く四人は身を乗り出してレコーダーから聞こえる声を聞こうとする。

『——こち——本部、応答——こちら、救助班——、視界が悪く——』

ノイズに混じり、途切れ途切れに人の声が聞こえる。救助隊員の男の声だろうか、聞き取りづらいがその声には焦りが混じっているように聞こえた。

『——に、自分以外全員倒れ——応援を——、急ぎ——』

雑音と声に混じり、がちやがちやと物が擦れて鳴っている。よく聞けば息も荒く、物音を聞く限りこの連絡をした者が走りながらである事が蓮達にはわかった。

『——の、化物がみんな——れちまつ……あ、うわあああッ!』

直後に、レコーダーからそれまでの物音とは全く異なる大きな雑音が発された。激しい雑音が散発的に響く中、途切れ途切れに男の悲痛な絶叫と、肉が潰れる様な水気のある音が僅かに聞こえた後、レコーダーは音を出さなくなつた。

『どう思う』

「……連絡した方は、走りながら連絡してきました。……何かに、追われていた?」

「聞こえた範囲だけで想像するなら、山でこつち側の化物に遭遇して、救助隊員全員ゆー・だいで、かなあ」

「最後の物音に混じって、骨が無理矢理折られた様な音が聞こえたな。余程の力で捕まつたのか?」

「……もしくは、喰われたか、ね」

明らかな異常を伝える連絡を、この場にいる全員が冷静に推理する。常人が聞けば連絡そのものを鼻で笑つてしまふ様な、“化物”の存在を前提として。

ユーリヤや蓮などは大小の違いはあるが被害者の事を考え痛ましい顔を浮かべるが、他三人はそういった様子を見せない。この三人に情けがないという訳ではなく、こういつた事に対しては割り切つて考えるようにしているだけだ。

「僕達の方でもそう考えている。この山では何らかの理由で“化物”が存在し、闊歩している。現在その一帯は地元の警察によつて一般人の立ち入りこそ封鎖されているが、先程シスターの言つた通り、第二の大規模な捜索隊が編成されている最中だ」

「……まずいわね。本当に何かいるとしたら、二次遭難どころじゃないわよ」

「ミイラ取り達がまるごとミイラ、か。シャレならんな」

「その前に、私達で調査する……という事ですね」

「ちよつとしたハイキング、だね」

十三は首を左右に振つて鳴らし、ユーリヤは既に行くことを決めた様な眼差しでいる。真魚は一切表情を変えず、呑気な事を言っているが反対する様子は見られない。要は、既に全員この調査に乗り気だという事だ。

「ハイキングというには物騒極まりないがな。出発は準備出来次第すぐ、今回は人目もつかない場所故、なんでもありだ。山や森を更地に変えたりする様な、どこかであつた

様な事以外はな」

「言われなくてもわかっているわよ政次郎くん」

政次郎が最後に蓮を一瞥し、ほぼあり得ないが唯一やつてはいけない事を一応注意する。言われずとも蓮も好き好んで大きな被害を残そうとは思わないし、同じ轍を踏んでこれ以上状況を悪化させるつもりもない。

「ツシ、今度は暴れられそうだな。とはいえ山、か……ちと骨折れそうだな」

「山登りつて初めて、かも」

「んじゃ、真魚は俺と一緒に準備しに行くか？金ぐらい出すぞ」

「別にお金は大丈夫だけど……まあもらえるモノはもらつとくね」

十三は真魚と話し、早速山の調査に必要な準備を考え始めている。まるで親子の様なそのやり取りに、蓮は少し微笑ましいと思った。

「……ん？政次郎くん、その準備って政府から出ないの？」

「税金はお前の財布では無い。そのぐらい自分で用意しろ」

「あ、あの……ここ、今月、私も厳しいのですが……」

「……野曾木。シスターの弾薬費他、準備費用はお前の割り当ての筈だ」

「え、っ」

「……」に来てユーリヤの協力の契約内容を引つ張つてこられるとは思わなかった蓮は、

政次郎からの言葉に完全に虚を突かれた。蓮にしても、今現在の預金と利子の事を考えると、自分の分以上の出費は厳しい。

「……ユーリヤ。預金いくらある？」

「これぐらい、です……うち殆ど、今週の返済で飛びます……」

「……………」

「蓮さん……」

「……………わかった、わよ……」

微笑ましい十三と真魚のやり取りとは真逆の空気が、蓮とユーリヤの周囲を包む。テーブル一つ分の距離を挟んで、恐ろしく空気の落差が激しい。

頭を抱える蓮と心底申し訳なさそうに謝り続けるユーリヤの様子を見て、政次郎は溜息をつく。人間、金が無いと何も出来ず、行動には常に金がついてくる。

(哀れだ)

とはいえ助ける気もさらさら無いので、政次郎は対岸を見るような目で二人を見つ、自身も登山に備えて持ち込む装備を考える事にした。

2. 備え無くして憂うのみ

「——ん？おい、その車、止まれ」

行方不明者を救助に來た救急隊員が二次遭難した事で、緊急事態という事で封鎖されている山の麓。

道路の封鎖を示すコーンと警官が数人立っている場所に、一台の車が接近してきた。警官の一人はすぐさま車に呼び止めをかける。車は緩やかにブレーキが踏まれ、警官の近くへ停車した。

「手前の道路にあつた看板が見えなかつたか？この先は現在、一般人の立入禁止となっている。すぐに戻る事だ」

「僕達はこの山の調査に來た者だ」

呼び止めた警官は足を止めた車のすぐ傍まで近付き、この道路の現在の状況を伝えた。すると、助手席の窓が開き、青年がそれに答えた。

「調査？……関係者には見えないな。そもそも、本部からの連絡も入っていない。変な言い訳で通ろうとするのはやめるんだな」

「真実だ。ここに來る前、そちらの署長には伝えてある。『民間の協力者が來た』と上

に伝えろ」

「……随分偉そうにホラ吹くじゃねえか」

疑わしげにする警官に対し、青年は慇懃かつ簡潔に述べる。明らかに年下と思われる青年がこちらに対して礼を欠かした言葉遣いをする事にも、見た目からして関係者とも思えない者が協力者と嘯うそぶいているのにも、警官は気に入らなかつた。

二言程のやり取りですつかり機嫌を損ねた警官は、目の前の青年に対して既に信用を失つていた。どうせ適当な物言いでこの場を通行しようとしてるとか、人気の無い山で思いっきり危険運転でもしようとしているものだと思つた。

「……確認してやるからちよつと待つてろ。逃げんなよ」

「ああ」

職務通り、警官は上司へ無線を繋げようとする。看板を無視して来た車両自体はこれまでそれなりにはいたが、警告すればすぐ来た道を戻つていった。だが、警告されても一切戻ろうとする気配の無いのはこれが初めてだ。

そういつた困つた一般人の扱いについて、現場で即座な判断を下す事は許されていない。正直さつさと追いつ返してしまえばいいと警官は思っているが、必ず不審車両は報告して判断を仰ぐ様に言われている以上は勝手な事は出来ない。

何やら運転席の大男が”話が違うじゃん”とか助手席の青年へと尋ねているが、どう

聞いてここまで運転してきたというのだろうか。

そんな事を考えるも、上司へと無線が繋がった為に思考はそちらへ切り替わる。

「報告します。不審車両を確認、〃民間の協力者〃と名乗る男二名がこちらを通行しようとしているのですが、どうしますか」

わざと助手席や運転席の男に聞こえる様に、警官は報告する。今更からかってしまった、というのは気に食わないので、騙った事に対する罪悪感を感じてもらおう。

こちらとてただ山の手前で立たされ続け腹が立っているというのに、ここにきて一手間を増やされたのだからそのぐらいいはさせてもらおう。

「——え？特徴、ですか？……迷彩服を着た大男と、ボロいマント着てる青年ですけど……は？通してもいい？えっ？」

“民間の協力者”と聞いて、無線先の上司が何か焦った様に車両内の人物の確認をしてきて、見たままの印象を伝えると即座に通行の許可を出すように求めてきた。

続いて上司は慌てた様に、何かを伝え忘れていた旨を独り言で呟いていた。それが落ち着いた後、代わりに車両の人物に対して謝罪する様に警官へ伝えてきた。

「——は、はあ、わかりました、そう伝えておきます。……通ってもいい、らしいぞ。あと、うちの上司から〃自分の連絡の不手際で大変失礼しました〃、って」

「気にするな。〃こちらは気にしていない」

釈然としないまま、上司から伝えられた通りの事を青年に伝える。ついそれまでと同じ口調で答えてしまったが、上司が畏まるような人物なら不適切な口調だったのではないかと警官はふと後悔した。

幸い、特に気にしていないというように青年は無表情のまま答え、助手席の窓が閉まる。

それが早くこの先に進みたいという風に見えたので、道路に置いていたコーンをどかす様に同僚達に指示を飛ばす。進路が空いた事を確認すると、車はそのまま先へ進んでいった。

「……どういこうった？」

明らかに不審な車両と人物達に対して、急いで通行許可が出された事に対して、警官は全く理解できないまま立ち呆けた。

◆ ◆ ◆
「……まったく、話通ってねーんじゃねーかってマジ焦ったわ」

「連絡が届かない事があるのは仕方あるまい。人である以上、ミスは付き物だ」

説明を受けてから数日後、五人は調査対象の山へやってきていた。都心部より遠い場所の為、今回は車を使つての移動となった。

検問を抜けた後、森閑とした山内の道路をひたすら車で走っていく。目的地付近の小

さな駐車場を目指しているが、峠道特有の狭く曲りくねった道が速度を抑えさせる。

運転をしている十三は溜息をつき、先程の検問の事について政次郎に話す。散々準備して遠出したのに出直し、というのは考えたくもなかった。政次郎は特にそういった心配もしていなかったようだが。

「……仕切りはもう外してもいいぞ。もう見られる事はあるまい」

「あ、そう？よかつたわ、コレあるとなんか狭苦しいしね」

政次郎の声を受けて、車の座席の前方と後方を遮っていた仕切りが外され、蓮・ユリヤ・真魚の三人が顔を出す。

検問がある事自体は最初からわかっており、その際に“民間の協力者”と表向きの建前を伝えるように手筈されていたのだが、政次郎や十三と異なり蓮達は明らかに協力者と言うには無理がある見た目をしている。

その為、無用な混乱を招かないようにする為、検問で調べられでもない限りは三人は姿を隠す事にしていて。政次郎もかなり怪しげな見た目ではあるのだが、これで女性陣三人まで姿を見せていれば見る人の不信感と言うまでもないだろう。

「……十三さん、まだ着かないの？結構暇なだけだ」

「こども曲がり道ばつかじゃしゃーねーだろ。安全第一だ」

「無理して事故を起こしても本末転倒ですしね」

「んー」

退屈そうに運転席の座席に身を乗せ、蓮が文句を言う。出発から既に一時間近くが経過しており、蓮も検問に付く前までは装備のチェックなどをしていたが、さすがに何度も同じ点検ばかりをしていればこれ以上やる必要を感じなくなつた。

ユーリヤと世間話をしようとするれば、どちらが話すにせよ最終的に借金の関わる身の上話になり空気が落ち込むし、真魚と話そうとしてもひたすら携帯を弄るばかりでろくな答えが帰つてこない。

結果、蓮はとてつもなく暇を持て余していた。さつさと外に出て暴れたいとまで思った。

「そう急かさずとも、直に着く。……というか、野曾木」

「ん、何政次郎くん」

「本気でその服装で調査する気か？」

政次郎が指摘した服装とは、蓮が出撃する際のいつもの服装……つまりは、黒を基調としたコルセット服と太腿まで露出させているミニスカートの事である。さすがに靴はいつものヒールのついた編上げブーツでは無く、運動用の靴だったが。

「山内を歩くのに向いた服装とは思えんがな。シスターもいつもと同じ聖職者服のようだが」

「……はい、そうなんですけど……」

「……削れる予算は削ってるのよ……」

「成程」

服装について言及すると、二人は即座に落ち込んだ。いくらなんでも新しく服も買えない、という様な事は無いのだが、不可欠なものでも無い限りは可能な限り出費を抑えたいというのが二人の正直な心の内だった。

政次郎が横の真魚に目を移すと、こちらの方はパーカーこそ普段着ているものと同じだが、その中にはしっかりと保温性に優れる中間着が着込まれ、またズボンも撥水性の良さそうなロングパンツとなっていた。

あまりにもいつも通りな服装の二人と、完全防備の真魚。差が異様についていた。

「真魚の服装も伊達が用意したのか？」

「山登り初めてだってんだから、備えられるだけ備えといたほうがいいだろ。とりあえず機能面だけ考えて、適当なの揃えてやった」

「山ガール、でびゅー」

ぶい、と携帯から目と手を離さず口だけで真魚が呟く。

「……いや、服装なんてどうとでもなるから。さしたる問題じゃないから。真冬ってわけじゃないんだし、そんな服装で大きな差って出ないから、たぶん」

「何も聞いていないぞ野曾木」

完全装備の真魚を見て、蓮は自分の判断に対する自信が揺らいでいた。大丈夫、問題ない、大して変わらない、いける、やれる。ひたすら似たような事を心の中で自分に言い続ける。

「お、目的地見えたぜ。全員、降りる準備しろよ」

そうしている内に道路の先によく小さな駐車場が見え、十三が全員に声をかける。

「……まあいい。自分で選んだ事だ、後から文句を言うなよ」

「わかつてるわよ、そんな気なんてさらさら無いわ」

未だに自信なさ気になっている蓮に対し、政次郎が釘を刺す。目的地が近付いてまた不安にはなったが、蓮が自分で判断した事なので自己責任というのは間違いない。

不安など気合で飛ばしてしまえばいい。ようは気の持ちようだ、いつも通りやればいい。そう考えて頭の不安を強引に押し出し、蓮は仕事のスイッチを入れた。



「い、い、めつ、ちよつ、休憩つ……」

「またか野曾木」

山内の調査を始めてから一時間ほど経ったが、蓮が休憩を求める事で調査は度々中断

されていた。

道路は既に警察や救助隊が調べ尽くしていたので、蓮達は真つ先に道路以外……道と呼べるものもない、森の中を探索していた。

が、踏み固められていない土や、滑りやすく積もった葉、それに隠された突き出た根など、歩くには不適當な悪路を歩く度に体力は奪われていく。

こういった悪路に対する経験の少ない女性陣は、最初の内はただ歩くのにも苦戦していた。

「蓮ちゃん、もしかして体力無い?」

「……私からすればなんで真魚ちゃんがそんなピンピンしてるのかわかんないわ」

頭に絡んだ蜘蛛の巣を払うことも無く息を切らす蓮に、真魚から心配の声がかかる。所々休憩するとはいえ、蓮と比べると真魚は体力に余裕を大きく持っていた。

小柄かつ明らかにインドア系といった様な真魚が、蓮より余裕を持って動いているというのが不思議に感じられた。山に入った直後は蓮と同様に、悪路に苦戦していたのだが……。

「コツ掴んだ。踏みやすいとこ探すの、結構楽しいかも」

「うそでしょ……」

同じだけ歩いている筈だが、蓮は未だにコツと呼べるような事はわかっていない。そ

もそも、どこまで見てもまるで変わらない土と葉だらけの景色の中、違いなんて探せる気がしない。

うんざりする程見てきた地面の様子から何も読み取れない事がわかると、蓮はがつくりと上体を落とし膝に手をつき、足裏の痛みを耐えつつ息をゆつくり整える事にした。

「履いてる靴も違うしな。足に違和感とか無いか？」

「ふともも張ってる」

「足裏は痛いとかあるか？」

「ふっー」

「なら問題なしだな。っーか蓮、ただの運動靴でここはしんどいだろう」

こういった場に最も慣れてる為に先導役をしていた十三が軽々と引き返し、真魚の様子を尋ねる。特に真魚に異常が無いと確認すると、今度は蓮の方へ声をかけてきた。

「……そんな違うものなの……？」

「そうじゃなきやトレッキングシューズなんて売ってねーよ。まあ真魚のはケツコーいいヤツ選んでやったし、その差も大きいだろ」

「何千円したのそれ……」

「……そういやちゃんと値段見てなかったな。いくらだっけ？」

「にまんぐらい、かな」

想定の数倍の値段を告げられ、蓮は一瞬立ちくらみを起こした。今現在の財布事情で、靴一つにかかる様な値段とは到底思えなかつたからだ。正直今日一番の衝撃とまで考えた。

「……つていうかユーリヤも運動靴じゃない、なんで私だけ……」

「私は体力をつけるよう心がけてるので、多分その違いかと……」

恨みがましい目で蓮は今度は比較的余裕のある——疲労こそしてはいるが、蓮ほどではない——様子のユーリヤを見て、苦い表情でユーリヤはその視線を返す。

ユーリヤの事を知らない者が見ればか弱い女性といった印象を抱かせそうなものだが、その実態は専門の機関に属する退魔師^{エタジニスト}であり、異形の物に対抗する為に相応の訓練は積んでいる。

特に腕力や体力に関しては、自身の武器であるスレッジハンマーを振り回す為に人並み以上が求められた。その為、ユーリヤの体力は下手な運動選手並にある。

そういつた下積み^{タタカ}の差によって、現在蓮とユーリヤには余裕の差が表れていた。蓮もこういった稼業の為に、体力は常人以上にはあるのだが、いかんせん状況が悪かつた。

「……もうやだ……」

「文句は言うなと言つたはずだが」

「独り言だから聞き流して……」

積み重なった疲労と、自分が調査の足を引っ張っている事に対する申し訳無さからつい弱気な言葉が口から出る。政次郎は一切容赦せずそこを突いてくるが、もう虚勢を返す元氣も無い。

再び頭を落とせば、ここまで歩く中で枝や葉などに引っ掛け、ボロボロに汚れて傷ついた自分の脚が目に入ってきた。

誰だいつもの服装でいいと言った奴。山を舐めるな。蓮は強くそう思った。

3. 白い狹霧の中で

「……しかし、さつきから妙に視界が悪いわねえ」

何度目とも覚えていない休憩を終えて息を整えた蓮は、周囲を見渡そうとする。ある程度進んできた辺りから、森の中の空気に白い粉の様な物が漂うのを目にするようになった。

最初はただの花粉か何かかと思つて気にもならなかった——蓮一人だけ深呼吸した際に吸い込んで咳き込むような事はあつた——が、先に進むごとに濃度は増してきた。

先が見えずに進行が難しいという様な申告な度合のものでもないが、遠くが見渡せない為少々方向感覚が失われつつある。とはいえ、この森に入った直後から十三が定期的な地図とコンパスを確認し、通つてきた木に目印をつけている為、方角や帰り道がわからなくなる事は無いだろう。

「目に入ると痛いし、吸つちやうとせきこむね」

「……真魚ちゃん、その装備だとそんな事ないでしょ」

「んー、防ぎきれてないのかなあ、たまにむせるよ。こほ」

「私は」たまに「どころじゃないけどね」

蓮が手のみで口元を隠しつつ、ジト目で真魚の顔を見る。空気に浮かぶ花粉が濃くなる前に、真魚は自分のザックからゴーグルとマスクを取り出して身につけていた。

マスクを身につけて息苦しくなるのではないかと思つたが、先程からの真魚の様子を見る限りそういう事は無いらしい。途中で「むれるっ」とかキメ顔——雰囲気だけで、表情はいつもと変わっていないかつた——で言っていたが。

とはいえ、マスクをつけてもたまに咳き込む事がある為、マスクの端の顔にフィットさせる為のワイヤーを定期的に触っている。そうやって触っている内に外の空気が入っているのではないか、と蓮は推測していた。

「レコーダーでも“視界が悪い”と言っていました、この花粉の事だったんですね……」

「いくらなんでも目に見えて濃いつつーのは不自然だなあ。これ以上濃くなるんなら、さすがに出直す必要もあんじゃね？」

「……そうだな。最悪、人数分の暗視ゴーグルでも揃える必要がある」

真魚と準備を同じくした十三も既にゴーグルとマスクをしており、政次郎も煩わしげにスカーフに口元を深めに潜らせている。ユーリヤは蓮と同様程度の用意しかされなかつた為、マスクはしていない。

空気の薄い場所を歩くのならばマスクはむしろ邪魔なのは、という出費を減らすた

めだけに逃えた準備当時の蓮の理屈によって、二人はそういった装備は持ち合わせていなかった。花粉を吸い込み咳き込む度に、二人は三百円程のマスクすら惜しんだ事を後悔していた。

「……結構休憩したとはいえ、相当歩き回ってるのに手がかりらしいもの無いわね」

「これだけ葉が積もっていると、掘り返して足跡を探すというのも非現実的だからな。伊達、お前は何か見つけなかったか」

「いんや、救助隊も似たような目印をつけて歩き回ったと思つてなんか無いか見てつけど今所はねーな。範囲的にはまだ大して歩き回つてねーし、この付近には来てねーのかもな」

「……えっ？相当歩いたわよね、私達？」

「進軍ペース遅えからなあ。まだ全体の五分の一ってどこじゃねえの」

救助隊の手がかりについて、政次郎が十三に聞いたが、十三はそれに対して文字通りのお手上げという様に肩を竦めて掌を上に戻し、肩まで上げて首を横に振る。

「さらりと述べられた」まだ五分の一〃という事実に対し、蓮は耳を疑う。相当量の擦り傷を負い、脚が泥塗れになるほど歩き回ったというのに、まだまだ歩かなければいけないのかと考えると気がどころか全身が重くなった。

「……野曾木が歩けなくなる前に、一度離脱するべきかもしれないな。今日中に終わる

とは思ってはいなかったが、これ以上疲労するのは望ましくない」

「せ、政次郎くん……優しさで感情あつたの……!」

「単純に調査効率の話だ。効率だけ考えるなら明日からお前を置いていくまで考えている」

「やっぱ政次郎くんだったわ」

現在の進行状況を考えて、政次郎が撤退の提案をする。時間的な余裕はまだまだあるが、休憩を取る間隔は徐々に短くなつてきており、このまま続ければ探索の体力が尽きかねない恐れがあつた。

それでなくとも疲労した状態で化物とぼったり遭遇するというのは、考えられ得る限り最悪の状況だ。どんな敵がいるかもわかっていない状況で無理をして、こつちまでミイラになる気はない。

後日のことを考えると、駐車場まで戻つてキャンプするのが最も良いと政次郎は考えた。車にまで戻れば、事前に準備してきたテントや食料も積んである為、数泊ぐらいは可能である。

これまでしてきた調査する手間を省き、付けてきた目印を見て最短距離で戻れば、いくら蓮が疲労しているこの状況でもここまで歩いた時間よりは遥かに早く戻れる筈だ。

「——離脱に異論は無いな。一旦駐車場まで戻るぞ。ここまでの調査範囲についてのま

とめと、後日以降も野曾木を連れて行くかどうかについて、話し合ってから一泊する」

「ちよつと待つて政次郎くんマジで待つて」

「十分休憩は取ったぞ」

「そうじゃなくて」

「安心しろ。一日分の調査費用は払う。今回の働きの色々と差つ引く事にはなるだろうが」

「それだけは勘弁して政次郎くん！明日から頑張るから！明日日本気出すからあ!!」

「……蓮さん……」

自身の報酬にまで関わる話になり、蓮は政次郎に必死の形相で詰め寄った。常に余裕のある姿——少なくとも蓮は真面目にそう振る舞っているつもりである——を仲間に見せるように心がけている蓮が、そういった考えを忘れる程に必死だった。

想定外のコストカットを受けそうになって政次郎に縋る蓮を、身につまされる思いでユーリヤは見た。私はああならないように気をつけよう……そう考えた。

◆ ◆ ◆

「す、すみません政次郎さん、こほつ、休憩、いいでしょうか……こほつ」

「……今度はシスターか」

帰路についてから、これまでのペース以上に休憩が取られるようになっていた。その

原因は今度は蓮では無く、概ねユーリヤが求めた事であった。

帰り道になって、これまでの行軍では体力に余裕を持っていたユーリヤが蓮以上に息を切らし始めた。蓮の方も例によって厳しい顔をしているが、蓮が音を上げるよりも先にユーリヤから休憩を切り出される事が殆どだった。

「すみません、急に疲れが……けほつ、こほつ……本当に、すみません」

「無理して喋らなくていい。シスターの体力事情は優先度が高い、しっかりと回復してくれ」

「政次郎くん、私の時とすっごい扱いの差を感じるんだけど」

「シスターに出来る事は潰しが利かないものが多いからな」

咳き込みながらも謝罪するユーリヤを、態度こそ変わらないが政次郎が^{いたわ}労る。自分が休憩を頼む時とは全く違う態度に対して、蓮の目は細くなる。

実際、ユーリヤはこの面子における文字通りの生命線の役割を持っている。魔力に対する高い感知能力、異形の生物や魔術に特に有効な防護術、そして死の淵からも命を呼び戻す治癒術。

特に治癒術に関しては、戦鬪らしい事を行っていない現状でも使われていた。花粉のようなものが漂うエリアを探索する様になってから、大なり小なりこの場の全員が僅かだが体調に異常を感じている。

疲労すれば咳き込みが止まらなくなったり、歩いた事による疲労とは別の倦怠感を感じたりしている。症状が目立ってくる度に、襲撃に備えてユーリヤは術によって仲間たちを治癒していた。

ただ、その術による消耗は一つ一つは小さかれ、確実に精神力と集中力を奪い、そして時間が経つことでその影響が体力にまで及んできた。現状、仲間内で最も消耗しているのは間違いなくユーリヤだ。

「……野曾木、どう思う」

「どう、つて？」

「この花粉、魔術に起因するものでないのはシスターの感知外である事からも確かだろう。だが、それ以外……人為的によって生み出された、なんらかの妨害である可能性は無いか」

「……可能性というか、まず十中八九そうよ」

政次郎はずっと前からこの花粉について不信感を覚えていた。まず、出処が分からないう。調査中に確認したが、これらの花粉を撒くような木や植物は目に映らなかつた。

次に、空気中の濃度。帰路にも関わらず、戻ろうと提案した時と同じぐらいの花粉が周囲を覆っている。風が吹いているわけでもない事は何度も確かめた。

最後に、花粉の影響。マスクの有無に関わらず、この場全員が咳き込んでいることと、

体力の衰弱を感じている。ユーリヤがここまで追い込まれている時点で、これらは自然現象と言うにはもはや無理がある。

「どういう事だ」

「落ち着いてきて今になってわかったんだけど、この粉は何かの毒よ。少なくとも、私の知る所ではないものの、ね」

「……毒だと?」

蓮が断言し、政次郎が訝しげにする。蓮は真魚のザックからマスクを取り出し、ユーリヤに渡した。

「さすがにはつきりとした効力はわからないけど……妙に思っさつき試しに耐性を下げてみたら、少しこっちにも影響が出たわ。まず間違いなく、未知の毒よ」

「お前もここまで同じ症状を起こしていたんじゃないのか」

「……咳は単に濃い所で吸ってたまにむせてるだけ。疲れてるのは自前よ」

「なんて紛らわしい」

「正直申し訳ないとは思ってるわ……自分でもちよつと前に」あれ?なんか皆と感じ違
うかな” って気付いて、確かめたわけだし……」

政次郎から冷たい目を向けられ、これまでの事もあつて弁解の余地もない蓮は申し訳
ない顔を向ける。とはいったものの、情報的に収穫である事は間違いない。

毒と聞いてユーリヤはマスクをつける。余計に疲れを助長してしまふ事は確かではあるが、このまま無防備に未知の毒を吸い込み続ける方が間違ひなく危険というのが蓮の判断だろう。毒のスペシャリストである蓮の判断に疑問を挟む事は無い。

「しかし、毒か。シスターや十分に隠せてないだろう僕はともかく、マスクをしている伊達や真魚にまで効いているのは何故だ？」

「そつちはわかつてるわ。皮膚に付着する事でも体に少しずつ浸透していくタイプだからよ。吸い込めば当然万全の効果を発揮するでしょうけど、そうでなくとも時間さえかければ全員同じぐらい体力を奪われるでしょうね」

「……厄介だな」

「遅効性なのが唯一の救いね。ユーリヤも疲れてきているし、帰るまでは私の能力で回復させるわ」

人間、皮膚を晒さない服装などまずしない。耳まで覆いきる事も、顔全体を防ぐこともそう無いし、服の袖口の僅かな隙間からも肌は空気に触れていると言える。

故に空気による接触感染というのは知らずに防げるものではない。空気というあまりにも大きな物に混ぜる分濃度が薄くなりやすく、命まで関わる程の事にはそう至らないのが幸いだが。

蓮は毒に対抗する為の物質——薬毒を放出し、一旦仲間全員の顔全体をガスで覆う。

と言つても、害を為すようなものではなく、文字通りの気体ガスであり、手つ取り早く顔に付着した毒物を浄化し、呼吸器官を治す為のものだ。

「おつ、なんか気分良くなつたかも。なー蓮、今マスク外してもいいのかわ？」

「いいわよ、この場の毒に関してはそれで殺菌出来てる筈だし。あんまり深呼吸されるとこつちの維持操作が面倒だからやめてほしいけど」

「大分、楽になつてきました。ありがとうございます、蓮さん」

「……お前の能力で治されるのは、わかつていても正直いい気分がしないな」

「気分が悪くなるレベルまで濃度上げるわよ政次郎くん」

そもそも「全ての物質は有害であり、それが毒か薬かは量による」という言葉があるように、毒物と呼ばれないものもまた過剰な投与をすれば人に害となる。

その逆も然りで、少量で毒とされる物質も微量であれば人体に必要なものが多い。医薬品などの人の体を整えるモノもまた、同じようなものだ。

蓮の能力は毒を操ることであり、その中身を致死レベルまで濃くすることも、薬品レベルまで薄くすることも自在だ。一口に“毒の操作”といつても、その幅は極めて広く応用が効く。やろうと思えば怪我すら無理矢理治す毒すら作れる。

……とはいえ、ユーリヤの術ほど治癒に適している訳でもなく、適切な毒を生み出すにも操るにも集中力を要する為、基本的には適材適所として仕事は分けている。蓮の能

力が最も効力を發揮するのは、やはり生物に対しての攻撃だからだ。

「んじゃ、皆マスクつけて。……とりあえず即座に影響が出るタイプじゃないのは確かだから、休憩の度に今のガスを作るわ」

「今のガスを常時展開する事はできないのか？」

「出来ない事はないけど、四人分となると維持に集中力が持っていられるのと、非常時に激しく動かれるだけで私の操作がおっつかないわ。立ち止まって休憩してる時じゃないと辛いわね」

「……野曾木で防げるとわかったただけ儲け物だな。ちなみに、皮膚に付着した分は殺菌しなくていいのか」

「帰ってからね。……正直、この状況で襲われなと思う？」

「僕が襲撃するなら、今しかないな」

「敵が来る事を想定するなら、消耗は最低限に留めたいわ。……今、確実に毒を受けていないと言い切れるのは私だけだからね」

常に最悪の事態は想定する事。そして、自分が相手の立場だったらどうするかを予想する事。それらの観点から言って、既にこちらは敵の術中に嵌っている可能性がある。

非自然の毒、山中に存在する化物、削られた体力。これらが全て知性のある者が引き起こした事であれば、この状況で易易と帰れるとは思えない。

蓮と政次郎の会話により、自ずと五人は未知の敵による襲撃に備えて警戒し始めた。今見えている物、周囲の音、空気のざらつき。それら全てに、警戒を払う。

「——真魚、後ろだ！」

何かの違和感を感じた政次郎が真魚へ叫び、十三が真魚の方向へ一息で跳ぶ。

直後に真魚の後方から影が伸びてくるが、真魚に当たる直前で十三が間へ割って入り、ほぼ考えずにその影にすかさず左の豪腕を振るう。

その影は拳に当たる前にうねり、振り抜かれた腕に絡みつき、その影の先が十三の胴部へ巻き付いた。

「……木い!？」

自分の腕に絡み付いた存在を確かめ、十三が大きく声を上げる。

全員が影の正体を目で確かめた。筒の様に太い灰色の木の枝が十三の腕に巻き付き、楕円に広がった平べったい先端が胴体に巻き付いている。枝の大元を見やれば、四メートルはゆうに超えるだろう、巨大な影がある。

まるで巨大な枯れ木の様だった。そのシルエットには幹と枝のようなものしか見えない。急激に空気が動いた事で、白い霧は少しずつ蓮達の後方へ流れていく。

そして周囲の霧が薄まった事で気付く。その巨大な木の上部が不自然に丸いことと、その部分が大きく口を開いて、牙を覗かせていることを。

「十三さん、ほどこいてツ!!」

蓮が大声を上げると同時に、十三の体は地面から引っこ抜かれる様に、その巨木の“手”によって引っ張られ、強制的に宙に浮かされた。

4. 牙を剥く森

「うおおあああッ!」

巨木の枝の手に掴まれ、十三の体が地を離れ、怪物が開いた口へと引き寄せられていく。

即座に政次郎は腰のホルスターからサブマシンガンを抜き、巨木の体へ向けてトリガーを引いた。

敵の大きさから特に狙いを定める必要もなく、ただ前へ撃てばその殆どは当たると見て、フルオートで容赦無く銃弾を浴びせていく。撃ち放った弾丸は全て巨木の胴体へ命中し、巨木は動きを止める。

「チッ」

一瞬の制止の後、木の怪物はさしたるダメージも受けた様子も見せず、十三を掴む手とは別の手を政次郎へと振るう。その手が体に届く前に、政次郎は身を斜めにしながらその場から後ろへ飛び退き回避する。

枝の手が振り抜かれ、飛び退いて着地した政次郎をさらに追おうという動きを見せた所で、その手のある空間が唐突に切り刻まれ、表面に傷がつけられる。

「蓮ちゃん、今」

「ナイス真魚ちゃん！」

真魚は手元の魔術エミュレータ——魔術に必要な工程をコンピュータによつて擬似再現する、彼女の“武器”——を起動し、不可視の刃をその手へ向けて撃っていた。

それを見て蓮がすかさず酸毒のガスを生み出して放つ。魔術の刃によつて唐突に傷がつけられて怯み、動きが一瞬止まった枝の手の傷口へと酸毒が直撃し、音を立てて傷口が焼かれていく。

傷口自体は小さなものだが、そこを起点に蓮の毒が手の中を侵していき、手は内外部から同時に、徐々に焼かれていく。

「K U A a a a a !」

その毒から逃れる様に巨木は悲鳴を上げて政次郎へ伸ばした手を引つ込める。ガスの範囲から逃れた手はそれ以上焼かれる事もなく、体内へ侵入した毒も少量でそれ以上の影響は現れない。

巨木が痛みに声を上げたのと同時に、掴まれた十三がその手の中でもがき始める。

「はなっせコラー！くのツ——あーだだだあつ！」

が、巨木の手は十三をより強く握ることによつて強引に押さえ込んだ。自身よりも明らかに強い力で体を締め付けられ、十三の顔が苦悶に歪む。

「野曾木、知ってるなら説明しろ、五秒以内で」

「ザイクロトラン」！木の怪物、捕まったら喰われる！」

「俺聞きたくなかったそんなの！……あいでええー！」

ザイクロトラン。惑星ザイクロトルにかつて住んでいたとされる、光沢を持つ灰色の大樹の形をした、地球外来の宇宙生物の一つ。

複数の触肢を持ち、その頭部に人間の子供であれば一呑みに出来るほどの大きな口と牙を持つ樹木型の生物。それが蓮達が今対峙している巨体の正体だった。

「十三さんなんかそこから抜けて！そいつ、体をちぎろうとしてる！」

「言われずとも今現在進行系で足がもげそうなんだよ！おいコラ変な所触ろうとすがッ！」

暴れる十三の上体を掴んでいる触肢が押さえ込み、空いた下半身に別の触肢が伸びて十三の両脚を力任せに引っ張り始める。

ザイクロトランは口に入らない程の大きさの人間を捕まえると、その獲物を小さくして食べようとする習性がある。今は十三の腕や脚をちぎる事で食べやすい大きさにしようとしていた。

「離して下さいっ!!」

「フッ！」

十三の脚を引つ張る別の触肢へ向け、ユーリヤが愛用のスレッジハンマーを全力でぶつけ、衝撃に怯んだ所へユーリヤの影から接近してきた政次郎が刀を抜き放ち、両断する気で二度振るう。

ユーリヤの一撃によって十三の脚から触肢を離させる事には成功したが、政次郎の刀はその木の堅さに阻まれて途中で刃が止まり、僅かに切り込み傷を入れるだけで終わった。

「aaaA!」

「く……!」

「きやあつ!!」

二人に攻撃されて目障りに思ったのか、ザイクロトランは三本目の触肢を政次郎とユーリヤへ向け、蠅を払う様に勢い良く振り抜いた。

政次郎は咄嗟の所で斜め前方に飛び込み、触肢の軌道の死角へ入る事で回避したが、ハンマーを前に掲げて身を固めたユーリヤは触肢に大きく突き飛ばされ、地面へ転がされた。

「ユーリヤ、無事!?!」

「ツげほつ、ごほつ……だ、大丈夫で——げほつ!!」

受け身こそ取ったものの、ユーリヤは地面から立ち上がる事が出来ずに嘔吐えづいてい

た。ダメージ自体が大きいというのもあるが、今の状態で強い衝撃を受けた事が悪かった。

周囲にまだ残っている毒粉が、ここまでの行軍で衰弱し、強い衝撃を受けて息が荒れて疲労が出た体を蝕んでいく。加速度的に体が重くなるのを感じ、ユーリヤは力を入れ直せず立てないでいた。

「……起きれたらすぐ下がって自分を治療しなさい、ユーリヤ。真魚ちゃんも触肢が届かない位置まで下がって、あれは一発受けたらほぼアウトだわ」

「うん、一応でつかいの構えとくからイケたら合図よろしく」
「頼りにさせてもらうわ」

真魚は魔術エミューレータを操作しながら、早めに後ろ歩きで下がっていく。距離を取っていく真魚を見送りながら、蓮は背中に背負ったショットガンを手を取った。

黒を基調とした銃身に取り付けられた、正規の量産品にはあり得ない金の装飾が鈍く光を返す。

「……んとこ使ってなかったわね……頼りにしてるわよ、相棒」

“ダゴン殺し”。ウインチェスターM1887をベースに、蓮の性格や能力に合わせてあらゆる部分を全面的に交換・改造し、魔術付与までされた対神話生物用ショットガン。

本来単純な制圧^{ストッピングパワー}力を考えれば、集中して多くの銃弾を撃ち込む事の出来るサブマシンガンやアサルトライフルの方が強力ではある。これらは何も対人のみならず、神話生物の様な異形に対しても基本的には共通している。

が、そういった事情を差し引いても蓮はこのショットガンよりも頼れる銃は無いと考えている。

「政次郎くん、ぶつ放すからなんとかそつから離れなさい！」

「この状況で無茶を言ってくれろ」

ザイクロトランと肉薄した状態で、次々と襲いかかる複数の触肢を紙一重で政次郎はかわし続けている。最初のサブマシンガンの斉射や、刀による攻撃で有効打を与えられなかった事を見て、政次郎は反撃を諦めて回避に専念していた。

ただ触肢から離脱するだけなら既に出て来ただろうが、吹き飛ばされたユーリヤや、未だ掴まつてる十三の事を考えると、身軽な自分が敵の注意を引いている方が被害が少なく済む。

そういう考えから、政次郎はユーリヤが突き飛ばされてからザイクロトランの周囲で防戦に徹していた。一度触肢に掴まれば終わりの状況で、政次郎は焦る様子も無くのりくらしと避け続けている。

誰よりも危険な状況にいる政次郎に対し、蓮は「離れろ」と言い放つ。政次郎はそれ

に伝えて複数の触肢に同時に襲われながらも、それらを身を振ったり刀の背で弾きいなしながら後退し、少しずつ確実に距離を取っていった。

「んじゃ、いつちよ——」

政次郎が上手くザイクロトランの近くから離れていくのを見て、蓮はダゴン殺しを右手に持つて体を前傾させ、毒を体内に循環させる。耐性を僅かに下げる事で、その効果は徐々に表れてくる。

目の前の“獲物”にのみ意識が集まる。手に持つ銃の重さと、地面を踏み締める足の感覚が鋭敏になる。血と共に巡る脳内物質が、体の奥底に眠るものを引き出す。

「——派手にかますわよー」

弾け飛ぶ勢いで地面を蹴り、蓮は一気にザイクロトランへ肉薄する。

ザイクロトランが逃げる政次郎への追撃に気を取られている内に、ダゴン殺しを両手で構えてその胸部へ見上げるように照準を合わせる。一気に近付いてきた蓮に視線が向くのを感じるが、触肢が動くよりも蓮の次の行動は速い。

最初の政次郎のサブマシンガンの斉射では、いい所表面を削るだけが精一杯だった。ザイクロトランの表皮は丈夫であり、拳銃弾をばら撒くだけでは撃ち貫けない。ならばどうするか。

「ぶっ飛びなさいッ!!」

こちらへ触肢を伸ばされるよりも早く、胴部へ散弾を撃ち込む。二発、三発、四発。手早くトリガーと一体化しているレバーを前後させ、排莖と発射を繰り返す。

より威力が高い弾を、より近くから、より多く撃ち込む。極めて単純な解決策。それも、今撃っている弾は通常の12ゲージ弾ではなく、蓮の能力によつて毒性がより付与された硫化水銀の散弾である。

直撃した所から対怪物用の毒が胴部に突き刺さり、強引な連射によりさらに深い所まで食い込んでいく。銃の反動が蓮の体を強く揺さぶるが、限界まで高めた身体能力と集中力が暴れる銃を抑え込み、同じ箇所へ弾丸の雨を浴びせていく。

「G U O o o o !!」

「ツうつさいー!」

四発目を受けて痛みに振れる巨体を見て、あえて銃身を抑える左手を離し右手だけでレバーを握つて前へ動かし、それを軸として銃身も逆方向へ回転する。

勢いのまま一回転し手元に戻ってきた銃床を持ち直すと同時に、止めた勢いでレバーを戻して装弾。左手で持ち直す手間も惜しいというように、そのまま右腕を伸ばして五発目を発射した。

反動によつて抑え込まれていない銃身は跳ねたが、どうにか制御してそれまでの傷口へ散弾を浴びせる。あまりの痛みと不快感をもたらした蓮を排除する為、ザイクロトラ

ンが悲鳴を上げながらも二本の触肢を蓮へ叩きつけようと大きく振り上げる。
「んんんだらあつー！」

散弾を浴びて蓮へ注意が逸れ、自身を掴んでいる触肢の力が一瞬抜けた所を見て十三が渾身の力で体に入力直し、手の内側に出来た僅かな隙間に肘打ち、次いで腕を滑り込ませて強引に触肢の拘束をこじ開ける。

獲物が手の内から逃れるのを見て蓮へ振るわれる触肢の動きが精彩を欠く。毒により研ぎ澄まされた感覚により、蓮はただ直線的に叩きつけられる触肢の動きを見切り、素早く後ろへ飛んでかわした。

蓮がその場から飛び退いた事によって代わりに地面へと手が叩きつけられ、その轟音に次いで触肢による拘束から逃れて十三が着地する。

「コオオオツ——」

着地と同時に、脇へ両腕を引いて構えつつ音を立てて十三が呼吸を吐く。息を強引に整えた後、十三は一瞬強く息を吸って流れるように身体をザイクロトランのいる正面へと向けた。

「かアツ！」

肺の底まで吸った空気を絞り出す様に吐き出しながら、十三はザイクロトランへ殴りかかった。

サブマシンガンの斉射にすら耐えた堅い表皮へ、鍛え抜かれた拳骨を叩きつける。衝撃が十分に中まで通らない感触を無視しながら、ぶつけた拳を引いた勢いで腰を回して逆の拳を振り抜く。

殴る・引く・殴る・引く。常人が一呼吸を終えられない程の短い間に、殴る為に鍛え抜かれた拳が幾度もザイクロトランの胴体へと、目にも留まらぬ速さで打ち込まれていく。

相手に通用するかどうか迷いも一切せず、体が動く限り全力で殴り続ける。十三にとつて大事な事は、目の前の物体が“殴れるかどうか”だけだ。殴れるのであれば、例えそれが木だろうが鉄だろうが関係無い。

死ぬまで殴る。そのつもりで、さらに大きく前へ踏み込んでもう何発目かも覚えていない拳を目の前の怪物（ごんちきしょう）にぶち当てていく。

「ツGRUUOOO!!」

十三の渾身の連打を受け続け、ついに怪物の方が音を上げる。逃れた獲物を再び捕まえようと十三へ構えていた触肢が痛みに震え、僅かに巨体が後ろへたじろいだ。

「十三さん下がって！真魚ちゃん、やっちゃって！」

明らかな隙を見せたザイクロトランを見て、蓮が声を上げて後退する。さらに打ち込もうと拳を構えていた十三がそれを聞き、すぐさまザイクロトランへ背を向けて全力で

離脱する。

十三には何故蓮が撤退を指示するのか、真魚が何をしようとしているか、どちらもわかっていない。ただ、こと化物との戦いにおいては蓮の判断に対して全幅の信頼を置いている為、条件反射で言われた通りに動いていた。

「指定よーし、プログラムよーし」

気の抜けた声が蓮の後方から聞こえる。下がった蓮がそちらを見れば、真魚の持つ魔術エミュレータが薄ぼんやりと光を放ち、真魚の周囲に魔力が循環している。

眠たげな無表情で、真魚は疑似魔術プログラムの最後のタツプひとおしをする。

「——燃えちゃえ」

瞬間、黒の炎が巨体を覆い尽くす。

燃焼していながら光を吸う様な色を放つその炎は、瞬く間にマイクロトランの全身に行き渡り、異常な勢いで燃え広がっていく。

奇妙な事に、黒い炎は僅かにその熱で周囲を焦がすことはあっても、他の木に燃え広がることなく、まるでマイクロトランを食い尽くすように次々に黒い炎が巡り、向かっていく。

「A、A、A、aaッ!!」

この世の生物とは思えない濁った叫び声が空気を震わせ、マイクロトランは黒い炎を

振り払おうと触肢で体を叩き続けるが、触れた触肢にもその分の炎がさらに燃え移り、炎は勢いを増し続ける。

まるで意志を持って襲いかかるような炎に対し、マイクロトランは何も出来ずにいた。逃れることも敵わないと悟った怪物は、蓮達を無視して地面や周囲の木々に自らの体をぶつけ、暴れ回る。

「もいっぱあーっ」

炎で即死しない事を確認すると、真魚が容赦なく同様のプログラムを選択し、再び消える事の無い黒炎がマイクロトランへ覆い被せられた。

ただでさえ苦しんでいるマイクロトランに、襲いかかる地獄の火が追加される。もはや金切り声すら上げることが出来ず、二度目の炎が撃たれて十秒足らずでその巨体は残らず炭と化した。

轟音を立てて、炭の塊となった巨体が森の中へ倒れる。それを確認して、真魚はプログラムの中断をエミュレータに指で命じ、あり得ざる生きた炎はこの場から消えた。

「……もえつきたぜ、まっしろにな……」

「真っ黒よ」

満足気な空気を出しながらどこか哀愁漂わせる顔をする真魚へ蓮はすかさず突っ込んだ。

5. 輪を組んで

「——解毒はこれでよし。と言つても、失つた体力が戻つて来る訳じゃないからユーリヤは無理に動くのも術使うのも禁止、いいわね」

「すみません、蓮さん……」

「ここまでユーリヤは十分仕事をしてくれたんだし、誰も文句言わないわよ」

衰弱したユーリヤに付着した毒を体全体を解毒用のガスで覆う事で少しづつ分解していく。完全に浄化する事も出来るが、ここから帰るにあたり一切の毒を奪い去り、体の抵抗力を落とすのは良くない。

毒による肉体的な疲労だけでなく、術を使い続けた事による精神的な疲労も目立っている。遭遇戦も想定し、気をつけながら行軍していたにも関わらず、今のユーリヤの消耗はかなり激しい。毒を取るだけでは不十分と考えた蓮は、さらに別の毒を配合する。

「歩くのもしんどそうだし、ちよつと体に喝入れるわよ。帰るまでの間だけなら多分普通に歩けるようになる筈だけど、戻ったらすごい眠くなると思うから気をつけてね」

「……わかりました、お願いします」

脳内物質を促進させる毒を少量作り、ユーリヤの口へ気体として流し込む。液体状に

作り飲ませてでも構わないのだが、指を口の中に入れて液体を垂らすというのは見た目的に躊躇われた。

毒を送り込まれたユーリヤは少し苦しそうな顔をした後、少しずつ顔からそれまで見せていた疲労の色が消えていく。効力が効力だけに、効き過ぎないように慎重に蓮は毒を送り込んでいった。

「——う、あ、つ……あ、体が一気に軽くなりましたっ！凄いい効き目ですねこれ！」

「……ここまでね。疲労が無くなった訳じゃないから、無理はしないでね」

「はい！」

「一瞬で怖いぐらい元気になってんだけど。やべー成分使ってねそれ？」

「依存性はないから大丈夫よ。……………たぶん」

「蓮さん!？」

「ち、ちがうこれはただのビタミン剤じゃー」

「真魚ちゃんどこでそんなん覚えてくるの」

立つのもままならないといった様子だったユーリヤが、それまでの疲れを感じさせない様子で体を軽々と動かして疲労を確かめる。それまで何かのしかかっていた様な体の重さも、もう感じなかった。

あまりの即効性に十三は軽く引いており、真魚は危なげな言い回しで、傍から見た今

のユーリヤの様子を表現している。蓮もやりすぎてないかちよつと不安になった。

「……シスターの応急処置が終わつたなら早く離脱するぞ。さつきの怪物が一匹だけでも限らん。この状況でまた不意を突かれれば、次は対応出来るかわからん」

政次郎が場の空気を締め、四人は現状を思い返し頷いた。ザイクロトランは先程、大した音も経てずに真魚の後方から現れた。

視界の悪さを利用してこの森の木に紛れ込んでいるのは確かであり、さらにザイクロトランは一見してただ巨大な木ではあるが、きちんと足があり、音も立てずに獲物に迫る事を得意とする。

周囲が木に囲まれている今の状況では、どこに隠れてどこから現れるかなど予想もつかない。一度発見されて交戦した以上、他のザイクロトランがこちらに近寄ってくる事も考えられる。

「ユーリヤは念のため私の近くを歩いて、体に不調を覚えたんならすぐ治すわ」

「わかりました、お願いします」

「殿は僕がやろう」

そうして帰るまでの間、十三を先頭に少し距離を離しつつ、蓮・ユーリヤ・真魚が固まり、その少し後方に政次郎が殿として警戒しながら歩くことにした。

歩幅は蓮達三人に合わせ、付かず離れずの距離を十三と政次郎が保ちながら少しずつ

駐車場まで戻る。先程使用した銃弾を再装填しつつ、周囲を警戒しながら足場の悪い地面を確実に踏み締めていく。

幸い、再びザイクロトランと遭遇する事は無かった。途中で再び蓮は歩くのもしんどくなる程疲れ切ったが、こっそりユーリヤの回復に使ったものと同質の毒を自身の体に回すことで意地を張った為、帰路は最低限の休憩だけで済んだ。



「めっ……ちや、しんどいわ……」

駐車場の端で、ガードレールに手と体重を乗せ、気怠そうに蓮は木の間から見える夜景を眺める。

ここへ帰還してからテントの設営をしている内に、日は落ちてすっかり夜となった。設営が終わった現在、簡単な夕食の準備を十三がしている。テントが完成してから、ユーリヤは蓮の毒による効力が抜け、抑えていた疲れが出た為にすぐに中に入って横になった。

政次郎は離れた所で刀の手入れと持ち歩く装備の見直しをしており、真魚は圏外となったスマホを見て絶望的な顔色を見せた後、退屈を持って余してテントで寝転がっている。

蓮もまた、これまでの行軍や帰ってくるまでにこっそり使用した毒が抜けたことによ

る疲労が強くて出ており、ついでにダゴン殺しを連射した事による反動で右腕が痺れていた。

戦闘時やその直後は興奮状態にあった為に気にならなかつたが、さすがに威力を上げた為に反動も強くなつたダゴン殺しを連射するのは体に相当に負担がかかつていた。さらに言うなら――

「……片手撃ちなんてやるもんじゃないわね……」

ザイクロトランへの連射の最後、半ば勢いで曲芸染みた銃の再装填と片手撃ちを行い、発射の反動が右腕に集中した。毒による身体能力の底上げをしていたからなんとか制御出来たものの、どう考えても無理のある撃ち方だつた。

興奮状態にあつた事もあつて、つい格好をつけてしまったのは否めない。あくまで蓮の能力は体内の神経物質などに作用させて身体能力の限界を引き出すものであり、出来ないことが出来るようになるわけじゃない。

体に無理のある事をすれば、その分の反動は必ずやってくる。それが今だつた。

「おい蓮、メシ出来たぞー。ユーリヤと真魚起こしてくれ」

「ん、わかつたわー」

反省している所に十三の声がかかる。まあ骨が折れた訳でもないし、一晩も寝れば治るだろう。今度はこんな無茶な真似はしないようにすればいいだけの話ではあるし、

やっちゃったものは仕方ない。これ以上は気にしない事にした。

女性用に充てられた大型テントに入り、中でぐっすりと眠るユーリヤを揺り起こす。真魚は十三の声が聞こえていたのか、既に起きていた。気持ち不機嫌そう、眠そうな顔をしている。

「ん、んん……か、体が重い、です……」

「……もうちよいで寝れそうだったのにー」

ユーリヤは寝惚け眼をこすりながら気怠げに起き、真魚は渋々といった様子で立ち上がる。

三人はテントから出て、持ち運び式の三脚の頂点にランタンをつけた明かりの下にいる十三や政次郎のいる所へ向かい、厚みのあるレジャーシートへ腰を下ろした。

十三は三人へ、皿に盛られたレトルトのカレーライスと手拭きをてきぱきと配っている。なんか主夫みたいだなこの人、と蓮は考えたが口には出さなかった。

「相当参ってんなあ。大分眠そうだぞ」

「……正直、すぐにでも寝そうです……」

「わたしはさつきようやく寝れそうだったのをおじさんにジヤマされた」

「え、俺悪いのそれ」

ユーリヤは臉を重々しくしており、真魚は若干不機嫌そうに十三を睨んでいる。とは

いっても本気で睨んでいるわけではなく、ほぼポーズだけなのは見てわかる。

政次郎は蓮達が来る前よりも先に座っており、三人が来る前から食べ始めていたらしい。十三の皿は未だ減っていない。わざわざ三人が来るのを待っていたのだろうか、見た目によらない律儀さを感じる。

手拭きで手の汚れを落とし、政次郎を除く四人は手を合わせる。ユーリヤだけ食前の挨拶が長いので、さすがにそちらは待たずに三人はカレーに口をつけ始めた。

「可もなく不可もない、よくある」としか表現出来ない味がする。とはいえ不味い訳でもないし、散々の行軍と戦闘で疲れた体には十分に美味しく感じられるものではあった。

「野曾木。ダメ元で聞くが、山内の毒の解析は出来るか」

「難しいわ。いくら毒操作能力って言ったって、私から出た物でもない未知の毒じゃあ分析するだけで時間がかかりすぎる。対抗する毒は作れたけど、それだって総当り気味に作っただけなもの」

政次郎が山内で遭遇した毒の粉について蓮に聞くが、良い答えを返すことは出来ない。

蓮の能力はほぼあらゆる毒性に対して耐性を持ち、自身の考える通りに生み出して操作できるというものである。

転じて能力で生み出せる既知の毒ガスや薬毒であれば、吸収・摂取時の肉体の反応で分析も出来る。だが、山内で遭遇した毒は未知の毒であり、その成り立ちや詳細を知らない今の蓮では分析にも再現にも時間が必要だ。

そして、今蓮達に最も足りないのがまさにその時間だった。

「……次の救助隊が編成されるまでの時間を考えると、わざわざ化学防護服などの装備を支給してもらおうのは不可能だな。最悪救助隊を圧力で止める事も出来るが、望ましくはない」

「まー二次遭難者出てる状況で、救助隊ちよい待て」とか、ありえねーわな」

「なんととしても早く解決しないといけませんね……」

接触によって感染する毒だと言うなら、最も考えられる対策は全身を覆う防護服だ。だが、戦闘をするにはあまりにも重く、また着たまま山内を歩き回るには体力的な不安が残る。

それに装備の手配をもらうにも時間がかかる。速やかな解決を目指している状況で、余計な手間や手続きをする余裕は無い。

「毒については今日みたいに、休憩を取りながら私かなんとかするしかないわね。定期的に抵抗力を上げてやれば、あの位の毒なら皆でも対抗出来ると思うわ。……私がかめつちや疲れる事になるだろうけど」

「あの木の怪物どうするの？ あんなのいっぱいいるんなら、やつばここ全部焼いちやう方がはやくない？」

「却下だ。さすがに山一つが焼け野原となれば、どう足掻いても揉み消せん」

平然と唯一の禁止事項を口走る真魚に政次郎は制止を入れる。実際、森の中に潜む木の怪物というのは厄介だ。この山に何匹潜んでいるかもわからない現状では、全ての対処は難しい。

政次郎としては、手持ちの銃や刀で遭遇した怪物に太刀打ち出来ないというのも厳しい状況だった。これらが使えない場合、政次郎は基本的に爆弾やロケットランチャーなどの大火力の火器で異形に対処する。

ただ、周囲が全て森となると下手に広範囲を炎上させる爆弾は使えないし、大型の武装は山内で持ち運ぶのは無理がある。真魚の様に制御が効き、怪物に有効な装備が現状の政次郎には無い。

「……毒が妨害なんだとしたら、ザイクロトランを召喚した誰かがどこかに潜んでいる筈よ。人を寄せ付けない様にして、何か大規模な術の準備をしている可能性がある」

「んー、召喚？ あの化物が最初からこの山にいたって可能性ってないの？」

「まず無いと思うわ。政次郎くん、この山で他に遭難して行方不明になった人って、昔いた？」

「せいぜい道路で事故を起こしたとかその程度の事件しか起こっていないな。そもそもこの山は通行用の峠であって、好き好んでハイキングに来るような山ではない」

「あのザイクロトランは成体だった。幼体の頃があつたなら、その時点で目撃証言や犠牲者が出てる筈よ」

今日遭遇したザイクロトランの大きさを思い出し、蓮が説明する。ザイクロトランは木の姿を取つてはいるが、生物である以上は成長と個体差が存在する。

今回遭遇したザイクロトランはごく少ない遭遇報告の成体とほぼ同格だった。肉食性であるザイクロトランが幼体の頃に何もしないと、元々この山に棲んでいたとするなら既にこの山の生態系はボロボロになり、犠牲者ももつと昔から出ていただろう。

「……安易に決めつける事は出来んが、筋は通っているな。明日以降の方針は怪物の捜索、及び黒幕の断定を目指す。異論はないか」

全員が首を縦に振る。

「……政次郎くん、毒に対して絶対必要だしちゃんと明日も私連れてつてくれるわよね。終わったら報酬出るわよね」

「心配せずとも連れて行く。こちらの消耗をお前一人で防げるなら、必要経費だ」

「蓮ちゃん必死だね」

「あれ見てると世知辛さを感じるな」

帰ってくる前の話題を思い出してまた不安そうに話しかけてくる蓮を、目を瞑って政次郎が応じる。金が関わってしまえば途端に態度が弱々しくなる蓮を、三人は憐れむしか出来なかった。

6. 澱みの奥へ

ザイクロトランに襲撃され、それを撃退した翌日。初日と同様に、蓮達は歩き辛い山内の森の中の探索をしていた。

ユーリヤと蓮が疲労の余り朝起きるのが遅れた為、本来予定していた探索の開始時刻から一時間ほど遅れることになったが、それ以外に概ね変わった所は無い。

前回まで探索した地点の隣のエリアから、ローラーをかける様に徐々に、森の中を隅々まで見落とさないよう踏破していく。

例の毒の粉もまた当然の如く現れたが、前日に言った通りに頻繁に休憩しながら蓮の能力で各個人の免疫力を上げる事によって、前回のような毒による悪影響は四人の体には現れなかった。

「……し、しんどいわ……」

とはいえ、蓮個人の状況は全く変わっていないどころか悪化している。慣れない山道に足を取られる事による疲労に加え、定期的に能力を使用する事による気疲れがあった。

最低限の使用に留めているとはいえ、蓮の能力はその繊細な操作に集中力を必要とす

る。前日の様な襲撃も無く戦闘が行われていない現状、最も消耗しているのは蓮だ。

「口に出すから余計に辛くなる。根性を出せ」

「政次郎くんの口から根性論が出るとは思わなかったわ」

「今すぐ体力を作れ」や「靴を買ってこい」と言うよりはマシだろう」

「……………」もつともデス」

遠回しに自身の過失を突きつけられ、ぐうの音も出ない。間違はなく行軍で足を引つ張っているのは蓮の体力と不注意に依るものだし、毒に対する支援をしている所でその落ち度が消える事はない。

「今日はザイテングラートさん、見ないね」

「ザイクロトランね。わざと言ってるでしょ」

「確かに、既に毒霧の地域に入っていますけど、今日は一度も見ていませんね」

真魚やユーリヤが今日は未だ見ていないザイクロトランについて話す。

毒の霧が出てきてから五人は再びの襲撃をずっと警戒していたが、ここまで歩く中でザイクロトランやそれ以外の異形が襲ってくる事は無かった。

いつ来るかわからない襲撃を警戒して歩くだけでも、足取りは重くなり疲れは嵩増しされていく。毒による影響が無くなったとはいえ、明確な形を成した危機の存在が探索の進行を確実に抑制し、遅らせている。

「出ない分にや気が楽だがなあ。あんな馬鹿力で次掴まったら俺お婿に行けなくなっちゃうわ」

「安心しろ、元から貰い手などいない」

先導する十三が頭に両手を回して気楽そうにしている所に、容赦なく政次郎が言葉のドスを叩き込む。単なる場を和ませる軽口が一瞬にして心を裂く刃となって切り返され、悲しみのあまり十三は顔を抑えた。

「……そろそろ帰った方がいいかもね。免疫力の上げた状態を続けるのは、知らない間に体力を削るわ。体力にまだ余裕がある、と感じてるぐらいの所が丁度いい塩梅よ」

「……わかっていた事とはいえ、探索が思うように進まん」

「午後には何か見つかればいいんですが……」

蓮が一時撤退の提案をする。気付けば一日の折り返しは近付いていた。

蓮の能力による回復や身体能力の増強は、基本的には少量の毒性に対して本人の身体が反応し、抵抗力を強引に引き出す事によって作用する。

かなり気を使って毒の成分や濃度を操作してはいるが、風邪に対して常に体温を上げている様なもので、影響こそはつきりと形として出てなくとも体への負担そのものはかかっている。

その為、単に息を整える小休憩のみならず、体の調子を整える大休憩……十分な仮眠

を取る事が必要だった。

「いちいち戻んなきゃなんねーのがめんどくせーな」

「レポートできるパイプ的ななにか持ってないの蓮ちゃん」

「あるわけないでしょ」

「ここまで歩いてきたのと同じだけの距離を徒歩で帰ることに対し十三は愚痴り、簡単に帰る手段がないかと真魚が聞いてくる。

実際、結構足に疲労がきている蓮としても山道を地道に歩いて戻るのは辛い。こういう時には転移の魔術を使える魔術師が羨ましく感じられる。

一応蓮も瞬間移動出来るアーティファクト——魔術師や異界の生物による魔法の品——自体は持っているのだが、緊急時の脱出手段としてしか使えない限定的な力しか持っていない。

恨めしそうに蓮は懐中時計を懐から取り出して見る。秘められた魔力は沈静化されており、全く動く気配は無い。これがもう少し自由に使えればなと心の中でぼやき、溜息をついて懐に戻した。



「………んん？なんだこりゃ」

一時キャンプに戻り、十分に休憩をしてから午後の探索は始まった。

初日と今日の午前の探索の結果を地図に照らし合わせると、毒霧が出て来る地点と濃くなる地点がある事がわかった。その為、午後の探索ではその地点付近に当たりを付け、真つ先に探索をする事にした。

再び毒霧が辺りに立ち込めるようになり、しばらく歩いた所で十三が声を上げる。

「どうしたの、十三さん」

「この木の根本んとこ、えらい削れてんだよ」

十三が指を指した木の根本の部分は、外皮が削れて白い木肌が見えていた。成長の過程で自然に樹皮が剥がれ落ちた様な形ではなく、根本の一部分のみが削れ落ちている。

蓮が十三の横まで近付いてその部分をよく見れば、剥がれた木肌の部分には黒い痕といくつかの傷が、うっすらとつけられているのがわかった。

「……確かに妙ね。こんなの、これまでであった？」

「少なくとも俺が見てきた限りはねーな。——と、なりや」

何か思いついたように十三が座り込み、木の根本付近の葉で覆われた地面を探り始める。真剣な顔で葉を一つ一つ拾い、手慣れた様子で自分の後ろへ除かしていく。

「……何探してるの？」

「いやまあ、一応探すだけ探そうかなと……げ、あつた。政次郎、ちよい来てくれ」

十三が渋い顔で地面を覗き込み、政次郎を呼ぶ。それにつられてユーリヤや真魚も木

の近くまでやってきた。

「どうした、伊達」

「証拠品袋とか持つてるだろ、くれ」

「何か見つかったのか？」

「剥がれた爪が落ちてた。多分被害者のだろ」

なんでもない事のように政次郎に告げる。それを聞き、蓮とユーリヤは顔をしかめた。

「……人間の爪よね？」

「間違いねーな。血も付着してっし……多分この木についてる黒いのも同じ奴の血痕だろうな」

「……何故、こんな所に……？」

「まあ位置的に考えりやぶつ倒れながら木を掴んだんだろ。爪剥がれるぐらい死に物狂いつてこた、そこから逃げられない状況……あー、ザイなんとかって奴に足でも掴まれてたんかねえ」

頭をかきながら、十三が当時の状況を推測する。痛ましい状況が嫌でも想像されてしまう。

政次郎は淡々と地面に落ちてる爪を手袋を嵌めて回収し、スマートフォンで削れた根元の写真を角度を変えて何枚か撮っていく。

「……写真はこのままなのか。この傷だが、少々妙だな」

「そうなの？」

「木に縋り付いた時の引つ掻き傷にしちや痕が短けえな。爪を立ててる時に引つ張られただけなら真横に長い傷がつけられてる筈だが、こりやどつちかつつと意図的に傷をつけた感じだ」

木には複数の傷がつけられている。しかしそれらは襲われた者が必死に縋り付くような痕ではなく、指先で小さく引つ掻いたような傷が多かった。

この傷をつけた者が、何かを書こうとしてつけたような。そういつた意図が感じられる。だが、傷自体は乱雑な横の線の集まりで、文字のようなものではない。

「——矢印か」

「あー、なるほど。確かに言われてみりや、それっぽく見えんな」

僅かに斜めの線が混じっている事を見て、政次郎がその線の意図を推測する。

黒い痕——被害者の手の血痕と思われるそれとは別に、複数の爪痕は斜めとなつて交わり、一点の方向を指すように残されている。

「この方向に何かある、つて事かしら」

「意味を求めるならそうなるだろうな」

「……何があつたんでしょうか」

「ま、行つてみない事にや始まんねーだろ」

「そだね」

全会一致だった。元からこの森全域を調べるつもりで、当てもない以上は反対する理由も無い。体力的な余力も、真つ先に毒霧の地点を探した為に十分残っている。

爪痕がつけられた木のわかりやすい高さに目印を残して、五人は爪痕の示す方向へ向かった。



「……濃くなってきたなあ」

「まえがみえねエ」

爪痕から先へ進むごとに毒霧の濃度は少しずつ高くなり、遠くだけが見渡せない程度だった霧は、十数歩も歩けばそれまで歩いてきた道が見えなくなり、閉塞感を感じさせるものとなっている。

十三のつけている目印のおかげで帰り道に迷うことは無いだろうが、この状況で目印もなく彷徨えば十分もしない内に迷う事になるのは目に見える。

毒霧が充満するこの状況で対策も無くこの場を歩き続ければどうなっていたか、正直想像もしたくなかった。

「この濃度は明らかに異常ね……皆、体は大丈夫？」

「ええ、まだ大丈夫です」

「これでは距離を取りすぎると逆に危険だな」

先導する十三と殿の政次郎は霧の濃度に合わせ、その中間にいる蓮達との距離を詰めて、さらに霧が濃くなっても見失わないように備えて歩いている。

空気から感じる危険の気配に並んで警戒も引き上げられ、十三は一步一步を速やかに且つ最小限の歩幅にする事で足を上げる時間を減らし、政次郎も周囲に対して視覚と聴覚を研ぎ澄ましている。

そういつた二人の空気に当てられ、女性陣もまた弥が上にも神経が張り詰められ、内側の早鐘が大きくなるのを感じる。

「警戒しすぎるなよ。体力を削らせておいて、消耗しきった所で襲い掛かってくる算段かも知れん」

「警戒しない方が無理ってもんでしょ、これ。……全く、先が見えないっていうのは思ってた以上に嫌な気分させられるわね」

「ただ歩くだけなのも飽きるよね」

「まあそれはあるかもしれないけど——ユーリヤ、どうかした？」

政次郎が不必要な緊張を抑えるように口にするが、どこまで歩いても続く密室のどこかに潜んでいるだろう敵の存在を考えるとそれも難しい。

音も立てずに近付いてきたり、木に隠れ潜む存在相手にどれほど警戒しても足りるといふ事はない。そういう考えそのものが、知らずの内に体力を削つていく。

そういつた事を考えて張つた心を多少なりとも意識的に緩ませるようにしていると、ユーリヤが進行方向とは少し逸れた方向を見つめていた。

「……」こちらの方向から、嫌な感じがします。魔力——というよりは、靈的なものでしょうか……ざらつくような、まとわりつくような、なんとも言えない……」

「十三さん、ユーリヤの指してる方向に向かつて」

「承知」

ユーリヤの感じる違和感に従い、一行は向かう方角を少し変える。

ユーリヤが何かを感じるといふ事は、事実上敵が近いという事だ。必要以上にも以下にも警戒をしない様に抑えつつ、確実に足を進めていく。

それから数分も歩かない内に、それまでずっと同じだった景色に変化が訪れた。

「……山小屋……?」

「というよりは、山荘だな」

開けた場所に、蔦で覆われた二階建ての山荘が立っている。

手入れのされていない事が一目でわかる程に外見は雨風で汚れており、看板に書かれていたであろう文字は霞んでいて読むことは出来ない。

山荘の後ろからは静けさに混じり僅かに清涼な音が聞こえ、水が流れる音がする。

人気を感じさせない場所であるのにも関わらず、この場にいる全員がこの場から感じる異質な空気に身構える。

魔術の類に疎い十三すら感じる、言い様のない嫌悪感。僅かに流れる空気と共に鼻に届く、幾度となく経験してきた血と腐臭が混じった「死そのもの」の匂い。

「……」ここで、間違いないです」

「みたいね。皆、準備はいい？」

「無論だ」

「おう」

「おっけー」

自然と手がそれぞれが携える銃に伸びる。目の前の山荘の中に潜むまだ見ぬ脅威の存在を肌で感じつつ、五人はゆっくりと山荘へ歩を進めた。

7. 悪意の抜け殻

全員が静かに山荘の扉の傍まで近寄り、政次郎がまず扉の左側に立つて音を立てないように手をかけ、静かに取っ手を回して鍵の有無を確かめる。

鍵がかかっている事を確認した政次郎が四人へ顔を向けて縦に振り、全員が頷き返す。十三が扉の右側につくのを確認し、政次郎は指を三本立てる。

三秒をかけて指折りを終えると扉を一気に引き開け、ほぼ同時に十三がアサルトライフルを構えて中へ入り込み、壁沿いに進みつつ室内を見渡す。

十三の後ろに続く形で政次郎も素早く侵入し、逆の壁沿いへ進みながらサブマシンガンを構える。

クリアリングを終え、視線を室内へ向けたまま残る蓮達へ見えるように十三が片手を内側へ引くサインを送り、遅れて蓮達も入ってきた。

「——居るな」

静かに政次郎が呟く。薄暗い山荘の玄関ホールの床には破れたカーペットの上には埃が積もっているが、一目見ればそこに多くの靴跡がつけられているのがわかる。

内外を見ればこの建物が既に廃墟となっているのは確かだが、それに相反して靴跡の

上には埃が積もっていない事から、埃が踏み付けられてからそう長い時間が経っていない事は間違いない。

この廃墟を出入りする何者かが居る。予想通りの状況に、一同は警戒を強めた。

「まずは一階から確認するぞ」

玄関ホールの近くには二階へ続く階段があり、足跡は一階の奥へも階段にも満遍なく散らされている。まずは下から確認する事にし、十三と政次郎が並んで進んでいく。

足跡が続いている近場の部屋から順々に調べていく事にし、一つ一つを素早く確認していった。

「……パソコン?」

いくらかの無人の部屋を確認し終え、「事務室」と扉の上のプレートに書かれた部屋に入ると、部屋の中の机の一つに置いてあるノートパソコンが目に入った。

靴跡と同様に埃が積もっておらず、部屋内の殆どが荒れ果てた状況にありながらそれのみが小奇麗な状態で残されている。パソコンの前に置いてある椅子もまた不自然に埃が払われていた。

「伊達、外の警戒を頼む」

「あ、よ」

政次郎が手袋を嵌めながら十三へ部屋の外の警戒を任せ、ノートパソコンが動くかど

うかを確かめる。想像通り、ノートパソコンは問題無く動き、機械的な灯りが部屋をぼんやりと照らす。

起動の際にパスワードが必要という事も無く、点灯してからすぐにデスクトップ画面が映る。不用心な事だと思うが、いちいち持ち帰ってセキュリティを解除する手間が省けるのは助かる。

インターネットが繋がるような環境とも思えない為、何らかの記録媒体としてノートパソコンを持ってきたのだろうと推測し、政次郎は画像やテキストファイルを中心に手早く目を通していく。

「……随分とろくでもないな」

デスクトップにあるフォルダの中には「No.」と書かれ、数字ごとに分けられたフォルダがあり、中を見ればそこにある全てが子供の写真の画像ファイルだった。

フォルダごとに別々の子供の写真が入っており、それらにもまた数字が各々つけられている。それぞれのファイルの日付時刻を見る限り、番号が増えるごとに後に追加されたファイルらしい。

問題なのはその中身で、最初の内の画像はただの盗撮写真と言っているものだが、番号が増えるとその子供が居る場所が薄暗い個室となり、後になるにつれてその子供が少しずつ傷付いていく。

番号が終わりに近付くと、顔が判別出来ない程の暴行を受けていたり、四肢が有り得ない方向へ曲げられていたり、悪い物では体のどこかしらが欠けているものすらあった。

画面を後ろから覗き込んでいる蓮達も、縮小表示の画像に軽く目を通していただけで強い嫌悪と怒りを覚える様な痛ましきだった。

「……単なる遭難事件ってだけじゃ終わらないみたいね」

「そうだな。画像の日はここ半年に渡り飛び飛びになっている。ここ最近に起こった誘拐事件と照らし合わせる必要があるだろう」

「なんて、惨い……」

このパソコンの持ち主はどうやら、多くの子供を誘拐しては監禁・暴行を繰り返している異常者のようだ。

倒錯した趣味の持ち主がそういった画像を集めているというには写真のあまりの多さや状況の偏りを考えれば無理があるし、盗撮された子供が暴行される経緯を写した写真などそうネットで集められる物ではない。

そのフォルダに入っている画像ファイルの殆どがそういった子供への暴行の経過を示す写真であることを確認し、政次郎は持参しているメモリの一つを差して画像をコピーする。

選択するのも面倒な為、フォルダ全てをぎっくりとコピーし、それが終わるまでの間に政次郎は目につく位置のフォルダを手早く開いては、何か変わったファイルが無いか目を通していく。

そうしていく内に、目を引くファイル名が見つかった。

「管理記録」、か」

「……大方の予想はつくわね……」

フォルダ内にあつた一つのドキュメントファイルで目が止まる。最も古い写真の日時とほぼ同期して始まり、一ヶ月ごとに分けられて作られているそれらとタイトルを照らし合わせれば、嫌でも内容は想像出来る。

とはいえ、確認しない訳にもいかない。まずはフォルダ内にある最も古いファイルを開く。

『これからここに保管するのは全てナンバー表記で記録していく事にした。これからも書いていくなら何かしら覚えやすい様にした方がいいだろうし、この際二人も三人も同じ事だ』

『No. 1は最初の奴に比べると反抗的だ。怯えずに歯向かってくる事に少々腹が立つたので、強く躰けておいた。明日には立場を理解してくれると楽なんだが』

『鍵を開けた瞬間に襲いかかってきた。その分入念に躰けてやったが、屈服させてやる

というのはいりくせになる。あの目を思い返すだけでゾクゾクする』

ファイルの書き出しからは暫くの間は、日記のような形式で簡易的に暴行の記録について書かれていた。嫌でも先程の写真達が頭に再び思い浮かばされてしまう。

日ごとに多少の内容の多寡はあったが、このファイルは最後までこの様な写真に映っていた子供に対する日記で埋められていた。それを確認して、政次郎はすぐに次の月のファイルを開く。

『No. 1の手間が減ったのでそろそろ二人目を考える』

『No. 1はほぼ動かない。No. 2は反抗的だが一番よりは素直』

『No. 1:死亡 No. 2:No. 1を見せて反応が改善』

次の月に入り、書かれている内容が少しずつ減っていく。暴行の過程はほぼ省略され、ほぼ状態のみを記録するものとなっていった。暴行の過程はほぼ省略さ

ファイルの後半になるごとにどんどん文字数は減っていき、次のファイルになる頃には内容はただ日を経るごとに番号が増えていき、最終的にはそれらに“生存”と“死亡”のどちらかが振られるだけの簡易的なものとなった。

「……吐き気がするわね」

「子供を、なんだと……!」

たった二文字で片付けられている子供の生死を見るごとに、蓮は少しずつ抑えがたい

苛立ちが大きくなっていき、ユーリヤは強い憤りから肩が震え、手を強く握り締めている。

一方で政次郎と真魚は内容に一切反応せず、ただ淡々と上から下まで何か変化が無いのか読み進めていく。内容が最も簡易的になった所からは高速でファイルを下まで送り、大きな変化が無い事を確認して政次郎は作業的に次のファイルを開いていく。

「……む」

「なんか文字増えてる」

生死の二つの記号が羅列されているだけの内容を飛ばし読みしていくと、途中でその決まった並びが崩れた。スクロールを止めてその区間を読めば、再び日記のような内容が書かれている。

『今日の買い出しの際、胡散臭い物が出回っていたので、退屈凌ぎにNo. 7に試してみたらマジでゾンビが作れた。面白いのでしばらくはこれで実験する』

『魔術？呪術？そういうものなのだろうか、とにかくこれは面白い。羨よりこれに書いてあるものがどれだけ出来るか試したくなった。実験体がもつと必要』

『呼び出した木の化物は凄まじいが、保管してたのが二つ丸ごと食われた。加減つてもんが無いのか、指定した所だけを食わせるのは無理。面白いが、困る』

書き方こそ最初にあつた簡素な日記とほぼ同じだが、内容に大きく変化が見られた。

“ゾンビ”、“呪術”、“木の化物”。次から次へと、単なる誘拐殺人から離れた単語が湧いてくる。この記録の主が試し始めた「胡散臭い物」——急激な内容の変化の原因に、蓮達は心当たりはあった。

「魔術書だろうな」

「まず間違いないわね」

邪神教団は昨今、呪文や神話生物の召喚などの手順を記した魔術書をデジタル化し、より多くの人間に流通させる事で事件の規模を大きくしている。

事実として蓮の受けている任務の多くで、デジタル化された魔術書を用いる魔術師とは遭遇している。こういった既に流通してしまった魔術書の回収もまた、蓮の受けている任務の一つだった。

急激な内容の変化を見るに、この記録を書いている者もまた何らかのルートで出回ってきた魔術書を手に入れ、それを子供相手に試し始めたという事だろう。

「……内容を見る限りは、単独犯だな。協力者がいる様な節がどこにも記されていない」
「厄介な人物が、厄介な玩具を手に入れてしまった……ってトコね」

それからの内容もまた、呪文を子供相手に試す様な日記が続いたが、途中からは魔術書の内容を読み込み、人間を使つての“研究”を行うという内容が混じり始めた。

生み出したゾンビの行動のパターンの記録、暴行の過程を変えることによる悪霊の意

図的な作成、生きたまま人間の体を削って材料にする——こういった、気の触れた様な内容が並んでくる。

その中の一つに、蓮達の目を引く内容があった。

『ゾンビを養分にした植物』……?」

曰く、「人間のゾンビがいるのならば植物のゾンビも作れるのではないか」という突拍子も無い発想から始めた研究。

生み出したゾンビを砕いて粉にし、それを土壤に混ぜて植物を育てていく。当然、意志も持たず肉を捕食する訳でもない植物を、人間のゾンビの様にすることは出来ない。

ただ、呪いの様な形で植物の生態を捻じ曲げる事で、全く別の悍ましい何かを作れないか。そういった考えから、独自に様々な実験を重ねていったらしい。

「当初から考えられない方向にイっちゃってるね、この人」

『中々上手くいかない。面白い』『生きた人間を土壤に埋めてみる。面白い』『悲鳴を聞かせてすすすすく育てる。面白い』……正気ではないな」

「完全にあてられちゃってるわね」

常識の外にある異界の生物やそれに関わる呪文は、人の精神を著しく蝕む。自身の身の程も弁えずに関り続けければ、精神は壊れ、狂う。

十分な理解を持ったつもりでいても、常人には扱いきれる様な次元の話ではない。こ

の日記を書いた者も、魔術書に魅入られて狂気の淵へ引きずり込まれていったのだらう。記録が後に行くごとに、それは顕著となっていく。

『命に反応する植物 出来た 面白い』

『子供を吸い尽くすのに 五日 かかりすぎ 面白い』

『花粉 俺にも反応する 捨てることにした 面白い』

『『命に反応する植物』と『花粉』、ね』

「過程が多すぎる上に内容が乱雑だな。細かい製法はわからんか」

「ここに書いてあるのがあの毒の霧の大本なんでしょうか……」

もはや研究とは言えないただの呪法の手順が無軌道に記録されただけの日記を読み進めると、様々な実験の結果、一応は変異した植物を作ることになったようだ。

ただ書いてある内容を考えるに、思った様な物は作れずに手に余り、最終的には投棄してしまっただけらしい。

外に漂っている毒も、この研究から作り出された植物によるものだろうか。どういった経緯を辿ればあれだけの広範囲を覆い尽くす霧になるのか、想像も出来ないが……。

「書かれてある研究の大半は狂人の与太話程度の稚拙なものだが、この森の現状を考えれば少なくともこの植物については笑い飛ばせん」

「書いてある事が本当なら、受け続けていけば衰弱どころか死に至る訳だからね……」

事実、記録を全体的に見れば、書かれてある研究の大半は途中のまま成果が出ずに放棄されたり、頓挫して終わっている。

元々が偶然魔術を手にしてしまった者であるからか、研究と言っても魔術師のするそれとは異なり、明確な目的・目標を設けられる事も無くただ思ったことを試していくのみ。

ただ、その状態でも成果を挙げたことを考えれば無視できる物でもない。本人の人間性のもとより、持っているだろう魔術書、積み上げたノウハウなど、放っておけばどこまで事態が深刻化するかはわからない。

「これで最後か」

日付が最も近い、最後のファイルを政次郎は開く。最初の内はそれまで同様、断片的な研究内容が続いていたが、途中でそれが止まる。

『検問 山 出れない まずい』

『子供 足りない 欲しい』

『面倒 排除する？ 気付かれるか 一考』

「遭難事件による検問でこの山に閉じ込められた、という事か？」

「……それはなんというか、まあ」

「おそまつ」

どうやら警察の始めた検問によって、これまで同様に山から降りることも出来ず、新しく子供を誘拐する事もままならなくなったようだ。

この山荘の位置は道路や駐車場からも遠く、また山に入りかなり深い位置にある。車が使えなければ誘拐はおろか、行き来も難しい。どんな通行手段を使っているかははっきりと書かれてはいないが、検問により出れないというのなら車を利用しているのだろう。

『化物 戻ってこない 死んだ？ 何故』

『また呼ぶ？ 足りない もつと』

『違う もつと強いやつを』

ここで記録は終わっていた。

ここに書いてある“化物”が最初に呼び出した“木の化物”——ザイクロトランならば、これは昨日蓮達が遭遇・撃退した後に書かれた記録と見て間違いない。

となると、最後の行の“もつと強いやつ”というのは——

「……おい、なんか外から聞こえねえか？」

思案している最中、十三がこちらへ声を向けてくる。それを受けて四人は考えるのを中断し、耳を澄ませる。

膨れた風船から空気が抜ける様な風を切る音が、僅かに耳に届く。音の聞こえ方から

して、部屋の近くや二階からではなく、この建物の裏で鳴っている音らしい。

それと同じく方向から、ぐちゃりぐちゃりと粘着質な音が断続して聞こえてくる。水の中で何かが引きずられている音と混じり、ただ聞いているだけで不快感を抱かせるものとなっている。

「——いぎあ、ああ!!」

続いて、同じ所から男の叫び声が聞こえてくる。

「急ぐわよー!」

反射的に蓮が全員に号令を下す。場に留まって不明瞭な想像に足を止めるよりも、実際に何があったかを自分の目で見て、それからどうするかを判断する方が良い。

まずは状況を確認する事を最優先とする蓮の判断に異議を唱える者はいない。蓮達は急いで山荘から出て、音のした方向……山荘の裏へと向かった。

8. 無尽の悪夢

蓮達が山荘から出て裏に回ってすぐの所に、それはいた。

周囲を包む白い霧と木々の陰による暗がりの中、緩やかに流れている沢を堰き止める様に、先日目撃したザイクロトランよりも大きな肉の塊が鎮座し、蠢いている。

その肉塊には生き物の内臓の様な脈動している生々しいモノが張り付き、体液を滴らせている。その体は沢の向こう岸へと不自然なまでに伸びて、地面に張り付いていた。

張り付いている所を見れば、地面とその肉塊の間に挟まれた人間の腕が見える。周囲の地面には、まるで破裂した様に真新しい血液が流れて地面に広がっている。

その光景を確認した直後、腕はその場から消えた。いや——

「……たべてる」

腕は肉塊に引きずり込まれた。真魚がつい口にした感想はそのまま真実として頭に入り、蓮達は目の前の肉塊が何者かを喰らうためにその場で蠢いている事を理解する。

人を喰う生物というのは蓮達にも馴染みは深く、そういつた異形と戦う事は多かった。だが目の前にいるこの肉塊のした行動は、口や牙を用いて咀嚼するそれらとは全くの異種。

体全体を口に見立て、引きずり込む様に喰う——人の体が潰される音を聞きながら、今日の前にいる異形の“捕食”の仕方を冷静な頭が遅れて理解していく。

潰れる音が止むと、肉塊は地面に貼り付けていた体を戻し、僅かに向きを変える。直後、その体のあらゆる場所から巨大な目玉が剥き出し、その瞳孔が蓮達のいる方向へと回った。

「撃って!!」

蓮が声を上げると同時に、全員が銃を発砲する。異形の体へ連続して鉛の雨が叩きつけられ、体に数々の穴が作られていく。

巨体な肉塊の表面に剥き出した目玉は次々に潰されていき、弾丸が貫いた所から体液が噴き上がり、悍ましいその体が削り飛ばされていく。

時間にして数秒ほどの銃弾の嵐の後、肉塊は全ての目玉を潰され、体は崩れた粘土の様にボロボロになっていった。

「……んだよ、見かけより余裕——」

「皆離れて!!」

見る陰も無くなった肉塊を見て十三が気を抜きそうになった所で、蓮が焦りを混ぜて叫ぶ。

その直後に、肉塊の外側にへばり付いていた腸の様なものがこちらへ伸びてきた。

その場で最も前に居る十三へ向けて、人の胸よりも太く大きい腸が凄まじい速さで突っ込んでくる。後退しながらも直感的に間に合わないと悟った十三は、衝撃を防ぐ為に体を傾け、左腕を盾にする。

腸が左腕にぶつかると、衝撃と共に、後退する体の勢いが引き止められた。突き飛ばされる事に備えていた十三の思考が、一瞬困惑する。

盾にした左腕を見れば、伸ばされた巨大な腸が腕全体を覆い隠している。腕が圧迫される感触を感じる。刹那、直前に目の当たりにした死体の光景が脳裏を過ぎった。

——呑み込まれる。

「ツクそ!!」

盾にする為に力を入れていた左腕を脱力、同時に全身の力を振り絞って左肩を引っかくように強引に腕を引っ張る。

圧迫される感触が急激に強くなるのと同時に、嫌な音を立てながら左腕を強引に引きずり出す。激痛が走るが、命の危機にある思考がそれを遮断する。

無理に腕を抜き出し体勢が崩れ、倒れる勢いを止めるべく踏ん張る。ふと目の前を見れば再びこちらへ詰め寄る腸と、その先にある眼を見てしまう。

「ふッー」

「どっきなやいこー」

体勢を崩した十三をカバーするべく、政次郎が踏み込みの勢いを持って伸ばされた内臓を叩き斬り、少し離れた位置から蓮が毒の風を飛ばしてぶつける。

十三の目の前まで伸びてきていた先端は斬り落とされ、同時に猛毒に侵された腸の中心が凄まじい速度で腐り落ちていく。それを見て、十三は体勢を立て直し終えて後ろへ飛び退く。

「十三さん、無事?!」

「ヒビ入って肩が外れた。完全に潰されてねーだけマシだな」

「すぐ治します!」

不自然に伸びた左肩を右手で触りながら、十三は潰されかけて血を流す自分の左腕の状態を確認する。自覚すると同時に、先程まで脳が遮断していた分の痛みが遅れてやってきた。

すぐにユーリヤが動き、治癒の魔術を十三の左腕へかける。激痛にまで達しようとしていた痛みが嘘のように引いていき、左腕の正常な感覚が戻ってくる。

さすがに外れた肩までは戻らないようだが、これならば問題ないと十三は考える。

「……おいおいおい、なんだよありゃ」

腕が治癒されていく中、改めて目の前を見れば、銃撃によって削り飛ばされた筈の異形の肉体は、内側から肉が湧き出るかのように膨張し、そこへ内臓の様な器官が浮き出

てはへばりついていく。

銃弾によつて吹き飛ばされた肉や体液は確かにその周囲の地面に散らされているにも関わらず、体は先程銃撃する前と全く変わらない大きさにまで戻つていく。戻つた場所からは、全て潰した筈の目玉が泡のように再び浮き出て、こちらを見つめていた。

「……気色悪いー。何あのキメラ肉団子」

「ムナガラー」。グレート・オールド・ワンの一人、"クトウルフの右腕"。かつて地球の海が一つしか無かつた頃の海の支配者よ。……またとんでもないモノを召喚させちやつたみたいね、あの記録の主は」

今対面している肉塊の異形——ムナガラーを見据えて、蓮が吐き捨てる。

人類が生まれるより遙か昔の太古の支配者、旧支配者と呼ばれるものの一柱。普段は世界のどこかしらで眠っているが、魔術書にはそういった化物の力を借りる為に、存在へ呼びかける呪文、呼び出す呪文も往々にして記されている。

最も、概ねが邪神と呼ばれる旧支配者達は、呼び出した所でこちらの言う事を聞いてくれる訳ではない。下級の眷属種族とは異なり、それらは現れれば自身の思いのままに動く。

大方、召喚した者はザイクロトランを従属させた時の様に、ムナガラーを呼び出して自分の手駒にでも使うつもりだったのだろうか……招来した所で、目の前にいた丁度い

いゝ餌”として食われてしまったのだろう。

「思わぬ大物ね……こんなのを野放しにしたら、この山全体が異界になりかねないわよ」
「それほどか」

「というより、この山の状況が悪いわ。今この山に流れる毒霧が記録にあつた通りの呪術の産物だとしたら、ムナガラ一の魔力と干渉し合う事で瘴気と化して、異界化を促すと思うわ」

撃つた弾丸を再装填しながら、蓮が再生を繰り返して蠢いているムナガラ一を見据える。

異界と化した空間は、現実が魔力によって変容する事によって閉ざされた空間となる。そうなつてしまった異界そこから脱出する術を、少なくとも一般人は持ち得ない。

さらに言えば、異界と化した空間ではその場の生物が変異する事で異形が生まれる他、旧支配者の眷属が召喚される事も考えられる。

この状況を放置する事はムナガラ一が山で暴れるだけに足らず、異界化によって山自体が他の異形を呼び、生み出す巢となりかねない。

「ここで倒すわよ。呼び出されて間もないなら、むしろこつちのチャンスだわ」
「当然だな。むしろ問題がわかりやすくなつた」

「元より、見逃すなど出来る筈ありません」

「いえすママ」

「あいよ。……んぎっ！」

本来絶対的な力を誇る旧支配者達は、常に完全な形で降臨する訳ではない。招来の儀式が不十分であったり、呼び出された直後で十分な魔力や生気を得ていない時などは、本来よりも数段劣る力しか発揮出来ない。

倒すならば今しか無い。ここで立ち向かう事を蓮が伝え、全員がそれを了承する。十三は左腕を垂直に曲げて腹部の前に置いて拳を握り、右手で左拳を押すことで肩を嵌め直す。

十三が肩を戻すとほぼ同時に、ムナガラがにじり寄りながら腸の触手が再び伸ばして来た。今度は一本だけではなく、全員を襲うべく何本もの触手が先程同様の速度で向かってくる。

「神よ、加護を！」

ユーリヤが声を上げると、淡い光が五人を包む。同時に政次郎と十三が前に出て、自身へ伸びてきた触手を刀で切り飛ばし、拳で弾き飛ばす。

残りの触手は多くが蓮の作り出した毒霧の壁に弱らせられ、真魚の起こした黒い砂嵐が弱った触手を吹き飛ばす。

それでも吹き飛ばせなかった二本の触手がユーリヤに襲いかかるが、ユーリヤを包む

淡い光に触れた途端に弾かれた様に跳ね飛び、それを見てまとめてユーリヤがハンマーで殴り飛ばす。

「あまり受け過ぎれば加護も持ちません、注意して下さい！」

「了解した」

「うわなんか手についた！めっちゃバタバタすんだけどこいつの汁！」

十三の文句を聞き流しながら、次々に襲いかかる肉の触手を対処していく。溶かし、切り飛ばした先から再び体から湧き出るように触手が生え、再び蓮達へ飛んでくる。

防戦に徹していれば凌ぐ事は出来る。とはいえ、いくら触手を潰しても数秒もしない内に元通りになる底無しの再生力を見せているムナガラーと、捕まらないように神経を尖らせ続けている蓮達。

これまでの行軍による疲れもあり、長期戦になれば分が悪いのは間違いない。蓮達の方だ。ユーリヤの施した加護によって大事こそ防がれているが、あわや触手に吞まれる所という状況も出ていた。

「罅が明かな」

「真魚ちゃん、デカいの一発お願い！皆は必死で凌いで！」

「おっけー」

真魚が手元を弄り、大規模な魔術を使用する為に魔術エミュレーターの中の魔術書ブ

ログラムを選択する。それと同時にエミュレーターが真魚の精神力を吸い上げ、プログラムが起動する。

精神に干渉する感覚で真魚の動きが僅かに止まり、そこへ触手が殺到した。

「光よー!」

真魚に集る^{たか}触手の群れへ向け、ユーリヤが破魔の魔術を唱え、魔を断つ光が触手を包んで消滅させる。それによって出来た時間で、すかさず真魚はエミュレーターを操作して一つの魔術を選択する。

「鉄拳ばーんち」

いつも通りの無表情で抑揚の無い言葉を吐きながら、真魚の前方の景色が僅かに歪む。それと同時に、こちらへ向けられていた触手が明後日の方向へ吹き飛ぶ。

その先にいるムナガラーの肉体が波打ったかと思えば、見えない力に殴り飛ばされた様にその巨体が後ろに流れる沢へと吹き飛び、叩きつけられた拍子に大きな水飛沫が上がる。

「畳み掛けるわよー!」

大きな隙を見せたムナガラーへ向けて、すかさず蓮達が攻撃を集中させる。

猛毒の嵐を叩きつけ、破魔の魔術が体を焼き、銃火が残る肉体を削る。最後に再び真魚が先程と同様の魔術を起動し、今度は生み出した力場を上から叩きつけて相手を押し

潰した。

轟音と共に沢からは水柱が上がり、蓮蓬にまで飛沫が届いて身を濡らしていく。

「……………どうだ？」

水飛沫を軽く払い、霧の向こうを見る為に全員が目を凝らす。

霧の奥を警戒して構えつつ、全ての舞い上がった水が落ちるのを待つ。ムナガラが蠢く時に聞こえる肉が振れる不快な音こそ聞こえてこないが、誰一人として安易な想像はしない。

漂っている水気が霧散し、視界が開ける。沢には潰されてバラバラになった肉片が散らばり、気色の悪い色の体液が下流へと流れて行っていた。

「——ふいー。さすがにこんだけ跡形も無くなりや、再生のしようもねーだろ」

「……………野曾木。海の神と言っていたが、体液の状態から再生するとかはあるのか」

「さすがに無いハズよ……………」

ムナガラーの状態を確認して、一様に息をつく。掴まれば即潰されるという状況での戦いは、想像以上に気を削っていた。張っていた肩を落とし、体の力を抜く。

ただ、その場でユーリヤのみが怪訝な顔をしていた。

「どうしたの、ユーリヤ」

「……………っ！皆さん、攻撃を！まだ気配は去っていない——」

ユーリヤが声を荒げた瞬間、沢が爆発する様に吹き上がる。そこから鉄砲水の様な激しい水流が低空に撃ち出され、蓮達へ飛び掛かってきた。

誰よりも速く警告に反応した十三が咄嗟に前に出た事で、後ろにいた蓮・ユーリヤ・真魚は水流のままの勢いから逃れ、その場で転ぶ程度で済んだが、庇った十三の体は水流の勢いに攫われるまま蓮達の後方まで転がされる。

「伊達さん！」

「無事だ、前から目え離すな！」

後ろに吹き飛ばされた十三をユーリヤが確認する前に、十三が声で制する。

横つ飛びに鉄砲水を避けた政次郎が先程までムナガラーの肉片がいた場所へ向けて手榴弾を投擲するが、到達する前に地面から突き上がる様に現れた触手に当たり、爆発する。

「……あれでも潰しきれんか」

政次郎が悪態を吐く。視線の先には、蠢く臓物が肉片の間にかかり、粘着質な水音を立てながら散らばった肉片を繋ぎ再生していくムナガラーの姿があった。

9. 侵喰

肉片が繋ぎ合わさり少しずつ体が戻りつつあるのを見て、ユーリヤが急ぎ膝射の状態
で銃の照準を合わせようとするが、その前にムナガラが沢から球状に固めた水を弾の
様に複数撃ち出した。

自分へ向かつてくる水球を見て慌ててユーリヤがその場から逃れようとするが、そう
考えた時には既にこちらに水球は到達していた。直撃したのは一発だけだったが、それ
だけでユーリヤの体はバランスを失い突き飛ばされる。

また、その時の衝撃で手から離れた銃がまた別の水球に当たり、銃が後ろへ吹き飛ば
された。後ろに飛んだ銃が木か岩にぶつかるとなる様な音がする。音が聞こえた距離を考え
るに取りに行くには厳しい距離だった。

「ユーリヤー！」

ユーリヤが体勢を崩したのを見て、そこへムナガラが二本の触手を伸ばしてくる。
政次郎がサブマシンガンでまとめて撃ち落とそうとするが、片方が影となって両方は撃
ち落とせず、一本の触手がその場で倒れるユーリヤに迫る。

ユーリヤと触手との距離が近い。ユーリヤの事を考えると腐らせたり焼いたりする

ような強力な毒は使えないと判断し、蓮は咄嗟に衰弱毒の霧を近寄る触手へぶつけた。霧が着弾すると同時に毒の状態を操作し、触手の表面に毒を凝固させていく。さすがに巨大な触手をそれだけで止める事は出来ないが、それによって迫る勢いを僅かに殺した。

触手に捕まるギリギリの所でユーリヤは地面を横に転がり、同時にそれまでユーリヤのいた場所へ向けて触手が地面に噛み付く。

地面にぶつかり触手の動きが止まった所で、その付近の地面が急激に隆起し、触手を囲み押し潰した。蓮の後方で体勢を立て直していた真魚が、土を操作する魔術を使用した為だ。

「……っ！助かりました、真魚ちゃん」

「ん」

「……時間を与えてしまったか」

全員が体勢を立て直して正面を見れば、先程とは体が一回りほど小さくなったものの、悍ましい見た目はほぼそのままの状態まで戻ったムナガラーの巨体があった。

水流や少ない触手での攻撃は、あくまで再生するまでの時間稼ぎに過ぎなかつたらしい。再び全身から無数の目がこちらを見据えて来る。血走った目が、ムナガラーの怒りを如実に表現していた。

「すみません、銃が吹き飛ばされました……」

「わりい、こつちもさつきぶつ飛ばされた時にバレルが曲がつて使いモンにならん」

服が傷だらけになり、顔に無数の擦り傷を負った十三が予備の拳銃を手に戻つてくる。

近寄れば襲いかかる触手に対応し切れず、捕まれば一瞬で潰され喰われる。こちらから下手に近寄れずに、かつ半端な攻撃ではすぐに再生するこの敵を前にして、距離を取つて相手を攻撃出来る手段が失われたのは痛い。

「……どうする？」

「……政次郎君はとにかく銃なり爆弾なりで牽制して。さつきと同じ規模まで再生させる暇だけは与えちゃダメ」

「わかった」

政次郎が蓮へ意見を求めれば、いやに渋い表情をして言葉が返ってくる。蓮が何を考えているかはわからないが、再び先程と同じ大きさにまで再生すれば、攻撃の手が減つたこの状況では手が負えないというのは確かだ。

特に真意を問う事はせず、政次郎は蓮達から離れながらムナガラへ向けて銃を連射し始める。

肉体の縮小に合わせて表面に見える触手の数も減っている為、回避に専念すれば自分

一人ならば問題無いと政次郎は判断した。蓮が政次郎へのみ牽制するよう言ったのも、恐らくは一人で少し時間を稼げと言外に言っているのだろうと取った。

「蓮さん、何か考えが？」

「……やりたかないんだけど、手が減った以上は仕方ないわ。ユーリヤ、真魚ちゃん、今の内にありつたけの肉体保護かけて」

「んー？ いいけど」

嫌そうな顔をする蓮を怪訝に思いながらも、ユーリヤと真魚が防御用の魔術をその場にいる全員へかけていく。

「……オツケー。皆は可能な限り援護お願い、十三さんは余裕があつたらでいいからあいつの注意を引いてくれると凄く助かるわ」

「まあそんぐらいしか出来ねーだろうから別にいいけど、蓮はどうすんだよ」

「決まってるでしょ」

ダゴン殺しを右手に持ち直し、蓮は意識を自身の内側へ集中させる。

——毒操作能力を用いて体に働きかける事で、人の体の本来持つ抵抗力や身体能力を引き出し、底上げする事が出来る。

これは蓮自身もよく使う手であり、限定的な使い方であれば意図的に“火事場の馬鹿力”といった、人の限界に近い力を意図的に引き出すことも可能だ。

だが、引き出すのは何も身体能力に限らない。蓮は自身の薬毒への耐性を下げ、それと同時に単なる肉体強化の範疇に収まらない程の、過剰な量の毒を体へ循環させ始める。

体中の血管が内側から圧迫され、釣られて体が跳ねる。一瞬目の前が眩んだ後――

「――突っ込むのよ!!」

出来る限りの力で地面を蹴り飛ばし、蓮は単身でムナガラーへ突っ込む。後ろから仲間の声が聞こえてくるが、風の音と共にすぐに耳から抜けていく。

ムナガラーから伸びる二本の触手が蓮を迎え撃つ。右斜めへ進みながら左手に毒を集中し、空中で手を払って触手の前へと濃度の高い霧の壁を作る。

その場に留まる毒に触れた触手が、毒を超えた瞬間から目に見える速度で溶け落ちていく。その速度はこれまでの毒の比では無い。

過剰な毒による強化はただ身体能力を上げるだけではなく、自身の能力にまで及ぶ。常人では命にも関わる毒を全身へ行き渡らせる事で、蓮は自身の限界を超えた能力の使用を可能としていた。

「……ッッ」

とはいえ、その効果を得る為に毒への耐性を下げている事もあり、リスクは大きい。能力を行使する度に言いような無い気持ち悪さが蓮を襲う。今すぐにもその場で止

まって休みたくなる程の不快感が湧き上がってくるが、目的を果たすまでは止まれな
い。

ムナガラーとの距離が近付く。触手が軽く迎撃された事を確認してか、今度は魔術に
よる水球の弾丸が複数飛んでくる。

「蓮さんー」

ユーリヤの声が聞こえると同時に、かわす余裕も無く水球と衝突しそうになるが、体
に当たると直前で水球の動きが不自然に反転し、ムナガラーへ跳ね飛ばされる。

撃ち出された勢いそのままに打ち返された水球がムナガラーの体へ当たり、僅かにそ
の巨体が揺れる。同時に自身の体を覆っていた魔術が一つ消える感覚がする。十分な
働きだ。

怯んだムナガラーが体を戻し、再び全身の眼球を回してこちらを睨むが、その内の一
つが後方からの発砲音と共に潰され、そこから体液が噴き出る。

そこへムナガラーの足元に現れた拘束用の魔法陣がその巨体を縛りつけ、動きが完全
に止まった所で後方から飛来した三本の光の槍がムナガラーへと突き刺さり、地面へ縫
い付ける。

「ナイスよ十三さん、真魚ちゃん、ユーリヤー」

完全にムナガラーの動きが止まった隙に、蓮は手が届く程の距離までムナガラーへ近

付いた。

右手に持つダゴン殺しの脇を締めて構え直し、自身の能力で銃身の中の弾丸へ毒を集中して込めつつ、右腕に思いつきり力を込める。

「喰らいなさい!!」

そして大きく踏み込み、動けないムナガラヘダゴン殺しの銃口を全力で突き刺した。生理的な嫌悪感を覚えさせる肉の抵抗を無視し、すかさず引き金を引く。

一切の逃げ場の無い状態で放たれた散弾がムナガラヘの体に叩き込まれる。反動で跳ねたダゴン殺しの銃身がムナガラヘの肉体から抜け飛び、右手からも離れて後ろの地面へ飛んでいく。だが、撃つのはこの一発で十分だ。

体を削り取っても、肉片になるまで砕いて散らしても再生する。それならば――

「――欠片も残さなきやいいんでしようがっ!」

左手を翳し、体内へ銃弾を介して撃ち込んだ毒へ意識を集中させる。増幅させた毒操作能力を最大限に行使し、ムナガラヘの内側に撃ち込んだ毒の性質を変容させていく。

より凶暴に、より膨大に。内側から隅々まで伸ばすつもりで毒を広げ、体を食い潰すつもりで細胞を壊していく。限界を超えた能力の行使に体が悲鳴を上げ、警笛の様に強い頭痛が襲ってくるが、唇を噛んで無視する。

内側から次々に体を壊し広がり続ける猛毒を受け、ムナガラヘが大きく悶える。その

勢いで自らの体を縛っている魔術を強引に外し、その場でのたうち回った。

「うあつ!？」

暴れる拍子にムナガラーの巨体が蓮に叩きつけられる。事前にかけていた保護の魔術のおかげで衝撃こそはかなり和らげられたものの、体は大きく吹き飛ばされた。

十分な着地も出来ずに蓮の体が背中から地面に落ちる。吹き飛ばされた勢いを背中が全て受ける事になり、腹の空気が押し出された。一瞬、視界が明滅する。

その拍子に毒の操作が途切れ、身中で暴れる毒が落ち着いたムナガラーは、自身に痛手を与えてきた者を排除するべく、倒れている蓮へ向け触手を伸ばした。

「やらせるかよー」

蓮とムナガラーの間へ、十三が拳銃を捨てながら走り込んで来て割り込む。

両腕に力を入れず軽く前で構え、そこへ触手が向かつてくる。防御すればその腕が絡め取られ、殴り飛ばす拳が触手の中に沈めばその瞬間に潰されかねない。それなら出来る事は一つ。

「オラア！」

目の前に迫る触手を巨大な腕と見立て、側面に両手を添える。勢いに逆らわずに僅かに横へ押しつつ、すかさず右手を触手の下部へ流して持ち上げ、体全体を回転させる勢いでそのまま斜め後ろへ放りつける。

合気道の要領で強引に触手を受け流し、受け流された触手が誰もいない地面へとぶつかる。触れた手を吞まれない為にほぼ一瞬しか触れられない分、少ししか軌道を曲げられなかったが、蓮へ当たりさえしなければそれでいい。

「さっさと起きろ野曾木！」

「回復しますー！」

政次郎が何かのボンベをムナガラーへ投げつけ、体に当たった直後にボンベが爆発する。それに伴い真つ白な冷気を伴う煙が生まれ、触れた瞬間にムナガラーの体の表面の粘液が凍結し、動く自由を奪っていった。

それと同時に倒れる蓮へユーリヤの治療の魔術がかけられる。蓮の体に残る地面に叩きつけられた痛みと、自らの毒による体への反動が和らげられ、癒されていく。

「わかつてるわ、よー！」

蓮が体を起こし、再び意識を集中させてムナガラーの体の中で毒を暴れさせる。

並の生物であれば即座に死に至らせる程の毒が、その濃度を加速度的に上げて内側から外側に向けて亀裂を入れるように走り、行き渡っていく。

毒に侵された部分が再生のしようがないまでに壊され、ムナガラーの体の形は見る見る内に風船が萎むように急速に崩れていった。

「ちっー！」

「まだ動くのかよー」

体がもはや形を留められないほどに崩れ落ちながらも、ムナガラーは暴れるのを止めず、残った動かせる触手を周囲に振り回す。失った分の肉を取り戻そうとする様な、必死の動きを政次郎と十三はなんとかかわし続ける。

蓮も毒の操作は止めないまま触手の届かない場所まで離れようとするが、無軌道に暴れる触手の一つが鞭のように横から飛来し、跳ね飛ばされて再び体が地面を転がる。

「蓮ちゃんー」

無防備に転がる蓮へ向けて残った触手が向かい、捕食しようとする。それを見て真魚が魔術エミューレータで最も準備時間の短い、見えない刃を生み出す呪文を選択する。

全身に毒が回り弱り切った触手の殆どが一当てで切り飛ばされ、宙を舞う。だが、一本だけ切り飛ばす事が出来ずに蓮へ向かった。——防御が、間に合わない。

「——ッ」

蓮の体に当たる直前で、触手の動きが止まる。息を呑んだ蓮が数秒触手を見ていると、その場で止まっていた触手が沈み、力無く地に落ちた。

ムナガラーの方を見ても、体の全身に浮かんでいた目も閉じられ、全身は毒により真っ黒に染まりきり、液体のように溶け落ちていた。先程までの暴れようが嘘だったかのように、その体はピクリとも動かない。

「……今度こそ、か？」

「まだよ。キツチリ消滅させるわ」

肉片になっても再生した生命力をまた悔る訳にはいかない。蓮は最後の力を振り絞り、ムナガラーの全身を覆う毒を強酸性のものへと変質させ、肉体の水分を奪っていく。蒸発させる所が無くなるまでムナガラーの体が炭化したのを確認してから、蓮は自らの毒への耐性を元に戻し、体に循環させていた毒を無効化する。自身の体を蝕む感覚から解放されていく感覚と共に、一息吐いた。

「……思った以上にしんどかったわね」

「結構無茶するよね、蓮ちゃん」

「蓮さん、体は大丈夫ですか！」

小走りでユーリヤが蓮へ近寄り、蓮の容態を確認する。体には目立った怪我が無い事を確認して安堵の息を漏らしつつも、念の為に治癒の魔術をかける。

遅れて真魚、十三が蓮の無事を確認するべく傍へと歩いてきた。ただ、政次郎だけはムナガラーのいた沢の向こうまで渡り、付近の地面を見渡している。

「……何してんの、政次郎くん？」

「召喚した者の遺品が無いか探している。調査は終わっていないからな」

「……結構な死闘だったと思うけど、ぶれないわね……」

大物との戦闘が終わった直後だと言うのに、一切いつもの調子を崩さず調査する政次郎に呆れの目と言葉を向ける。それに対しても政次郎は一切気にする事も無く、周囲の探索を続ける。

「真魚、魔術方面の見地が欲しい。こつちを手伝ってくれ、野曾木達は山荘内の調査を頼む」

「ん、りよーかい」

「……いやごめん、さすがに結構疲れたから、ちよつと休ませて……」

「……まあ、今回はいい。伊達、安全確保は任せる」

「あいよ」

目立った外傷は無いとはいえ、能力の過剰な行使による疲労で蓮の疲労は最大にまで達していた。

休息するにしても、安全が確保しやすい山荘の中の方がいい。十三に先導され、蓮とユーリヤは山荘の中へと戻っていった。

……正直、めっちゃ疲れたしもう調査したくないなあ、とか考えながらだったが。

10. 帰るまでは遠足

「……十三さん、ユーリヤ。休憩する前に、この山荘一通り見ない？」

「あ？まあ別に俺はいいけど、体大丈夫なのか？」

「ぶっちゃけ後遺症で立つのもしんどいわ。……けど、ちよつと気になる事があってね」
「先に探索するのであれば、回復しましょうか？」

山荘に入つてすぐ、蓮が二人へ探索を提案する。その顔は先程の戦闘で自身に用いた毒の反動による疲労が濃く浮かんでいる。

覚束無い足取りの蓮を見て、ユーリヤが心配して回復の提案をした。

「いや、ユーリヤは温存しといて。……一階は殆ど見たし、二階から行くわよ。十三さん、先お願い」

「ん？……了解」

蓮の提案に少し引っかけかりを覚えつつも、十三は指示に従い二階への階段を先に登る。

殆ど終わったといっても、一階の探索は先程のムナガラーの出現によって中断されていた。事務室で見つけたノートパソコンの様に、犯人の痕跡が残った物が一階に残って

いる可能性は否めない。

探索する場所が残りに少ないからこそ、一階の探索は全てに終わらせ、フロア全体の安全を確かめるのがセオリーだ。実際十三はそのつもりでいた。

だが、そういったセオリーや自身の疲労を無視してまで蓮は二階の探索を提案した。明らかに合理的では無い判断に引つかかる所こそあれど、蓮は何の考えもなく非合理的な事はしない、という信頼から反対はしなかった。

「……それで蓮さん、気になる事というのは？」

「ノートパソコンの中にあつた内容は覚えてるわよね」

「俺は話しか聞こえてなかったけど、なんかロクでもねー内容が書いてあつたんだろ？」

「子供たちを誘拐・監禁して暴行を加えたり、魔術の実験に使つてた記録よ」

二階への階段を登りながら、蓮が話す。

先行する十三は登つた先をゆっくりと確認し、異常が無い事を確認して二人へハンドサインを送り、付いてくるように促した。

「……確かにロクでもねーけど、それがどうしたんだ？」

「あそこに書かれてあつた記録には、複数人の子供を同時に監禁してたつてあつたわ。この山荘には相当数の子供が誘拐されて監禁されてた筈よ。だとしたら、監禁した複数の子供たちをどこで“管理”したかつて話になるわ」

二階に上がると、ツンと鼻につく腐臭が増す。二階全体に染み付いたように漂う強烈な臭いに鼻を抑えたくなるが、銃を持つ手を離すわけにもいかない。

顔をしかめながらも、蓮は自らの話を続ける。

「——ッ、一階は探索した場所にはそういう形跡も無かつたし、未探索の部屋は残りスペースを考えれば複数人の管理には向かない」

「ふんふん」

蓮の話を聞きながら、十三は二階の構造を眺めて確かめる。

一直線に続く狭い廊下の片側に扉がずらりと等間隔で並んでいる。最も近い扉に“203”と書かれてある事から、おそらくは全て客室だろうと推測した。

「あの記録にはそれぞれの子供に個別で番号が振ってあつたわ。多分、子供たちは一箇所にまとめてじゃなく、個室に閉じ込めてそれぞれを観察してたんだと思う。そうなる」と一番考えられるのは——」

「ここみてーな客室つてワケか」

「そういう事。……それで、さっきのムナガラーなんだけど。あれの召喚には生贄がいるの」

「……生贄、ですか?」

話を聞きながらも十三は廊下を軽く歩き、全体を見渡す。右側は歩くとすぐに突き当

たり、その角には廊下にあるのと同様の201番の客室の扉がある。

そこから階段から見て左側の奥へ行くごとに部屋番号は増えていき、見渡す限り八つほどの客室があるようだ。

「そ。召喚して喰われた術者とは別に、生きた人間が捧げられないとムナガラは呼び出せない。……それが誘拐された子供だとしたら、他にも生きている子供がここにいる可能性があるわ」

「……・確かに、それは急いで確認しないといけませんね」

「もしも〃管理〃されていた子供が生きているとすれば、術者や山荘の異常さから言うて危険な状態である事は間違いない。蓮が無理を押しして探索をしようとするのは、そういう理由からだった。」

廊下に仕掛けが無い事と、部屋の数を見て二階のおおよその大きさを確認し終えて戻ってきた十三が、まずは右端の201番の扉から開けようとするが、鍵がかかっているようで開く事はない。

「……ちつ、当然か。今から鍵探すつても手間だな。蓮、ブリーチング弾とか持ってねえの?」

「悪いけど持ってないわ……今度から買つところかしら」

「伊達さん、私がやります。ドアから離れて下さい」

ドアを開く為の弾薬が無いか蓮に聞くが、残念ながら蓮の持ち合わせの弾薬には無い。それを聞いてユーリヤが前に出てきた。その手にはスレッズハンマーが握られている。

「……え、おいおいまさか」

「——せえい!!」

掛け声と共に、ユーリヤがハンマーをドアの取っ手部分へ向けて全力で叩きつける。取っ手は破壊され、鍵が壊れたドアはそのままハンマーの振り抜かれた方向へ開かれた。

「開きましたよ」

「……う、うん……」

「……スゲーなシスター」

見た目に似合わぬ強行な手段を取ったユーリヤに若干引きつつも、十三は部屋内を確認する。

「——うげ、ひでえ。入らん方がいいわコレ」

「どうしたの、十三さん」

「死体の倉庫だ。ガキの死体がぶちこまれてる」

「ッ」

部屋に入らずとも廊下へ一気に流れ込んでくる強い腐臭に、蓮とユーリヤは顔を顰める。

部屋内には無造作に子供の死体が放り込まれ、積み上げられていた。人の持つ尊厳など微塵も感じさせず、ただ物として廃棄された命の果てが、そこにあつた。

死体は全て乾いた血がこびり付き、体は損壊し、ただ死体に集り^{たか}飛び回る蠅と湧き出る蛆のみが部屋内に動く全でつた。

「……これが、素材」の倉庫かしら、ね。吊つてあげたいけど、後よ」

「……はい。急ぎましよう」

死者を想い悲痛な顔をするユーリヤの肩に蓮が手を置く。亡くなってしまった子供へ思う所はいくらでもあるが、今は生きている子供を探す事が優先だ。

それからは最初の部屋を開けた時と同様に、二階の部屋の番号順にユーリヤがハンマーで鍵を破壊しては中を確認していった。ただ暴行の跡だけが残る誰もいない部屋もあれば、既に息絶えている子供だけがいる部屋もあった。

その度にやり切れない気持ちにはなるものの、確認を終えては足早に次の部屋へ行く。必ず後で弔うから、と心の中で誓いつつ、望まぬ死を遂げた子供を残して二階の探索を続ける。

「せいっ……っはあ」

ユーリヤが部屋の扉を破壊し、大きく息を吐く。これまでの疲労もあるが、二階の凄惨な状況と、生存者を期待して扉を開けては裏切られる事から、少し気が参ってしまった。

十三は表情を崩さず、扉が破壊されるや否や、ルーチンワークの如く確実に部屋内のクリアリングと確認を行っていく。その途中で、視線が止まる。

「……う、あ……」

「ユーリヤ、生存者だ。手当て頼む」

「……大丈夫ですか?！」

大きな物音に身動きみじろする子供を見て、飛びつくようにユーリヤが子供へ近寄り、すぐさま治療の魔術をかける。傷だらけの子供を温かな光が包み込み、体につけられた傷が塞がり、癒えていく。

魔術をかけて少しして、子供の虚ろに開かれていた目の焦点が徐々に合い、視線が左右に動く。途端、子供は怯えた表情になり、その場から飛び退いてユーリヤから距離を取った。

「つひーごめんなさいッ、ごめんなさいッ！なにもしません、から！なにも、しないでくださいー！」

「お、落ち着いて下さい！私達は助けに——」

「ごめんなさいごめんなさい痛い痛いもうやだ帰りたいだれかだれか……い」

子供は部屋の隅で頭を抱えて震えるばかりで、ユーリヤが声をかけても反応しない。意識を取り戻した代わりにただ恐慌をきたし続ける子供に、ユーリヤはかける言葉を思いつけなかった。

そうしている子供へ、蓮がゆっくりと歩いて近付いていった。目を閉じ震え続ける子供の傍まで歩き、しゃがみ込む。誰かが傍に来た事を察し、子供は怯えて大きく体を跳ねさせた。

「もう、大丈夫だから」

そうして怯える子供の体を、包み込む様に蓮が軽く抱きしめる。震え続ける体が、寄り添う体温を感じて徐々に収まっていく。

体の震えが収まった後、子供は蓮に縋るようにして咽び泣き始めた。それに対して蓮は何も言わずに、ただ頭と背中を撫で続け、ゆっくりと落ち着くのを待った。

しばらくそうしていると、泣き止んだ子供は安堵した表情を浮かべ、静かに眠り始めた。軽く頭を撫でてでも起きない事を確認した蓮は、子供を背負い立ち上がった。

「――部屋全部調べたら、この子に解毒処置もしてあげないとね。じゃ、次行きましょ」
「……そうですね」

子供を背負う蓮を見て、ユーリヤが優しげに微笑む。自身も疲労しきつているという

のに、人助けを最優先に動き、被害者に親身に寄り添う蓮の人柄はとても好ましいものだ。

こういった事件において、自身と時間の余裕さえあれば蓮は基本的に被害者の人命を優先して動く。そういう人の良さこそがユーリヤが蓮に対して信頼を置く理由だった。

立ち上がった蓮が部屋の外まで出ようと歩き始めると、数歩でバランスを崩し体がつんのめる。倒れそうになる蓮を、前に出た十三が片手で受け止めた。

「……って、わ、と」

「立つのもしんどいんだろが。素直にガキはこっちに渡しとけって」

「う……ごめん、お願い十三さん」

「ま、力仕事は元々こっち担当だしな」

十三は蓮の背負った子供を受け取り、重さなど無いように左肩に軽々と担ぎ、部屋を出て行く。

実際まともな食事を取れていないだろう子供の体は普通よりも遥かに軽かったのだが、それでも今の蓮にとっては厳しい重さだった。少し体に力を入れて動こうとしただけで、息を切らしている。

「……我ながら、締まらないわねえ」

蓮は乱れた息を整えるついでに、感じる情けなさを溜息と共に吐き出した。

◆ ◆ ◆
「結局、無事なのは二人だけか」

「二人」も「よ、十三さん」

「そうですね……こんな酷い状況で、よく生きていてくれました」

二階の全ての客室を開き、一階の残りの部屋も探索し終えた蓮たちは、一旦パソコンのあつた事務室まで戻って来ていた。

発見・保護できた子供二人は、気を失っている間に回復と解毒を済ませた。なお、蓮は解毒処置を自分がやろうとしたが、ユーリヤに休憩するように窘められた為、大人しく部屋の椅子に座って休んでいた。

一度座ると、気力で押し留めていた疲労と戦闘での反動が押し寄せて来た。さすがにもう体力が限界だったのだらう、事務室の机の上で腕を枕にして頭を伏せる。

そうしていると、事務室の扉を開けて政次郎と真魚が入ってきた。

「……そつちも終わったか」

「政次郎さん、何か見つかりましたか？」

「可能な限り周囲を見て回ったが、ろくなものは無しだ。タブレットの残骸と、コレぐらいだな」

政次郎は机に突っ伏す蓮と部屋の隅で眠り込む子供の様子を一瞥し、目を閉じて呆れ

混じりの溜息をつく。

ユーリヤから探索の結果を聞かれ、政次郎は手に持つ泥まみれのフラッシュメモ리를掲げた。

「野曾木……は、まだダメそうか」

「……もうちよつとだけ堪忍してつて感じね」

「まあいい。もう暫くはそうしていろ」

再び溜息を零し、政次郎は机にあるノートパソコンにフラッシュメモ리를差しして内容を確認する。中身を確認し、ノートパソコンを持つて蓮のいる机まで近付いてくる。

そして顔を伏せる蓮の目の前に音を立ててノートパソコンを置き、画面を向けた。

「そのままでもいいからコイツの中身を確認しろ。どういうブツだ」

「……わかったわよお……えーと、何々……」

腕に乗せていた頭を気怠げに上げて、蓮は画面に映るフラッシュメモリのの中身を確認する。

全文英語で書かれたファイルに目を向け、タイトルや各文章の頭などの要点のみを次々に読み、手早くスクロールしていった。

「——『グラーキの黙示録』、ね。半分ぐらい巻が抜けてるみたいだけど、書いてある中身そのものは本物ね。どこでこんな見つけてきたんだか」

「グラーキが自身の崇拜者に夢で授けた知識から、その崇拜者が書き上げた魔術書、だっけ」

「原典はそうだけど、色んな奴らに複写されてる内に色々尾びれがついた代物よ。これも第何版なんだか」

概ねの内容を把握し、蓮はファイルを閉じる。中身にはザイクロトランやムナガラーの召喚に関わる物もあつた為、術者がこの魔術書をこの山で解読して使つた事は明らかだった。

このノートパソコンの中身と合わせ、出処などを調査する必要があるだろうが……まあ、それは帰ってからでいいだろう。

「休憩が終わつたらキャンプまで撤退するぞ。さすがに救助者を抱えながらこの先の探索は出来ん、時間も時間だ。一度麓の警察に保護してもらい、明日から探索を再開するぞ」

「……………んっ?」

政次郎の言葉の一部に蓮が反応する。「探索を再開」、とはなんだろうか。

「……………探索、終わったんじゃないの?」

「この付近はな。今回の依頼の内容を忘れたのか」

「……………黒幕の排除じゃなかったっけ? 終わってない?」

「それは昨日決めた一時方針だ。大元の依頼は山内“すべて”の調査だぞ」
「……………えっ」

疲労しきつた頭と体が政次郎の言葉で完全にフリーズする。次いで、この二日の山内調査によって負った疲労と苦勞が瞬時に脳裏に思い浮かんでいく。

考えただけで疲れ切った体に見えない重石が覆い被さったような気分させられる。この状態で、また昨日今日と同じ苦勞をしなければならぬ、というのだろうか。

「……………あの、政次郎くん？私今回めっちゃ頑張ったし、もう早退ってわけにいかない？」
「馬鹿を言うな、山内に漂う毒に対する予防に必要だから連れて行けと言ったのはお前自身だろう。まだ山中に化物が残っていると仮定すれば、シスターに消耗が集中するのは効率が悪い」

「……………うぐ」

「出来れば、毒を生み出す元の特定もしておきたい。大元がどれほどの毒を撒いているかわからん以上、これはお前の仕事だ」

「……………む、ぐう」

政次郎からの言葉に蓮は一切の反論が出来ない。確かに前日、毒に対して自分が必要だと売り込んだのは事実であるし、この山中に未だ残っているだろう毒の大元を対処するなら、耐性を持つ自分が挑むのが筋だ。

蓮は唸りながら自分が休める理由を必死で考えるが、現状の装備や次の調査隊が来るまでの時間などを考えると、何度考えてみても最終的には一つの答えにしか行き着かなかった。

「……わかった、わよ……やるわよ……やりやいいんでしょうが……」

「ああ。その分報酬はキツチリ掛け合う、喜べ」

「嬉しいんだけど嬉しくないわ……」

「蓮さん……」

机に再び突つ伏して、蓮が自棄気味に明日以降の探索への参加を渋々承諾した。心底疲れ切った様子の蓮を見て、政次郎以外の三人はさすがに同情の目を向ける。

しばらく休憩した後、拠点にまで戻ってからすぐに蓮は泥のように眠りについた。

翌日以降も、蓮は疲労に耐えつつ、再び歩きにくい山中を探索する事になった。

毒を生み出していた大元の樹木は山荘から少々進んだ所に数本生えており、危惧していた山内の怪物は放置された低級のゾンビのみが徘徊していたが……わざわざ言葉にする程の波乱も無く、山中の探索は無事終わった。

ただ、蓄積したあまりの疲労から、最終的には蓮自身がゾンビの様に生気の無い顔となっていた。

結局政次郎からどのぐらいの報酬がもらえるかも確認する事なく、依頼終了直後に

真つ先にセーフハウスに戻り、二日ほど全身の疲労と筋肉痛を癒す羽目となった。

今度からの出撃は、準備でケチる事はやめよう。もつと楽に仕事出来るようにしよう
——ベッドで横になりながら、蓮はずっと反省し続けた。

巡る魔石編

1. 当たるか八卦

「どーもー野曾木さん、最近調子はいかがですかー?」

「……まあ、ボチボチつてとこよ、マスター」

今蓮が訪れているのは、オカルトショップ“Rouge^{ルー}ジュ^{ジュ}”。その手の界限では知る人ぞ知る、本物のマジックアイテムを取り扱う専門店である。

踊り子めいた肌を大きく露出している服とフェイスベール、長いブロンドヘアを携えた、この店の名を持つ店主であるルージュがにこやかな笑顔で蓮を迎えた。

「その割には浮かない顔ですねー。そのような難しい顔をしては運氣も逃げてしまいますよー?……しかしもう安心!こちらの開運のブレスレットさえあれば、良くない流れもたちまちに良くなること間違い無しです♪」

「……そのブレスレットを買ったら一億円とか拾えたりしない?」
「効果には個人差がございます♪」

迎えた時の笑顔は一切崩さないままに、蓮の無茶な問いを遠回しに店主は否定する。蓮にしてもさすがにそんな事はそう起こらない——絶対に無いとは限らないがこの

稼業の恐ろしい所ではあるが——とわかつてはいるので、この一連のやり取りはただの雑談代わりに過ぎない。

店に並べられている新しく入荷された商品と、商品の手前に平然とつけられた何十万円という自信に溢れた値札を細目で眺め、なんとも言えない気持ちになりながら、蓮は他の話題を切り出す。

「マスターの方こそ最近どうなの？何か胡散臭いやマだとか、曰く付きのブツが裏に流れたとか、そういう話って聞かない？」

「んー、事件はともかく、アーティファクト魔術品の関わる話でしたら耳に入った時点で即、確保しに動きますねー」

「……つてことは、特にナシかしら」

「残念ながらー」

ルージユは自ら集めた曰く付きの魔術品を並べて店を構える程の蒐集家コレクターであり、その関係で独自の情報網を持っている。こと範囲を魔術品に関係する事柄に限れば、蓮の情報収集範囲をまるで寄せ付けない程だ。

ルージユ本人も魔術やそれに関わる物事に対して造詣が深く、これらの情報に対する真偽も信用出来る。そういう事情もあり、仕事の際に必要な品を揃える時以外にも、蓮はよく店主に会いにこの店へ訪れていた。

とはいえ、何も買わずに店を後にするというのは気が引けるので、大抵は店に並ぶ商品——最低でも二十万円近くするような日くのあるアクセサリーなど——を買うことになるので、財布が薄い時には頻繁に訪れる訳にもいかない。

単なる情報料として考えるなら、店主自体の情報の正確さもあって出費としては悪くない。が、今回のように店主自体から情報が得られない場合にも、「話が聞けないなら帰るわ」とただ店を後にするのも些か与える印象が悪いので、結局は何かしら買物をする必要がある。

……別に何か買わなかったからと言ってその後ルージュと険悪になるわけではないだろうし、これは蓮にとつての見栄のような物なのだが。

「……はあ、やっぱり事件なんて見つけようと思つて見つけられるものじゃないわねえ」「お疲れのようですねー。それでは気分転換に、こういったことはいかがでしょうか?」目を瞑つて小さく息を落とす蓮へ言葉をかけると、ルージュは占いの水晶を置いてあるテーブルの端にタロットカードの山を置いた。

ルージュの本業は魔術品の蒐集及び売買ではあるが、副業として占いも取り扱っている。とはいえ、この店で取り扱う魔術品による売上の事もあり、客からの要望があればする程度でそれほど本腰を入れている様子はない。

どちらかと言えば、自身の格好も含めて店内の妖しげな空気をより強調する為のポ一

ズとしての意味合いが強いのだろう。かといってただの見せかけという事もなく、彼女の占いはちゃんとしたもので、ピンからキリまでいる占い師の中でも蓮が信頼を置ける、確かな“占術師”でもある。

「タロット占い、かしら」

「行き詰まった時にこそ、こういった外部からのアプローチに頼るのも良いかと。困った時の神頼み——というわけでもありませんが。何かしらのヒントになるかもしれないよー？」

「……」

実際問題、蓮も現状には行き詰まった感じを覚えていた。なんとか最近の事件の収入によつて直近の利子問題や、武装・物品不足は概ね解消されたと言つていい。

ただ、蓮の抱える問題の大元である借金の返済に関してはまだまだで、その膨大な額を削る事もままならない状況だ。結局の所、この借金を無くさない限りは蓮を取り巻く苦悩は絶えないわけで、少しずつでも返済を進めていかなければならない。

そこで何が出来るかと言えば、自分の使える情報網を駆使し、金になりそうな仕事になりそうな事件を探す事——結局はいつも通りの事しか蓮には出来ない。政次郎を通しての仕事の依頼を待っただけでは金も足りず、安定も無い。探せる範囲のことであれば、自分の仕事は自力で見つけるしかないのである。

だが、いざ気合を入れてハイ仕事が見つかりました、というのであればこの稼業で誰も困る事はない。例によって蓮の情報網にそれらしい事件は引つかからないまま、以前の依頼からは時間だけが過ぎていくのが現実であり、現状だ。

蓮の所持金は少しずつ利子の返済により削られ、たまに会う蜜柑からは遠回しに返済について言及されつつ、「まとまった金はまだか」という無言の重圧を受ける羽目になっている。

……そこらの魔術師や化物を相手にするより、最近の蜜柑と会う方が余程怖いくらいだった。

「そうね、マスターの占いなら信用出来るし。それじゃ、頼もうかしら」

「それでは一回二万円になります♪」

「……マスター、一回分にしてはちよつと高くないかしら」

「ユウジヨウ価格ですよー」

少々腑に落ちない価格設定に少し顔を顰めたが、一度やると決めた事を取り下げるというのも良くない気分が残る。少し悩んだ後、まあ今の財布なら別に出せない訳でもないから、と蓮は渋々一万円札を差し出した。

「毎度ありがとうございます♪それでは、力入れてやらせていただきますよー」

「ホント頼むわね。今の私の一万円って結構バカにできない出費なんだから」

金を受け取ったルージュは部屋の隅から椅子を二脚持ってきて、それらをタロットカードが置かれているテーブルの両側に置き、さあさどうぞと一言添えて椅子を引き、座るよう蓮に勧めた。

蓮は椅子を手に取り、席に着く。それを確認したルージュが逆側の椅子に座り、タロットカードの山から上の二十枚ほどのみを抜き取り、残った束はテーブルの上に乗っていた水晶と共に商品の棚へ除けて置かれた。

「大アルカナのみかしら」

「細かいのは見ても結果が分かり辛いでしようしねー。三枚か七枚か、どちらがいいですか？」

「スリーカードでいいわよ、本格的な相談って訳でもないから。……七枚引きで悪いカードばかりだったらそれこそちよつと落ち込んじゃうし」

「質問の内容はどうされます？」

「ざつくりと全体的な運勢でもいいんだけど……そうね、〃 次の仕事はいつ見つかるか〃 お願いします」

「わかりましたー♪」

タロット占いには多くの手法があるが、大アルカナのみを使用する場合の占いで特に有名なのは、単純に過去・現在・未来の推移を表すスリーカード、個人的な相談に対し

て対応・影響・結末まで見るヘキサグラムの二つである。

個人的には「借金返済はいつ終わるのか」という内容で細かく占って欲しい気持ちもあるが、なまじ占いに信頼性があるばかり、悪い結果が出ればそれだけで少々気持ちが滅入る事になる。ルージュの笑顔で「一ヶ月以内に都合つかなくなつてそこからは転落待ったなしです♪」とか言われれば、ちよつと立ち直れないかもしれない。

「……………」

そんな事を蓮が考えている間に、ルージュはそれまで顔に浮かべていた表情を無くし、両手を正面に置きながら目を閉じて集中し始めていた。

数多くバリエーションのある占術だが、どれにしても必ずしも術者の集中が必要とされる。一切の感情を挟まずに道具を取り扱い、無我の状態で世界と向き合つて、人智の外のかかに触れる。魔術にも似た、正しい“占術”を行う為には、凧のような精神と結果を引き出す確かな集中がいる……らしい。蓮の知る占いの知識は又聞きの話ではないが。

外界の音すら聞こえてこない、この空間のみが隔離された様な錯覚すら覚えさせる数十秒の静寂の後、ルージュが静かに目を開いて大アルカナのタロットカードの束を右手で持ち、左手で静かに上からカードを数枚ずつ引き抜きつつ移していく。

それを丁寧に三回ほど行つた後、今度はテーブルの上へカードを広げて、円を描くよ

うにそれらをかき混ぜていく。伏せられたカードの向きは混ぜる過程で何度も変えられていき、二十秒ほど混ぜ続けた所でカードを手元に寄せ、テーブルにシャツフルを終えたカードを横に立て、再び一つの束になる様に指で直していく。

その後、山札の上から六枚抜いて一枚のカードを表にしてテーブルに置き、同じことを二度行つた末に三つのタロットの絵柄が横に並んで置かれた。

「――〃吊るされた男〃、〃月〃、〃塔〃ですな――」

三枚の内、〃月〃のカードのみが逆さまになつた状態で、蓮の前に並べられている。ルージユはふむふむと声を小さく漏らしながら、顎を指の腹で撫でつつもカードを見ながら思案げな表情を浮かべている。

「……どんなもんなの?」

「そーですねえ、野曾木さんですからねえ」

「え、何、私だとなんかダメな事あるの」

「いえいえ、そういう事ではなく」

先程の集中してカードと向き合っていた表情が嘘のように、いつものにこやかな笑顔を顔に戻したルージユが最初に表にした二枚を手に取り、カードの向きを逆にして蓮の手前に置いて見せた。

「……」までの流れは確かに良くなかつたみたいですね。過去を示すのは〃停滞〃を意味

する”吊られた男”、蓮さんが悪いという事じゃなく、周囲の状況が一つどころに留まって動かないままだったんでしようねー」

「フオーありがと、それで次のカードは？」

「現在を示すのは”月”の逆位置ですね。これは”予期せぬ変化”を意味するので、今に何かしらこの現状が変わる事が訪れることでしょう」

「へえ、悪くないじゃない。最後のカードは？」

「未来を示している”塔”のカードですねー」

今の現状が変わるといふのなら、それだけで吉報である。思ったよりは悪くない……というより、良い結果が出た事に少し満足感を覚えながら最後のカードの結果を蓮は聞いた。

「失敗”、”トラブル”、”転落”——金運的には”破産”とか”貧困”とかの意味がありますねー」

「……………聞きたくない言葉のオンパレードなんだけど」

一気に気分がフオークボールの如く叩き落された。直前までの二枚の結果を踏まえれば、”悪い方向への変化がその内訪れる”という事になる。

占いで悪い結果が出るのはこれだから嫌なんだと蓮は内心で落ち込み、自然と頭が下がる。

「確かにこのカードはほぼ悪い意味しか持つていないんですけど、野曾木さんの場合は吉報にもなり得ますのでなんとも言えないんですよねー」

「……吉報？どの辺りがよ」

「このカードには“災難”、“闘争”など、避けられない苦難が訪れるという意味合いが根本にあります。……つまるところ、野曾木さんにとつての“お仕事”が来るのかもしれない。そういう関連の仕事というなら、野曾木さんとしては稼ぎ時でしょう？」

「……ははあ、なるほど、ね」

確かに神話生物との遭遇や、それに関わる教団・魔術師との戦いともなれば疑いようも無い“災難”なのは間違いない。加えて死の危険が近ければ近いほど、それで得られる見返りは概ねの事態で比例して大きくなる。

少し落ち込んだ気持ちを持ち直される。思えばこんな稼業をやる以上、苦難と災難には慣れっこだであるし、むしろ避けられない災難があるのであれば、その中からどれだけ得られる物があるかが肝要だ。

「……ありがとねマスター、確かに良い気分転換になったわ。いいわ、やってやろうじゃない。災難だろうが災厄だろうが、いつでもどこでもドンと来いつて感じよ」

「はい、何かしら準備をする時は、ぜひぜひうちの店をご一顧頂にー♪」

「言われなくても何かあったらそうさせてもらおうわよ。また来るわね、マスター」

「はい、またのお越しをー♪」

蓮は席を立ち、店の扉を開く。鈴の音の乾いた音が店内に響くのを聞きながら、蓮は“Rouge”を後にした。

「……相変わらず、野曾木さんは面白い道を行きますねー。これだけ見ていて飽きない人生というのも、羨ましい物です。はてさて、今度はどんな事が待ってるんでしょーうね」蓮が後にしてから少しして、店内に一人残されたルージユはそれまで蓮に向けていたにこやかな顔を顔から落とし、口元だけの微笑みを浮かべる。

最後に表にした“塔”のカードを右手で弄りながら、ルージユが独り言ちた。

2. タダより安い事無し

「——ところで蓮、次の土曜は暇かしら」

「……？唐突にどうしたの、奥様」

“ R o u g e ” を訪れた数日後、あれから唐突に事件が見つかるという事もなく、蓮は変わらず日々情報収集に励んでいた。

裏世界の住人が集う行きつけのクラブ、メールや電話などのみでやり取りする自身のコネクション、そして弥武組から聞く事の出来る唐館市内の現況など、様々な所から集めた情報をまとめ、何か異常な事が無いか確認する毎日だ。

魔術の関わるような日く付きの案件と、警察の範疇である通常の事件を情報の段階で区別するのは非常に難しい。不自然な行方不明者の偏りやあからさまな変死事件が続くならともかく、起こる事件の大半は自然的な事故と、人為的な刑事事件となっている。

とはいえ、そういう情報を常日頃から集める事で、いざ何かしら事が置きた際の唐突な変化や異変の前兆を察知出来ることを考えれば一切が無駄という訳でもない。そういった情勢の流れを把握する事は最優先であり、その関係で蓮は頻繁に弥武組と市内についての情報を交換している。

そうして今週の分の情報を蜜柑と共有し終えて、お茶でも飲みながら一息ついた所で、蜜柑は蓮へ唐突に別の話を切り出した。

「いや、大したことじゃないのだけど。この間商店街で買い物をしていたら、そこで福引券がオマケに二つついてきちゃって。帰りに回してみたら、次の土曜から開かれる展覧会のチケットが二人分当たったのよ」

「……ペアチケットなの？」

「いや、一人用のチケットが二枚。二回回してどっちも同じのが出たわ、私としてはもつと便利な最新家電とか狙ったんだけど、あの時はツイてなかったわね」

「……そのチケットは何等だったの？」

「三等ね。やっぱりああいうのはそうそう当たるように出来てないわ」

「……………」

普通そういうのはポケットティッシュだのハズレばかり出るものなんじゃないのかと、過去の自分の経験を思い出しつつ蓮は思った。当の蜜柑を見れば、本当に不運だったと言いたげに嘆息している。蜜柑と自分、どこで差がついたのか。

「というか、そういうった物で“狙って当てる”という発想がそもそも異様だ。狙っていないものが出せるなら誰だって悔しい思いはしないし、福引でそんな事をされたら客寄せにならないだろう。」

「で、こうして手元にそのチケットがあるわけなんだけど……私はそういうよくわからない物が並んでるだけの展覧会にはあまり興味無いし、かといって使わず捨てるのも少し勿体無いから。蓮が興味あるなら押し付け——プレゼントしたいと思ったのよ」

「隠す気無いなら」押し付けたかった” って言い切つていいんじゃないかしら」

「そんな事無いわよ。いつも頑張つてくれてる蓮に、何か労つてあげたいという気持ちも確かに心のどこかにはあるもの」

「心の隅に追いやられてる程度しか存在してないじゃない」

その言葉通り労う気持ちなどまるで表情に表さなのまま、取り出した二枚のチケットをお茶の入ったカップの横に置いて淡々と蜜柑は話し続ける。

気心の知れた関係としての軽口の掛け合いは心地良いが、「いつも頑張っている」の辺りからはどこか他意を感じさせる。主に滞っている借金の返済について。

「まあそんなわけで、コレいらない？ 興味が無いなら、無理に渡すつもりはないわ。ただ、最近中は々仕事も中々入つてこないみたいだし、たまにはこういうのも悪くないと思っただけど」

「うーん、そうねえ……」

目線を置かれたチケットへと落とし、書かれている文字を確認してみる。展覧会が行われる美術館は蓮も名前は聞いたことがあり、それなりに大きい所と記憶している。場

所はそれなりに遠いが、行けない程の距離でもない。

チケツトに大きく書かれているタイトルは、「古代メソポタミア・神秘の文明展」——
ありがちな物ではあるが、この美術館を使う規模の古代メソポタミアの美術展ともなれば確かに相当な物ではある。

(メソポタミア文明の大型展覧会、か……)

かつて旧支配者が支配していた古代に近付けば近付くほど、それらの影響は色濃く残り、当時の文明は今よりも魔術や呪術がより盛んに行われていた。国を治める者、或いはそれに近い役割の者が魔術師だったなどは然程珍しい事でも無いと様々な発掘品によつて判明している。

蓮も仕事で必要になったからという理由で、魔術や怪物に対する知識を集めている訳ではない。こういった古来の神秘にも少なからず興味というものはあり、それらが深く関わるだろう物事には惹かれる物がある。

特に古代メソポタミア文明というのは、かつて中東に生まれた数々の国の文明を総称した物で、一つの地方の特色だけに収まらない多様性を秘めた文明群だ。土地と水運に恵まれた当時の地は、それこそ紀元前最大の規模の文明が、長きに渡り育まれた。

その手の学者であれば、嫌いな者などないだろうという文明なのである。改めて考えてみれば、蓮は少なからずこの展覧会に関する興味が心中から湧いてくるのを感じ始

めた。

「……悪くはないけど、ちよつと遠いのよね……」

「ちなみにこのチケット、美術館の中のレストランのフリーチケットにもなつてて、館内であれば食後のスイーツも含めて無料食べ放題よ」

「奥様そのチケット頂戴」

最後の一押しによって、蓮は全ての迷いを叩き伏せた。



「——それで、蓮ちゃんのおゴリでタダ飯つて響きだけでなんとなく着いてきちやつたけど、なんでわたし誘つたの？」

「真魚ちゃんも大概いい性格してるわよね……」

そうして迎えた当日、蓮は真魚を誘い、駅で合流した後に鈍行電車で一緒に美術館へ向かつていた。

目的地の駅まで一時間近くかかる、と伝えた時には珍しく真魚の仏頂面が引き攣つたものだが、電車に乗って適当なボックス席に着き、スマートフォンを弄り始めるとすぐいつもの無表情に戻り、平静を戻した。

それからしばらくは真魚は黙々とゲームに没頭していたが、一区切りついた所で真魚が顔を上げて蓮へ問いを飛ばした。

「政次郎くんはそもそもこういうのに付き合わないから自動的に除外、ユーリヤには聞いてみたんだけど教会の仕事で炊き出しがあつて都合が付かなかつたのよ。十三さんは『俺そういうのよくわからねーからなー、古いだけじゃん』って身も蓋もない事抜かしたわ」

「おじさんはそこで女性の行きたい場所に合わせるぐらいの器量も無いから童貞なんだね」

「いやそこまでは言わないけど」

「おじさんは童貞だね」

「短くまとめろつて言つてんじやないのよ真魚ちゃん、つていうか車内で変なこと言わないように」

「ここぞとばかりに真魚は淡々とこの場にはいない十三に対して言葉の剃刀を飛ばしていく。休日の電車の中は座る場所に困らない程度に空いてこそいるが、蓮達の周囲に一切の人がいない訳も無く、真魚の言葉にちらほら反応して乗客は蓮達へ怪訝な視線を飛ばしてくる。」

蓮はこんな会話を聞かせて少々乗客に申し訳なくなつたが、聞かせた当の本人の真魚は他人の視線など何処吹く風と言わんばかりに何一つ気にする様子も見せず、感情を何処かへ置き忘れたようなその表情はまるで変わらない。

「つていうか、見ようによつてはデートに誘われたとか思われかねないんじゃない、それ？」

「……………そういえばそうかももしれないわね、二人きりで遠出する訳だし」

「相手がおじさんで良かったね、並の童貞だったら勘違いさせて舞い上がらせた挙句に『えつ、そういうつもりは無かったんだけど……………なんか、ごめん』つて別れ際に言っちゃつて、後々の人間関係がぎくしゃくしちゃう事請け合ひだったよ」

「具体的かつリアルにありそうでヤな想像ね」

「——あ、あつたあつた。ほら蓮ちゃん、これ見て」

「ん？」

会話をしながら手元のスマートフォンを弄っていた真魚が、その画面を蓮へ見せる。画面には「男を勘違いさせる女の特徴！」とページタイトルに書かれた記事があつた。

なんともご丁寧な事に、意図的にそのページは読み進められた状態になつており、「二人になる様に誘いをかける」という文字が強調されている場所が画面の一番上に来ている。それを見た蓮は曖昧な表情を浮かべた。

「……………いや、こんな見せて私にどうしろつて言うのよ」

「積極的にオトコを勘違いさせて弄ぶ悪女ムーブしていい」

「そこは態度を諫める所なんじゃないの!？」

「蓮ちゃん、蓮ちゃんにはそういう“素質”があるんだよ……ひよつとすると蓮ちゃんは、いつかトンデモなくビッグになるかもしれないねえ……っ!」

「何を真顔で適当極まりない事言ってるの」

「蓮ちゃんのビジュアルなら結構その方面イケそうなんだけど……試しに出会い系サイトの連中にやってみたりとかしない?」

「やらないからね?」

真魚は無表情を保ったまま、まるで表情と合致しない言葉を次々と出していく。というかそこで“出会い系サイトで試す”とかいう発想が出ることに少々蓮は不安を覚えた。主に真魚の年齢から考えて。

「……んー、あと駅いくつで着くの?」

「ええと……あと七つぐらいかしら」

「悲報、わたし女だけど知り合いが乗った電車が鈍行だった、しにたい——2スレ目」
「その内容でどうやって丸ースレッド持ったの」

「んー、ひまー……」

真魚は表情こそほぼ変わることが無いが無感情という訳でもなく、慣れているならば微妙な語調の変化などで実際にどう思っているかは伝わってくる。頭が力なさげに左右に揺れるのを見る限り、どうもいつまで経っても目的地に到着しない退屈の余り、少

し眠いらしい。

それを見て蓮は真魚の座る場所の横に置かれた真魚のリュックサックを持ち上げ、電車の網棚に乗せた。荷物置き場としてこれまで潰されていた席のスペースは再び空いて、ボックス席が広々とする。

「ほら、眠いんなら寝ときなさい。どうせゲームで夜更かしとかしてたんでしょう」

「……おかん力高いね蓮ちゃん、わたし男だったら惚れてたかも」

「誰がおかんよ、どうせこの辺りの駅間も遠いんだししばらくは寝れるわよ」

「んう……」

ぼて、と糸の切れた人形の如く真魚が座った体勢から真つ直ぐに横へ倒れ、目を伏せる。

少しの間そうしていると、電車がレールの継ぎ目に当たることに不定期に揺れ動き、真魚の体も合わせて跳ねた。それが何度か繰り返されると、真魚の眉間に一本の小皺が寄る。

六、七回ほど電車の揺れによって体が小さく跳ね上げられた後、先程の倒れた動きをゆつくりと逆回しする様に真魚が再び体を起こした。

「……めっちゃゆれる」

「まあ仕方ないわよねえ、電車なんだし」

「んー……あ、そうだ」

思案げに唸った後、真魚が蓮の隣の空いた所へ座る。何をする気だろうと蓮が様子を見てみると、そのまま真魚は蓮の座っている所に向かって体を横に倒してきた。

さすがにボックス席と言えど、人が座っている所に寝転ぶには狭い為、真魚は小さい体を丸めて体勢を斜めにする事で、狭い中でなんとか横になりつつも蓮の太腿に頭を預けた。

「……そんなんじや余計眠り難くない?」

「この感触だけで五千円ぐらい稼げそー」

「いかがわしい店みたいない草やめて」

「それじゃ蓮ちゃん、ちよつとよく眠れるヤツちよーだい」

「目当てはそつちね……そういうの、得意ってわけじゃないんだけど」

「わたしは安らかな眠りにつくまでテコでも動かーん……」

「……まあ、やるけどね」

意識を集中させ、入眠剤などに使われる化学物質を生成し始める。毒性が弱く依存性の低い物を作るのは、毒性の強い物を作るより余程難しい。感覚のみで操作する以上、特定の分子式を想像しただけで作れるという事はない。

その為、蓮は自身の毒操作能力の訓練の一つとして、仕事や生活で使えそうな薬物の

模倣を定期的に行っている。人を昏睡させる強めのものから、短期間のみで効果の切れる弱いものまで、既存の薬物で有名な物であれば再現は出来る。

生み出した化合物を気体状に薄く放出しつつ、車内の空気に流れてしまわないように右手の周囲に留める。毒性と気体の濃度に細心の注意を払い、自らの太腿の上にいる真魚の顔へ掌を落とした。

「着いたら起こすから、ゆっくり寝るといいわ」

「ん……………」

真魚の目を覆いつつも、掌から真魚の鼻と口元へ気体を緩やかに少量だけ流している。次第に真魚の呼吸が緩やかになり、しばらくすると電車が揺れても真魚が身動きする事は無くなった。

完全に真魚が眠りについた事を確認してから、蓮は真魚へ翳していた手を戻し、自分の頬に軽く添えた。

「——はあ、私の能力を自分の都合の良いように使おうとするなんて、政次郎くんじゃあるまいに。周りから悪い影響受けてないわよね……………」

蓮は溜息をつきながら、浅く呼吸を漏らして安らかに眠っている真魚の頭を撫で、揺れによって乱れてしまった髪を優しく整える。その寝顔を見て、年相応な所もあるなと考えた。

次の駅名を告げる車内アナウンスを聞き、残りの通過する駅の数思い出した後、蓮は窓の外へ顔を向けて何も考えずに流れていく風景を眺め始めた。

3. 音は劈き渡る

「……ほえー、おつきい」

電車を降り、美術館の敷地前に着いた直後に真魚が気持ち驚いた声を上げる。

美術館の周囲は広々としたスペースが広がっており、歩道やスロープ以外は木々や芝生が景観を飾っている。

道の先には近代建築特有の、ただ眺めるだけでも目を惹く曲線や円を入り混ぜたデザイン、二階建ての美術館が建っており、両目では全体像を捉えきれない程の広大さで敷地に鎮座している。

「ま、遠出するだけはある美術館って事よ。中にはレストランだけじゃなく図書館、お土産屋、カフェラウンジからテラスまで、規模に恥じないだけのものが揃ってるわ」

「詳しいね」

「それほどでもないわよ、この位の事はネットで調べればわかる事だし」

実際、この美術館は地元の住民であれば誰もが知っているほどに有名な所であり、地元のみならず付近の市からの観光客も多く訪れている。美術館の入口手前では、スマートフォンのカメラを起動して美術館を見上げて撮影する若者の姿もあった。

同じく今日開かれる展覧会を見に来た客なのか、美術館の中へ入っていく人の姿がいくらか見える。取り立てて人数が多いというわけでもないが、有名な画家の作品や偉人に関する展覧会でも無いのに人の流動が外目で見えるというだけで大したものだろう。

蓮はスマートフォンを取り出し、現在の時刻を確認した。

「で、真魚ちゃんどうする？ 丁度お昼時だけど、軽く見て回ってからご飯にする？」

「お腹すいたからさっさと食べたい」

「承知よ、行きましようか」

蓮としては少々最初に少し見て回るぐらいでも問題無いと思つたが、元々真魚には自分の趣味に付き合わせてここに来てもらっているのです、真魚からの要望は可能な限り聞いてあげたい。

朝に電車に乗った分時間はたっぷりあるので、せっかくの遠出なら今日一日はのんびりと構えてもいいだろう。そう思い、蓮は横にいる真魚へ顔を向けつつ、美術館へ歩き始め……その一歩目でヒールを歩道に敷かれたタイルの段差にひっかけた。

「のうあつ——つたあ！」

「蓮ちゃんダサイ」

「……見なかつた事にして。あと誰にも言わないでね」

「貸し一つつてコトで」

「貸しになる程のものなの私の醜態」

なんとかバランスを立て直して転ぶ事こそ回避出来たが、平静ぶる蓮の顔には赤みが差していた。



「うーん、七十五点」

「結構ばくばく食べた後で結構辛辣な評価ね」

「人は百点以外でも満足を覚えられる生き物なんだよ」

「食事に対する感想じゃないわよそれ」

館内の二階にあるレストランで蓮よりも一回り多い量の昼食を食べ終わった後、真魚は満腹感や充足感が一切考慮に入らない率直な感想を述べた。

レストランの出す料理はメニューに記載こそ少ないが、その分外れのない料理——カレーやパスタ料理など——のバリエーションを中心としており、味も文句のつけるような所もない為、満足こそは出来た。

「でも実際、”おいしい”以外の感想ってないよね」

「……それはまあ、そうね」

「リアクションだけで場を繋げる芸能人の凄さだけは尊敬してる」

「もっと仕事の面を尊敬したげて」

ただ、その分味付けが万人受けする“普通”の域に留まっており、受ける印象も薄かった。蓮としても的確な評価をするなら、「普通に美味しい」止まりだったという感じだ。

とはいえ、無料で食べれる物としては十二分であり、ここ最近はやフハウスで簡便食品のお世話になっていた蓮としては文句を付ける所は無い。真魚としても点数は辛口だが、口にしない所を見ると不満とする所は無いらしい。

「さて、お腹も一杯になった事だし、それじゃ腹ごなしがてら、展覧会を見て回るとしましょうか」

「んー。んくつ……がりがり」

「……行儀悪いからやめなさい」

蓮が席を立ち、真魚がグラスに僅かに残った冷水を中の氷ごと口の中へと入れる。その後、音を立てながら口の中で氷を噛み砕くのを見て、蓮は注意した。

レストランを出て階段を降り、中央のホールに戻る。ホール先にある最も大きな扉の横には、展覧会の題名がでかかど書かれた立て看板がある。入口から真っ先に目につく為、このホール内で最も目立っている。

「さて、メインといきましょうか。どんなもんかしらね」

「わたしのメイン終わったし帰ってゲームしていい？」

「何のために来たのよ!？」

「蓮ちゃんのお奢りとかいうレアイベCG回収」

「CGって何よ!？」

一向に展示会への興味を示そうとしない真魚へ突っ込みを入れつつ、蓮達は展示室へと進んだ。



「おお……有翼牛の人面像、これ本物なの！凄いわね、さすがに実物見るのは初めてよ……」

「……ん」

「真魚ちゃん真魚ちゃん、今でも知られるスフィンクスやグリフォンみたいに、動物同士の特徴を組み合わせた美術品っていうのはシュメル文明——メソポタミア初期からの文化でね、狛犬みたいな守り神だったとも、権威ある者の象徴として象られたとも言われているのよ」

「……ん」

「円筒印章もあるじゃない！あれはね、粘土板に転がして模様を作るのに使うのよ。皮紙が出るまで使われたメソポタミア文明の一般的手法でね、紀元前における印刷技術と言ってもいいわ」

「……………んん」

広いホールにはそれぞれポールロープや厚みのあるガラスケースで仕切られ、様々な美術品が散り散りに並んでいる。展示品はそれぞれ時代ごとに大まかに分けられているが、進路は決められておらず、大半の展示品はどんな角度からでも見れるようになっている。

見る順番も決められておらず、どう回っても良いと判断した為、蓮達は目のつくまま自由にあちこちのフロアにある展示品を見て回っている……のだが。

「蓮ちゃん」

「ん、どうしたの」

「うるさいから静かにしてくれない？」

「うるさっ……!？」

「つていうか解説なら展示品の前に書いてあるしいらない」

「いらなっ……」

いつもより冷たさ二割増しになった目つきで真魚が蓮へ率直に告げる。

一つ一つの展示品を見るごとに蓮がその展示品についての知る限りの説明を入れてきており、その結果二人の見て回るペースは相当に遅かった。説明されている真魚としては別に聞きたくもない豆知識を逐一聞かされている状態で、辟易するのも無理はな

かった。

「政次郎くんが」説明癖が最大の欠点。って言うワケがよくわかったよ」

「……そ、そんなに嫌だった……？」

「まあ、うん」

「……………」

蓮としては善意のつもりで説明していただけに、真魚から嫌気を示された事は大きなシヨックだった。美術館の壁に向かい、頭を擦りつけるようにして落ち込む。

これが政次郎に言われるのであれば、確実に言葉に交えられる嫌味に反論する事で気持ち楽になっていただろうが、真魚からの言葉は淡々と自身の感想を述べてくる分がえって心に刺さった。

「気になることあつたら聞くようにするから、あんまり落ち込まないでね。めんどくさいから」

「……ハイ」

挙げ句の果てに面倒呼ばわりされ、蓮は完全に意気消沈した。……今度から少し人に何かを説明する際には気をつけるべきかと、少々本気で悩み始めるぐらいには精神が参っていた。

そうして蓮の口数が真魚によって大幅に抑え込まれた後、しばらく二人の間の会話は

展示品を眺めては簡単な感想を話す程度に留まった。蓮としては展示品を見る度に自身の知っている知識が喉まで出かかった状態が続き、非常にもやもやした気持ちを抱える事になったが。

「……………」

「あれ、どうしたの真魚ちゃん？」

「いや、向こうの方にあるショーケースの中の——」

真魚が訝しげな声を上げた直後、大きな破裂音が展示ホールの出口の近くから響き渡る。普段耳にすることが無い、聞き慣れた音に対して反射的に蓮と真魚が反応し、その音の方向へ向き直る。

黒いスーツを着込みサングラスをかけた男達が、拳銃を構えてホール内の客の方へ向けている。その中央に立つ一人は銃を天井へ向けており、その拳銃からはまだ硝煙が立ち昇っているのが見える。

「この場の全員に告げる。我々の邪魔をすれば撃つ。……二度は言わん」

天井へ発砲した男が肅々と自らの主張を発し、周囲にいる男達同様に銃を水平に構え直す。その瞬間、現状を遅れて理解した女性客の一人が耳を劈くような悲鳴を上げ、それに続く形で他の客も悲鳴を上げる。

その場で途切れなく続く悲鳴の波はホール中の隅まで死の恐怖として伝播し、ホール

内の客は全員男達のいる方向から反対側——ホールの入口方面——へ、恐怖から逃れる為に走り出した。

「ちよ、ちよつと押さないで……！くつ、何なのよあれ！」

「のわー」

入口方面へ逃げ走る客にぶつかり押され、蓮達もその場に留まることが出来ず、逃げていく客達の流れの中に吞まれていく。蓮よりも背丈の小さい真魚は瞬く間に人の波に吞まれて、蓮の見える位置から瞬く間に離れていった。

一刻も早く逃げようとする客、恐怖に足をもつれさせたり客にぶつかられて床に転ぶ客、それを避けようとして他の人とぶつかる客……あちこちで連鎖的に起こるパニックや恐怖が、その場から逃げる者達の勢いを抑え、ホール内には混沌よりただ逃げる流れが作り上げられた。

男達の詳細を確認したい蓮も少しずつ入口側へ押され続け、男達を確認しに前に行くどころかその場に留まる事もままならず、意図せぬままに体は入口側へと近付いていく。

(周囲に一般人が多すぎる、毒も使えない……！)

蓮の毒操作能力は、毒を自身の体から生み出して何らかの形で発生・操作させるのを最も得意とする。“得意とする”だけであり、視認した空間に自身の思う毒を直接生み

出す事も出来る。

しかし今銃を持つ男達を制圧しようにも、一般人に密着された状態では体の周囲に毒を発する事はもちろん出来ないし、人に押されるがままの現状では男達を十分に視認し続ける事も出来ない。

非常時に備え常に携帯しているガバメントを取り出そうとすれば、蓮を中心にさらなる混乱が生まれ、その隙を取られてこちらへ向けて男達が発砲してくる可能性が高い。周囲を一般人で固められている以上、そうなつた最悪の場合には一般人ごとこちらが殺されかねない。

「……………これか」

ガラスが叩き割られる音が男達のいる場所から聞こえてくる。高価な美術品を目当てとした強盗、なのだろうか。犯行には初動から迷いが無く、どこか手慣れた印象を蓮は心中で抱く。

身動きが取れない状態でそうこう考えている間に、出口方面へ男達の人影が離れていくのが見える。発砲から二分と経たない間に速やかに撤収していく男達の後ろ姿を、蓮は見送る事しか出来ない。

「このつ、待ちなさい、よっ！」

男達が離れていくのを見てこのまま逃がす訳にはいかないと考えた蓮は、なんとか人

の流れを押し退け、時間をかけて強引に前に出る。その場から離れようとする客の最後列から抜け出し、男達が逃げた方向へと走り出す。

ホールの出口を抜けた蓮は、裏口から逃げたと当たりをつけてそのまま外へ出る。人の熱気に満ちた空間と外気の気温差が肌から温度を奪うのも気にせず、周囲を見渡す。

しかしその周囲には既に男達らしき影は無く、あるのは目の前の道路に残されたタイヤ痕のみだった。

「……最悪ね、折角の休日が台無しだわ……」

道路を見渡し終えて、何も手がかりを掴めないとわかった蓮は館内へ戻る。こうなればもう自分に来る事は無いし、この先は地元の警察に任せるしかない。途中で人の波に吞まれてはぐれた真魚も心配だ。

ホール内に戻ると、髪がぼさぼさに乱れて気持ち不機嫌そうな真魚が、割られたショーケースに目を向けている。

「真魚ちゃん、大丈夫？」

「わたしの体はボドボドダー」

「大丈夫そうね」

真魚は蓮の方へ顔を向けず、割られて中身が持ち出されたと思わしきショーケースを見て、思案気な顔をしている。

「……どうしたの?」

「いや、男達が来る直前にこの中身を見たんだけど。蓮ちゃんにも聞こうと思つて」

「私に聞きたい物? 何だったの?」

「んー、ちよつとよくわかんなかったけど、多分宝石か何かだと思つ。赤いやつ」

「……それがどうかしたの?」

強盗の狙いが最初からアンティークな宝石狙いだった、とすれば初動から離脱までの迷いの無さも確かにわかる。大きさは見ていない為わからないが、ガラスケースの大きさを安置用の台座を見る限り、手のひら大ほどのものと推察出来る。

メソポタミア文明の発掘品としてそれだけ大きな宝石が存在するならば、確かにそれ一つで一生遊んで暮らせる程の価値となる。とはいえ、それだけ特徴的な物ならば裏世界で売り飛ばしたとしてもすぐに足が付き、身を滅ぼす事は間違いないだろう。

「いや、なんかその石から魔力みたいな感じの気がして。そんな石あるのかな、つて」

「……待つて。それ、本当なの?」

「うん」

が、ここで真魚が無視できない言葉を吐いた。手際の良すぎる強盗、それに唯一奪われていった魔力を持つ宝石。二つが合わさり、一気に今起きた事態がきな臭さを増していく。

「……調べた方がいいかもしれないわね、こっち側の事件の可能性があるわ。となると、手がかりが無いのが痛いわね」

「これとかどう?」

「ん?」

そう言つて真魚が手元のスマートフォンを蓮に見せる。画面にはこの場で銃を発砲した直後と思わしき、銃を構えている最中の男達の姿がカメラで撮影された写真の画像が写っていた。

「……ナイスプレーだけど、なんで撮ってるの?」

「蓮ちゃんに宝石の事を聞こうとあっち見た時、〃うわーヤクザっぽい人いる〃って思つて構えちゃつて、発砲音でついシャツター切っちゃつた。まさかマジモンとは思わなかつたけど」

「……………現代っ子って怖いわね」

真魚による恐れ知らずな証拠写真に対して、蓮は渋い顔を返すことしか出来なかつた。

4. 夜よりも早く

「……はー、うめえ」

唐館市のとある警察署の喫煙室にて、この署に務める警察官である葉原警部は煙草を片手に、湯気の立つコーヒーを一人でのんびりと飲んでいた。

昨今、ここ唐館市は凶悪犯罪の増加やそれに釣られての治安の悪化などが著しい。紛争地のゲリラ並の武装を所持するマフィアや、唐館市の外より来た出身不明の外国人犯罪者など、もはや警棒と拳銃だけでは対処不可能な程になっている。

とはいえ、あまりにも危険性の高い事件は優先的に特殊部隊に回される。一般の刑事の仕事はもっぱら治安の悪化に引っ張られる様に増加し続ける刑事事件の処理と、その後始末がメインだ。

少し前までは忙しい状態が続き、下の刑事より持ち上げられる多くの報告の処理、発生した事件の現場の調査に駆り出されたりと、おちおち休憩もしていられないという状況が続いていたが、今はこうして休憩時間にコーヒーを暖める程度までには時間が取れていた。

「……出来りゃあ、もう少し位は楽しんでえもんなんだが」

煙草を口に含んで肺の隅まで行き届くように息を吸い、溜息と共に煙を広く吐き出す。昨今の情勢はこうして一服をつく時間すら惜しいと思わせた程であり、平和というものの尊さと儂さが白煙と共に身に沁みる。

いつ部下からの報告がこの休憩室にまで持ち込まれるかわからない状況ではあるが、出来れば休憩時間が終わるまではこうしてコーヒーと煙を楽しんでいたものだ。

そう葉原が考えながらコーヒーを口に運ぶと、休憩室の扉がこつこつと軽く叩かれる。煙を吸いに来た同僚であれば、扉をわざわざ叩く必要は無い。……噂をすれば影とは言うが、まさか考えるだけでもダメなのだろうか。そう諦観が脳裏に差しつつ、扉に嵌められたガラスを見る。

そこには不始末を犯してしみつたれた部下の面よりもさらに見たくない顔である、葉原にとつては災厄と言つても差し支え無い人間が笑顔で手を振っていた。

「……………はー。まっじい」

急激に味が悪くなったと感じたコーヒーを一気に啜り、空になったカップを喫煙室に置いて席を立つ。三割増しで重く感じる腰を持ち上げ両眉を中央に寄せながら、葉原は仕方なく喫煙室の外へと出た。

「はあい、葉原警部。顔色が悪いわね、煙草の吸いすぎかしら」

「抜かせクソツタレ。お前が関わって来て気分が悪くならない奴はいねえよ」

苛立ちを隠そうともせず、葉原は自らの疫病神——蓮に対して、不服の言葉を返す。それを受けた本人はあらあら、と呟きながらも葉原からの言葉をなんら気にせずに微笑んでいた。

折角の休憩時間を邪魔されたという気分の悪さを切り替えるべく頭を掻き、葉原は蓮に向き直る。蓮が葉原を尋ねるといふ事は、大概の場合において刑事が首を突っ込めばその首が無くなりかねない位の厄ネタを持ち込んできた、という事とイコールである。下手な気分でも対応する事は出来ない。

「……で、要件はなんだ。ゾンビでも湧いたか、巨大コウモリでも出たか、はたまた幽霊でも目撃されたか」

「心配しなくても今回は大した事無いわよ、ちよつとした世間話ぐらいの軽い用ね」

「世間話なら他でやれ、三渡辺りなら喜んで付き合うだろ」

「そうもいかないわ、葉原警部から口利いてもらわないと面倒だし」

そう言つて蓮は自分の携帯を取り出し、一つの画像ファイルを葉原へ見せた。そこには、銃をカメラの方向へ構える、明らかに一般^カ人^タとは思えないスーツとサンングラスで服装を統一した男達が写っていた。

「誰だこいつら」

「つい先日、鹿鳴町で起こった美術館強盗事件の犯人達よ」

「……監視カメラの角度じゃねえな。この画像、どこから手に入れた」

「企業秘密、つて事で。ちよつと気になる所があつて、この犯人達の情報を知りたいの。その市の警察に聞いて回るより、葉原警部経由で聞いた方が角が立たないし、確實だからね。お願い出来るかしら」

「……チツ。わかつた、三渡に調べさせる。その写真寄越せ」

「わかつたわ、そつちの携帯とパソコン両方に送つておくわよ」

即座に蓮の要請を承諾し、少し遅れて自身の携帯宛てにメールが送られてくる。それを確認した葉原は、喫煙室の前より離れて事務室へ向かう。

何故蓮が強盗事件を追うのか、どこから手に入れた画像なのか、気になる所とは何か……これらの疑問点を、葉原は真つ先に思考の外へ追いやった。どうせ聞いた所でまともな返答が期待出来る訳でもなく、聞き出した所で蓮が関わったという時点で常識外のオカルト絡みの話なのは間違いない。

とはいえ、蓮に協力する事で自身の手の及ばぬ事件を未然に防げるといふ事は疑いようのない事実だ。実際に蓮の手で救い出されて警察の手に預けられた行方不明者や事件の被害者は多く、それら事件も詳細こそ記録に残らないが常軌を逸した内容の物ばかりで、それらが警察に回つてこないのはそれだけで得だ。

警察の上層部の方からも可能な限り協力するように言われている事もあり、葉原の中

では協力を拒否するという選択肢は最初から用意されていない。というより、変に協力を渋る方が後々面倒な事になる。

「おい三渡！ちよつと来い！」

「え？なんすか葉原警部、まだ休憩時間だったんじゃ」

「うるせえこの男達について調べろ。鹿鳴町内、あるいは付近の暴力団の線で当たれ。最優先だ」

「え、俺まだ仕事残ってんすけど」

「誰にでもいいから引き継げ、一分やる」

「無茶ですよお！」

何より面倒な事は頼りになる相棒バシリに任せればそれでいい。自分が動かなくてもよく、情報を渡すだけでいいというのであれば確かにいつも持ち込まれるものよりも、遥かに気が楽な案件だった。

◆ ◆ ◆

「……“楓かえで丁組”？」

「そ。私と真魚ちゃんの行った美術館で強盗してつた暴力団れんちゆうの名よ」

蓮が葉原と会った翌日に、蓮は政次郎、ユーリヤ、十三、真魚を自身のセーフハウスへ招集していた。内容は蓮達の目の前で行われた強盗事件についての報告である。

「一から説明しとくわね。先日土曜、鹿鳴町にある美術館にて強盗事件が発生。たまたま居合わせた私と真魚ちゃんがそれを目撃、連中は銃を片手にその場の客を脅迫し、パニックを起こした隙を突いて展示物を奪っていったわ。数分にも満たない間の速やかな犯行で、人的被害は幸い無し。奪われたのは一品の宝石のみよ」

人差し指を立てながら当時の状況を蓮は三人へ向けて説明する。それを聞き、ここに集められた三人は大小差はあれど、疑問を顔に浮かべていた。

「わざわざ強盗なんてリスク犯して一品だけえ？リスクの割に合わなくねーか」

「それはまた災難でしたけど……ええと」

「……それがどうした。わざわざ僕達を集めるんだ、それなりの理由が無ければ僕はすぐに帰るぞ」

ここまでの説明では、当事者である蓮や真魚はともかく、他三人が集まる理由にはならない。十三は事件のリスクターンに頭を捻り、ユーリヤは集められた理由がわからず困惑し、政次郎は肝心な点を最初に説明せずに前置きを説明された事へ苛立ちを見せていた。

そんな三人の様子を見て、蓮は人差し指を立てて自身の説明を続けた。

「ここからが本題よ。奪われた宝石は品目では“血の石”と呼ばれていた大粒のルビー。

私は見てないけど、真魚ちゃんが遠目から見た時に魔力を感じたらしいわ」

「本当ですか、真魚ちゃん」

「うん」

「リスクの大きい強盗行為をしておいて、狙った様にその宝石だけを盗んでいく。……ききな臭いと思わない?」

「まあ、やーな感じはするな」

ユーリヤは「血の石」と呼ばれた宝石について、右手を下顎につけながら心当たりを頭から探し、十三は腕を組みながら蓮の感じた違和感に対して同意する。が、政次郎は少し目を瞑った後、つまらなそうな顔で蓮に言葉を返した。

「それがどうした。確実に盗めるアンティークな宝石狙いの強盗、という線は捨てきれない。それだけなら現地の警察の管轄でしかない。その宝石に魔力があったとして、強盗がその価値を知った上で犯行に及んだという証拠はあるのか」

「どう証明しろつてのよ、そんなの」

「情報が少なすぎる。言った筈だ、それなりの理由を寄越せと」

政次郎は蓮へ冷たい目を飛ばし、情報の少なさへの不満と「その程度ならばすぐに帰る」という自身の姿勢を示した。実際、現状は美術館が強盗に襲われたというだけで、人的被害も無ければ蓮達が対処しなければならぬ怪物、魔術師などが目撃された訳でもない。

盗まれた“血の石”にしても、魔力を持つ石というのは確かに希少な物ではあるが、詳細が不明な現状では危険性があるのかどうかすらもわからない。行く末を放置すれば何が起るかわからないというのは確かに不安な点ではあるが、だからと言ってただ怪しいというだけで動ける程、政次郎の立場は軽くなかった。

蓮にしてもその事は把握している為、政次郎へ向けて二つ目の指を立てた。

「その楓丁組なんだけどもね。蜜柑さんに聞いたら、ここ最近になって急に銃器や弾薬を大量に仕入れたそうなの」

「……それが？」

「仕入先が“黒丘会”って言ったら、どう思う？」

「——本当か」

「間違いないわよ」

“黒丘会”。蓮達の関わる事件で、何度と対立してきた中国系マフィアであり、その実体は危険な邪神の招来を目的として動く邪神教団の一つの、表向きの顔である。

裏では邪神の降臨を目指して数々の人間を生贄とするべく誘拐・暴行・殺害しているが、表では麻薬や銃火器のディーラー、強盗から要人暗殺、人身売買と、極めて手広い分野で資金調達を行っている。

手広い商売内容から裏の繋がりも広く、自身達の信じる邪神以外の旧支配者を招来さ

せようとする事件にも何らかの形で関わっている事も多く、ここ唐館市に於いては常に注意を払うべき危険組織の一つとして知られている。

「楓丁組はシノギこそ少ないけど、組の規模から言えばそれほど資金に困窮してる訳じゃないわ。そんな所がただ一点の宝石を強盗し、しかも裏では黒丘会と繋がりを持っていた……これだけ揃えば、調べる価値ぐらいはあると思わないかしら、政次郎くん」
「……………成程な」

蓮から示された追加の情報を聞き、政次郎が関心を払う仕草を見せる。これまで知る中で黒丘会と繋がりを持った者や組織は、概ね邪神教団やそれに等しい要注意人物ばかりであった。

邪神教団関連の事件は概ねの場合、何かしらの被害や犠牲者がはつきりと確認されるから動く事になる。事件そのものや政次郎達の存在の隠匿を考えると、事態が不明瞭な時に動く事はリスクが大きいかからだ。

しかしこれだけの状況証拠が揃っていれば、話は別だ。政次郎としても出来うる事ながら事件が起きる前か、事態が深刻化する前に懸念材料は解消しておきたい。少し考えた後、政次郎は蓮へ言葉を返した。

「わかった、こちらからも手を貸そう。とはいえ、現状の時点では何も起こっていないのは確かだ。仮に件の宝石を取り戻した所で、いつも通りの手当は出せんぞ」

「……そればかりは仕方ないわね……まあ、背に腹は代えられないわ」

いつもの様な非常時に等しい事件では無い為に仕方ないとわかつている事とはいえ、報酬がいつもより少ないというのは少々気落ちする。だからと言つて、手を抜く訳にもいかない。間接的とはいえ黒丘会の関わる事件であり、魔術の影が見えている以上は十中八九厄介事になるだろう。

「私も着いていく事に異論はありませんが……その、政次郎さん、私の手当の方は……」

「……シスターは元は僕が雇つて手を借りている様な物だ。通常通り出そう」

「蓮さん、私もお手伝いします。どこであれど、邪神の影があるならば見過ごせません」

「……そう」

ユーリヤが申し訳無さそうに政次郎へ自身の手当の有無について聞き出し、問題ない事を確認すると一転して凛々しい顔で蓮へ同行の意図を告げる。金銭的問題で変わり身の早い人間というのは傍から見るとこう映るのかと、少々蓮は複雑な気持ちになった。

「俺も当然付き合うぜ。家で転がつてるよりはドンパチャつてる方が面白えしな」

「おじさんつて顔の通り過激だよね」

「顔は余計だ」

続いて十三も首を左右に曲げ、右拳を左掌に押し付けて音を鳴らしながら蓮に協力す

る旨を伝えてくる。十三は普段こそ温厚な人柄だが、仕事の際は相当に好戦的であり、危険な現場へ自ら望んで飛び込む節がある。

蓮としてはほぼ出費も無く戦い慣れている十三の手が借りられるのは大変有り難いのだが、常に二つ返事で仕事に参加する十三を見るとユーリヤとは別の理由で複雑だ。蓮にとつて一番引つかかるのは報酬はいらなとか、今の蓮にとつては天地がひっくり返つても言えない事を平然と話す所なのだが。

「あ、蓮ちゃん私も参加でよろしく」

「すっごいノリが軽い」

「まあ行かない理由も無いし、一人残されるのもなんだし」

真魚も「じゃあ私も」という調子で蓮達に付いてくる事を決めた。真魚にしても十三と似たような立場ではあるが、彼女の場合はこういった事件に関わる時の自分の扱いはとにかく軽い。行かない理由が無いから危険な仕事に付いてくる、というのもどうにも危うい。

とはいえ優れた魔術師であり、遠目とはいえ実際に盗まれた宝石を目撃した真魚が同行する事は素直に有り難い。出来る事なら全力で挑みたい蓮に協力を拒む理由も無く、結局はいつも通りの五人で今回の事件に当たる事になった。

「……それで野曾木、具体的にこれからどうする気だ。宝石を取り戻すと言っても、そい

つらの居場所はわかつているのか」

「その辺は問題ないわ。現地の警察の調査状況をこつちに流してもらったから、そこから逆算して調査外の場所にある隠れやすい場所の候補は絞り込み済みよ」

「蓮さんのコネの広さってたまに怖いですよね」

「ただ悪名が広まつてるだけだ」

「どつくわよ政次郎くん」

政次郎へ突っ込みを入れながらも、蓮が隣の市の地図を取り出す。地図には赤いペンでいくつか赤い丸がつけられており、それぞれの右上に第一候補、第二候補と注釈がつけられている。

地図には四つの丸がつけられているが、その内蓮は第一候補と注釈された地点を指差した。

「一番怪しい場所はここ。人気の無い離れた場所だし、古い道ながら道路もちやんと通ってる。仮に警察が来ても抜ける道は多い。候補こそ四つ挙げてあるけど、私は十中八九ここに隠れてると思ってるわ」

「ふむ」

「問題は時間よ。あんまりのんびりと構えてたり警察がここまで捜査の手を伸ばせば別の場所へ移るかもしれない。一刻も早く動く必要があるわ」

「同じ場所に留まり続けるといいうのも、考え辛いですからね……」

「ただ、事件から間も無い今なら警察の各地の検問と捜査が活発で、あちらもそうは動けない。こちらが確保しに動くなら、この今しか無いわ。だから」

一 拍置いて、蓮は地図へ置いた指を振り上げ、第一候補と書かれた地点を指先で強く叩いて音を出して。

「——今日夜に、ここを強襲するわ」

蓮は不敵な顔で、四人へ笑いかけた。

5. 睡蓮は連なり

「……あそこか」

蓮から説明を受けた後、準備を早々に済ませて蓮達は車を使い、その日の内に高速道路を通って鹿鳴町内の楓丁組の隠れ場所と思わしき場所の近くまで辿り着いていた。

既に時刻は深夜を回り、蓮達が今いる場所の周辺は人里から遠く離れているせい、疎らに並ぶ街灯以外の光は見えず、それ以外には明かりを灯さずにいる建物がただ佇むだけで、暗闇の中に影をぼつりぼつりと落とすだけとなっている。

ただ、政次郎が見据える先の建物は窓が不自然に全て閉じられ、目を凝らせばその閉じられた端々からは僅かに灯りが漏れていた。周辺の建物を見ても、中が一切伺えないようにされている建物は他に無い。

「車はここまでだな、あんま寄せてもバレちゃう。……で、どうする？」

十三が車を止め、ヘッドライトを落とす。運転席にいる十三は振り返り、全員の顔を見てこれからの行動を確認する。

「……メンバーを選抜する。見たところ建物は小さく、閉所戦が予想される。基本方針として可能な限りは戦闘を避け、やむを得ない場合のみ交戦する。隠密行動ならば、人

数を絞った方が良いだろう」

助手席に居る政次郎は振り返る事無く、淡々と自身の意見を述べていく。実際、蓮達から見ても隠れ場所の建物はビルの様に大きくなく、五人で並んで進軍するのに十分な空間があるとは考えにくい。

さらに言えば今回の目的は強奪された宝石の奪還であり、いつもの様に建物内に存在する敵性を全て排除する必要は無い。相手としても警察に追われる身である為、襲撃が察知されれば逃走される可能性が高い。その為、なるべく侵入を察知されない様に人数を絞る必要がある。

「とはいえ、こちらでも元々少人数ではある。一人二人ほど建物の外に控えておけばそれでいいだろう。まずは真魚だな」

「わーい立ってるだけの簡単なお仕事だー」

「……控えの意味は理解してるだろうな」

「ん、外へ逃げるヤクザがいたら背中からばっさばっさとカイシヤクすればいいんだよね」

「……………まあそれでいい」

こういつた作戦を考えるにあたり、真っ先に外されるのは真魚だ。真魚の取り扱う魔術は良くも悪くも殺傷力が高く、派手な物音を伴う物が多い。また、相手を考えると本

格的に交戦する際には銃撃戦が予想されるが、その練度もはつきり言って経験不足であり、隠密行動に長ける訳でもない。

真魚本人もそれを自覚してのことか、異論の声は上げずにむしろ諸手を上げて喜んでいた。真魚の起動から発動までにワンアクションかかる魔術の特性から言って、銃は天敵中の天敵だ。そういう相手が予見される状況で一線から外れてもいいのは気が楽だった。

「シスターも建物の外で待機してくれ。建物内では長物はデッドウェイトにしかならないし、治癒が必要な状況には持ち込ませたくない。真魚の護衛も頼みたい」

「わかりました、お引き受けします」

「トランクにM4ライフルが入っている、戦闘の際はそちらを使ってくれ」

同様に真魚ほどではないが、銃撃戦が不得手なユーリヤも控えに回る。ユーリヤの回復の魔術は戦闘の際には頼れるものだが、そもそも戦闘を回避する事を第一に考える今回においては出番は少ない。また、単体での自衛能力に欠ける真魚の護衛も必要だった。

「つてことは、突入は私・政次郎くん・十三さんでやるのね」

「ああ、能力的にも適正的にも妥当だろう。お前の能力は暗殺と潜入には使いやすいからな、そこだけは羨ましい」

「お望みなら最初は政次郎くんを無力化させるわよ」

右手を上げて掌に昏睡毒を生成しながら蓮は怒気を政次郎へと向けるが、当の本人は助手席で前を向いて暗闇の先を見続けるばかりでまるで気にする素振りを見せない。

蓮の能力は抵抗する手段を持たない一般人相手であれば、格闘術による制圧よりも音を出さず、かつ確実に無力化出来る。昏睡毒を少々空気に混ぜて飛ばしてやるだけで、近付くまでもなくその空間にいる全ての人間を一度に気絶させられるのは蓮以外には出来ない事だ。

蓮としては“暗殺に向いている”というのは、なんだかイメージが凄く悪いので不服極まりないのだが、実際にこういう事態に向いていること自体は自覚しているので、活かせる場面では存分に能力は活用していく。

「つていうか、蓮ちゃんを建物に放り込んで毒ガスもくもくして全部屋に行き渡して、中の連中全部^{こころ}燻し終わった後にゆっくり探索すればいいんじゃない？名付けて“全ヤクザバルサン計画”」

「うわあ」

「何この子こわい」

「ナチュラルに殺虫剤扱いするのやめてくれないかしら!?!」

突入前の打ち合わせが概ねまとまろうとしている所で、真魚が小さく手を上げて真顔

でとんでもない作戦を立案してきた。敵味方の両方に全く容赦の無い真魚の立案に、政次郎以外の三人はさすがに引いた。

「……悪くないな。出来ないのか、野曾木」

「真剣に検討しないでよ……見えてない場所まで毒を行き渡らせるのは時間かかるし、どうしても距離と遮蔽物で濃度の差が出るからあんまりオススメ出来ないわよ、行き渡る前に二階から逃げられたらそれまでだし」

「便利なんだかそうじゃないんだかわからん力だ」

「言つとくけど結構操とりあつかい作難しいんだからねコレ」

実際問題、建物一つを毒ガスで満たすというのは相当な手間を要する。視界内であったり、蓮から近い周辺の空間であれば即座に任意の濃度の毒で満たす事は出来るが、離れた見えない所や壁で遮られた向こうにまで毒を及ぼす事は難しい。

基本的には目に見える場所までしか能力の操作は及ばない為、見えない場所まで毒を満たすには毒の比重を軽くした上で、あえて動きの制御を外し空気の流れに乗せてやり、自然に空気中に行き渡るのを待つしか無い。

能力による制御を外せば場所の違いによるムラが出る事は免れない。そのような不確実な手段に頼るよりは、直接乗り込んで目の見える場所へ毒を放つ方が余程手っ取り早く、自らの目で効果を確認できる分不安も無い。

「仕方無い、予定通り僕達三人で乗り込むぞ。無力化は主に伊達が拘束し、野曾木に処理おしつけさせる体でやる。後方のカバーはこちらがする、しくじって妙な物音を出すなよ」

「承知」

「政次郎くんは私をなんだと思ってるのかしら」

「使いやすい毒物だ」

「よーしこの仕事終わったら政次郎くんだけ地下駐車場ね」

いつもの軽口を叩き合いながらも、蓮達は所持する拳銃やサブマシンガンの最終チェックを行う。銃に頼るのは最後の手段とはいえ、対人戦においてはこれより頼りになる武器は無い。

建物内での取り回しを考え、いつも使っているアサルトライフルや蓮のダゴン殺しはトランクの底に転がっている。蓮個人としては制圧力に優れるダゴン殺しは持ち込みたかったが、政次郎から「そんな花火をどこで使う気だ」と制されて渋々トランク内の留守番を任せる事となった。

「……各員、準備は良いな。状況を開始する」

全員が所持する銃器のチェックを終えたのを確認し、政次郎が号令をかける。それを合図に、蓮達は車のドアを開き、一斉に建物へ向かい駆け出した。



「——くあ、ねっみいなあオイ」

「言うなつて、あと十分もすりや交代だ、俺だつて眠いんだから耐えろや」

周辺を僅かに点在するのみの街灯が照らす暗闇の中、建物の前にはスーツ姿の大柄の男が二人、欠伸を噛み殺しながら立っている。

組の中でも新参にあたる二人は、ここ数日は理由も知らされずにこの建物の前での見張りを命じられており、何も変わらない夜の景色を眺めるのもいい加減に飽きが来ている所だった。

「しっかし、カチコミとか面倒な事しなくてもいいつてのは気が楽だけだよ……なんで何日もこんな所に籠ってんだろうな、うちの組」

「さあなあ……俺もアニキに理由聞こうとは思ってたんだけど、俺も知らされてない”つてさ。んなアホな、と思つたけど……あの顔見るとなんも言えなかつたわ」

「顔？」

「頬の辺りに思いつきり青痣ついてんのよ、一昨日まで無かつたヤツ」

「……アニキがぶん殴られたのか？誰に？」

「アニキを殴れるのなんて、若頭カシラか組長ぐらいだろ……」

意識すればするほど湧き出てくる眠気を誤魔化す為に二人は最近の組についての雑談を交わす。新参とはいえ、最近の組の様子は明らかに妙で、話の種とするには申し分

無かった。

「……若頭だろうなあ。最近、なんか荒っぽいしよ」

「だよなあ。前一緒に取り立ておいこみした時なんかよ、金は出せねえって土下座したヤツをサツカーボール蹴り飛ばすみたいに何度も蹴り飛ばして半殺し——ってか、マジで死ぬ一歩手前までやつちまってよ。完全にキレてたから、慌てて俺が止めたんだよ。……俺もぶん殴られたけど」

「なんだそりゃ、初耳だぞ」

「……やべ、口止めされてんだった。若頭には内緒で頼む」

最近の組の中で何が一番おかしいかと考えた時、二人が真つ先に頭に思い浮かべるのは組の二番手である若頭だった。最近になって振る舞いは以前よりも粗野かつ暴力的になり、急に楓丁組の武装化を推進し始めた。

前者に関しては機嫌が悪くなる事でもあったのだろうと考えているが、後者に関しては目立つ対立勢力もない現状において、拳銃どころか短機関銃・突撃銃まで何故仕入れようとするのか、誰にも理解出来なかった。

「最近の若頭と、組の武装化と、今回の籠城……関係、あんだらうなあ……やーな感じしかしねえ……」

「怪しいヤツ見かけたらブツ放せ」って拳銃渡されたけど……おつかなくて握るのも

こえーよ……」

「……正直同感だわ」

おっかなびつくりと言った手つきで、見張りにつく前に渡された名前も知らない拳銃の硬さをポケットの上から確かめる。二人はモデルガンですら持ったことも無く、撃ち方を一度教えてもらっただけで実際に何かを銃で撃つたことも無い素人だった。

その為、銃を持って誰かを撃つというイメージよりも、銃そのものが持つ「人を殺す道具」というイメージを根強く意識し、実際に何も無い所へ数秒構えるだけでも握る手が震える有様だった。

そもそも若頭から命じられた「怪しいヤツ」という想定が曖昧であり、どのように怪しいか・どういう人物かと質問しても、「怪しいと思ったヤツ全部だ」と、ほぼ反芻するだけの言葉が返ってきただけで、その場で聞いていた誰もが内心では納得していなかった。

「……はあ、誰も来なきやいいよなあ、来たらどうするか考えなきやならねえしよ——
くあ、あ」

「ふああ——おい、こつちにまで眠いのが伝染るだろ、もうちよい辛抱しろ」

「んな事言うなって、眠いもんは眠い……っつーか……やべ、限界か、も……」

「……ね、ねみ、い……なんだ、この……匂い……?」

話を続ける二人は殆ど同時に、急激な眠気が湧いてくるのを感じて建物の壁に手をつく。抗おうと考えた先から加速度的に瞼は重くなり続け、手足から力が抜けていく。段々と鈍くなる頭の端では明らかに異常とも思ったが、立つ事もままならなくなった二人はそのまま地面へ倒れ込んだ。

異常を伝える為に声だけでも上げようとしたが、意識が遠くなるに連れて口を動かす事も難しくなり、言葉にもならない呻き声だけが漏れる。すぐにそれすらも出来なくなつて、二人の目は完全に閉じた。

「——もう考えなくていいわよ」

思考が暗闇に沈み切る前に、凜とした女の声が聞こえた気がした。



見張りを眠らせた蓮達はなるべく足音を消しながら、足早に通路内を進んでいく。常に通路の先や部屋へ耳を立て、少しでも物音や話し声音が聞こえれば足を止めて気配を確認していく。

目的は宝石の奪還のみとはいええ、在処のわからない代物を探した上にこの場から離れて車まで戻る事を考えると、建物内を隅々まで探索した上でなるべく障害となり得る不安要素は事前に取り除くのが望ましい。

その為、蓮達がすべきことは——

「……曲がった先、五・六メートルに三人だ。いけるか」

「俺だけじゃキツイ。蓮、この距離からなんとか出来るか」

「五秒だけあっち側の動きを鈍らせるわ。その間に息止めて捕まえて」

「わかった、政次郎も手え貸せ」

「了解した、やれ野曾木」

蓮達から見て通路を曲がった先の三つの気配を政次郎が察知し、即座に三人は小声で思考を共有する。十三が静かに深呼吸をするのを確認すると、蓮が能力を使つて通路の先の空気へ麻痺毒を流し始める。

それから一秒置いて、十三が足音は最小限に曲がった先へ駆け出し、姿勢が硬直した三人の男達を確認する。男達が毒に気を取られてこちらに気付かない僅かな間に、十三は距離を詰めて最も近い男の腕と胴を引っ掴み、そのまま政次郎達のいる通路の方へ力任せに遠心力へ乗せて放った。

毒によつて体が動かない男は突然の襲撃に反応する事も出来ず、ただ勢いに負けて倒れないように反射的に足を動かし、曲がり角の先にいる政次郎まで横走りをする様子が流されていく。

「ッ!？」

「だ、誰——」

投げ飛ばされた男を政次郎が受け止め、即座に口を塞いで小刀を顔の前に翳して動きを止める。ここに来てようやく反応した通路の先の男の内の一人へ、十三は素早く喉の頸動脈へ向けて手刀を打ち込んだ。

一瞬間への血の流れを止められた男の動きは反応する途中で止まり、その隙に通路から出た蓮がその男へ向けて昏睡毒を集中して打ち込むと、そのまま男は意識を失った。

「テメツ——」

手が届く程まで接近してきた十三へ向けて、残った男が拳を振り上げる。十三は振り上げた腕の肘を左手で取り、手首へ添えた右手で振り下ろされようとする拳を切り落とすように勢いを流す。

勢いを完全に流された男の体が右へ沈み、十三はそのまま腕を捕まえて踏み込み、関節の逆を取りつつ腰を落として相手を地に伏せさせた。男が体勢を立て直す前に十三は素早く相手の背中へ移り、体を押さえ込みながら男の首を締めた。

「ぐ、が、アツ」

首が折れるかと錯覚する程の剛力で締められた男は、声すらも出せないまま意識が遠のいていく。男は苦し紛れに、事前に渡された拳銃を腰から取り出そうと腕を動かそうとするが、自身に覆い被さる巨躯の圧力によってそれもままならない。

そうして男は押さえ込まれたまま何も出来ずに、体の自由を手放した。

「落ちたな。蓮、そっちのヤツ頼む」

「手間が省けて助かるわ」

十三が拘束した男が完全に意識がなくなるのを確認した蓮は、わけもわからぬまま唐突に政次郎に命を握られ、震える事しか出来ないでいる男へ手を向け毒を放つ。男の体が一瞬小さく跳ねた後、すぐに男は意識を絶った。

「……音は響いていないな。問題無いだろう」

「ま、抑えんの一人に集中していいってんならそりやしくじらねーよ。三人いっぺんにやるんだったら加減出来んが」

「なんか十三さんが別人みたいに頼もしいわ」

「ひどい」

周囲の気配へ気を配り直し、気付かれた素振りが無いことを確認する。

建物内にいる他の組員に気付かれる事なく、確認出来た全ての人間の意識だけを確実にかつ素早く奪っていく。建物内の隅々まで調べるにあたり、ただ排除するよりも難しい事を蓮達は次から次へとこなしていた。

蓮の能力によって確実に意識を奪う事と、対人戦に極めて手慣れた十三が相手を拘束する事を合わせ、突入から三度の交戦を経ても蓮達はまだその存在を気付かれずにいた。

「しっかし、アレだな。楽なのはいいんだが」

「ん、どうしたの十三さん」

「いや、蓮が手を翳しただけで相手が一瞬で寝るのがアレだ、薬含んだハンカチで意識落とすアレにしか見えねえ」

「確かに」

「これ終わったらそのシーンを二人に体験させてあげるわよ」

真魚の殺虫剤に続き、蓮へ不意極まりないイメー^たジ^とを持ってくる二人へ対して、蓮は強烈な刺激毒で同じ目に合わせてやる事を心に決めた。

6. 窮させば逸す

「部屋内に……五人以上、か。少しばかり厄介だな」

「さつきと同じ手は使えねーな。どうすんだ蓮」

建物内にいる組員を無力化しつつ、部屋を総当りに探索していく蓮達だったが、あの部屋で同様にこなそうと立ち止まり、政次郎が耳を添えて中にいる人間の数を気配や話し声から推測する。

気配が多く壁越しの為にはつきりと判別こそ出来なかったが、中にいる人間の数は最低でも五人。通路で無力化した三人組の様に、毒で動きを止めた隙に十三が制するやり方は使えそうにない人数だった。

物音を抑えた対処法が頭に浮かばなかった政次郎と十三は蓮へ顔を向け、提案を待った。

「……部屋の大きさは……よし、いけるわね。声を出させない為にもちよつと手荒になるけど」

「どうする気だ」

「一瞬で無力化出来ないなら、時間をかければいいのよ」

通路の形や扉の位置と大きさから部屋の大きさに当たりをつけ、蓮は微笑みながら二人へ可能と示した。

蓮は右手を握り締めて、目を閉じて掌の内に能力を集中する。精製した毒の濃度を上げて一点へと凝縮させて、はつきりとした形を持った固体として生み出す。

蓮が手を開くと、掌の上には白い粉が小さく山となつて積もり上がっていた。

「それはなんだ、野曾木」

「ドクウツギの毒をベースにした特製の粉末よ。吸い込んだら痙攣と呼吸麻痺を起こすわ」

「ヒエツ」

「情けない声上げないでよ十三さん。今は能力で制御してるから飛散する事は無いわ」

蓮の作り出した毒の粉を覗き込んでいた十三が、効能を説明された途端に一瞬で蓮から一歩距離を取った。小声で悲鳴を上げながら足音も立てずに後ろに下がるといふ、凄いのか情けないのかわからない十三の芸当を見て、蓮は苦笑いする。

政次郎は一切微動だにせず、蓮の生み出した毒の粉を見続けている。こちらは対照的に肝が座つているといふにも程があつた。蓮の能力に対する信用なのか、単に恐れる程の物でもないと考えているのかはその仏頂面からは伺えない。

「それを部屋の中へ入れるのか」

「そ。扉の下から流し込んで、部屋内の空気中に散らして全員に行き渡らせるわ。すぐ隣程度の距離なら見なくても均等に散らすぐらいは出来るし、時間かけて吸い込ませるなら気付かせない位には細かく作つてあるわ。きつちり無味無臭よ」

「蓮の存在つて犯罪的つっ—か犯罪そのものだよな」

「何を今更」

「うっかりピンポイントで二人の顔付近まで巻き上げてあげましょうか」

二人の小言をしつかり記憶に保存しつつ、蓮は掌の粉を操り、少しずつ扉の隙間から室内へと流していく。ある程度室内の地面を進んだ所で、放射線状に粉を舞い上げて空気に混ぜていく。

見えないから少々不安ではあるが、慎重に部屋の中の空気へ粉を乗せるようスプリングクラーの如く縦横無尽に舞い上げていく。あまり露骨に動かせば不自然な風の流れとして察知されかねないので、蓮は慎重に操作に集中した。

蓮が毒を流し始めてからおよそ二分程が経ち、部屋の中から俄にわかに物音が上がる。壁に何かが当たる音、床に重い物を落ちた音や振動、声にならない呻き声が混ざり、静かな異常音が部屋の外まで聞こえてくる。

「……そろそろいいだろう。やりすぎれば危険だぞ」

「そうね、殺す気までは無いし。毒を消すから、合図したら突入で」

部屋内の物音は少しずつ増え、政次郎は聞き耳を立てる限りは正常に動いている人間はいないと判断した。

蓮が室内の毒を消し、ハンドサインを出した後に十三は拳銃を片手に部屋の扉を開き、即座に壁際へと動きながら正面へ銃を構える。十三が室内を見やれば、部屋の中の男達は皆椅子から転げ落ちていたり、床に倒れ伏していたり、膝をついてくず折れたといったような体勢で、喉や頬に爪を立てて声も出せないままもがいていた。

「うっわ、マジでキツそう。ほとんど白目向いてて窒息一步手前って感じじゃねえか、エッグ」

「やっぱ見えないトコだと吸わせる量の調整が難しいわね。とはいえ、加減して倒れる前に何かされても困るし、仕方ないわ」

「……ふん、ここはただの溜まり場か。遊具ばかりとは、かけた時間の割に合わん」

部屋内の惨状を見て十三は一方的に窒息させられた男達へ同情の目を向け、蓮は苦しんでいる男達へ謝罪代わりに睡眠薬と同じ成分を持つ毒の気体を床に眠る男達へ散布してやり、苦しみから解放してやる。

一応のアフターケアとして蓮が呼吸不全を起こした毒の解毒もしていく間、政次郎は手早く部屋内にある物全てを捜索していく。部屋にあるものの殆どは暇を潰す為の遊具や銃器の弾薬程度で、探している宝石は見つからなかった。

「次へ急ぐぞ。時間をかけ過ぎている、そろそろ入口の見張りが言っていた交代時間を回る頃合いだ。いずれ気付かれる」

「むしろこんだけ暴れ回つてよく気付かれてねーってレベルだわな。全部で何人いるんだか知らんけど、多分もう半壊ぐらいしてんだろこれ」

「気付かれない内に済ませれば最上だったけど……ま、そうなった時は正面切つてやり合うだけね。とはいえ後ろの心配が無ければ、私達が負ける道理は無いでしょ」

「可能な限り面倒は避けるべきだと言っている。使う消耗品は野曾木だけで済ませたいからな」

「政次郎君への遺恨カウンターが今回だけでいくつ乗つたか覚え切れないわ」

探索を終えた政次郎が軽口を言いながらも扉に耳を当て、部屋の外の気配が無い事を確認する。政次郎が部屋から出て、蓮と十三もそれに続き部屋を後にする。

突入からここまで対処した人数を考えればさしたる時間とは言えないが、それでも着実に時間は経過し続けている。入口で聞いた見張りの話を考えれば、そろそろ時間的な余裕は無くなってくる頃合いだった。

「残る部屋もそうは多くない筈だ。気付かれる前に——」

その瞬間に蓮達の後方、入口の方向より発砲音が響いて来る。唐突な銃声に反応して体が振り向いた直後、再び複数の異なる銃声が散発的に聞こえてきた。

入口の近くで行われているであろう明らかな銃撃戦の音に紛れ、人の声が聞こえてくる。

「——襲ッ！敵襲——全員、構え……がッ!!」

拳銃の連射音に差し込まれる形で男の叫び声が聞こえ、それが別の銃声が鳴ると同時に共に遮られる。しかし敵を知らせるその声は蓮達の場所まで聞こえて余る程の音量で建物内へと届いた。

声からすぐに蓮達の進行方向から焦り動き回る物音や足音が聞こえ、瞬きする程の間で状況は反転し、それまで蓮達が保持してきた静寂は完全に破られていた。

「オイ政次郎、周辺は見張り二人だけだったんじゃねえのかよー」

「間違いは無い。大方、何らかの理由で一時的に離れていた組員がこちらへ戻ったのだろう。大方、周辺の警察の動きを把握する為に哨戒を数人出していた、といった所か」
「……冷静に分析してる場合じゃないでしょ!」

銃の安全装置を外しながら、十三と政次郎が前方を、蓮が後方を警戒して壁際へと寄る。前方は入口から聞こえる銃撃音と入口の敵——張り込んでいるユーリヤと真魚——を確かめるべく、多くの人間がこちらへと駆け寄る音が聞こえてくる。

蓮は先程の大声を上げた男や、同様に外にいるかも知れない組員が入口にいるユーリヤ達を抑えて蓮達の後ろから迫って来ることが無いか、騒ぎ立つ建物内の音に構わずに

耳を澄ませてどうにか聞き取ろうとする。

さすがに政次郎の様に気配や物音から断言する事は出来ないが、ユーリヤが撃っているであろうアサルトライフルの銃声が重なり響き続けられている事から、恐らくは入口は突破されていないと推測した。

「後ろは大丈夫そうよ！こうなったらさつき言った通り——」

「腹括って正面突破、だろ！ったく、嵩張るからってアサルトライフル預けたのはまづかったか！」

「割り切れ。それに音を気にしなくていいのなら、むしろ動きやすい」

政次郎が腕を上げて自身の外套を広げ、体に巻き付けたベルトに取り付けてある物を一つ乱暴に引っぺがす。

それから目を閉じて何かを待つように手にそれを持ったままの体勢で留まったかと思えば、ピンを引き抜いて速やかに通路の先へと放り投げた。

「伊達、目を瞑ったまま相手を無力化出来るか」

「はあ？何言ってるんだお前。出来るワケねーじゃんそんな漫画みてーなの」

「わかった、いつでもカバー出来るようにそこで構えている」

「デメエー！どこの回し——」

政次郎と十三が二言三言交わした直後に、拳銃やサブマシンガンで武装した男の一群

が通路の先から現れる。それと同時に、政次郎が先程投げた缶からは白煙が急激に吹き出し始め、男達の周囲を覆い始めた。

「がっ、ぺっ！んだ、これ……！」

「煙ッ……発煙手榴弾か!? ツゲホ！」

男達が文字通り煙に巻かれ咳き込んでいる所へ、政次郎が駆け出す。煙の上がる場所の直前までその向こうの人影を注視してその数と位置関係を把握し、そのまま目を口を閉じて煙の中へと突入した。

目を瞑ったそのままの状態で政次郎は自身と最も近い男へと目掛け、抜刀した勢いで逆袈裟へ振り抜き、続けて振り抜いた刀を持ち上げ反転させ、その右横にいる男へと袈裟懸けに斬りつける。

斬った相手が痛みに仰け反るのとほぼ同時に、刀を振り抜いた勢いのまま肩をぶつけて相手の体勢を崩してやり、空いたスペースをすり抜けて政次郎は奥にいる男達へと真つ直ぐに向かう。

顔を煙から背けながら抜け出ようと動きを見せる男達へ対し、その前に両足を横薙ぎに斬りつけ、そのまま刃を脇構えから翻して別の男の右肩口まで切り上げ、さらに右後ろにいる男へ斜めに胴打ちを放つ。

そうして政次郎は目を瞑ったまま作業的にそこにいる男達全ての間を流れる様に駆

けながら一閃し続け、煙が出て十秒も経たない内にその場に訪れた男達は全員その場に沈んだ。

「片付いた、突っ切って来い」

「……マジかい」

「……政次郎君も大概トンデモよね」

その場の煙が立ち籠めたまま、その向こう側から政次郎が二人へと声を飛ばし、それに応えて蓮と十三も口を覆って前へと駆け出し、その場に呻きながら転がる男達を避けながら煙の中を抜ける。

抜けた先では時間が余ったとしても言わんばかりに曲がり角の壁へ背を預けつつ、何食わぬ顔で政次郎が拭紙で刀に付着した血液を拭き取り終えて、鞘へと刀身を収めた。

「殺ったのか?」

「そんな手間のかかる事はしない。腕・脚・近い場所へ適当に打ち込んで、痛みと出血で起き上がる気が起きない程度の傷で済ませてやった」

「ひどいわね政次郎君」

「毒おまえ使えいと言われる筋合いは無い」

合流した三人は建物内の騒然たる様子を耳にしながら、より物音が多く大きく聞こえる方向へと駆け出す。こうなれば探索よりも先にこの建物の中の敵対勢力を全て排除

する必要がある。

それにはまず、最も厄介な数の暴力——武装した主力集団を無力化するか、頭を抑えるのが最優先だ。一人二人が駆けつけた所で、遭遇戦では蓮・政次郎・十三相手には秒すら持たない以上、考えられうる最も手間な状況は、一箇所へと集中された戦力による籠城である。

敵襲にざわめき立って建物内で混乱が起きている内に、主力を直接的であれ間接的であれ抑え込む必要がある。そう考えて奥へと走る内に数人の男が部屋から出て蓮達を見つけるが、銃を構えるよりも速く十三の拳、政次郎の小太刀、蓮の毒が叩き込まれて一瞬でその場に沈んだ。

「右奥方向、相当数いるな。ここまでの素人とは違いよく訓練されている、駆け付けようという気配がしない」

「走りながら政次郎君はなんでそんな細かく相手の気配とかわかるの」

「訓練すれば誰にでも出来る」

「出来ねーよ知らねーよ、んなスキル」

政次郎からの通告を受けて、銃をいつでも撃てるように心構えを済ませておきながらその気配のするらしい方向へと急ぐ。二つ程通路の角を曲がった先で一度立ち止まり、先を覗き込もうと片目だけを出すと、即座に通路の奥からは銃の雨が通路の空気を切り

裂いて飛びかかってくる。

「何者だなにもんテメエら！ サツじやねえのか！」

「近寄らせんな時間稼げ！ 当たんなくてもいい、とにかく弾ア途切れさせんじやねえぞ
！」

「……対応が早いな。面倒な」

毒づきながら政次郎がその場にしゃがみ込み、サブマシンガンを片手に最小限だけ通路から銃身と顔を乗り出し、牽制程度に狙いも定めず撃ち込む。不安定な姿勢で撃たれ暴れる銃身が手から離れないよう、数発撃った直後に体を引つ込めた。

当然すっかりと見ずに撃った弾が当たることもなく、一瞬はこちらの射撃で途切れた奥からの制圧射撃も、すぐに先程同様の勢いで目の前で再現される。

「人数差は歴然だ、撃ち合っても弾の無駄だな」

「どうするのよ」

「こうするだけだ、耳を塞げ」

再び政次郎が懐から何かを取り出し、先程とは大きさの違うそれに取り付けられたピンを口で抜き、三秒待つてからそれを通路の奥へ横手で低く投げ込んだ。

投げ込む瞬間に見えたその丸いシルエットから何を投げ込んだのか理解した蓮と十三が急いで耳を両手で塞いだ直後、投げ込んだ先から強烈な爆発音が鳴り響き、大量の

破片が飛散して蓮達の前にある床や壁へと高速で突き刺さった。

手榴弾の爆発の反響が終わる頃には、通路の奥からは銃声一つ聞こえて来なくなつた。

「……死んだんじゃない？」

「視認した扉までの位置を考えて投げ込んだ。あの距離ならば致死性の直撃は免れている筈だ。これだけこちらが譲歩して死ぬならあちらの自己責任だな」

「こいつホントヒデー」

“死んだら相手が悪い”としゃれつと言い放ちながら、政次郎は警戒しながら通路の奥の気配を探る。問題無いとハンドサインを二人で送り、蓮達は隊列を組み直しながら通路の奥にある部屋へと進んだ。

至近距離での手榴弾により扉が無惨に破壊されてしまった部屋へ踏み込むと同時に左右を見やれば、中には殆どが腕や片側の胴から血を出して蹲る男達しかいなかったが、一人だけ比較的軽症だったのか血を流し地に伏しながらもこちらに銃を向けてくる男がいた。

「させつかー！」

傷を負い苦悶して動きが遅くなっている男へ十三が素早く近付き、こちらへ銃を向ける手へローキックを放つ。引き金を引く時間すら許されずに銃は蹴り飛ばされ、回転し

ながら地面を滑っていった。

十三は銃を蹴り飛ばした勢いのまま足を上へ回し、銃を向けてきた男の側頭部へ向けて踵を落とす。手加減して足を振り抜かず、側頭部に当たった所で止めたが、その衝撃で男は地面に逆側のこめかみを打ち付け、意識を手放した。

「ヤベツ、焦ってつい殺るトコだった」

「死体を出せば後処理を手伝わせるつもりだったんだがな」

抵抗の気を見せる者がその場からいなくなり、まだ意識のある者は念の為に蓮が毒を床へ薄く散布して眠らせた。

制圧を済ませると三人は部屋内を見回して確かめる。奥に続く扉がある事や、銃器の予備がいくらか転がっていたり、やけに部屋内が散らかっている程度の事しか確認出来ず、探している宝石や特に気にかかるほどの物は無い。

それを見た政次郎が傍から見てもわかる程に眉間に皺を寄せて、その表情を珍しく歪めた。

「チツ、思った以上にいい判断をする。やられたな」

「ん、どうしたの政次郎くん。別にもう派手な物音はしないみたいだけど」

「……あー！そういう事かよクソ！ヤクザのくせに判断はえーな！」

蓮が不思議そうに政次郎の様子を見て、それに続いて十三が何か思い当たって片手で

頭を掻く。何か気付いたらしい二人を見てもどういふ事かわからない蓮が妙に思っている、外からは高い音が短く刻むように鳴り響き、直後に機械の低い駆動音が空気を震わせてこちらまで届く。

日常的にも馴染み深いこれら一連の音を聞いて、蓮はようやく二人が気付いた事を遅れて理解した。

「……車ッ！もう逃げる気なの!？」

「最初の偵察では確認出来なかったが……どこかに隠してあつたか。迂闊だ」

「言ってる場合じゃねえぞ、急げ!」

蓮達が部屋の内にある扉を開け、車のエンジン音をコンパス代わりにして裏口へ続く扉を見つける。扉を開く直前に甲高いスキル音が聞こえ、開いた時には蓮達の目の先の所から黒い車が走ってその場を後にしようとしていた。

咄嗟に三人は銃を構えて発砲するが、道路に飛び出した車が急速に向きを変えた為はその弾丸は車体に掠めた程度の傷しか残さず、その場から逃げる車の動きを止めることは叶わなかった。

「くっ！これじゃ、美術館あのとぎの焼き増しじゃないの!」

「……いや、どうやら焦るあまりあつちはミスを犯したな」

「え?」

道路を駆け抜けてこの場から離れる車の音を聞き、車が去っていく方を見て蓮は毒づいた。が、政次郎は車が逃げた方角とは全く別の場所、先程まで車があつただろうガレージの中を見ていた。

政次郎の声を聞いて蓮がその視線の先を見れば、大型のバイクが一つ壁に添えられる様に立っていた。

7. 風を突き抜けて

「目立つ外傷は無いな。これならばすぐに使える」

「使える、つて……キーが刺さつてる訳でも無いでしょ」

政次郎がガレージ内に放置されていた流線型のカウルを備えた大型バイクへ近付いて、全体を一瞥する。タイヤやエンジンに傷が入っていないそれは、エンジンさえかればそのまま足として使える状態だった。

ただ、バイクとその周囲を蓮が見る限りは肝心のエンジンを動かす為のキーが見当たらない。エンジンに挿しっぱなしという杜撰ずさんな事も、バイク近くの地面に落ちているという幸運な事も無かった。これでは動かすことは出来ない。

そう蓮が思っていると、政次郎は自らの外套の内側をこそごとと手探り、外へ出された手の指先には二つの細い物が握られていた。

「……ボールペン、と針金？」

何故ボールペンを、と蓮が思う間に政次郎がボールペンの先のパーツを取り外し外側をひねると、先端からペン先ではなく金属製の細長い芯がすつと伸びた。その金属芯は目を引くことに、先まで平べったく潰されていた。

政次郎はボールペンを逆に捻り、金属芯を伸びたままに固定する。次に、取り出した針金を垂直に曲げて、取り出した二つをバイクのエンジンにある鍵穴に差し込んだ。

金属芯は差し込んだ状態で左手で固定しつつ、政次郎は鍵穴へ入れた針金を微かに動かしつつ奥へと入れていく。最奥まで差し込んで少し動かすと、そのまま政次郎は金属芯を右へ回した。同時に、エンジンがキーを入れて回された時と同様に、音を鳴らしながら振動を始める。

「これで動く」

「ええ……」

「お前……」

一切の迷いも淀みも無く行われた政次郎のピッキングを目の前にして、蓮と十三は呆れの視線を向けた。ピッキング一式をいつでも持ち歩いているのかとか、えらく行動が手慣れているとか、躊躇とか無いのかとか、言いたい事はいくらかでもあったが、その全てが頭の中でまぜこぜになり口が固まって言葉には出来なかつた。

「そんな目をしている時間は無いぞ、このまますぐに追う。野曾木、後ろに乗れ」

「え、私？」

「伊達はその肥大した筋肉の分重、速度が落ちる。さらに言えば曲がる時にバランスが取り辛い、邪魔だ」

「肥大って酷くねえ!? これでもちちゃんと体絞ってんぞ!」

「お前のウエイト事情など知るか」

政次郎が低く唸り続けるバイクに跨り、後部の空いたスペースへ蓮を呼ぶ。何よりも速度が求められる今、重量の問題は無視出来ない。重量が軽ければ速く・動きやすくなり、重ければ遅く・動きにくくなる。

全身が筋肉の塊とも言える十三は重量という点で言えば、この状況で追跡するには適していないかった。また、政次郎が蓮を後部に乗せる理由はそれだけではない。

「野曾木、この周辺の地図と他隠伏地点の候補は頭に入っているな」

「当然でしょ」

「ならば相手のルートを見て予測しろ。ナビゲートそれとお前の能力なら、掴まったままでも手を使わずに攻撃出来るだろう」

「……なるほどね」

「伊達、お前はシスターと真魚の援護に行け。表の銃声はまだ聞こえる、さつさと片付けたら車に乗ってついて来い。こちらの場所はその時野曾木に電話で聞け」

「承知」

この時点になっても、入口付近からは銃声は続いて響いている。ユーリヤ達の状況が膠着状態になっていると予想した政次郎は、その手の状況に手慣れた十三をそちらへ向

かわせたかった。

銃撃戦で手間取っていたとしても、そこへ十三が加われれば間違ひなくその膠着は打開される。政次郎の提案に二人が納得・同意した所で、蓮はすぐさまバイクの後ろへ飛び乗ってシートに腰を落とし、政次郎の肩へ両手を乗せた。

「撒かれんじゃねえぞ政次郎」

「あれだけ煩い車だ、まず見失わん。距離はそれなりにあるが、まだ追いつける」

「十三さん、ユーリヤ達の事も心配だから早く行つてあげて！こっちはなんとかするわ！」

政次郎がスロットルを何度か捻り、エンジンを強く吹かせる。それを話の終わりの合図として、十三は銃を片手にガレージを飛び出していき、ユーリヤ達がまだ応戦しているだろう入口の方向へと走つていった。

今まさにバイクが発進する、といった時に蓮はふと気付いた。

「あ、そういえばヘルメット忘れてたわ。ごめん政次郎くん、ちよつとガレージの中探してくるから待っ——」

「いらん。さつさと出るぞ、時間が惜しい」

「え、ちよつ」

「それとしつかり掴まってる、落ちてても拾わんぞ」

ヘルメットを探そうと立とうとした蓮を言葉で制すると、政次郎は一切待たずに即座にバイクを発進させた。ガレージを出て車が逃げていった道へとハンドルを向けると、政次郎はスロットルを思いっきり回してエンジンの回転数を上げる。

瞬間、車輪が地面を削り上げ、二人は前方へ跳んだ。

「ひきやあああ。あ。あ。——」

想定外の急速な加速を受けた体が恐怖を覚え、振り落とされないように蓮は政次郎の体へ咄嗟にしがみつく。あられもない悲鳴をその場に残しながら、蓮達の乗るバイクは道路の先の闇へと消えていった。



「死ぬ！死ぬわ私！この速度でノーヘルは絶対死ぬ！政次郎くん今何キロ!？」

「喧^{やかま}しい、落ちなければ死なん。無駄話をやめてナビするか、次のコーナーで振り落とされるか、選べ」

「いやーあー!!こんな所で死にたくなーいー!!」

ガレージから出てから殺人的な速度で政次郎はバイクを走らせ続け、蓮は恐怖の余り喉が張り裂けんばかりに絶叫しつつ、体全体と細い腕にある力全てを使って政次郎の背に抱きついてた。

対向車がないのを良い事に、政次郎は尋常じゃない速度で道を走り、コーナーに

突つ込む。足が道路につくのではないかと蓮が恐れる程に車体を傾け、ガードレールギリギリの所で曲がり終える。速度のロスを最小限に留めながら車体を戻して、政次郎は再びスロットルを回して速度を跳ね上げる。

「わあー！ぎいーやあ、ーっ！落ち、落ちッ！わ、あーっ!!」

コーナーに入る度に蓮は死を覚悟して奇声を張り上げ、抜ける度に恐怖と抗議の声を上げる。もはや蓮には何一つ余裕は無く、自身がその体を政次郎へ目一杯押し付けている事にすら何も感じない。ただ、しがみついている力を緩めれば死ぬという確信のみが頭を支配していた。

最も、政次郎はその柔らかな感触に対して何一つ思考を割かず、風を切る音や背後の蓮の絶叫の外、遠くから微かに響いてくる車のエンジン音と、時折甲高く鳴る地面のスキール音を拾う事に集中していたが。

「——近付いてきたな。あちらもいい加減こちらの追跡に気付いているだろう。いい加減慣れる野曾木、煩くて敵わん」

「慣れる訳無いでしょ！政次郎くんこれでミスって死んだら天国でもつかい呪い殺すからね!!」

「お互い天国なぞ行ける柄か、馬鹿な夢想は寝てからにしろ。このまま足を引つ張るならその分報酬を差っ引くぞ」

「報酬ッ——」

恐怖で軽く思考が現実から離れて浮いている所へ、政次郎が言った軽い一言が鉤爪の如く蓮の思考に引っかかる。その瞬間、想起した借金の残り金額が一瞬にして引力となり、思考を現実へと引き戻した。

政次郎はやる男だ。蓮に関しては容赦無く、報酬の査定に“これまでの行い”という曖昧な要素を、極めて説得力ある金額に変え、そのままマイナスにしてくる。絶対にやる。つていうかやられた事ある。

この話をしていて区間が丁度コーナーの無い真つ直ぐの道だった事が幸いし、それまで蓮の頭の中に充満していた恐怖は金銭的な不安により押しやられ、途端にクリアになった思考が今自分がやるべき事を見出す。

「——ッ、政次郎くん次の次、曲がらないで真つ直ぐ行つて！」

「何？それだと相手から離れるぞ」

「多分相手の狙いはここから一番遠い隠れ家ところに行く事！車なら無理だけどバイクなら突つ切れる道がこの先にある、そこで差を詰められる！上手く行けば追いつけるかもしれない！」

「………わかった」

蓮から言われた通りに政次郎は車の通つただろう道をあえて無視し、直進していく。

平静さを取り戻した蓮は政次郎の風を切る音に負けずに声を張り上げて、政次郎の耳元での確に通るべき最短の道を示していく。

極端に曲がる道を選ばず、また信号や人気の無い道を選んだ為にバイクは速度を大きく落とさないまま進み続けて、次第に一度は離れてしまった車の音は再び近付いてきていた。

「このまま真つ直ぐ行けば大きい道に出るわ、相手はその道を使う気よ!……ん、着信?」

「伊達か。野曾木、出る」

「もしもし十三さん、そっちはどう!?」

『全員無事だ、今は外の連中片付けてようやと車に戻った!今そっちどこだよ!』

蓮の想定通りに車に近付いていた時に、スカートのポケットにしまつてあるスマートフォンが振動する。すぐさま蓮が手に取れば、予想通り電話をかけてきた相手は十三だった。

「もうちよいで国道□号線に出て北へ向くとこ!」

『どこだよ地元じゃねーからわかんねーよ!目印とかねーの!?!』

「第三候補の地点に行く道よ!真魚ちゃんにスマホのナビ使ってもらつて!それでわかる!」

『あいあいさー』

「急なルート変更あつたらその都度連絡する！切るわよ！」

『わかった、気いつけるよ！』

蓮は向かつてくる風に負けて流れないように声を張り上げ、通話先の十三や真魚へ必要な情報を要点を推さえ伝える。

片手ではがみつき続けるには怖い速度で走っている最中の為、蓮は手短かに通話を切り上げてスマートフォンを素早くポケットへと戻し、バランスを崩さない内に政次郎の体を再び両腕でホールドする。

冷静な思考が戻った今になって、蓮は“この体勢ちよつと恥ずかしいんじゃないのか？”とか思ったが、こうでもしなければ振り落とされかねない。実際恥じらっている余裕がある状況でも無いので、頭に浮かんだ思考は一旦捨てる事にした。

そうしている間にも突っ切ってきた道にも終わりが見え、突き当たった先にはここまでの道よりも一回り光量が多い街灯で照らされた一般道が目に入ってきた。

「右曲がって合流！三車線、幅一杯使って速度落とさないで！」

「了解」

それまで走り抜けてきた一車線がそれ以下の幅の道から、政次郎の操るバイクが幅広な一般道へ飛び出して合流する。体を傾けてバイクの軌道を曲げつつ、エンジンの回転

数のロスを抑えて道の端まで渡った所で体勢を斜めから前へと向け直す。

曲がり終えた所で蓮達は前の道路へ目を向ける。およそ四十メートルほど先、そこにはガレージで蓮達の前から去っていった黒い車の後ろ姿があった。

「よし、追いついた!」

「ち、直線が長いな」

ようやくテールランプが見えた事で、蓮は自身の目論見が上手く行ったと安堵したが、政次郎は道の先の形を見て舌打ちをする。深夜帯の為に車がろくに通っていないこの道路は、高速道路とも思えるほどにうねりが少なく、非常に見通しの良い場所だった。総重量の軽さに加えて、命すら投げ打ちかねない程の無茶な域まで速度を引き上げて疾走している分、速度的には蓮達の方が勝っている。ただ、政次郎はこの状況に嫌な予感を覚えていた。

「どうしたの、これならなんとか追いつけるんじゃない——」

「あつちは追われる側で、車だ。そして見通しのいい場所、これだけの状況が揃えば相手が次にしてくる事は決まっているだろう」

そう政次郎が蓮へ話した直後に、前方の車に動きがあった。いや、車の挙動は変わっていない。車の後部座席の両側の窓が開いたのか、そこから何かの影がせり出していた。

街灯の光の下を潜り、車から出た影が照らされる。それは窓から半身を乗り出した男二人が、蓮達へその手に握ったサブマシンガンを構えている姿だった。

「ツ政次郎くん!!」

蓮が次に起こる光景を想起して叫ぶ。その瞬間、バイクへ向けて大量の発砲音と共に弾丸が乱れ飛んだ。

8. その刹那を止める

「——ち、また距離が空いたか」

降り注いだ弾丸が当たるより前にハンドルを切っていた政次郎が、再びバイクを前へ向けて逃げ続ける車の姿を見据える。

撃たれる事はこの道へ合流した時点から予測がついていた為に、先んじて回避するよう動く事が出来たが、弾丸をかわす為に軌道を曲げてしまった事でそれまでの速度と体勢は崩されて、詰まりかけていた両者の差は再び開いていた。

「ッ、どうするのコレ！この速度の上、今みたいに撃たれてたらこつちから撃ち返すなんて無理よ!？」

「お前の能力はダメなのか」

「毒を生み出したら風で流されるし、車の場所へ直接発生させても走ってるからすぐ範囲外に逃げられるわ!」

「ちっ、肝心な時に使えん」

「小声でもしっかり聞こえてるからね政次郎くん!」

バイクの速度を上げて距離を詰めようとするも、矢継ぎ早に前方の車から銃弾が発せ

られ、その機先を制される。政次郎は撃たれる前にバイクの軌道にフェイントを入れつつ、蛇行してなんとかやり過ぐすが、そうしてバイクを前に向けない時間が増える毎に距離は離されてしまう。

それを繰り返す内に、この道路に出てから車を視認した時から倍以上の差をつけられた。ここに来てそれまで続けざまにされていた銃撃は一旦の収まりを見せる。距離が開いた事であちらも狙いをつけにくくなったのに加え、放った銃弾の再装填をしているのだろう。

どれだけの弾を所持しているのかは知らないが、追いつきながら弾切れまでかわし続けるというのは非現実的な案だ。

近付かなければどうしようもないこちらに対し、あちらは確実に当てられる距離までこちらが近付くのを待ち構えて撃てば、いずれ当たる。牽制などで無駄弾を使う必要が無いのは、むしろ追われている側の方だ。

「……このままイタチごっこをしても埒が明かん。野曾木、散々耳元でがなり立てて邪魔をした分、今ここで何か案を出せ。こちらも考える」

「いや私が叫ぶ羽目になったのはそっちの命知らずの運転のせいでしょう！」

「文句をつけるのはそれで死んでからにしろ。……さすがにこの速度では、僕が運転しながら片手で撃って当てるのは無理だな。お前が何とかしろ、バラストの真似はここま

でだ」

「ちゃんとナビしたじゃない！追いついたの私のおかげでしょ！」

「追いつくだけなら時間をかければ僕だけでも問題無かった」

「こ、この顔面セメント忍者……！」

下手に距離を詰めれば再び銃撃が飛んでくる危険性がある為、作戦を考える時間を取るべく政次郎はあえて空いた距離を無理に詰めようとせずに、車間距離を維持するようバイクを走らせる。

蓮達は空いた余裕と時間を半分軽口に割きつつも、もう半分で前方の車に追いつく、あるいは止める案を考え続ける。ただ、有効策は中々思いつかない。

これが後ろにいるのがユーリヤであれば、と政次郎はつい仮定的に考えてしまう。

「野曾木が知識だけではなく身を守る魔術も使えていればな……」

「思った事はなんとなくわかるけどしようがないでしょ！人には向き不向きがあるの！

私の問題じゃないの！」

「呪術が使えるならあの車の行く先を一瞬呪えたりしないのか」

「簡単に言うけど、運命操作はどんなに規模が小さくても高度な術なの！私の呪術は毒を媒介に傷の治りを遅くしたり、出血を激しくしたりするのが限界よ！」

「……………」

「沈黙しても言いたいことわかるからね!」

ユーリヤの使える魔術には、傷や不調を治すものだけではなく、矢や銃弾の軌道を逸らし身を守る魔術もある。

致命的な弾丸のみをかわしながら強引に差を詰めれるのならば、その隙にこちらから撃ち返す事も可能なのだが、と無い魔術^もねだりをしてしまう頭を律して、考えを追い出す。

蓮にしてもこういう状況で有効な魔術はいくつか頭に浮かぶが、そのどれもが蓮が使うことの出来ないものや、いざ使用するにも適した魔術品の助けや事前の儀式が必要なものばかりだった。

蓮個人が出来る事はあくまで毒を生んで操るまでであり、それを起点として扱う呪術も怪物や霊体に傷を負わせる為の物が殆どだ。毒が届かなければそもそも効果は現れず、この状況で車をどうこうする術を蓮は持ち合わせていない。

「伊達に先回りをさせるか……無理だな、距離がありすぎる。仮に先回り出来たとして、途中で進路変更された時のロスが激しい」

「そもそももう隠れ家は近付いてきてる、このまま追い続ければ間違いなく素通りされるわ! そうなったらどこまで逃げるか、見当がつかなくなる!」

別方面からこちらを追ってきている十三達の手を借りるには、先程の電話が来た時に

発進したと考えると、ここまでの彼我の距離は開きすぎている。先回りをする時間も無く、また想定外の事態が一つ起きてしまえば無為となる。

なんとしてでも蓮と政次郎が、この場で前方で走り続ける車に追いついて止めるしかない状況だった。

「近付いた時の斉射が最大の問題だな。こちらから牽制を撃ち返すなりで止められればいいんだが……」

「——止める?」

政次郎が何気なく、最初に蓮が無理と言った案を蒸し返す。その言葉の中に含まれる単語に、蓮が反応を見せた。

確かにこの状況で脅威なのは、あちらから発砲される銃のみだ。それをこちらからの反撃や、蓮の能力で止める事は確かに出来ない。だが——

「……思いついたわ! 政次郎くん耳貸して!」

「言われずともこの体勢だとお前の声は勝手に耳に入る」

「体勢については言わないでよ折角意識しない様にしてるんだから!」

「お前は何を言っているんだ」

体勢について言及され、忘れようとしていた政次郎に対する蓮の現状の姿勢を再認識し、蓮は少し赤面する。目を強く瞑って心の中で思考を振り払い、今第一に自分が考え

るべきこの状況への對抗策を頭に浮かべ直す。

政次郎の耳元で蓮が自身の発案の要点をまとめ、伝える。それを聞いた政次郎はその案について少し考えた後、蓮へ答えた。

「……成程、上手く行けば追いつけるな。問題は仕掛けるポイントと、車を止める手段だ。どうする、追いついた瞬間に撃つのか？」

「動きながらタイヤに銃を当てるのはちよつと不安があるわね。ただ、追い抜いて風上に立てれば、毒が使えらるわ」

「毒……運転手を止めるのか？だがあの速度で運転手を麻痺させれば、大事故になりかねんぞ。奴らが宝石を持っているのなら、車と一緒に紛失してしまう」

「毒つたつて、なんでもかんでも生き物にかけるものつて訳じゃないわよ」

そう言つて蓮は自信ありげに片方の口の端を少し上げる。政次郎からは蓮の表情は見えていないが、その口調から蓮が何かしらの考えを持つており、そこに自信を抱いている事は察する事が出来た。

「……肝心な所をぼかすな。まあいい、これでしくじつた時にはこちらの後処理の分だけ報酬を引いてやるだけだ」

「ちよつとやめてそれマジでやめて。船舶事件の後の結構反省してるから、今度からちやんとするから」

「今それを証明するんだな。……仕掛けるのは、速度を落とさざるを得ない大きなコーナード。一気に距離を詰め、今言った案で奴らを追い抜く。適した場所はあるか」

「もうちよつとで海が見える道に出るわ、そこから少しすれば大きく左に曲がる道が来る筈よ」

「わかった、仕掛ける際にはカウントする。一いちでやれ」

蓮の提案を受けて、お互いに即興の作戦の打ち合わせを詰めていく。最低限の確認、質問、返事のみで構成される会話の中に、不要な疑念や反発は無い。こと仕事においては、二人はそれぞれの考えに余計な感情を挟まない程度には、お互いに信用を置いていた。

「チャンスは一度、しくじればバイクと共に蜂の巣だ。口だけじゃない事を祈るぞ」

「そつちこそ、タイミング間違えないでよね。政次郎くんの最初の一発が大事なんだから」

「お前に心配される筋合いは無い」

必要な打ち合わせを終え、軽口を叩いている内に道路の横に並んでいた建物に遮られていた風景が開き、そこから明かり無く揺蕩う夜の海が見えた。

政次郎が先を注視し、街灯の並びが先で大きく左に曲がつていくのを確認する。それを見て政次郎は再び速度を上げつつ、左手をハンドルから離して自身の外套の中へ伸ば

す。素早く缶状の爆弾を手にとった政次郎は、口でピンを抜いて信管を着火する為のレバーごとその缶を握り締める。

少しずつ車との距離を詰めていき、二つの影が尋常ではない速度で大きなコーナーへと近付いていく。タイミングを見計らい、政次郎は握っているレバーから手をずらし、解放されたレバーは上へ跳ね上がる。

「五、四、三」

内部で着火した爆弾の側面を左手で握りながら、政次郎がカウンントを始める。向こうはようやくやくコーナーを確認したのか、前を走る車のテールランプが強く発光し、その速度を少し留める。

その間に政次郎は上げた速度を維持し続け、車間距離を縮めていく。コーナーの長さや角度をはつきりとその目で確認しつつ、バイクを少しずつ右へと寄せ、曲がる瞬間に備える。

「二」

先を走る車がコーナーへ入り、速度を大きく落とす。距離は縮まっていき、最初に道路に合流した時とほぼ変わらないほどになっていた。

曲がりながらも車はこちらを視認し、再び後部座席の窓が開く。それと同時に、政次郎は左前へ向けて可能な限り遠くに、左手に持っていた爆弾を投げつけた。

「一」
「！」

窓から顔を出した男達が銃をこちらへ向け、政次郎のカウントが一を告げる。それと同時に蓮が能力を使い、毒を発生させた。事前に作っていた毒を自身の体へ巡らせつつ、触れている場所を通して政次郎の体へも同じ毒を注いでいく。

お互いの体に回された毒は即座に効果を表し、二人の身体感覚の一部に変調をきたしていく。それを感じながら、二人は次に起こることへ備えて目を閉じた。

瞬間、道路が一際眩い光に覆われた。

「がッ!？」

「つぐ、うるせ……ッ!」

道路に投げ捨てられた缶が放つ燐光と轟音を、蓮達を射抜くべく狙いを定めていた男達が直に受ける。暗さに慣れていた眼は急激な光で眩ませられ、銃声すら凌ぐ炸裂音に本能的に体が竦む。

高速で曲がる最中だった運転手も、ミラーが跳ね返す光や突然の音に一瞬気を取られ、不測の事態に備えてついブレーキを少し強めに踏んでしまう。車が止まることは無いが、速度は大きく落ちた。

目に焼き付いた暗点の先を見れば、突然の光と音に対してまるで怯むことなく、とて

つもない速度でコーナーを曲がりながらこちらへ近付いてくるバイクの姿があった。

そんな馬鹿な。距離を考えればあちらの近くで炸裂した筈なのに、何故何事も無い様に運転出来る。

「——耳、戻したわよ政次郎くん！ぶち抜いて！」

「全く、一瞬とはいえ気分が悪い」

閃光を防ぐために閉じていた目を開いた蓮は、すぐさま自身と政次郎の体に回していた、聴覚を麻痺させる毒を解毒する。

一時的に止められていた耳の感覚が解毒と共に徐々に戻っていき、耳に感じるエンジンと風の音が少しずつ大きくなっていく。十分な感覚が戻ったのを感じつつ、政次郎は動きを鈍らせている車へ一気に肉薄していく。

いかに閃光手榴弾とはいえ、車までの距離を考えればその影響は本来の物とは程遠い。相手がこちらの不意打ちから立ち直るより先に、左へ切り込む様に鋭角に曲がりながら車との距離を詰める。

十五メートル、十メートル、五メートル。ブレーキを示す赤い光が消え、車が再び速度を上げようとする。だがもう遅い。距離、零メートル。

「やれ、野曾木！」

車の横に並び、そのまま追い抜いていく。追い抜く直前に蓮が能力を使い、毒を精製

して風下の車へと流していく。狙いは車内へ侵入する為の窓ではなく、もつと下。

時間にすれば一瞬の接近の後、そのままバイクは車の先を走っていく。距離が近ければ近い程、銃撃の危険性は高まる。速度差がついている内に、今度は逆にこちらが前に立って距離を一気に取ろうとする。

政次郎がサイドミラーを覗けば、光と音から立ち直った後部座席の男達はこちらを見て、銃を向け直そうとしている。いつ撃たれてもかわせるように、ハンドルを逆方向へ曲げる心構えをする。

「ところで政次郎くん。トルエンって物質、知ってるかしら」

「知らん、興味が無い」

「そこは聞きなさいよお……溶媒として有名な劇物でね、色んなものを溶かす媒体として扱われてるのよ。ペンキやシンナー、接着剤——」

そんな時に、蓮が唐突に世間話をするような軽さで政次郎に関係の無い話を切り出す。政次郎は一切興味を示そうとしないが、意に介さず蓮は話を続ける。

窓の外へ身を乗り出した男達は銃をこちらに向け狙いを定めている。距離が離れ切る前に当てるつもりなのだろう。実際まだ離れ切れていない今撃たれば、避け切れるかは五分五分だ。撃たれるタイミングを見計らい、ギリギリまで狙いを引きつけるようハンドルを握る。

「——そして、ゴム全般」

蓮が呟いた瞬間、後ろを走る車の挙動が揺れ、タイヤから地面を削る音が響いてくる。車は急激にコントロールを乱し、危険を感じた運転手がブレーキを強く踏む。勢いのまま危うくスリップしてしまいそうになるのを、強くホイールに押し付けられたブレーキパッドがタイヤと共に車の動きを抑え込み、車は後部を横へと滑らせながら道路の端へと近付いていく。

ガツンと音を鳴らし、車体側面が道路端のガードレールにぶつかる。直前に強くブレーキが踏み込まれて勢いが殺されていた分、それほどの衝撃は無い。表面が僅かに溶けたタイヤは地面との激しい摩擦により、異臭を放ちながら白い煙を燻らせていた。

「ま、ざつとこんなものね」

「反転する、口を閉じろ」

「へ？」

顔を後ろへ向けて車が止まった様子を確かめる蓮へ、政次郎が聞き流しそうになる程の警告を放つ。

その瞬間、政次郎が前輪のブレーキを強くかけて、ギアを一気に落とす。ハンドルを切りながら左手のクラッチと足先のリアブレーキで後輪の速度を調節し、政次郎はバイクの後輪を滑らせた。

「うひいえああ!？」

体が前に吹つ飛ぶかと思う程に急速なGを感じながら、政次郎の操るバイクの車輪は甲高い音を立てながら急速に横を向いてアスファルトを削る。どういう事が起きるか予見出来なかつた蓮は、政次郎の体へそれまで以上にしがみつくと事で体が投げ出されるのを防ぐ。

実時間の何倍にも引き伸ばされた恐怖が蓮を襲いながらも、次第にバイクの速度は失われる。勢いが止まる頃には、バイクは後ろへと向けられていた。

それまで足元から鳴り響いていたスキル音に少々の耳鳴りを覚える間に、政次郎は止まったバイクを再び走らせる。

「ちよ、ちよっ！政次郎くんっ舌かんだ！」

「だから閉じろと言ったんだ」

「いきなりこうするとかわかる訳ないでしょー！」

「理解力不足だな。行くぞ、連中が立ち直る前にこのまま制圧する」

「あぁーもーっ！」

一切蓮へ配慮を見せないまま、政次郎は未だに道路の端で静止したままの車へと近付いていった。

9. 過ぎ去りし物

政次郎がバイクで車へと向かっている途中、車がその場から少し後退し、ハンドルを切ろうとしているのが見えた。

蓮の毒によってタイヤの表面を溶かされた車は、正常な速度で走れる状態にはない。が、動かすこと自体は可能といった感じで、向こうは何が起こったのか理解してないまでも、道半ばのこの状況で車を捨てるという選択はまず有り得なかった。

なんとか体勢を立て直して再び走らせようとする車へ、政次郎は左手で拳銃を取り出し、ほぼ静止している車のタイヤへ向けて三度発砲した。

不安定な体勢ゆえに一発は外したものの、残りの二発が車の右前輪を射抜き、破裂音が夜の道路に響き渡る。圧縮空気がタイヤから解き放たれた力で車体は跳ね、動きは制された。

「車より十メートル地点に横向きに停める、備えろ」

「またあ!？」

蓮の愚痴を聞き流し、車を横切った所で政次郎は再びバイクのブレーキを駆使し、車体を横滑りさせながら勢いを殺していく。先程よりは速度が出ていなかった事と、さつ

きの今で同じ事が繰り返された為に、蓮も今度はしつかりと衝撃に備えて口を嘯むような事は無かった。

車の後方へ横にする形で政次郎はバイクを停めると、すかさず政次郎は背に強くしがみ付いている蓮の腕を強引にひっぺがし、矢が放たれたような速さで車へと駆けていった。

「くそ、ンだ一体！」

「撃たれたのか!? 許さねえぞあのバイク野郎——」

後部座席の扉が開き、銃を持った男達が状況の確認に出てくる。政次郎はすかさず右側から出てきた男の銃を持つ腕へ向けて、自身の拳銃の引き金を引く。弾丸の直撃により男の腕からは血が舞い、保持する力を失った銃は道路へ落ちた。

銃弾の命中を見て政次郎は拳銃を捨てつつ、後部座席の左側から出てきた男へ向けて走る。男がこちらの発砲に反応してこちらに銃を向ける頃には、政次郎は一足で届く距離にいた。

「シッ！」

走りながら政次郎が右手で抜刀し、そのまま相手の腕を斜めに斬り上げる。銃の引き金を引くよりも先に腕を斬りつけられた男は刀の勢いにより腕を跳ね除けられ、手放された銃もその方向へと飛んだ。

刀を振り抜いた所で政次郎は刃の向きはそのままに、柄の端に左手を伸ばして右手を逆の方向へ一瞬で持ち変える。その状態のまま刀の勢いを返して、刀の背で相手の喉側面を強打した。

「ゴッ——」

峰とはいえ急所を殴打され、男は刀の打ち込まれた勢いのままに吹き飛ばされて気絶する。

それを手応えだけで確認した政次郎は、続けて車の前部座席へ視線を向ける。助手席に乗った男が、後部座席の開け放たれた窓越しにこちらへサブマシンガンを向けていた。

「チ」

政次郎がその場で体勢を低くすると同時に、車の内側から多数の弾丸が飛来した。車体を使い死角に体を潜めて、その体勢のまま政次郎は続けて撃ち続けられる銃弾の嵐をやり過ごす。

それが過ぎると今度は助手席の窓が銃で撃ち割られ、そこから銃身と手のみが現れて政次郎のいる位置へと向けられる。引き金が引かれるより先に、政次郎は刀で銃身を下から突き上げて狙いを逸らした。

あらぬ方向へと向けられた銃口が火を噴き、政次郎から見て斜め後ろにある街灯へと

に銃弾が放たれる。政次郎の代わりに撃たれ破壊された街灯は、淡く光を照らし返しながら近くの道路へと残骸となつてばらばらと散らされていく。

その間に政次郎は突いた刀身を左へ少し引き、サブマシンガンを持った男の手の甲をシャープに斬つた。

「ツてえ！」

サブマシンガンが手から離れ、地面に落ちる手前で政次郎は左足でそれを道路へ向け蹴飛ばす。相手が武器を失つたと見て政次郎は立ち上がり、刀を顔の前に水平に構えて剣先を助手席へと向けて構える。

「ッ」

政次郎が息を止める。助手席にいる男は左手に、運転席にいる男が両手で拳銃を構え、同時にこちらへ銃口を向けている。位置的に、一度に二人を斬りつける方法は無い。

助手席の男の襟首を掴んで盾にするか？ いや、その前に助手席の男からの発砲を防ぐ事が出来ない。

「政次郎くん、助手席！」

「！」

声が政次郎の耳へ届き、反射的に助手席にいる男の左腕を刀で突き刺す。それと同時に、黒い霧が後部座席の窓から高速で飛び込んで来て、運転席にいる男の体を覆つた。

助手席の男は悲鳴を上げてその手から拳銃を取り落とし、運転席の男は白目を剥いて倒れ込む。政次郎は刀を突き刺した男へ注意を払ったまま、ちらりと片目で右側を見る。

そこには黒い霧を従わせて片手を車へ伸ばし、政次郎が最初に腕を撃った男の意識を奪いつつ、こちらを見ながらにやにやと何か言いたげに笑っている蓮の姿があった。

「ふふん、政次郎くん。何か私に言うべき事、無いかしら？」

「……動き出しが遅かったな。停めてからここまで何秒だと思っている」

「そうじゃないでしょーが！ほら、”あ”から始まって”う”で終わるヤツよー」

「ある程度はマシな働きだったが、それだけだろう」

「よーし後で覚えてなさいよね」

“素直に感謝の一言も言えないのかこの野郎は”と、蓮の政次郎に対する怒りのボルテージがまた上がった。



意識のある男達を全員眠らせ、蓮がこの場で負わせた男達の傷を簡単に止血し、政次郎が車内を漁っている所で、遅れて十三達の乗った車がその場へ到着した。

黒い車の真後ろへ停まった直後、車の助手席の扉が開き、そこからユーリヤが出てふらふらと倒れるように膝をつく。ぎよっとして蓮がその横顔を見れば、ユーリヤの顔か

らは血の色が抜け、表情は引き攣っていた。

「……し、死ぬかとおつ、思いました……」

「まあまあ楽しかったよね」

続けて後部座席から真魚が出て来るが、その表情は対照的に明るい。と言つても真魚が無表情なのは変わらなず、あくまでいつもより心なしか眉や目の開き方が微妙に違うというだけで、ハッキリと明るいとは言い切れないのだが。

最後に運転席から十三が、ばつが悪そうに後頭部を手で搔きながら出てきた。

「いやーわりーわりー。まあでもほら、何回かフェンスに軽く当たっただけで済んで良かったわ、うん」

「おじさん。車の横、さっきので凹んでるよ」

「……えつ、マジ？そんな強く当たってた？全然わかんなかった」

「か、神に召される事を本気で覚悟しましたよ……」

そんな十三達の様子を蓮が見ていると、男達の乗っていた車のハザードランプが点き、中を一通り見終えた政次郎が出て来る。そのまま政次郎は十三へ声をかけた。

「伊達か、丁度いい。ハザードランプを点けてこの車に軽く接触させる。通行車が通りがかつたなら、接触事故が起きた」と見せられる」

「了解。警察が来たらどうすんだ？」

「上へ連絡を取って黙らせるだけだ。疑念を持つ一般人より、役所仕事をこなしてくれる組織の方が与し易い」

「つたく、お上が後ろにいるヤツは怖いねえ」

「それより伊達、その車の修理代はお前持ちだぞ」

「……うげ」

政次郎とのやり取りを渋い顔で終え、運転席へ戻った十三は乗ってきた車のハザードランプを点けると、そのままゆつくりと前進して黒い車へ軽く添える程度に接触する。

それが終わると政次郎は助手席で眠っている男を担ぎ、車外へ引つ張り出す。それを見た蓮は何事かと訝しんだ。

「その男、どうするの?」

「こっちの車の中で尋問する。シスターは助手席で待機、真魚は不審な車両が近付いてこないか、外で見張りを頼む。伊達は念の為そっちの車の中の男達を見張っている、起きたら野曾木を恨め」

「ん」

「承知」

「余程の事が無い限り起きないわよ。尋問って、何を聞くつもり?」

「車内に宝石が無かった。それについて聞き出す」

「……何ですつて?」

十三が乗つてきた車の後部座席へ男を乗せ、同じく車へ乗り込んだ政次郎が小刀を抜いて男の喉元に添える。そして蓮に無言で目配せをした。

それを受けて蓮も後部座席へ乗り込み政次郎の隣に座り、車の扉を閉める。その後、意識を覚醒させる為の毒を生み出し、座らされた男へ吸引させた。

「——カハッ! げほっ、ぐほっ……な、んだ……ッ!」

「動くな。質問に答えろ。逆らつた瞬間、指が飛ぶと思え」

「テメツ、そう言われて”ハイそうですか”なんて言うヤクザが——」

男が声を荒げた瞬間、政次郎は男の右腕を捻り上げ、そのまま小刀で人差し指の背を引き斬る。指は両断こそされなかったが、深く斬りつけられた傷からは血が噴き出した。

「つがぁあつ!!」

「シスター、止血してくれ。……良かったな、いくら逆らつても指が無くなる事は無いぞ。その代わりと言つてはなんだが、逆らう度に斬り方を変えてやろう。その気になるまで痛みに飽きさせるつもりはないぞ」

「政次郎くん、なんか楽しんでない?」

「心外だな」

助手席で振り返つて政次郎達の様子を見ていたユーリヤが、急いで男の指を開いた刀傷へ治療の魔術をかけると、傷はたちまちに塞がる。痛みだけを与える政次郎の手法を見て、蓮は正直ドン引きした。

政次郎に脅された男は目の前の男の目が一切揺れない事と、実際に指の痛みが急速に引いて独りでに止血された事から、政次郎が本気である事を直観的に理解し、苦い顔で政次郎を睨みつけた。

「状況を理解してくれた所で、問おう。貴様らが数日前に強盗した宝石はどこにある。貴様らの隠れ家か、それとも誰かが握っているのか。五秒くれてやる」

「……ッ！あ、れは——ガ……！」

「……？」

政次郎が男へ問いを投げかけると、男の表情が怯えや怒りとはまた違う変わり方をする。最初は政次郎に怯えて動かそうとしていた口が、急に開いたままの形で留まる。

喉の奥から掠れた声をひねり出すように、しかししっかりとした発音にはならない。こちらに逆らつて言葉を洩っているのはまた異なるその様子に、政次郎が戸惑いを見せる。

ヒューヒューと苦しげに喉を鳴らす男を見て、妙に思つた政次郎は五秒を過ぎても握る小刀を留めた。

「……これは、〃こつち〃の管轄みたいね。政次郎くん、交代よ。そのまま抑えといて」
「チ、これだからこの手の事件は面倒なんだ」

悪態を吐きながら政次郎は小刀を納める。そのまま男の背後に回り両腕を拘束して、男を蓮へと向ける。それを受けて、蓮が男の顔を覗き込むように自らの顔を寄せた。

「さて、それじゃ……ねえ、あなた」

「カツ——な、んだよ、クソアマツ……！俺は、何も——」

「まあまあ落ち着いて。〃ここにあなたの敵はいないわよ？。〃」

「——あ、ああ……？」

「〃だってこれは、夢なんだから。そうでしょう？。〃」

「……ゆ、め……？」

蓮が幻覚物質を精製し、男の体へ徐々に注ぎ込んでいく。次第に男の意識は溶かされていき、それまで向けていた敵意は失われて理由の無い安心感が男の体を支配していく。

思考の糸が緩み切った状態の男は、蓮から与えられた言葉をそのままに受け取っている。蓮の毒が回り切った男の目尻は下がり、その目からは既に自身の意志を示す光が失われていた。

「ん、よし。それじゃあ、少しずつ思い出してみましようか。……数日前、美術館から宝

石を強奪した後、それからどうしたのかしら？」

「……ああ……依頼者に渡す前、に……警察から隠れる為、組全員を一旦隠れ家へ逃して……」

「……依頼者？誰？」

「……ローブ被った変な男……知らねえヤツ、だ」

思考を蓮の言葉で誘導して、男の当時の記憶を思い出させて口にさせていく。政次郎の尋問に対しての反応を見るに、この男は何らかの魔術で宝石についての事を誰かと話す事を封じられているか、あるいは部分的な精神支配を受けていると蓮は考えていた。

完全に記憶を消されていたり、“すり変わり”をされているのならば、口に出せない様子を見せる理由にはならない。それならば、男に自主的に話させる気にする、あるいは独り言を言わせれば良いと考え、蓮は男を自白させる方針で情報を引き出そうとしていた。

「依頼内容はどんなだったかしら、思い出してみて」

「あの美術館に展示される……赤い宝石を奪って……前金で、一千万積んだトランク渡されて……渡せば、後日に成功報酬を渡す、って……言ってたな」

「宝石は今どこにあるの？」

「……昨日、俺が持っていて……あいつに指定された場所で……渡した、な」

「……やられたわね、一手遅れだわ」

額に右拳を当て、蓮が苦い顔を浮かべる。この様子では組そのものはその“依頼者”に丁度いい手として使われただけで、ろくに情報は与えられていない。宝石は昨日の時点でその依頼者の手に渡ってしまっており、どこにもない。

“依頼者”が魔術師であるのは、この男の口止めの仕方から見ても間違いない。となれば、宝石が魔術品である事も自然と確定となる。ポンと大金を最初に出してまで確保しようとする辺り、その石の価値や使用方法についても知っているのだろう。相当に厄介な状況だ。

「……政次郎君、引き上げましょう。宝石はここには無いわ、面倒事が起きる前にここから離れるわよ」

「ここまでやっておいて、“はい諦めます”などと殊勝な事を抜かす気か」
「誰もそんな事言っていないでしょ。あつちの車で寝てる奴も含めて、全員に根こそぎ知ってる情報を吐かせるわよ。ただ、この場で探しても無駄ならゆつくり時間をかけられる場所でやった方がいいわ」

「……わかった。伊達、撤退するぞ。野曾木はそつちの車に男をぶち込んで、男どもが起きない様に運転しろ。僕はこのバイクを回収する。真魚もこつちに戻れ」

この男達の手に宝石が無い以上、この場に留まり続ける意味は無いとして蓮と政次郎

は撤退の準備をし始めた。政次郎の声を受けて、車にいた男を見張っていた十三と、静寂を保ち続ける道路を外で眺めていた真魚が車へと戻つて来る。

最低限この場に残された痕跡を抹消する為に政次郎や十三が動く中、未だ毒が効いており朦朧としている男を見て、余した時間が勿体無く感じた蓮は一つの質問を投げた。

「ねえ、その依頼者、宝石を受け取った時に何か言つてなかつたかしら」

「……何か……」

蓮の質問を受けて、男はその時の記憶を呼び戻す為に一息置く。数秒ほどの沈黙の後、再び男の口が開かれる。

『確かに、本物の“火の石”だ』とか……『あとは相応しい時と場所のみ』とか、言つていた」

「……“火の石”？」

美術館の品目とは異なる名前を聞き、蓮の中での宝石への謎は深まった。

10. 茫漠を追い

楓丁組の拠点を強襲し逃走した男達を拘束した蓮達は、逃走した男達を連れて早朝に唐館市へと戻ってきていた。男達の知る情報を吐かせてまとめるまでは次の行動の指針も取れない為、蓮は一度男達の身柄を弥武組へと預けて仲間達と一時的に別れた。

何はともあれ、今最も大事なものは休息だった。情報をまとめるにも疲労を残した状態では頭の回転速度は落ち、十分な仕事はこなせない。さらに言えば無茶なカーチェイスによる気疲れも大きく、ゆっくり休みたいというのが文字通り体を振り回された蓮とユーリヤの正直な心中であった。

大小の差こそあるが夜襲による疲労があるというのは全員共通であり、これから先に備えるという意味合いでも体力は戻しておきたいのは確かだった為、これに異論を唱える者はいなかった。

そして休息から明けた昼、蓮達は再び弥武組の事務所へと集合していた。

「あら蓮、遅かったわね。預かった連中、大分前に目を覚ましてたわよ」
「あいつらの様子はどう？」

「元氣一杯ね。目を覚ました瞬間、部屋の扉を壊そうとしてきたわ。まあ、そんな簡単に

壊される部屋は宛てがっていないけど」

「今は？」

「カズに躰けを任せてからはすっかりお利口さんよ」

「あからさまにヤクザだね」

「ヤクザなのよ」

蜜柑と顔を合わせ、預けた男達の様子を聞く。男達は想像通りの反応をしたらしいが、弥武組は期待通りの働きをしてくれたらしい。こういう時には頼れる人手があるというのは助かる、と素直に蓮は思った。

「で、早速聞き出しに行くかしら？」

「ええ。政次郎くん、ユーリヤ、ちよつと手伝つて欲しいんだけどいいかしら」

「構わん」

「わかりました」

蓮の能力を使えば尋問をする際に相手の敵対心を奪い、安全を確保しながら確実な自白を誘導する事が出来る為、元々人手はそれほど必要無い。

だが、考える頭が多い方がより細かく情報を集められるし、先日尋問した際には問題無かったものの魔術による何らかの障害があればユーリヤの術で解除出来る可能性もある。その為、二人に同行するように頼んだ。

「俺らはどーすりやいい？」

「十三さんと真魚ちゃんを持つてきた私達の銃のメンテナンスと、物品の補給をお願い。特に指定はしないから、二人で判断して必要だと思ったものをリストアップして蜜柑さんに渡して。代金は気にする必要無いわ」

「よつしや蓮ちゃんのお財布の天井まで買っちゃおう」

「必要だと思ったもの。よ！不必要な分は返すからね！」

真魚からさらりと放たれる冗談に蓮はきつちり釘を差しておく。冗談とわかっていても、真魚の場合は言葉にしておかなければ。止められなかったし。と、愉快犯の如く蓮の貯金残高を削ってきそいで少々不安があった。

……流石に不必要に買い込みをしようとすれば傍の十三が止めるとは思いが。

「あー、それじゃありストアアップしてる間、ちよつとエミュレータの調整お願いしたいんですけど」

「構わないわよ。そのPCは色々興味深いからね」

「間違えてプログラム起動しちゃったら死んじやうかもあるので気をつけて下さい」

「……気をつけるわ。カズ、蓮達の案内よろしくね」

「ウス。姐さん、こちらです」

真魚が蜜柑に魔術エミュレータを渡し、十三と一緒に所持品の見直しに移った所で、

部屋の入口の方で立っていたカズ——弥武組の若頭を務める青年——が蓮達の方へ歩いてくる。

そのままカズの案内に従って蓮達三人はその場を離れ、男達のいる部屋へと向かつていく。その移動の最中、蓮はカズへ男達の様子について質問を投げかけた。

「カズくん、アイツらを見ていて変わったことはあった？」

「変わったこと、というか……アイツらの若頭だけは、最後まで反抗的でしたね。相当痛めつけましたが、最後まで折れずに大物タレてましたよ。大した強情さですわ」

「カズくんにそう言わせるって事は相当ねえ。まあ、また良い夢見せてあげれば問題無いけれど」

「姐さん、悪い顔してますよ」

「野曾木の顔は元からこんなものだ」

「よし、どつくわね政次郎くん」

蓮が申し訳程度の断りを入れると同時に、右隣を歩く政次郎のこめかみへ向けて拳を飛ばす。が、政次郎はそれに一切動じることなく、歩きながら首を少し傾げるだけでそれをかわした。

かわされても諦める事なく蓮は何度か拳を振るったが、その度に政次郎は体を引き、屈め、傾げる事で蓮の拳の一切を手を使うまでもなく捌き続ける。四回目の拳がかわさ

れた時点で、蓮の手が止まった。

「……そこは素直に殴られるべき所だと思っただけ」

「当てられん奴が悪い」

「……………」

「姐さん、この部屋です」

納得いかない気持ちを抱える事になりながらも、蓮達は男達のいる部屋の前へと到着した。蓮は気持ちを切り替え、蓮はその場にしゃがみこんで扉の下へ手を伸ばす。

そのまま昨日の尋問の際に使用した幻覚毒を部屋の中へ気体状にして流し込んでいく。扉を開けた瞬間に抵抗されてはたまったものではないし、最初にまとめて毒を振り撒いた方が手間が省ける。

「……………これでよし、と。皆、もう入ってもいいわよ」

「相変わらず姐さんの力は便利ですね」

「ろくでもない事に関してだけは一流だからな」

「政次郎くんはたまにはその余計な一言を抑えてみないかしら。……何はともあれ、これで情報は聞き放題よ。どれだけの物が聞けるかはわからないけど、やるだけはやりましょうか」

「はい」

なんとしてでも手がかりとなり得る情報を手に入れるつもりで、蓮達は部屋の扉を開いた。

◆ ◆ ◆
「得られた情報をまとめるぞ」

一時間に渡る尋問を終えて、蓮達五人は弥武組の応接間のソファアに腰を下ろし、顔を合わせていた。

語調こそ変わらないが、いつもより数割増し程に不機嫌な顔をした政次郎が尋問の内容について切り出す。ソファアの感触を確かめるように体を軽く跳ねさせている真魚を諫めることもせず、政次郎は話を続けた。

「魔術師と思わしき、依頼者」の接触は六回。楓丁組の若頭にのみ接触を絞り、先月から一週間前に至るまで、段階的に精神誘導の魔術をかけたものと思われる。接触した地点は路地、廃ビル、若頭の自宅前などそれぞれバラバラだ。普段どこにいるのか、所在はどこか、それらは知らされていない」

政次郎の説明に合わせて、蓮が鹿鳴町の地域地図を取り出してガラスのテーブルの上を開く。地図には既に六つの丸がつけられているが、印された地点には共通点と言える程の物は無く、散り散りとなっている。

強いて言うなら生活圏に近いという程度で、これらの地点から見て取れるこれと言つ

た特徴らしい特徴は無い。

「魔術師は組の武装化にあたり、黒丘会との仲立ちをした。若頭の目から見て魔術師本人は黒丘会のただの取引先の一人という印象で、所属している風には見えなかつたらしい。……この事実が良いか悪いかは微妙だな」

「なんで？」

「良い点は黒丘会程の組織ではない所屬、あるいは個人に過ぎないだろうという事。仲介の際にその魔術師しか姿を見せなかつたらしい。大きい組織に所屬しているなら、黒丘会との立会いで一人という不用心な真似はしまい」

黒丘会は子飼いの暗殺者も多くいる武装組織であり、敵対する者に対しては一切の容赦をしない。邪神教団の中でも特に大規模かつ危険な部類の組織である彼らと交流する事は、それだけで命の危険が隣り合わせである。

その為、まともに彼らについて知っている組織であれば、安全を確保する為にも単身で立会うというのはまず有り得ない。その為、その魔術師が個人として黒丘会と付き合っていると考える方が自然だった。

「悪い点は黒丘会経由で足取りが追えない事だ。黒丘会に所屬している魔術師であれば唐館市（じょうかんし）での黒丘会の動きから手がかりも掴める可能性もあつたが、それも無くなつた。……他の組員にも尋問したが、若頭以外はろくに魔術師に関する情報は持つていなかった

た。若頭から得られた情報は、今言ったので全てだ」

話の後半からは政次郎の顔には険しさが増していき、それが状況の悪さを物語っていた。長々と尋問に時間を費やしたにも関わらず、思うような情報は得られなかった事が尚更政次郎の機嫌を悪くしていた。

政次郎が切った言葉を継いで、蓮が口を開いた。

「一つ、現在宝石は“依頼者”である魔術師の手にある。二つ、そいつは宝石の事を“火の石”と呼んでいた。三つ、“相応しい時と場所”を探している。四つ、若頭はそういった場所を知らない。五つ、黒丘会の所属ではない。……昨日聞いた分を含めてまとめると、こんな所ね」

「……それで、どうやって追うんだ？」

「接触地点付近の監視カメラの映像を洗い直すくらいだな」

「それでも場所がわかるわけではないですよね……鹿鳴町の外まで逃げられていたら、どうしようも無いのでは——」

「いや、鹿鳴町にいる事自体は間違いないと思うわ」

ユーリヤが不安そうにするのを打ち消すように、蓮が確信を含んだ声を上げる。

「まだ鹿鳴町の検問が解かれてない以上、外へ出ようとすれば必ず事を荒立てる必要があるわ。自分で美術館を襲わずに楓丁組に実行犯を任せるような奴が、ここに来て大き

な動きを見せるとは考えにくい。まず間違はなく、町の中に潜伏してる筈よ」

「だろ。楓丁組をこちらが抑えている以上、検問はしばらく続く。その間が勝負だ」
そこまで話すと、政次郎はソファーから立ち上がり、応接間の扉まで歩いて行く。その背中へ十三が声をかけた。

「どこ行くんだ？」

「監視カメラの映像を確認する為に現地へ行く。先月からの映像の確認となると、いくら時間があっても足らん」

「そういう事なら手伝うぜ、どうせ俺がやれる事なんてそんなぐらいいか無いだろ」

「いいだろう、今日から眠れんと思え」

「なんで俺手伝う相手から脅されてんの？」

ちよつとは感謝とか無いんかよ、とぶつくさ言いながら十三も政次郎の後ろへ付いて行く。扉に手をかけた所で、政次郎が残った蓮達の方へ振り向いて口を開く。

「そういう訳で、僕と伊達は鹿鳴町に戻る。そつちは魔術関係の観点で手がかりを探してくれ、何か手がかりがあればこちらで当たろう」

「了解。ユーリヤ、真魚ちゃん、“血の石”と“火の石”の両方で情報を当たってみるわよ」

「わかりました、私は本部に過去似た事件や魔術品の目撃証言が無いか聞いてみますね」

「ん……じゃわたしは図書館とネットで調べてみる。まああんまり期待出来ないかもだけれど」

政次郎達が部屋を出て行き、それに続いて蓮達もそれぞれ手分けして情報を探すべく一時解散する事にした。

ユーリヤが出口方面へと歩いていき、真魚はメンテナンスに出した魔術エミュレータを受け取るべく、蜜柑のいる事務室の道に戻っていく。それを見送り、蓮は応接間の外で見張りとして立っていたカズへ伝言を頼んだ。

「カズくん、蜜柑さんに伝えといて。『楓丁組の連中、事件が解決するまでよろしく』って」

「余所者にあんまり長々とタダ飯を食わせるのも癪ですがね」

「すぐに受け取りに来るわよ」

“ そう時間はかけない ” とカズへ暗に言い切つて、蓮は弥武組を後にした。



「……なー政次郎。十分でいいから寝ていい?」

「何度も言った通りだ」

「いや頼むって。もう丸二日じゃん、さすがに瞼メツチャ重えんだって、限界だつてコレ」

「洗濯バサミでも借りてこい」

二日後の鹿鳴町の警備会社の一室にて、政次郎と十三は監視カメラの映像を夜間の物に絞り、ひたすら早回しで追っていた。

ここに来る前に買い込んだインスタント食品の山をひたすら崩し、音も無く流れ続けるモニターを眺め続けるだけの作業を寝ずに続けた事で、十三の顔にも嫌気と眠気が色濃く出ていた。

一方で文句を言う十三に目をくれる事もなく、この部屋に来た直後から表情を一切変えないままに、政次郎はモニター端にある時間表示以外がろくに動く事のない画面を見続けている。

「……つてもなあ、結局あの若頭とかいうヤツと会った時の映像以外、それっぽいのろくにカメラに映ってねえじゃん。ここまで収穫ゼロに近えじゃん。さすがに精神的にキツイぜ」

「ゼロという訳でもあるまい。〃 接触以降、この付近には出歩いていない〃 というのは確かになっている」

「なんもわかかってねえじゃん、ゼロじゃん」

「ここで潰した分だけ奴の活動範囲を絞れる。最初から他に縋る物も無い、諦めて目を前に向けろ」

「うげえー……」

ここに来てから何度目かもわからない仮眠の要求が再び却下され、がつくりと十三が頭を落とす。

若頭の自白にあつた接触時の映像を確認する事は出来たが、それからについてはカメラに映る事は無く、魔術師の足取りはまるで掴めていない。

ただ、少なくとも確認した範囲にそれらしい姿が確認出来ないということは、若頭と接触した時以外は人目のつく場所に降りてきていないという事の証左にもなる。若頭と会った時の映像を確認した後、寶石を受け渡した日から今日までの間の映像を確認していったが、どこにも魔術師らしき人影は無かつた。

淡々と地図を黒く塗り潰していくだけの作業ではあつたが、ここ二日で鹿鳴町の相当な範囲は確認済となつた。全てが確認出来たという訳でも無いが、こうも見つからないのであれば少なくとも監視カメラと人気のある場所に隠れ家を持っているという事は考えにくい。

人除けの魔術を使って潜伏しているとしても、一般人による目撃からは身を隠せてもカメラのような電子機器の目までは誤魔化せない。確認作業で魔術師のいる場所が“人気の無い地点”に絞れるなら、それは十分な成果と言える。

「……………」

そうして姿が見えない事の確認に目を働かせていると、政次郎のスマートフォンに着信が入る。画面に映った人名を一瞥し、政次郎はすぐに通話を繋げた。

「野曾木か。……いや、こちらの確認の限りでは姿は見えてない。……? ああ、そんなる」

ここ二日の間無かった蓮からの連絡が入り、政次郎は近況を報告する。政次郎の意識が通話に逸れたのを見て、十三は腕を組んで椅子に背を深く預け、目を瞑った。

既に瞼の重みが意識で制御出来る所を過ぎていた十三にとつては、たとえ政次郎が通話に費やしている数分の間であっても貴重な休息時間であった。五分だけだから、すぐ起きるから。自分が納得する為だけの理由を言い聞かせ、体と意識を深く安らぎに沈ませていった。

「——わかった。こちらは待機している、なるべくすぐに来い。……起きろ伊達」

政次郎が蓮との通話を終えてスマートフォンを懐へしまうと、眠っている十三の座る椅子の足を強く蹴飛ばして大きく揺らす。椅子の揺れが体全体に伝わり、急な衝撃に十三の意識が一気に覚醒する。

「んげつ!? つと、とー……いや、寝てねーって! ちゃんと起きてたし!」

「下手な言い訳ならしない方がマシだぞ。……野曾木達が魔術師の居場所らしき地点を見つけたらしい。夕方に合流してそこへ調査しに行く、それまでは休んでも構わん」

「お、やっとか！いやあコレで久々に外に出れ——ってちよい待て。それなら今俺を起こす必要あつたか？」

「言う前に眠つたからだ」

「お前一緒に仕事する同僚への気遣いとかそういうの無えのかよ……で、その場所つてどこだよ」

政次郎の対応に釈然としない気持ちを抱えながら、十三は政次郎へ聞き返す。当の政次郎は不満げな十三にも澄ました顔を崩さずに、淡々と質問に答えた。

「候補は二つあるそうだが、濃厚なのはここだそうだ」

「……なんも無えじゃんそこ」

「一本のみだが、ここに道路が通っている。その付近だ」

政次郎が指を置いた地図の付近には、人里から離れた無名の丘陵地帯のみがただ広がっていた。

11. 来由と行末

「……」アツシユールバニパルの焰ほのお「？」

「そ。多分それが、盗まれた寶石——いや、魔石の正体よ」

日が暮れる頃、蓮達が乗った車は政次郎達のいる警備会社のビル前へと到着し、すぐに十三に運転を代わって——蓮が運転席にいた為に十三は最初後部座席に乘ろうとしたが、肩幅の分だけ座席を圧迫して、真ん中に座っていた真魚から「狭いし汗臭い」と文句を言われた——蓮が電話で伝えた丘陵地帯へ移動を始めた。

真魚のスマートフォンを運転席の横へセツトしてカーナビアプリを起動した後、到着するまでの時間を使い蓮はこの二日で得た情報を政次郎と十三へと共有するべく話し始めた。

「アツシユールバニパル王の火の石」、カラ・シエールの呪われた宝玉、邪悪の心臓——色んな呼び方はあるけど、その実態は旧支配者達自らの手によって生み出された、真正銘アーティファクトの魔石よ」

「何故それがわかった？そして、それと魔術師の居場所の関係性は？」

「オカルトショップのマスターにちよつと手伝ってもらったわ。古代メソポタミアから

現代まで残ってる代物なんて、そう無いからね。……魔術師の居場所との関係については、ちよつと説明が必要ね」

「……はあ」

「本当に必要な事なんだから『また始まったよ』みたいな溜息をこれ見よがしにしないでくれるかしら」

「またやるの?」

「直球で口にしろつて言ってるんじゃないのよ真魚ちゃん」

車が走るにつれて少しずつ信号に止められる頻度は低くなり、周囲を囲む建物は減っていく。生活圏から離れ、夜を迎えた道路に音は無く、エンジン音と車内での会話以外は聞こえなくなっていく。

そんな中、政次郎と真魚からの無言・有言の文句を流しながら、蓮は説明を始めた。

「まず、この石の来歴をざっと説明するわね。メソポタミア文明が栄えていた頃、邪鬼が住むとされる未開の洞窟で鬼により守護されていたこの石は、力を求めた一人の魔術師によつて奪われたわ。魔術師の名前は、ズスルタン」

「……そういやメソポタミア文明つてめつちや昔の話だよな。何年前の事だ、それ?」

「紀元前七世紀の話だから、2600年以上前ね」

「めつちやスケールデケエ」

疑問の答えについて蓮が平然に返すと、十三は想像だにしない年数を示され面を食らった。単純に古すぎる話という事もあるが、それほど昔の物事が今になって事件に繋がるのは十三の常識では考えにくい事だったからだ。

「ズスルタンは洞窟から戻ると、魔石の力を使うことによつてアッシリア王国の王、アツシユールバニパル王の側近として仕えたわ。石の力により未来を見通し、その予言によつて王政を支えた。その功績から、赤き魔石は“アツシユールバニパルの焰”と呼ばれたらしいわ」

「未来予知の魔術か。中々興味深いな」

「……興味深そうにしてる所悪いけど、この石は未来を見通すだけなんて優しい物じゃないわよ」

政次郎はここに来て蓮の話に明確に興味を寄せた。政次郎は魔術師では無いが、自身の仕事に使える物、あるいは有益と思つた情報に対しては詳しく知ろうとする傾向がある。

しかし、この魔石に関して言えばどのような形でも、常人が便利な道具感覚で使える物ではなかった。

「ある時、王国に災いが降りかかり、人々はそれを魔石の呪いと呼んだ。その事から魔石ごとズスルタンは国を追放され、行き場を無くしたズスルタンはカラ・シエールという

町へ逃げ込んだ。……しかし、その町でも魔石の力は知られており、間もなく町全体で魔石を巡る抗争が起こったわ」

「いつの時代もつまんねー理由で内乱起きてるもんだな」

「かの石は邪神により生み出された遺産です。恐らく、ただそこにあるだけで人の欲望や悪性……精神に強く干渉する性質を持つでしょう。一概にその人々が悪かったとも言いきれません」

蓮の話から傭兵として紛争地で戦っていた頃の事を思い出し、十三の顔に険しさが過ぎる。声に僅かな失望が含まれるのを聞き、ユーリヤが過去の人々への擁護を入れた。

魔術に対して正しい理解を持たない多くの人々は、それを便利な道具の様に扱う事で至る力を発揮するのであり、自身の欲求のままに使えば必ず身の破滅を呼び込む事となる。

それを知らない人々は、目の前に結果として現れた奇跡のみを信じ、それが孕む狂気と危険へ対策を取らない。そういった心の隙と、力への盲目さが魔術に関わる悲劇を起こしてきたのである。

「話を続けるわね。抗争の果て、ズスルタンは町を統べる王に捕えられ、魔石とその命を奪われたわ。その死の間際、ズスルタンは魔石が存在した洞窟の邪鬼を封じた魔術を解

き、また石へ向けて呪言を叫んだ。『外なる神々よ、旧き支配者達よ。お前達の物はここにある』——その後、一夜にしてカラ・シエールは滅びたわ」

「エクストリーム心中だね」

「……そ、その表現はどうかと……」

「あの真魚ちゃん、真面目な話を一言で軽いノリにしないで欲しいんだけど」

魔石によってカラ・シエールへ訪れた悲劇に対し、端的すぎる表現で真魚が補足するように例え、過去へと気持ちを持っていった蓮とユーリヤの気が削がれた。

言葉の選び方こそ不謹慎だが、話の要点を明確に掴んだ上での例えであった為に、蓮もあまり強い語調で真魚へ注意を入れる事は出来なかった。

「それで、その逸話がどう関係する」

「まだ話は途中よ。持ち手を失った魔石はそのまま廃墟のカラ・シエールに残ったのだけど……魔術師の“ズスルタン”という名前が問題だね」

「名前？」

「ここから先はユーリヤが調べた事だから、ユーリヤに任せるわ」

「はい、わかりました」

「ここで蓮は話を一旦区切り、話し手をユーリヤに交代した。それに伴いこほん、とユーリヤは話を切り替える為の咳払いをしてから口を開いた。

「蓮さんが調べたところまでの情報を元に、過去に“アッシュールバニバルの焰”、及びそれに纏わる物について関係が確認された事件を極東支部や本部に調べてもらいました。……そうすると、魔石と直接の関わりは無いのですが、気にかかる事件が見つかりました」

「とうとう?」

「1560年頃、ハンガリーにある山岳地帯の中に立つ黒い石柱郡の近くにて、とても人の世の物とは考えられない怪物が現れ、当時そこへ侵攻していたトルコ軍がそれと応戦、兵の半数を失いながら撃退した——という事件がありました」

「えらい時間飛んだなオイ。つてかハンガリーつて、ヨーロッパじゃん。なんで古代の中東の話が、中世ヨーロッパに繋がんだよ」

「それが、その邪神が現れた地域の一帯は当時、“ズスルタン”と呼ばれていたんです」

「……何だと?」

「古代に旧支配者の魔石と関わった魔術師の名前が、中世ヨーロッパの地域につけられた。……どう? 偶然の一致にしては、妙だとは思わないかしら?」

「……フツーに考えりゃ、ありえねーわな」

古代メソポタミアにて惨劇の引き金となった魔石を扱った魔術師と、中世ヨーロッパにて軍が壊滅させられた謎の怪物が現れた山岳地帯の名前。二千年という気の遠く

る時間の開きがあつて尚、その二つは合致した。

地域も年数も離れたこれら二つの事件に繋がりがあるといふのは、常識で考えれば有り得ない。……だが、蓮達の仕事において言えば、時には“有り得ない”という言葉の意味が反転する。

“有り得ない”事がそこにある時、そこには必ず何らかの意味があり、理由があり、意図があり。そしてその裏には狂気と悪夢が脈動し、陰謀と邪悪が息衝いている。

「その怪物が現れた山岳地帯には当時、村がありました。トルコ軍の侵攻により当時の村民は皆死に絶えたそうですが、その後新たに別の住民が住み着き、村は再建されました。……そして、そこに住むようになった村民の間には一つの伝承があるんです」

「この流れだと、ろくな言い伝えつて予感しねーな」

「その通りです。“山の上の『黒の碑』^{いしづみ}には悪鬼が宿り、触れた者に呪いを齎す”——この碑は山にある黒い石柱郡の事を指しますが、それに触れた者は皆悪夢に心を蝕まれるそうです」

「……それだけでは無い、のだろうな」

「私は見た。かの昔に死に絶えた愚劣な狂信徒どもの群れを見たのだ。あれが夢でなるものか、奴らは亡霊と化して尚、奴らの邪神を地獄から呼び戻していたのだ。……その悪夢を見た人の、手記の内容です」

ユーリヤがここまで話した所で、唐突に真魚が背を伸ばし、小さく手を上げながら話に加わってきた。

「あ、ついでにその話の中で出てきた“黒の碑”って、“黒の書”……あー、“無名祭祀書”の方がいい、かな。その中にも、ちよろつと名前出てたりするんだよね」

「無名祭祀書……唐館地下鉄にいた食屍鬼の事件でも回収したアレか」

「そ。ホントに触れる程度だったんだけど、『アレなんかの邪神の象徴なんじゃね？』って」

「軽っ」

「いやそんなフランクな書き口されてる本じゃないからね」

以前蓮達が挑んだ怪異事件の中に、唐館市で大量の行方不明者を出し続ける地下鉄の調査があった。

その事件の実態は知恵を持つ食屍鬼の魔術師が、同類の集団を率いて大量の生贄を“確保”していたという物だったが、その事件の中で蓮達は“無名祭祀書”の一部が複製されたデータファイルを回収していた。

その内容は著者が見聞した邪教の实在を様々な論点から証明するという物で、原書は出版後即時に発禁・焚書され、著者は出版後に人の手によるものとは思えない変死を遂げたという、曰く付きという意味では一級品の本である。

「ここまでが調べた情報で、ここからは私達の想像なんだけど……この“黒の碑”の見える悪夢は、かつてトルコ軍に撃退された邪神が、自らが復活する為の儀式を夢を通じて見せているんじゃないかしら」

「ふむ」

「山岳地帯の村にかつて住んでいた村民は中東からハンガリーへ流れ着いた邪教徒の民族で、どういう関係があるかは知らないけど、ズスルタンが過去に関わった悪鬼……邪神を崇め、その召喚を企んでいた。流石に時間が勿体無かったから裏取りは出来なかったけど」

「………続ける」

ここまで提示した情報を元に、蓮はそこから導き出した推理を話していく。

様々な観点から語られたこれまでの話が、少しずつ終着点へ向けて収束しようとしているのを感じて、十三は運転をしながらも真剣に耳を傾け、政次郎も静かに話の続きを促した。

「その邪神は“碑”の神とされているけれど、実はこの“碑”は世界の各地で見られていてね。調べた限りでもメキシコ、ブリテン諸島にある事が確認されているわ。……つまり、“碑”を通じさえすれば、どこにでも現れかねない」

「……まさか、今向かっている先にその“碑”があるのか？」

「いや、多分無いわ」

「ねーのかよ」

それまでの話の流れからの推測をあつきりと否定され、十三は予想外といった声を上げる。政次郎も口にくそしなかつたが、その顔には話が急に絶たれた事による疑念の表情が浮かんだ。

「ならば、今向かっている場所はなんだ」

「言つたでしょう？」 碑” を通じさえすれば、どこでも現れる。……ズスルタンがかつて手にし、呪言によつて邪神を呼び寄せる魔石なら、“碑” の代わりとして召喚の触媒、あるいは目印として使えるんじゃないか。私はそう考えたわ」

「……そんな事が出来るのか？」

「難しいかもしれないけれど可能性はゼロではないし、魔石が本物だとすればそれだけの魔力は備えている筈よ。何より、碑のある山岳地帯と魔術師がその名を共有している以上、同じく碑と魔石にも何らかの因果関係は有り得るわ」

蓮の立てた推測を聞き、政次郎が目を伏せてここまでの話を深く考える。

古代メソポタミアの魔術師、それによつて使われた呪われた魔石、中世ヨーロッパの山岳地帯、かつて現れた邪神、無名祭祀書に記述された“碑”。それぞれが糸のような繋がりを持ち、偶然と断ずるには不可解な共通点もある。

その上での推理として示された、魔石による邪神の召喚。多少の裏取りが抜けている事や、想像に過ぎない所を踏まえても、確かに無視出来ない可能性であった。

「……どこでもいい、と言ったな。ならば、何故この丘陵地帯なんだ？」

「大きな理由が二つ。一つはこの市内において人氣が少なく、かつ道路が近くまで通つてゐる事。誰にもバレず、かつ早く儀式に移りたいなら、遠出する足は必須だからね」

「二つ目は何だ」

「山岳地帯にある碑の場所と近いロケーションだからよ。話によるとその碑は山の上にあつて、周囲は森に囲まれながらも、碑の周囲は開けた状態になっているらしいわ」

「召喚するにあたり、少しでも儀式の再現率を上げるといふ事か」

「そういう事ね」

「……おい、アレ見ろ」

話の区切りがついた所を見計らい、十三が前を指差す。気付けば丘陵地帯の深くまで進んでいた車の周囲は背の低い木々に囲まれ、舗装された道路の終わりが見えていた。

十三が指した先には、道路から少し外れた場所の木々の陰に、ナンバープレートの外された車が木によって隠られるように斜めに駐車されていた。

「……読みは当たりみたいね。行くわよ皆、散々あちこち行かされたけど、ここでケリをつけるわ」

「ああ」

「急ぎましょう。……何やら、淀んだ気配が漂っています」

「二日もカンヅメにされてた分、ストレス解消と行くかね、っと」

「ん」

車を道路の端に停めて外に出た蓮達は、トランクからそれぞれの銃器を取り出し、弾倉の確認だけを済ませて手早く戦闘の準備をする。

誰よりも早く銃器の確認を終えた政次郎は、続けて手榴弾などの戦闘用の備品を確認し始め、外套の中に手早く戻して取り出しやすい様にセットし直していく。そうしている最中に、蓮は横から声をかけた。

「政次郎くん、これも持っていてくれないかしら」

「……なんだこれは」

「“切り札”よ。……まあ、使わずに済んだ方がいいんだけど」

「切り札？こんなものがか？」

蓮が差し出した物を政次郎は胡乱げに見たが、すぐに言葉に従い外套の中に入れる。政次郎には蓮から手渡された物が何の役に立つか、一見しただけではわからなかった。

とはいえ、常に財布を気にする立場である蓮が、態々持ってきて自分に渡してくる以上は、何かしらの意味や力を持つ物であるという事は間違いないだろう。そう思い、特

に追求はしなかった。

「何に使うかぐらいは聞いておきたいがな」

「別に特別な使い方は無いわよ、見た通りの物だから」

「……益々胡散臭くなつたんだが」

「おーい、何してんだ二人共。こっちの準備終わったぞー」

銃器を肩に担いだ十三が話を続けたままの蓮と政次郎に声をかけ、二人へ出発を促してきた。

それまで蓮へ疑わしげな目を向けていた政次郎は、溜息を小さくついてそれまでの話を打ち切った。

「……まあいい。使わなければいけない時が来たら、その時に言え」

「それでいいわよ。……ユーリヤ、さっき言つてた心配つてどっちからする？」

「はい。……向こうの方です」

「オツケー、案内お願いね」

ユーリヤがその場で目を閉じて集中し、その場に僅かに残された魔力の残滓と異様な気配を感じ取り、そこから概ねの方向を指し示す。

案内の為に前に立ったユーリヤの斜め前に十三と政次郎がつき、蓮と真魚が後ろにいた状態で五人は道路から外れ、先の見通す事も出来ない暗い林の中へと入っていつ

た。

12. 月華の暴威

「——ふむ、良い月だ。月明かりというのは実に落ち着く。月そのものが光っている訳でもない、単なる太陽光の反射だというのに……あの光はどうしてこうも、心を惹き付けるのだろうかね」

丘陵地帯の道らしい道も無い林を抜けた先、生い茂る木々が唐突に開かれ、風に揺れる程の高さも無い草地と僅かに隆起した岩のみが見える自然のホールを中心に、場違いな男が立っていた。

星の光を遮る事の無い夜空に高々と昇った満月を仰ぎながら、黒を基調としたフードのついたローブで全身を覆い隠したその男は、ただただその光景に向けて嘆美の言葉を漏らしていた。

「こういう夜だ。私以外にもこうして今、月を見ている者も多くいるだろうな。この町、この国に限らず。世界のあちこちの人間が、夜に潜む化生達が……裏側にて眠り続ける、古き神々もまた」

男は誰に告げる訳でも無い独り言を話し続ける。語り口こそ静かだが、その口の形は微かな興奮と高揚に歪み、吊り上げられている。

音の無い空間に風が一筋抜けて行き、男のローブを揺らしていく。流れていく風の揺らぎの中に含まれる物を感じ取り、男は空から視線を外し顔を下げ、表情を固く引き絞り直した。

「……さて、と。思っていた以上に動きが早かったな。正直、それなりに慎重に動いたつもりだっただけにシヨックはある。が、過ぎた事だな。……一応は聞いておこうか」

風上から聞こえてくる、徐々に木々を掻き分け近付いて来る音へ向けて聞こえる様に、男は声を一回り大きくする。こちらの声が聞こえたのか、月明かりも届かない木々の陰にいる闖入者の足音はそこで止まる。

姿は未だ確認出来ないが、重なった移動音から考えて複数人。だが、警察や軍隊の様な大人数では無い。それならば問題無い。恐らくは同業、或いは内々に裏の事件を対処する隠密部隊の類だろう。

それならば、ここで処理してしまえば後は無い。余裕を持って、今もこちらの様子を見つめている今夜のゲストの応対に臨む事にした。

「目的は何かね。私の持つ物か、私が待つ神か。それとも——私の命か」

その瞬間、足音の方向より離れた木々の上から銃声が響き、一発の銃弾が静寂を裂いた。

男は左腕を瞬時に動かし、銃声へ向けて頭を庇う様に構える。左腕に当たった弾丸は

腕を中心に、衝撃を男の体全体へと波及させ、それに伴い男の体は吹き飛ばされた。

足が地から浮き、体が衝撃に押されるがままに傾こうとする。男はそれに耐え切り、吹き飛ばされた先の地面に右足を突き立て地面を削り取り、体をその場に留めた。

頭を庇った左腕を下ろし、再び銃弾が飛んできた方向と足音のした方向の二つを見据える。二度目の銃撃に備えて警戒していると、足音の方向からは四人の武装した男女が現れ、そこに遅れて後ろから長銃を背負った一人の男が小走りで合流した。

「……狙撃銃ライフルの直撃に耐えるか。その腕、何を仕込んでいる」

「仕込むとは随分人聞きが悪い。これが私の自慢の腕だ」、それ以上の返答がいるかね？」

「ふん、まあいい。どういうカラクリかは、直接貴様の体で確かめる」

「やれやれ、話し合う余地すら無いとはそれなりに悲しい。……ところで、質問には答えてくれないのかな？」

「私達の目的が何か、だったかしら？……今の一発がどこを狙ったのか。それで十分でしょ」

「それも一つや二つではない……ぜんぶだ……」

「ごめん真魚ちゃん今そういう場面じゃないから」

不意を突いての狙撃をただ腕で防ぐという荒業を成した目の前の男を政次郎は疑わ

しげに見ながらも、それ自体はさして驚く程の事でも無いと言う様に、自然体のまま目の前の男を見据える。

先の一発が全ての答えである、と示した蓮の言葉に真魚が少々力の抜ける補足を入れてきた為、これ以上この場の空気を弛緩させられる前に蓮が真魚へ釘を刺した。

ライフル弾を体を受けているにも関わらず、さして痛みも見せずには飄々としている事もそうだが、気配を消しての政次郎の不意打ちに一瞬で反応して急所を守った目の前の男の動きは、間違いなく常人から外れている。単なる魔術師という訳では無く、体の何かしらを弄っている可能性が高い。

政次郎の急襲によつてあわよくば命を取り、それが届かないまでも一気呵成に攻撃して優位を取つて倒し切るといふ策は無くなった。ここからは慎重に、油断なく立ち回る必要がある。

蓮達は目の前の男を、その一挙一動も見逃さない様に睨みつける。そこに魔術は介入しているか、常人との違いはどこか、そもそも人間かどうか。各々の考えで、隙を見せないよう気を払いながら、男の様子に目をやる。

「ふうむ、随分と愉快な刺客のようだ。普通追手というのは、もう少し話をしたがる物だと思つていたのだが。……もしや、私の目的も既に何かしら見当を付けている、のかな？」

“碑”の邪神の復活と招来。……そうでしょう?」

「なんと。美術館の強盗から、この短期間でそこまで突き止めたのかね。……なるほど、それなり以上に聡明なお嬢さん方らしい」

「その答えは合ってるって事でいいのかよ、人外の兄ちゃん」

「その強面のお兄さんは中々傷つく事を言う。私は見ての通り正真正銘の人間なので……ほら、頭に角が生えていたり、顔に目玉がいくつもあつたり、肌に鱗があるわけでも無いだろう」

十三が手に持つ軽機関銃を片腕で支えて銃口を向けながら、探りを入れる為に言葉を飛ばす。それに応え、男は顔を隠していたフードを右手で取り払い、色は蒼白ながらも普通の人間にしか見えない顔を蓮達へ見せた。

男の言葉の通り、その顔に怪物の特徴の様な目立った変異や異常は見当たらない。平然と、或いは少し愉快そうに冗談を飛ばす口振りには狂人のような乱れも無く、落ち着きを持っていた。それは一見すれば平常な人間の様子と同じに見える。

……但し、それは銃器で武装した集団を前にした状況で無ければ、の話だ。

「おっと、質問に答ええないのは失礼に当たるな。答えは”その通り”。私の目的は君達が邪神と呼んでいる、この世ならざる存在の顕現だ。……いやはや、素晴らしい慧眼だ。“碑”がある訳でも無いこの地ならばそう突き止められないだろうと踏んでいたのだ

が……残念な反面、感心も大きいよ」

「そうか」

やれやれ、と残念な声を上げつつ大袈裟に肩を竦めながらも、男は顔に笑みを浮かべる。その動きの隙を突き、政次郎は腰のサブマシンガンを素早く右手で抜き、さらに左手で素早く破片手榴弾を取り出して投げつけると同時に、添えた指で引き金を引いた。

片手による早撃ちによって銃口は大きくブレるが、それでも反動を上手くいなす事で数発の弾丸は男へ飛び掛かり、ワンテンポ遅れて先に投げられた手榴弾が男の目の前まで放物線を描いて届こうとする。

が、男のローブの左袖を内から引き千切つて現れた、本来左腕のある場所から生える複数の触腕が軋しなやかに、かつ凄まじい速さで動く事により、体を狙った銃弾は弾き飛ばされた。手榴弾もまたその触腕によって鞭で殴られたかの如く、信じられない勢いで真横へと飛ばされる。

銃弾は触腕に軌道を逸らされながらも空気を切り裂いて飛び、男の後ろ斜めの地面を穿つ。遅れて手榴弾が遠くで爆発し、誰もいない空間を煙と共に吹き飛ばした。

政次郎の独断による攻撃に面を食らった蓮達は、手榴弾の爆発に備えて体を伏せ気味に構えていた。

「つだあー！危ないでしょうが政次郎くん！何か合図くらい出なさいよー！」

「そんな挙動を見せれば相手に警戒されるだけだ」

「……あの、こちらの方向に弾き返されてたら、私達皆死んでいたのでは……？」

「即死さえしなければシスターの魔術でどうとでもなる。さらに言えばそれを防ぐ為に同時に撃った。事実、こちらに飛ばす余裕は無かつたらしい。あちらの手の内が判明した分、結果的にはプラスだ」

「こいつ本気で言ってるのマジタチ悪いわ」

「びっくりした」

結局は爆発した場所から距離があつた為に、それほど破片はこちらに飛んでくる事は無かつた。それに加えて咄嗟に十三が蓮達と手榴弾の間に入るように動いていた為、その場の全員には掠り傷一つ無い。

間に入った十三にいくつか飛んできていた破片は距離により勢いを失っており、それに加えて十三の力が込められた筋肉の鎧によつて阻まれていた。十三が構えを解いて体を動かせば、同時に十三の体に張り付いていた破片が地面にぱらぱらと落ちていく。奇襲を仕掛けた当の政次郎は遠くまで飛ばされた手榴弾の爆発には一切気を払わず、目の前の男の左肩で揺らぐ肥大した異形の触腕と、男の表情と様子を観察を続けていた。

男の顔にはそれまで以上の愉快さが浮かんでおり、喜悅といった様子でくつくつと

笑っていた。

「くくつ、いい、実に面白いな、君達は」

「……結構理性的なのね。そんな気持ち悪い物、体にくつつけておきながら」

「ふうむ、少し傷つくな。先程言った通り、これは私の自慢の腕なのでね。まあ最初の内は少々抵抗もあつたが、“住めば都”……ああいや、“習うより慣れる”、か。実際に使ってみれば、良い所も多いのだよ。君達のような危険に対するお守りにもなつてくれるしな」

「銃弾を弾くバケモンアーム仕込んだ不審者が何抜かしてんだよ」

「ん、でもさ。わたし達が危険っていうの、別に否定出来なくない？」

「……そ、それを自分から言っちゃうのは、ちよつと反応に困りますね……」

ロープで隠せなくなった男の左肩から先には本来ある筈の腕は無く、黒色の触腕達がうねうねと蠢いている。超自然的なそれは、ただ目にするだけでも生理的な嫌悪感を与えてくる。

人ならざる異形の腕を持つてなお、男の態度は理性的だった。魔術に関わる過程で、旧支配者やその眷属に“侵食”されるケース自体は多いのだが、大抵は体と魂の不一致により真つ当な知性は奪われるか、あるいは狂気に対する自己防衛の為に自ら思考を閉ざす事となる。

だが、目の前の男はどうやら異形に体を侵食されながらも、それを自身の意志で制御し、そこに疑いを持つていない。部分的にのみ侵食を抑えたまま力を振るう、“共存”の状態を維持し続けているらしい。

口振りから考えて、昨日今日こうなつたという訳でも無いようだ。その上で、魔術も扱うことが出来るとなると、中々に手間な相手なのは間違いないだろう。眉を顰めて、蓮は誰にも聞こえない程に小さい舌打ちをした。

「ここに辿り着いた聡明さ、瞬時に殺しにかかる容赦の無さ、それでいて自然体でいる度胸。成程成程、相当な場数を踏んでいるのだろうな。……どうやら、それなりに楽しい夜となりそうだ」

「政次郎くんと一緒にたにされるのは不服極まりないけど……まあ、手を出すのが早いか遅いかってだけね。儀式の前みたいで良かったわ、ここでアンタを処理して一件落着くと行くわよ……!」

「君達にとつてはそれがベストだろうな。……しかし、そう上手くいくものかな?」
「余裕ぶつこいてんじやねーぞ優男、コイツはどうだ!」

あくまで愉快そうに余裕を保ち続ける男へ向けて、十三は自身の持つ軽機関銃をしっかりと両腕で構え直し、目の前の“化物”へ向けてその引き金を強く、長く引いた。

フルオート機構による鉛弾の嵐が、小さな空気の風船を続けて割るような発砲音と共

に前方の男へ放たれる。それを見た男は左肩を前に出すように体を傾け、巨大な触腕達を前方で揃え、壁にするように前に突き出した。

弾丸が到達するよりも先に、並べられたそれぞれの触腕がさらに一回り膨らみ、全体へ血管のようなものが浮き出る。月光を黒く照り返す触腕は、飛んで来た弾丸を岩を穿った様な音を立てつつも次々に受けていった。

引き金を引き終えて、十三は前に出された触腕の様子を伺う。銃弾を受けた所に僅かな凹みのような痕こそ見受けられるが、触腕の壁に歪みは無く、体液が吹き出るといった事も無い。銃の暴力は、触腕の頑強さのみを以て捻じ伏せられていた。

「……フザけてんぜクソツタレ！ M249^コの値段いくらだと思つてんだ！」

「ふむ、こちらもそれなりに力を入れて防戦したのだが。何か気に障ったかね？」

「——強いて言うなら、懐に入られて尚油断している所だ」

「む」

男が十三の言葉に答えている時に自身の右側から聞こえてきた声に顔を向ければ、いつの間にか男の右側へ回り込む様に接近していた政次郎が刀を抜き放ち、胴体へ向けて刃を振るおうとする姿があった。

連射を弾く音に紛れて銃の射程から一気に距離を詰めていた政次郎は、直前にフードを右手で取り払った動きから、触腕は左腕にのみあるものと見当を付けていた。事実、

こちらの声に反応した男は右腕を引き、左の触腕を動かしてこちらに対応しようとしている。

しかし既に間合いの中まで入り込んだ、政次郎の刀が体を切り裂く方が速い。一太刀で胴体を飛ばすつもりで、政次郎は渾身の力を込めて胴打ちを放った。

「油断に見えたのなら謝るが——ここまで迫り着いた君達相手に油断するつもりなど、最初から無いよ」

「……ッ！」

政次郎はその目を僅かに見開き、男の飄々とした声を聞きながら目の前の光景を見る。男の胴体には刃が食い込むどころか、ローブの布一枚を裂いただけでその刀が止まっていた。

明らかに刀よりも硬い物にぶつけた振動が両腕まで伝わり、その異様な感触に違和感を覚える。刃を少し下げてローブの下を見れば、触腕が胴体に絡まっており、その硬度によつて刀を弾いていた。

それを確認すると同時に政次郎が胴体から男の動きに目をやれば、政次郎へ向けて動かしていた左腕側の触腕の一つを、今まさに振り下ろそうとしていた。

「チー」

後ろへ飛び退くにも弾丸すら弾く触腕の速さを考えれば難しいと考え、政次郎は胴体

へ叩き付けた刀を翻して自身の前に掲げて構える。鞭の様に撓り振り落とされた触腕が、政次郎との間に差し出された刀に阻まれ、叩き付けられる。

常識を超えた力で打ち据えられた事で、刀身が一瞬曲がる感覚が両手へと伝わる。思考を挟まず、反射的に政次郎は後ろに跳びながら、刀の柄から手を離れた。

その場に手放された刀は、触腕により轟音と共に地面に叩き付けられ、勢いのままに地面をバウンドして背丈よりも高く空中に投げ出された。

あのまま受けていれば刀が折られ、それに巻き込まれて余った勢いで自らの手首も折れていた。自身の得物がどこへ飛ばされているかを冷静に見送りつつ、目の前の男を見る。跳び退いた自身へ追撃しようと、別の触腕を構えていた。

今度は先程の様に防御されないよう突き込むつもりなのか、男は細く硬く引き絞られた触腕を真つ直ぐにこちらに向けている。今しがた刀による防御も成立させなかつた力を以てすれば、恐らく腕を構えた所で防ぎきれないだろう。

——ならば、防御する必要は無い。

「政次郎くん！」

「やらせませんッ！」

触腕が政次郎へ飛ばされるよりも先に、政次郎とは逆方向に遅れて回り込んでいた蓮とユーリヤが動く。

蓮が注意を向ける為にダゴン殺しによる散弾を男の側面から放ち、その直後にユーリヤが背負っていたスレッジハンマーを手に持って男との距離を詰めるべく走る。

蓮の発砲の直前で反応した男は、政次郎へ向けようとしていた触腕も含めて左腕側の触腕を、軽機関銃の連射を防いだ時同様に目の前で壁の様に固め、散弾を防いだ。

「——ぐ」

「せええいっ!!」

十三の軽機関銃の銃弾を受け続けて尚、微動だにしなかった触腕の壁が散弾を受けた直後に揺れ、隙間一つ無く詰められていた触腕の列に乱れが生じる。

その瞬間をユーリヤは見逃さず、生み出された触手の隙間に向けて自身の魔力を込めた鉄槌を叩き込んだ。

「がっ……いっく、見た目に似合わず荒っぽいお嬢さんなのだ……いっ」

ダゴン殺しの直撃によって乱れた隙間に、ユーリヤの鉄槌が振じ込まれる。その鎚頭は男の顔の前にまで迫るも、触手を押し退けるのに大半の力が殺された為にそれ以上前へと動かせなかった。

触手の壁に埋まる形となったハンマーを、体勢の有利のままにユーリヤは自身の力の全てを使い押し付け、男を押し潰すつもりで動きを封じようとする。

が、いかに退魔師として鍛えているユーリヤの膂力を持ってしても、男の触腕の力に

は敵わず、徐々に押され返されて、逆にユーリヤが力づくで押し込められていった。

「く、うつ……」

「臆せず殴り掛かる勢いも、腕力も悪くはないが……まあ、相手が悪かったと思いたまえ……！」

「シスター、離れろ！」

ユーリヤが手に持つスレッジハンマーごと男の触腕に押されて体が傾いている所へ、着地した政次郎が地面に片膝を付いて狙撃銃を構える。ユーリヤへの警告と同時に、政次郎は男の頭へ向けて発砲した。

その警告を耳にして、男は首だけ振り向きながらユーリヤを押さえ込んでいた触手の半分を後ろへ回し、政次郎の銃撃を最初の不意打ちの時同様に防ぐ。軽く溜息をついて、男はつまらなそうな顔を政次郎に向けた。

「……やれやれ、一度通用しなかった事を再び繰り返すのは感心しないな。あまりスマートとは——」

「——ッ！」

男が政次郎へ言葉を向けると同時に、依然触腕に押されているユーリヤが男の下半身に向けて前蹴りを放つ。男の足を蹴り飛ばしたつもりが、足裏から伝わる感触は硬い。ローブの下を守っている触腕が、足にまで伸びているのだろう。

しかし、それによって跳ね返る衝撃と共にユーリヤは後ろへ下がりがり、その力で触腕に埋まる形だったハンマーを引っこ抜く。武器が自由になったユーリヤは、素早く後ろへ跳んで男から距離を取った。

「……そう簡単に逃がすと思うかね」

大きくその場から跳んで離れていこうとするユーリヤを一瞥し、男は触手を伸ばそうとする。が、離れていくユーリヤの表情を見て違和感を覚えた。

その顔はこちらからの攻撃を警戒する様子では無く、焦りと恐怖が浮かんで見えた。こちらが触腕を構えている前から怯える、というのは少々妙だと感じる。

よく見れば視線も少々こちらの左腕からは外れていた。左腕ではなく、自分自身を見ているように……いや、それにしては視線が下向きになっている。まるで、足を見つめているような——

「ッ!?!」

こつ、と足に金属が軽く当たたる感触がする。それに目を向ければ、いつの間にか赤い缶が男の足元へ転がってきていた。

それを男が確認した瞬間、爆炎がその場に舞い上がった。

13. 光満ちて

「……上手くいったか。いいタイミングの援護だった」

男の足元で炸裂した炎は落ち着き、爆心地の中央で僅かに生い茂る草と、黒く爛れる触腕の塊を燃料に僅かに揺らめくのみとなっていた。

男のいた地点には膨らんだ触腕が地に伏せるのみで、男の肉体を確認する事は出来ない。いかに至近距離で受けたと言っても、左半身を除いて形もなく吹き飛ばされた、という事はまず無いだろう。

となると、炸裂の衝撃を受けて倒れ込んだ触腕に体を押し潰されたか……真偽はわからないが、目の前の触腕が地面に転がり続けているのは事実だった。

「無事か、シスター」

「し、死ぬかと思いました……」

「む、どこか痛めたのか」

「政次郎くんに焼殺されかけた”つつってんのよ仏頂面”」

得物を失った政次郎は狙撃銃を背負い直し、小回りの利くサブマシンガンを手に取り。目の前に伏せる触腕に動きは無いが、死体を確認するまでは倒したとは言えない

し、男が死んでも触腕のみが分離して動き出すという事も有り得る。

政次郎は緊張の糸を緩めず、目の前に燦る火と黒い異形の塊を見やりながら、徐々に距離を取る。そうしながらユーリヤの状態を確認する為、声を飛ばした。

手榴弾が炸裂する直前にギリギリで足元に転がるそれに気付き、その場から飛び退いたユーリヤは顔を引き攣らせながらも政次郎同様に目の前の異形に警戒を払いつつ、アサルトライフルを手取る。

一歩間違えれば自分も炎に巻かれていた事実には慄然とするユーリヤの心情を、隣の蓮が代弁して政次郎へ返した。

「シスターがとっかん吶喊した時点で、力負けして離脱する事になると予測しての事だ。拮抗したのは嬉しい誤算だったが……あの時に手榴弾を取り出した判断は正解だったな」

「いつ投げたかと思つたら、私達が必死で助けようとしてたつて時にこつそり転がしてたのね……」

「防げん攻撃で腕を潰すよりは、その手でピンを抜く方が建設的だった。とはいえ、十中八九そつちが動くとは思つていたぞ」

「あの、十の内の一つだったら——」

「今回は上手く行つた。結果が全てだ」

蓮達が政次郎から男の注意を逸らす為の援護よりも一瞬早く、政次郎は触腕を向けら

れた時に懐から焼夷手榴弾を取り出し、銃声とユーリヤの攻撃に紛れて男の足元へ静かに転がしていた。

自身の命を奪われようとしている時にも、政次郎は冷静に計算して行動する。正しさと合理性によって自身の命の勘定も排除したその判断に対し、蓮とユーリヤは何も言えずに顔を引き攣らせた。

「しかし並の生物がああ距離で受けければ骨も残さず溶けるだろうが、原形が残るとはな。大した丈夫さだ、これだから近頃の化物というのは困る」

「そんな」近頃の若者はこれだから「みたいな」

「……ただの火では焼けにくいのかも知れんな。シスター、真魚。変に動き出す前に魔術で消し飛ばし——」

政次郎がユーリヤと離れた位置で待機している真魚へ向け、魔術で攻撃するよう指示を飛ばした瞬間、そのシルエツトがブレた。

正確に表現すれば、それはただ単純に動いただけだった。が、あまりにも動き出しが速すぎて、一瞬ただその周囲が揺れただけのような、そんな錯覚を覚えさせられてしまった。

政次郎は鍛え抜いた動体視力と反射神経によって、ギリギリの所でその動きに反応した。瞬時に左半身だけを引きながら首を右に曲げる。その瞬間、それまで政次郎の首が

あつた空間を黒い触腕が突き抜ける。政次郎の左肩を掠め、触腕はその後ろの大気を一気に貫いた。

「くッ！」

「ユーリヤッ!!」

「え——」

一瞬遅れて触腕が動いた事による空気の波が政次郎の体全体を押し、それに無理に逆らわずに政次郎は傾けたそのままの姿勢で触腕から離れるべく、斜め後ろへと鋭くステップを刻んでいく。

政次郎への攻撃より一瞬遅れ、今度は反対方向にいる蓮達へ向けて同様に別の触腕が高速で突き伸びてきた。

嫌な予感を覚えた蓮は、咄嗟に横にいるユーリヤの肩を掌で突き飛ばす。ユーリヤがいた地点へ伸びる触手は、それを見てから判断したかの様に方向を僅かに曲げ、蓮の胴体の横まで伸びてくる。

そして蓮の思考が“ユーリヤを突き飛ばす事が出来た”と結果を理解した頃には、伸び切った一本の触腕が蓮の体を締め上げ、さらにその事実で頭が追いつくよりも先に蓮の体が触腕の伸びてきた方向へ引かれ、空に浮いた。

「——さすがに、これは痛かったな。言っただろう、正真正銘の人間だと。……人の命と

いうものは、もっと大事にする物と習わなかったのかな」

「ぐううつ……！……！……！……！……！……！」

「れ、蓮さん！」

「……！……！……！……！……！……！」

蓮はその細い胴体を両腕ごと触腕に巻き付けられ、触腕の生える元の近くで、地面から離れて掲げられた。

地面に伏せていた触腕をかき分けるようにして、男が立ち上がる。ローブの大半が焼け落ち、左半身にある触腕達の表面は火によつて広範囲が焼け爛れた状態になっている。

特に焼けた部分の多い触腕は、未だ蠢いているもののそれまでよりも動きは鈍くなつており、先程の手榴弾による傷が深く刻まれた事が伺える。

男は落ち着いた口調こそ維持しているものの、それまでの愉快そうな表情を落とし、その顔には僅かに痛みによる苦悶と苛立ちを見せていた。と言つても、焼夷手榴弾の直撃を受けたにしてはその表情の苦痛の程度は低い。

「……体を覆いながら数本の腕で手榴弾を上から押し潰し、延焼を最低限に抑えたか。使える手が多いというのは便利なものだな、今度その手の術についても調べておこう」
「その少年は実に面白い。仲間を人質に取られている状況で、私の腕を冷静に評価し

てくるとは。先程こちらを呑氣と評したが、君も大概ではないかね」

「二つ言うならば、僕は貴様への警戒を解いておらず、油断は無い。そして人質がシスターであれば少々困っていたが、野曾木であればそれ程痛手とは思わん」

「帰ったら助走付き右ストレートぶちかますからね政次郎くん!!」

「くつくつく、君達はどこまでが本気かわからんな。本当に、面白い」

「くつちやべってねーでさつさと放しやがれミミズ野郎!」

「おっと、そうはいかんな」

蓮を捕まえた男へいつでも殴りかかれるように十三は距離を詰め、自身の持つ軽機関銃の銃口を向ける。が、それに合わせて男は蓮を巻いた触腕を十三の方へ動かし、人質となつた体を文字通りの盾として構える。

それを見せられ、引き金に指をかけていた十三は手を止めざるを得なくなり、ぐうと呻き声を漏らす。どれ程正確に男のみを狙つたとしても、触腕による防御の事も考えるに男に弾丸が当たるよりも先に、盾にされた蓮の華奢な肉体に無数の風穴が開く事になるだろう。

十三が男の注意を引いている間にユーリヤと政次郎もまた手に持つ銃を構えていたが、男はそれを一瞥すると、蓮の体を盾として掲げたまま、目で追える程度に素早く触腕を動かし、自身の周囲にぐるりと一周させた。

「……………くつ、なんて卑劣なっ……………」

「野曾木、なんとか外せないのか」

「そうは、言つても、ねッ……………」

それを見て、政次郎とユーリヤの手も止まる。三人で一斉に射撃すれば、蓮に触腕を一本使っている上に火傷が深い今の相手の左腕の状態ならば、その防御をすり抜けて男の頭蓋を割る事は出来るだろう。

しかし、撃たれる事になる銃弾の三分の一は蓮がその体で受ける事となる。最悪、蓮への当たり所が悪く即死ともなれば、いかにユーリヤの治癒の魔術があつてもどうにも出来ない。

捕まっている蓮も先程から触腕から抜け出す為に、自身の能力をフル稼働させて様々な毒を体外に放出しているが、触腕の力は一向に緩んでいない。毒に耐性がある、と言うには酸毒によって溶解する様子も薄いのが妙だ。

体を締め付けられる力が徐々に増すと同時に、蓮の毒を操る集中力が乱される。単なる締め付けの強さによる痛みもあるが、蓮は自身の集中を直接崩されているような、そんな感覚を受けていた。

「ふむ、このお嬢さんも只者では無いようだ。が、こうして捕まえてしまえば可愛いものだな」

「ツ!!皆、吸われるわ!近付いちやダメ!」

「それもすぐに理解するか。とはいえ、捕まっているお嬢さん本人が言っても意味は無いな」

男の口元は話の合間にも僅かに震え、そこから近い距離にいる蓮は人の使う言語以外の、地の底から湧き出る様な唸る音を聞き取った。その音の形を正確に聞き取る事は出来ないが、蓮は自身の受けている感覚からその正体を推測する。

恐らくは、精神に干渉する魔術か呪言の類。蓮の思考は保たれ、能力だけが阻害される感覚から、恐らくは人の内側にある生気や魔力を奪う、或いは吸い取る物と考えた。事実、優位に立った男はその言葉を否定しなかった。

対象に呪文を届かせる必要があるのか、または元々効力の範囲が狭いのか。どちらにせよ男から離れたユーリヤに同様の感覚を覚えている様子が無い以上、近寄って捕まれば蓮の二の舞となる。

蓮を銃への盾にしながら、相手が近付くならば捕縛してミイラにする。ただの一手で、蓮一人の動きが封じられた以上に形勢が魔術師の方へと傾いてしまっていた。

「…………ち、面倒な」

「蓮さん……………く、どうすれば……………」

「人質が無きや戦えねーのかテメエ!男らしくねーんじゃねーのか!」

「強面のお兄さん、先程私を“人外”と呼んだだろう？ならば人らしさなど、私には関係の無い話なのではないかね」

「……根に持つタイプかよ！お前嫌われやすいだろ！」

「殺し屋に好かれようと思う人間がいるのかな」

蓮の体を牽制するように左右に揺らしながらも少しづつ蓮の力を奪いつつ、政次郎に向けて男はゆつくりと歩く。それを見て政次郎も合わせて斜めへ後ずさり、一定の距離を保とうとする。

一連の交戦から最も厄介な相手が政次郎だと考えた男は、先程の様に注意を外した瞬間に何かを仕掛けられる事を警戒し、未だ銃を構える十三やユーリヤにも最低限の警戒はしながらも、隙を見せず確実に下がる政次郎より早く歩き、一步につき半歩の距離を詰めていく。

政次郎の外套の中にある手榴弾による閃光や煙幕の目眩ましも、手に取り・ピンを抜き・爆発する三つのタイムラグがある以上、政次郎へ視線を外さず何本ものの触腕を自由に出来る男には通じない。

「……さて、これが悪役であれば人質と何かを取引するのだろうか。生憎、私が君達に求める物は邪魔をしない事、ひいては君達全員の命だ。という事で、ろくな抵抗の出来ない君達を一人一人、確実に倒させてもらうぞ」

「正解だな。何かを要求したとしても、元々その女は交換材料にもならん」

「政次郎くんん!?」

「せ、政次郎さん……」

囚われの蓮に対してあまりにもあんまりな政次郎の返答に対し、蓮の心中は怒り半分、それを超えるさらなる怒り半分が天を衝いていた。何が悲しくて一応は仲間の政次郎からこんな扱いを受けなければならぬのだらうかと本気で思っていた。

そうしている間にも男と政次郎の距離は縮まり、蓮を体をユーリヤと十三の方向へ僅かに向けながらも、男は火傷の程度が薄く自由に動かせる触手に力を入れ、政次郎に向けて貫く構えを取らせる。

「……………」

「隙を一切見せないのは大した物だが、その足取りでどこまで逃げられるかね」

男は政次郎へ近付く歩幅をさらに広げ、余裕を持ち悠々と距離を詰めていく。

政次郎が持つ二つの銃では触腕の防御を抜く事は出来ず、大きく退こうと足を地面から大きく離せばその隙を触腕が突く。先程の様に一本はかわせても、二本・三本と連続で来れば身のこなしに自信がある政次郎と言えども、串刺しになるのは目に見えていた。

男は確実に政次郎の命が奪う事の出来るその隙を待っている。政次郎が隙が出さず

とも、このまま男が近付き続け、政次郎が反応出来る距離より前へ踏み込まれば最初の一本だけで体に風穴が開く。

不確実な可能性が一切絡まない、その場面を作るべく男は歩き続ける。後ろへ逃げる政次郎も、先程の触腕の速度を考えて、あと二歩分詰められれば命は無い、そう直観する。冷や汗が一筋、政次郎の輪郭をなぞった。

「……………までだな」

「ああ、君の命は……………までだ」

「いや、そうじゃない」

「……………何？」

「——真魚ッ！」

政次郎が大声と言えないまでも通る声を遠くへ響かせる。瞬間、十三が横に動きその陰にいた真魚が起動済の魔術エミュレータの表面をタップし、準備済のプログラムの実行命令を下す。

魔術エミュレータの表面が蒼く輝き、それと同時に選択した魔術の効果が発揮され、真魚の目の先にいる男へ向けて甲高い音の塊が空気を揺らして奔る。

意識の外にいた真魚が姿を現した事と、真魚が自分に何を仕掛けようとしたのかを理解しようとした一瞬の間に、男は音速で飛んで来たそれを無防備のまま受ける。その

時、自分の中の何かが割れる音がした。

「う、ぐツ!？」

音を媒介にする、精神干渉の高位魔術。自身の知識と経験からそれを一瞬で理解した男は、振動が伝わりと共に心を壊そうとするその魔術に意識の全てで抵抗する事で、なんとか正気を保つ。

だが無防備に受けてしまった分だけその効果は表れ、姿勢は崩れて一瞬目の前が暗転する。全身の体の力が抜け、ただ倒れない様にする事で頭が支配される。

「蓮ちゃん、今!」

「さっさと放しなさい、よッ!」

自身を縛る触腕の力が緩み、その時を見逃さなかつた蓮は手に持つダゴン殺しの銃口を僅かながらも可能な限り男の方へ傾けると共に、引き金を引いた。

過剰な反動によつて暴れるダゴン殺しの振動が触腕を揺らし、放たれた内の大半は地面に当たつたもののその硫化水銀の散弾の一部が男や触腕を掠め、削つていく。触腕の内外から同時に暴れられた事により、触腕の縄は広がり蓮を地面へと落とした。

「ぐツ!?!この弾……ッ!」

「これに弱いんでしょうが!ユーリヤ、十三さんを殴らせてあげてッ!」

「はいっ!!」

暴れた反動のままにダゴン殺しはどこかへと飛んでいくが、着地してユーリヤに指示を飛ばした蓮は一目散に男から走って距離を取る。

蓮の指示を理解したユーリヤは、自身の得意とする魔術を用意する。傷を癒す奇跡のみが神に仕える退魔師の術では無い。邪悪なる存在に人の身で立ち向かう為の術は、様々な形で存在する。

男が体勢を立て直すよりも先にユーリヤの術が完成し、神々しい輝きがその場に広がる。光の波及は男を直接害する様な力は持たない。が、男へ向けて走り込んで来る十三はその輝きを身に受け、体全体に薄く淡い光を纏った。

「おおおおらあつ!!」

一気に男との距離を手の届く所まで詰めた十三が地を踏み締める。慣性と体重を乗せた力は筋肉を撥条にし乗算され、その全てを右拳に集約し打ち出した。

十三の気合から危険を覚えた男は、体の力を入れ直し左の触腕を自身と十三の間に割り込ませ、触腕を引き締めて盾とする。十三の拳が触腕にぶつけられた瞬間、痛みを知らない無敵の盾に火花が上がったかの様な鋭い熱を感じた。

「ぐがあツ！付与の魔術、か！」

「ツづうおおおアツ!!」

邪なる触腕は十三の拳に乗ったユーリヤの魔力に強く拒絶され、刹那的に触腕の力が

失われた所へと十三の鍛え抜かれた肉体から放たれる拳打が突き刺さり、大きく触腕が吹き飛ばされて男の肉体がそれに引つ張られる。

十三は反作用により拳に跳ね返る痛みに歯を食いしばりながら、さらに一步強く踏み込む。相手の体勢が崩れ防御も意味を成さない今、距離を空けるといふ選択肢は有り得ない。腰で自身の体を揺り戻し、さらに左拳を男へ振るつた。

僅かな間に男は吹き飛ばされたものとは別の触腕を前に出し、十三の左拳を阻む。再び触腕は吹き飛ばされ、十三は左拳を打つた勢いを反転させ、また右拳を振るう。

振るう、防がれる、殴り飛ばす。振るう、防がれる、殴り飛ばす。

呼吸すら挟まず高速で叩きつけられる十三の拳の嵐を、触腕を盾にする度に殴り飛ばされ後退しながらも、男は交互に触腕を戻すことで凌ぎ続ける。

「ぐ、お、がッ——調子に、乗るなッ！」

「がほっ!？」

何度目かもわからぬ程の拳を凌ぎながらも体勢を徐々に戻した男は、十三の拳を受けた勢いと共に一步下がり、拳が届くのが僅かに遅れた間隙に差し込む様に、焼け爛れている触腕を強引に動かし十三の腹部を叩く。

さすがに大部分が焼けた触手を細かく動かす事は出来ず、ただぶつけただけと言った程度の力しか出せなかったが、衝撃により空気を吐き出させられた十三の勢いは大きく

削がれ、暴乱が止まる。

怯んだ十三へ向けて、散々殴り飛ばされ痺れすら覚えさせられた触腕に力を込める。この腕を持つてからこれほど痛みという物を覚えたのは、男にとつては初めての事だった。それ程の事をした目の前の巨漢の脳天を割るべく、触腕を膨らませて巨大な鞭を打つ構えを取った。

「——それはこちらの台詞だ」

触腕を掲げたその瞬間、男の背後から冷徹な声が聞こえてくる。視線をなんとかそちらへ向ければ、その視線の端に政次郎の姿があつた。

いつの間にか後ろまで走つて回り込まれていた。この距離から銃撃してくるか？それならば、と男は保険として体に巻きつけている触腕を背後まで動かす。何をしてくるのかさえわかれば、受けてから対応出来る。

首を向けてその目に政次郎の姿を完全に映す。翻った外套が半身を前傾させた政次郎の体を大きく隠している。銃口が見えにくいのは困るが、銃を構えるならば必ず狙いを定める為に手を伸ばすか、脇を締める事になる。それを見極めるべく、政次郎を見続ける。

が、政次郎の外套が揺れる先に白く光る刃が僅かに見えた。

「まさか!？」

「はッ!!」

政次郎の刀が月光を反射し一閃される。男はただ直感のままに胴を触腕に守らせて、上半身を反らす事で男はその一撃を既すんでの所で躲した。胴部の身代わりとなつた触腕は完全に両断され、刃が僅かに掠めた脇腹からは血が数滴舞う。

シスター服の女性の魔術付与はこの少年にまで届いていたのか。先程の指示から完全に十三にのみ魔力を付与していたものと思つていた男は、自身の認識を覆されて驚愕に顔を歪ませる。

とはいえ、なんとか躲す事は出来た。巨漢の男が再び殴り掛かつてくる前に、目の前の少年に触腕を使い今度こそ倒す。魔術付与された刀の鋭さは目を見張る物があるが、把握さえ出来ていれば立ち回りを考えられる。

死を前にして加速した思考が一瞬にして男の思考をまとめ上げ、不利な状況にも関わらず根拠の無い余裕すら湧き上がる。男の顔に無意識の笑みが浮かび、触腕を動かそうとした。

「え——」

その瞬間、体に熱が浮かぶ。温度による熱ではない。細く長い線の様な熱が、斜めに引かれる。

一瞬遅れて、胴体から血飛沫が舞い上がる。加速した思考で自身の体を確かめる。胴

体が斜めに裂かれていた。目の前の外套の男を見る。先程の攻撃とは逆方向に振り抜かれた刀を持ち、さらに今も刃先を返している。

今度は左肩の付け根から刃が振り下ろされる。痛みを自覚するよりも先に、右脚が斬られる。さらに右脇腹が。次に左胸が。右肩が。

一瞬で六ヶ所に刃が走り、その全ての後に体から鮮やかな赤が開く。そして政次郎は右肩を斬り上げた刀の向きをまた返し、それを男の体の中央へ真っ直ぐに振り抜いた。

「——ツグ、アアア、ア、ツ!!」

加速した思考が戻ると共に、胴体の全ての痛みが一度に表れて男はあらんばかりの声を張り上げる。体から噴水の如く血液は飛び出て、受けた七つの傷は体の内側へ深く食い込む様に痛みを与え続ける。

触腕の制御もしようにも痛覚の情報のみが頭に流れ、切り裂かれた体は呼吸をする毎に体のあちこちが壊れ落ちていきそうな錯覚すら覚える程に受けた刃傷の深さを訴え続けていた。

男があまりの痛みに意識を遠のかせようとしている時に、政次郎はさらに触腕に刀を刺し、男の体を飛び膝蹴りで倒して刀を地面へ突き立てる。さらに男が体を起こせないように、首に膝を乗せ体重をかけて、自身の重みで動きを封じた。

「僕が当ても無く後退していたと思つたか。あれは最初から刀が一足で取れる場所まで

到達する為の後退だ。常に自身が優位である、そう勘違いする事こそが油断だ」

もはや声も出せないと言った風に男は呻き声を上げ、暴れる触腕を魔力の付与された刀により制しながら政次郎が男へ起伏の無い言葉を投げかけていく。

体の自由を完全に奪い男を制圧した政次郎を見て、蓮は一息をついてその場に座り込み、その周囲へ三人が心配する様子で歩いて来た。

「……しっかし、よく真魚ちゃんが何かしようとしているの気付いたわね、政次郎くん」

「真魚が途中から静かすぎたからな。それに伊達は視線こそ動かさなかったが、何度か後ろに注意を向けている素振りがあった。何をするかまではわからなかったが、何かを企んでいるのはわかった」

「ん、意識がおじさんに向いて、忘れられるのを待ってた。おじさんの筋肉モリモリマツチヨマンなビッグボディだったら、私ぐらい余裕で隠れられるからね」

「なあその後半の俺への件くだりいる?」

「蓮さん、ご無事で良かったです!」

座り込む蓮が大きな外傷も術への後遺症も無い事を手振りて全員に教え、ユーリヤが念の為治癒の魔術を蓮にかけていく。十三や真魚もそれを見て安心を顔に見せ、場の緊張をいつもの調子で意図的に緩める。

男から流れ続ける血の匂いだけが、その場の空気を締めていた。

14. 満天へ至る

「……シスター、男を口が利ける所まで回復させてくれ」

「えっ？」

「こいつを死なせる訳にはいかん」

「は、はいっ！」

呪言により多少衰弱こそしたが、ダゴン殺しを強引に撃った腕以外に目立つ外傷が無かった蓮への治癒が終わり、タイミングを見計って政次郎がユーリヤへ男の治癒を指示する。

味方にも敵にも容赦の無い政次郎が口にした、意外な言葉にユーリヤは少し驚くが、政次郎もまた人の子であり優しさを捨て去ってはいないのだと思い、思わず笑顔で快諾した。

ユーリヤが男の容態を見る。血こそ夥しく流れてはいるが、全身の刀傷はどれも急所から外れているか、致死の深さまでは届いていない。刀を突き刺されたままの触腕はそれまでの剛力を感じさせない程萎んでおり、びくびくと時折震えを見せるだけの姿にはもはや人並の力しか感じさせない。

ユーリヤは左半身の治癒を最低限に抑え、男の全身に刻まれた刀傷を魔術で塞いでいく。血液と共に流れ出た体力を戻しさえしなければ先程までの力はもはや発揮出来ないだろうと考え、ユーリヤは男の命を肉体へ繋げ直した。

「——ク、カハツ……」

「意識が戻ったか。妙な真似をすれば治ったばかりのその場所に風穴を開ける。こちらの質問に答えろ」

「……ふ、私の命を所望なのでは、無かったのか、ねっ……」

「質問に答えれば一瞬で楽にしてやる、答えなければ先程以上の痛みをゆつくりと与えた上でその命を断つ。野曾木よりもお喋りなその無駄口に、最期に一つだけマシな仕事を与えてやると言っているんだ」

「……………」

「ユーリヤ、何思ったのか大体察するけどこれが政次郎くんよ。真つ当な優しさなんて見せる柄じゃないわ」

男の意識が戻った直後に政次郎が始める無慈悲な尋問に、ユーリヤは浮かんだ笑顔を落とす。その様子を見た蓮が、ユーリヤの肩に手を置いて同情を見せた。

政次郎は力の抜けた触腕が暴れる力も無いと判断し、串刺しにする刀を右手だけで握りながら左手でサブマシンガンを抜き、男へと向ける。その目には一切の情の色は浮か

べておらず、ただただ事実のみを告げている事を男へ示す。

政次郎の表情を見た男は、小さく溜息をついて諦めの表情を作る。大勢は既に決してしまつており、自分ではどうにも出来ないと思つて悟る。むしろこれだけ徹底した姿勢を続ける、目の前の少年への敬意すら湧いた。

「……ふ、ふつ。素晴らしい、それなり以上に、面白い。完敗だ、これだけされては、ね。」

「……わかつたよ、少年。敗者は勝者の物」というヤツだ、何でも言おうじゃないか」

「貴様への質問は一つだ。魔石はどこにある」

「……」

抵抗を諦めて政次郎の要求を受け入れる事で、男は逆に余裕を取り戻し、穏やかな顔で答える。

政次郎はそれに対してもなんらアクションを見せず、淡々と自身の要求のみを口にする。男の顔を見据え、ただその目と体の動きに嘘が混ざるかどうかを待つ。右手に力を込めて刀が突き刺す触腕を通し、無言の脅迫を男の体へ伝える。

「……ふう。私は今晚、この場で儀式をするつもりでここに来た。その黒いお嬢さんの言う通り、“碑”の神を呼び出す為の、ね。そして儀式の途中だった為に、今私の手の中には無い」

「どこにある。ここに至り」失くしました」などと抜かすなら、楽な最期は許さん」

「つくく。心配せずとも、この場にあるよ。目印も無いここでは明確に示す事こそ出来ないが、少し離れた場所だ。五分も歩き回れば、転がっているのが目に見えるさ」

「そうか。伊達、この周囲を探してこい」

「へいへい」

男の表情に嘘をついている様子は無い。生殺与奪を握られて尚余裕を見せる男の口振りは多少癪に障る物があつたが、質問に正しく答えている以上わざわざ責める必要は無かつた。

十三は軽機関銃の給弾を終え、肩に担いでその場から離れる。目印も無くただ歩き回る事に対する億劫さはあるが、文句を言える状況でも無いので素直に視線を地面へ向け、左右へ振る。

女性陣は政次郎や男の様子から、事態の決着を理解して安堵を見せる。早期に動けた事により、最悪の事態は防ぐ事が出来た。もう少し対応が遅れていたら危なかつただろう、素直に今の結果を喜ぶ。

「……君の質問には嘘偽りなく、正直に答えた。私の命はここで終わりだろう、ならば最期に一つだけ私のささやかな望みを聞いてくれないかね？」

「随分と厚かましいな。内容次第では貴様の真つ当な死は無くなるぞ」

「せ、政次郎さん、さすがにそれは……」

「いいじゃないの。“命だけは助けてくれ”なんて情けない事も口にしてないんだし。その潔さに免じてあげましょうよ」

「せめて痛みを知らずやすらかに——」

「いやそういうニュアンスでも無いからね」

男の嘆願にも冷徹さを一切崩さない政次郎へ、思わず見ていたユーリヤや蓮がフォロイを入れる。その横で真魚が何やら顔に穏やかさを伺わせながらいつもの様にボケてくるが、言い切る前に蓮が止める。

その声に反応し、男は政次郎へ向けていた視線を逸らして真魚を見る。口角はさらに上がりそれまで以上に愉快そうにしながら、声も出さずに笑い男は言葉を発した。

「その小さなお嬢さんも、只者では無いと思っていたら」あの「エミユレータの使い手だったとはね。それを実戦で使いこなす魔術師など、そうはいまい。見事なお点前てまえだったよ」

「……? おじさん、わたしのPCの事知ってるの?」

「知っているさ。今は未だ数も揃ってないが、それはこの界限では最新鋭だ。頭の硬い老害共は自身の術に絶対の自信を持ち、邪道と評してはいるが……近い将来、それが生み出す“軍隊”を前にしてしまえば、腐りゆくだけのその口も自然と閉じる事となる」

「……………そういう言い方は、好きじゃない、かな」

笑いながら真魚へ語りかける男の言葉に含まれる意図へ、真魚が表情を僅かにだが確実に歪めて嫌悪を見せる。

真魚にとって、魔術エミュレータは最大の武器であり、父親が自分に残してくれた数少ない形を持つ思い出だ。心の半分はその価値や危険性を客観的に評価しながらも、もう半分には思い入れと情による熱を置いている。

この発展が引き寄せるだろう未来の最悪の形は、真魚にも理解出来ている。だがそれは父が想い、遺した願いを人の欲で歪めたものだ。それを口にする男へ、真魚は確かな反感を持った。

「おや、思いの外気分を悪くしたらしい。何をそれに重ねているかは知らないが、失礼をした。……とはいえ若くしてそれを手にし、狂気に吞まれずにいる君に対する敬意は揺らがない」

「……随分と買われてる。おじさん、ロリコンなの？」

「はっはっは！……っづ！いやいや、小さな魔術師どうはいへの素直な感想だよ」

「本当によく喋る口だ。さっさと望みとやらを口にしろ、僕は野曾木よりお喋りな奴は嫌いなんだ」

「それ遠回しに私がうるさいって言ってるわよね、蹴るわ」

「蓮さんストップです！この件が片付いてからにしましょう！ね!?」

真魚へ笑いなから一方的に談笑する男の触腕を政次郎は刀で挟み、その刃に宿る魔力が男へ痛みを伝える。

突き刺された場所を中心とした激痛の点が、自身の安らかな死がもう確定したと考え、笑いを止めずにいる男の思い上がりを正す。

苛立ちから漏れる政次郎の本音に反応してその背中へ大腿で近付こうとする蓮を、ユーリヤが羽交い締めにして止める。先程盾にされていた時の事もしつかりと思いついた蓮は、体の動きを封じられながらも政次郎へ近付こうとする怒りだけは保ち続けた。

「フフ、すまないね少年。こんなにも、楽しいと思つた事は初めてでね……私の望みはただ一つ、本当に小さな事だ。……最期に、あの月を見ながら逝きたい。それだけなんだよ」

「……センチな願いだな。構わん、いいだろう」

男の言葉を聞き、政次郎は体を抑える力を可能な限り抜かず姿勢を少し変える。半身を引いて首元を抑える膝を逆の脚に変えて、顔を覗き込む体勢を胸から上の上半身を俯瞰する体勢へと変えた。

男が妙な挙動をすればその瞬間に撃つ、その思いは一切揺らがさない。男はなんら不自然な素振りを見せず、抵抗を見せる事が無かった。

政次郎の体が顔の前から退かされた事により、地に礫となった男の目線は空へと向かう。輝く星々の小さな光と、最も大きく見える満月が男を見下ろしている。男は、穏やかな笑顔を浮かべて目を閉じた。

「——ああ、本当にいい夜だ、いい月だ……。私は、これが見たかった……」
「つまらん事に拘る奴だ。これで満足か」

「ああ、有難う少年。私は最期に、これが見たかった」

満ち足りた、という顔で男は体の力を完全に脱力させる。政次郎の経験にも珍しい部類である、死を前に満足を見せる男の様子を奇怪だと政次郎は考えるも、狂人の思考など自身には元より理解の外であるし、何より興味も無い為すぐに考えを捨てる。

男に向けていた銃口を、頭の中央へ向ける。その頭蓋に先程の様な触腕でも潜んでいない限りは、確実に殺せる。銃を構え直す音に対しても男はなんら反応を見せない。

「……いい夜だ。どうせ死ぬのなら、こんな月の下で死にたい。そうは思わないか、お嬢さん方」

「僕はどうでもいい」

「まあ、確かにいい光景ってのは思うけどね」

「——……」

「んー」

男の今際いまわの言葉に、それぞれが反応する。ユーリヤはすぐに訪れるだろう男への安らかな死を神へ願ひ、無言で両の掌を合わせている。

政次郎が引き金にかけた指に力を込め始める。目の前の狂人が何を思い、何を口にしようとするの引き金が緞帳となる。今、この仕事の終わりを告げる銃声が鳴る。

「——この時を待っていた」

それまでの穏やかな笑いを一気に歪めた男へ、政次郎が銃火を放つ。脳天を貫く銃弾を阻むものも無く、男は一瞬で絶命した。

同時に、凄まじい大気の震えが蓮達へと届く。唐突に悍ましさすら覚える大量の魔力が離れた場所から湧き上がり、威圧感を伴う波が肌と髪を揺らして確かに体に震えを伝播させる。

魔力の元を見やる。眩く妖しい赤の光が地面から溢れ、そこへ近付いていた十三が、自身の手を持つ軽機関銃を地面へ構えている。

その表情は驚愕に満ちており、魔力の迸る先を睨み何かをしようとするものの、その体は目に見えぬ力によって気圧され、満足に動かす事が出来ない。

「——蓮、真魚ツ！エミューレータが置かれてるツ!!その中央に赤い石・画面に陣ツ！」

「何?！」

「ツやられた!・タイムーよそれは!!」

「こ、この気配、はッ！」

「おじさん画面撃って!!」

真魚の指示に従い、十三は地面に置かれた魔術エミュレータと血が巡る様に律動的に輝く魔石へ向けて銃を向ける。が、迸る赤い光を直視する事が出来ず、その場に広がる圧力が銃と体を大きく揺らす。

その場の重力が少しずつ増していくような威圧感が五人を支配する。魔石の放つ赤い光は徐々に増し、その下のエミュレータの表面に映る陣は画面の隅を文字列が走るにつれて画面にノイズが入り、画面が写り直すごとに陣は歪んでその姿を変えていく。

目の前で起こる異常事態に手を出すことが出来ず、不可視の力に気圧される自身へ舌打ちながら、十三は絶対の自信と信頼を置くその肉体を以てしても、その場に留まる事が限界だった。

「ダメです伊達さん、その場から離れて下さいっ！」

「ヤベーのは俺でもわかるけど逃げたらダメだろこれ！」

「もう手遅れですッ!!」

「ツクそつたれが!!」

ユーリヤの叫びを聞き、銃を構えるのをやめた十三は見えない圧力から逃れる様にその場から素早く退く。魔石が輝く度に体は本能的に竦み、波打つ力に足元が掬われそう

になるも、思考で体を律して体幹は崩さない。

十三が離れた数秒後、全ての光がその場から失せる。星の光すらも遮る見えない存在感が、目にする蓮達へ絶対的な恐怖を齎し、正常な精神を乱れさせる。

外の空気を確かに肌にしながらも世界が閉ざされたような錯覚から覚め、蓮達の目が正常な光を宿し直し、目の前の光景を映す。赤い光はその場から失われ、月が照らす宵闇が戻っていた。

「……なんて、悍ましい……ッ」

「……うっげえ」

「きもち」

「——コイツは、なんだ」

その場にいた全員が、魔石の光があつた場所に鎮座するその存在を見て一瞬言葉を失う。

影の輪郭を見れば、最も近いのは蝦蟇だろう。肥え太り広がったその体が野原の真ん中へ悠々と座り込み、その巨体によって嫌と言う事すら許さず姿を目に入れてくる。

顔に浮かぶ赤い瞳はあらゆる黒さを織り交ぜた様に濁り、整うという事から最もかけ離れた印象を与える。歪みと混沌に満ちたその眼球は、醜悪という言葉の概念を心へ強制的に理解させた。

無骨な短い両腕を顔の前に構え、さらに体のあちこちからは男が左腕に宿していた腕——目の前の存在の巨体から考えれば、それは“腕”ではなく“手”や“指”といった程度の大ききさだ——がいくつも生え、質量という器を持たぬようにうごうごと歪み、ばらばらに揺れている。

それと同調する様に体の外側はぼこぼここと歪み続け、ただの一時として決まった形を持たない。その様は嫌悪、憎悪、拒絶、狂気——人の心全ての反発を促し続ける。

「……」
 “碑の神”、“魔女村の悪夢”、“だいせんきゆう大蟾宮の主”。欲望と醜悪を司り、それを齎すもの——」

蓮が目の前の存在の威圧感と恐怖に圧される心を制し、頭の隅の冷静さで目の前の存在を表す言葉を一つ一つ思い出して口にしていく。

悍ましい大蝦蟇が自身を見つめてくる蓮達の存在に気付き、顔を向ける。狂気を孕んだ深い瞳が、蓮達一人一人の形を見定めていく。

その眼光に心の中から止められぬ嫌悪を感じながらも、蓮は持てる正気で喉元まで迫るそれを抑え込み、力の籠った喉でその名の音を成す。

「——」
 “ゴル”
 “ゴロス”
 “ツ！”

有り得ざる大蝦蟇は、息を呑んで卑俗に大口を歪ませた。

15. 跳ねる狂笑

「ツどああ?!」

最も近くにいる十三へ、ゴルⅡゴロスは体から飛び出ている触手を一齐に突き出す。先程の男の触腕ほどの速度ではない、直前まで目にしていた動きに目を慣らしていた十三は軌道を見切り、真横へ大きく跳んでそのまま前へ体を回転させる。

掠めないように頭を丸め、肩で地面を受けて勢いを保ったまま転がっていく。十三は素早く体を起こしてゴルⅡゴロスへ向き直り、手に持つ軽機関銃に乱雑に銃弾を吐き出させた。

それを見てゴルⅡゴロスは触手の全てを使い銃弾を弾く。しかし狙いを持たずには撒かれる銃弾の全てを防ぐことは出来ず、放たれた内の幾らかがその巨体へ突き刺さる。

銃弾により空いた穴から体液を噴き出し、ゴルⅡゴロスの歪んだ口角は一瞬下りる。が、噴き出た体液はすぐに固まり傷痕を塞ぎ、落ちた表情は再び下卑た笑みを戻した。

その一連の間に十三はさらに後ろへ下がり、走ってきた蓮達が十三と近い位置にまで寄る。目の前の異形に対し湧き上がり続ける本能的な嫌悪を抑え込み、一同はゴルⅡゴ

口を睨みつける。

「……前もこんなだったよな！なんなんだよ俺前世で触手に悪い事でもしたの!？」

「日頃の行いだろう。そんな事より、目の前のアレをどうするかを考えろ」

「先程の魔術師の腕と似て——いや、魔術師がゴルⅡゴロスより受け取った腕が、あの触手だったのでしょうか……しかし、見れば見るほど……ッ」

「さすがにあれが触手プレイとかしてくる頭があるようには見えないよね」

「そのブレなさが頼もしく感じる事があるとは思わなかったわ」

空気が掠れた管を通る様な音を吐き出しながら、ゴルⅡゴロスは口を歪めて笑い続ける。

その存在感に慣れてきた蓮達は、少しずつ冷静な思考を取り戻して目の前の邪神に対する闘争心を奮い立たせる。向こうがこちらを見続けているという事は、標的とされているのは間違いなく蓮達五人全てだ。

魔術エミュレータによる自動儀式プログラムと、アツシユールバニパルの焰により召喚されたゴルⅡゴロス。召喚を阻止する事が出来なかったからと言って、気を落とす様な隙を見せれば目の前の邪神の威圧感に呑まれるだけだ。

こうなってしまった以上は、この場で対処するしかない。その意識は口にせずとも全員に共有され、震えそうになる体を心の奮いで打ち消し留めた。

「あの男が待つてたのは月の魔力が満ちる瞬間——満月が最も高く上がる正子しょうしだったのね。魔術エミュレータで儀式を再現し、足りない部分を魔石で補った……」

「喚ばれた方法はもはやこの際どうでもいい。……触手の速度は先程の男の振るうものよりは遅いが、数が倍近い。僕と伊達以外は近付けんな」

「俺あんなの殴りに行かなきゃなんなの？普通に嫌なんだけど」

「せめて僕らに向けられる触手を引きつけろ。……さっきの野曾木の様に捕まればその分の触手は封じられる、か？最悪それでもいいぞ」

「なんで自分から捕まりにいかなくやいけねーんだよ断固拒否だよ」

話し合いを続ける蓮達を見ても、ゴルⅡゴロスはその場で汚い音を出しながら笑うだけでなんら動きを見せない。自身に立ち向かおうとする人間達を愚かと嘲笑っているのか、それとも会話の中身を理解しているのか。

触手を風に乗せるように揺らしながら、それらをこちらに向けもしないでゴルⅡゴロスは笑い、その場に鎮座し続ける。その狂気が内包する意志は、人の身で推測する事は出来ない。

「……存外大人しいな。だがチャンスだ、先程の男の腕と同様の物ならばシスターの魔術が有効だろう。再付与を頼む、そろそろ魔術も切れる頃合だ」

「は、はいっ」

ユーリヤによつて身に宿つた幽光は、時間と共に少しずつ失われようとしていた。自身の魔力を拡散させる付与の術は、当の術者からの魔力供給が届かぬ以上元々長続きしない。

しかし男の使つていた触腕の大元が目の前の存在だったと仮定すれば、ゴルⅡゴロスにも同じ術が通用する可能性は高い。銃の効果が薄いのであれば、決め手となるのは魔術とそれを伴う攻撃だ。

ユーリヤが術の再展開をすべく、急ぎ構える。

「――? α α α ツ!!」

「うっ!?!」

「うるせツ……!?!」

「う、あつ!」

それを見たゴルⅡゴロスは急激に口を開き、声を張り上げる。精神を掻き乱す咆哮に、蓮達は反射的に耳を塞ぐ為に手を動かしてしまふ。

集中を乱されたユーリヤの術は完成する前に途切れ、狂気をそのままぶつけてくる様なその叫声に、蓮達が理性で抑えていた心中の嫌悪が再び湧き上がる。

体が竦み、体が強張つた。その隙に、目の前の大蝦蟇の体に変容する。背中表面が蠢き、触角が複数突き出る。突き出た触角の間に鰓えらのような膜が張り、それは確かな形

を完成させる。

「嘘だろ!？」

「翼……!？」

「飛べるのあれ」

その巨体ほどの大きさを持つ歪んだ翼を現し、ゴルⅡゴロスはにたりと粘着質な水音を立てて笑う。次の瞬間、短く太い脚に力が籠りその場から真上へ向け、大きく跳んだ。瞬間的に地から大きく離れ、巨体が星空を遮る。高高度へ達したゴルⅡゴロスは重力に引かれるものの、翼を大きく広げてパラシュートの様に空気を含む事で体は浮かぶように緩やかに空中に留まる。

歪んだ嗤いと瞳を蓮達の頭上から落としながら、ゴルⅡゴロスは大きく息を吸う。その素振りから、蓮は次に起こる事態を予測した。

「精神への呪言！ユーリヤ、保護ッ！」

「はい!!」

端的な言葉で次に身に降りかかる“攻撃”を蓮はユーリヤへと伝え、その一言目から動いていたユーリヤが怯んだ心を集中し直し、精神を護る為の術を速やかに展開する。

「? α——ツツツ!!」

「つくう……!」

「……………うゝ、やい……………」

魔術の完成と同時に、蓮達の頭上より声とも言えない破壊的な音が威圧感と共に叩き付けられる。耳を塞いでも本能的な恐怖は湧き上がり、単なる空気の振動以上に体は震え上がった。

“殺される”。圧倒的な上位の存在から突き付けられる理屈の無い直感が、生物としての格の違いを悟らせようとしてくる。ユーリヤの魔術によつて保護された精神が内の正気を支え、蓮達は体を縛りつけようとする呪言をなんとか跳ね除けた。

「何度もやられちゃ持たない！政次郎くん十三さん、撃ち落ととしてー！」

「ツ好き勝手、やらせつか！」

「蛙如きが、見下ろすな……………」

二度目の叫声が来る前に、素早く蓮は指示を飛ばす。射程が優れる銃を持つ二人に狙撃を指示し、即座に政次郎と十三は浮かぶ巨体の、空を遮る醜い翼へと狙撃銃と軽機関銃を向ける。

二つの最初の銃火の音が重なる。左の翼膜へ十三の持つ軽機関銃の無数の礫が風穴を次々に開けていき、右の翼の根本の中央が政次郎の寸分違わぬ狙いから放たれた一発の銃弾により抉り取られる。

翼の滑空によつてその場に留まる事が出来なくなつたゴルゴロスは、さしたる痛み

を顔に浮かばせないまま、翼を一瞬で体の内側へ戻して落下してくる。

着地と共に、地面が大きく揺れる。地に落ちた振動により、ゴルⅡゴロスの体は波打ち、それに伴いその歪んだ口元が体内の腐臭を吐き出し、蓮達の鼻へ届いた。

続けてゴルⅡゴロスの体が前へ傾き、その脚が膨らむ。筋肉の“おこり”の様なその初動に、誰よりも早く十三の体だけが反応し、無意識に足が一步を踏み出し構えを取った。

「? αッ!!」

「ンだとお!?!」

触手による攻撃かと十三が体の反応から一つ遅れて予測した所へ、ゴルⅡゴロスはその巨体を地を蹴り飛び跳ねる事で突進してきた。巨大な砲弾と化したその体に対し、拳や腕による抵抗は無駄と悟る。

構える腕で頭を庇い肩を縮め、体を一つの塊と見立てて全身に力を込める。そのまま飛んでくる巨体に対し左斜めへ踏み込む。脚を杭打ち、上体全ての力を集中して突進を受け、同時に体を回すことよって勢いを右後ろへと流す。

「——ッ!!」

「十三さんッ!!」

全身の筋肉全てを使った上での防御が、肩口が壊れる感触と共に刹那で吹き飛ばされ

る。十三の体は錐揉みしながら跳ね飛ばされ、勢いを僅かに斜めに逸らされたグルーゴロスの体は着地しないまま森の木々の生える所にまで飛んでいく。

まるで爪楊枝が折れるように木々はへし折れ、幹が折れる毎に巨体の速度が落ちる。木々に突っ込んだグルーゴロスを蓮達が振り返って見れば、赤い瞳が森の闇の中から浮かび上がり、こちらに向き直っていた。

「全員跳べ!!」

「ユーリヤは十三さんをツ！」

「くうっ！」

政次郎と蓮が声を荒らげると同時にグルーゴロスが再び跳躍し、その体が砲弾となる。

全員が別々の方向へと飛び退き、誰もいなくなった空間を巨体の影が吹き飛ばす。狙いを外した体は、その先の大地に両足を突き立て地面をめぐり上げ、滑る様に体の勢いを殺していく。

その間にユーリヤは、あまりの痛みに脂汗が大量に浮かび上がらせている十三へと近付く。肩の肉が削られ骨が砕かれている十三の様子に一瞬眉間を寄せるも、すぐに治癒の魔術をかけていった。

蓮は十三の傷が癒えていくのを一瞬の目線を飛ばす事で確認し終わると、今度は真魚

の方を向いた。

「真魚ちゃんここら一帯に火の壁作って！森の手前まで、円の帯状っ！」

「指定する、五秒ちようだい」

「政次郎くん攻撃！」

「そのつもりだ」

勢いの余り着地に大きな隙を見せるゴルⅡゴロスへ、政次郎はいつの間にか右肩に担いでいた四角い筒の先を向けていた。

人の顔より少し大きい程度の筒の先には、円形の四つの口が大きく空いている。無骨な筒にはグリップ以外には肩に当てる為のパッドと、筒先の覆っていた垂れ下がるカバー以外にそのシルエツトを大きく変える物はない。

大地に留まるゴルⅡゴロスが振り返るよりも先に、政次郎はその引き金を引く。筒の先から、推進剤を煙に変えてロケット弾が飛んでいく。

それに顔を向けた大蝦蟇が反応し、到達までに秒を要する推進弾を横に跳んで逃れる。政次郎はその動きに合わせて照準を変え、二度・三度・四度と次々に同じものを放つた。

最初の一発が狙いの先にある地面に着弾し、轟音と共に炎上する。凄まじい速さで横へ逃れるゴルⅡゴロスの動きを見越して撃たれた砲弾は、二発目は一発目よりも近い場

所を通過し、三発目はその背に、四発目は体の真ん中へと吸い込まれた。

爆炎が巨体から上がり、身の表面を焼き焦がしていく。面を焼き払う焼夷弾はさすがに堪えるのか、先程の様な心を縛る呪詛ではない、純粹な叫声がその口から上がる。

「ふあいあうおーるー」

その間に真魚の魔術プログラムが完成し、森の手前を黒炎の帯が駆け巡る。円をコンパスで描く様に地を走った炎の端は繋ぎ合わされ、蓮達と邪神を閉じ込める黒炎の檻が完成する。

ただ空気のみを飲み込んで燃焼を続ける魔術の炎は、決まった形と勢いを保ち続ける。森への逃げ道は無くなり、光無き火が檻の中の大気へ自らの熱を流し始める。

「……逃げ道塞ぎか？」

「いや、突進を封じる為よ。トルコ軍が壊滅しながらもあれを撃退した時、ムハンマドの聖剣・身を焼く火炎・太古の呪術の三つが決め手になったらしいわ。奴にとつて、火は天敵の筈よ」

「——なるほど、理解した。この火の檻によって森にまで突っ込む程の過剰な脚力も出せん。ようやくまともな土俵で戦えるな」

「……クソ、なんつー馬鹿力だ。受け流すだけの事もろくに出来なかつたぞ……！」

「今の内に付与し直します！」

場を閉ざした炎の意図がわからない政次郎へ、蓮がその狙いを伝える。ゴルⅡゴロスの巨体による突進は強烈だが、先程の様な全力の跳躍は勢いが強すぎる余り後ろまで突き抜けてしまう。

その先へ忌むべき炎の壁があるならば、まずわざわざ自分から飛び込もうとは思わない。その速度であれば炎の檻を突き抜ける事は容易だろうが、そうするよりは魔術師本人の命を奪う方が手近だ。

回復を終えた十三が離れた場所から苦い表情を残したまま、蓮達の近くまで戻ってくる。砕かれた肩は元に戻ってはいるが、防戦にのみ力を注いでもなお吹き飛ばされる程の、圧倒的な力の差へのショックがあつた。

ロケット弾に悶え、ゴルⅡゴロスは体を地面に叩きつけて怒りを見せる。その間にユーリヤが再び自身の魔力をその場へ広げ、その場にいる全員に邪を弾く光が再び宿つた。

「……僕らは前に出る。三人はあの触手を遠くから牽制しろ、誤射さえしなければ何をして構わん」

「了解、あつさりやられないでね二人共」

「誰に物を言っている。僕は左、伊達は右からだ」

「でっけえ借り作らされたからな。懐に入りさえすりや負けねえ、ぶん殴ってやらア

……！」

「気を付けて下さい、あの怪力は人が対抗出来る物ではありません」

「ん、おじさんの童貞が心配」

「あの、なんで俺の命より童貞が心配されてんの？」

政次郎は刀を構え直し、十三も両腕を曲げて拳を顔の前に出す。蓮もその場にいる全員に興奮物質を散布し、運動能力の底上げを促す。ユーリヤの精神保護と加えれば、幾分か先程の呪言への耐性にもなるだろう。

そうしている内に、ゴルⅡゴロスの体を包む火は消えようとしていた。体の内から黒い液体が湧き出て、火のついた皮膚を流し、焦げた表面を再び固めていく。

その顔には先程までの歪んだ笑みは消え、口の描く曲線は全く逆の方向へ下げられている。赤い瞳も細められ、怒りの形相で自らを焼いた張本人である政次郎を見つめていた。

「良かったな、あいつの狙いは僕らしい。可能な限り気は引く、なんとか近づけ」

「承知。……行くぜ」

「——今です！」

政次郎と十三は表情を引き締める。ゴルⅡゴロスが動き出す前に、ユーリヤが自身の銃でゴルⅡゴロスへ向けて発砲し、それを合図に二人が左右に分かれて駆け出した。

それに合わせゴルⅡゴロスは触手を目の前に突き出し、扇風機のように振り回す事で銃弾は弾かれていく。そこへ蓮が能力で触手の周囲を衰弱毒の大气で満たし、力を奪う。

それでも触手は勢いを失わないでいる所へ、真下の地面から陣が浮かび、突き出た魔力の鳶が触手達を次々に絡め取っていく。真魚の魔術による拘束が、触手全てを縛り付けてついに動きを止めた。

が、ゴルⅡゴロスが表情を歪めて体を膨らませ触手に力を込めると、瞬時にその鳶が碎け散る。真魚の魔術はゴルⅡゴロスの常識外の魔力により強引に破られ、再び触手は空へと解き放たれる。

「それで十分だ……！」

「ぶっ飛ばしてやんぜ、笑いガエル！」

時間にすれば一秒程の間隙にも政次郎と十三は足を止めず、お互いの武器が届くまであと少しの距離まで接近する。左右から同時に近付いて来る二人を見て、ゴルⅡゴロスは政次郎へ向けて体の三分の二の触手を向ける。

その全てが常人を殺すに足る勢いで、意志を持つ異形の鞭と槍が政次郎へ襲い掛かる。政次郎は近付く足を止め、振り回される触手に対応するべくその動きを見切る。

上から降り注ぐ突きに対し、両足を浮かさずに足捌きと体捌きを組み合わせる。ギリギリの所で躲す。振り回され飛び掛かる鞭を、胸より上を狙う物は上体を反らし、足より

下を狙う物は一瞬だけ宙を跳び通過させ、胴体を狙う物は刃で斬り捨てた。

政次郎が防戦する隙に、十三がさらに前へ踏み込む。それに対して残った触手が同様に振り翳される。

「お返した、ボケッ！」

政次郎よりも隙間の多い触手の群れを、左右に素早く踏み込む事で次々に十三は抜けていく。直撃コースの物は、カウンターを合わせて全力で殴り飛ばした。

ユーリヤの魔力の籠った拳で男の触腕同様に強く弾き飛ばされる触手を見て、これならば戦えると十三が確信する。しかし拳を放ち足が止まった事により、何本もの触手が殺到した。

極度の興奮状態にある体が危機感を麻痺させ、自身へ振るわれる暴力の軌道を瞬き一つ無く見させる。拳をさらに強く握り、その全てに對し拳で迎撃し、打ち飛ばす。

自身を攻撃する触手が消え失せ、目の前が開ける。強く地面を蹴り上げ、十三はゴル||ゴロスへ手が届く場所まで肉薄した。自身の全力が発揮出来る、絶対の間合い。

「ツがあああらアツ!!」

自身の腕と拳に自身の持てる力を限界よりも籠めると脳が指示する。目の前の存在を殴り殺す、一切の加減の必要は無い。躊躇という脳の制御が外れた豪腕を振るう。

ゴル||ゴロスが体を傾け、こちらを横目で見る。構わない。触手が振るわれるよりも

先に拳を振り抜く。もはや殴る事しか頭に無い十三は、もはや何があるかと拳を止める気は無かった。

拳が体へ吸い込まれる。もはや肉体を突き破らんばかりの勢いで放たれる凶器が、当たった。

「——いッでえ!?!」

その瞬間、拳の先から鈍い音が響く。明らかに肉体に当たった様な音ではない。十三の拳に激痛が走る。

何が起こったのか、目の前を確認する。ゴルゴロスの無骨な手が、拳の先に置いてある。だがその手にあるのは、肉では無い。掌全体を覆う硬い蹄が、十三の拳を受け止めていた。

16・杭討

魔力による反発を自身の力で抑え込み、左手の蹄で十三の拳を受けたゴルⅡゴロスが右手を振り上げる。

想像外の痛みに体を止めていた十三がそれを見上げる。その右掌にも今味わった、自身の拳よりも硬い蹄がそこにある。高々と振り上げられるそれを見て、昂っていた血の気が一気に引いた。

「だツぶね!!」

十三は右拳を引き、同時に左へ大きく跳ぶ。その瞬間、ゴルⅡゴロスの高々と上がった右手が振り下ろされ、空を切った掌はそのまま地面を叩いてその場を大きく揺らした。

その手の内にある蹄は地面に転がる小石を粉々に砕き、砂煙を大きく上げる。揺れる地面に跳ね飛ばされた様な錯覚を覚え、飛び退いた十三の体が体勢を崩し横に転がる。

「おじさんツー」

「皆、援護おっー」

未だ目の前から離れ切れずに地を転がる十三へ、ゴルⅡゴロスは左掌を上げる。体勢

が整っていない今、十三が巨大な手から逃れる手段は無い。最悪の事態が頭に浮かび、蓮が大声を上げる。

ユーリヤが三本の光の槍を生み出し、腕を下ろさんとするゴルⅡゴロスへ飛ばす。飛来する槍を見て、ゴルⅡゴロスは手を振り下ろす事なくその場から飛び退こうと脚に力を入れた。

が、逃れようとするその体へ向けて真魚のエミュレータから、空気を引き千切る様な異音を伴う黒い波が発せられる。その音は周囲に僅かにのみ漏れ、音でありながらも指向性を持った局所的な波がゴルⅡゴロスの体へのみ届く。

「? α!」

音が体に届くと同時に、さらにその内側へ向けて波は進む。伝わる毎に魂を外側から掘削する様な感覚を与え、それに伴いゴルⅡゴロスの巨体が強制的に硬直する。

そうして止まった体へ、聖なる槍が突き刺さっていく。人の背丈程の魔術の槍も、突き刺さる巨体からすればそれ程大きな物とは言えない。が、確かに体に食い込んだ事でゴルⅡゴロスの顔が確かに苦悶に歪んだ。

その間に十三は立ち上がりその場から下がろうとするも、動きが鈍い。蓮が急ぎ痛覚を麻痺させる麻酔物質を十三のいる周囲の空間に満たし、撤退しようとするその動きを助ける。

「無視してもらつては困る」

痛みから立ち直り再び十三に向き合おうとするゴルⅡゴロスへ向け、政次郎が焼夷手榴弾を投げる。触手でそれを弾き飛ばそうと缶を殴った瞬間、缶が爆発し触手が炎上する。

自身の器官が焼かれた事で、ゴルⅡゴロスはさらに顔を歪める。その熱が齎す痛みのままに、十三の事も忘れてゴルⅡゴロスは燃え上がった触手を振り回し暴れさせた。

「つく!?!」

ただ火を振り払う為の明確な意図を持たない触手の軌道を、政次郎はギリギリの所でかわす。が、火のついた触手が外套を巻き込み、その端へと火を燃え移らせた。

触手から離れる事を優先して政次郎は直ぐ様その場から退き、火の触手の範囲の外まで届くと共に自身の外套を取り払う。自身の体に巻き付けている爆薬に着火しないよう、外套を丸めゴルⅡゴロスへ向けて投げ捨てた。

力無く足元へ投げ付けられた外套に一瞬ゴルⅡゴロスの眼が向くが、すぐに何も起こらない事を確認し、燃え上がる触手を地面に叩きつけて火を舞い上がる砂煙で抑えていく。

自身への追撃が来ない事を確認し、政次郎は一旦距離を取る。二手に分けられた事でなんとか防戦出来ていた触手の群れに、十三を退けた両腕が加われば凌ぎ切る事は不可

能だと判断したからだ。

「……くそ、触手を焼いた所でキリが無い。焼夷手榴弾では全身を焼き払い切れんし、グリムリーパー M202も弾切れだ」

「いつてえー！蛙が何で蹄なんて持つてんだよ、詐欺だろチキショウ！」

「十三さん、手は大丈夫ですか！」

「百パー砕けてる！悪いけどまた頼む！」

政次郎が注意を向けた間に、命からがらと言った様子でその場から逃げ出していた十三が政次郎の近くまで戻り、派手に血を流し続ける潰れた右拳をひらひらとユーリヤへ見せる。

ユーリヤは速やかに治癒の魔術を施し、右手を包む光がその手の状態を巻き戻している。痛みこそ蓮の毒により止められていたが、自身の武器が砕けたままでは戦いにならない。瞬く間に傷が塞がった右手を、何度か広げては握る事を繰り返し状態を確かめる。

動く。力が籠る。指は一つ一つ曲がる。再び殴れる。それだけわかれば十分だ。十三が笑う。

「そろそろアイツこつち向くぞ、次の作戦はあんのか」

「もう一度伊達と僕が前に出る」

「は!?!さっきダメだったばっかじゃん!?!」

「今度は僕が奴に肉薄する。伊達、お前が奴の餌になれ」

「いくら刀で斬つても、あんだだけデカいんじや殺しきれねーだろ」

「アテがある」

作戦会議の途中に、触手の先についていた炎が消え失せ、ゴルⅡゴロスが再び蓮達の方へ向き直る。それを見て政次郎が体に取り付けてある缶の一つを取り、ピンを抜いて素早く投げつける。

さらに二つ・三つと素早くピンを抜いて連続で投げつける。ゴルⅡゴロスは先程の様に爆破炎上する事を警戒し、後ろへ軽く飛び退く。そのまま地面に落ちた缶からは、炎では無く大量の煙が吐き出された。

二つ目と三つ目からも次々に煙がその場に舞い上がり、煙がゴルⅡゴロスの前を完全に覆い尽くす。その間に政次郎はハンドサインで蓮達へ同行を促しながら横へ移動していく。

煙を強引に突進で突つ切るか、触手を闇雲に突き伸ばすのならば、間違いなく直前まで目にした蓮達の居場所へ向かってくるだろう。少しでも時間を稼ぐべく、蓮達はその場から横へ小走りしながら話を続ける。

「野曾木、使うぞ」

「ええ、わかるわね」

「言つた筈だぞ、”理解した”と」

「そうだったわね」

政次郎が蓮へと視線を向け、端的な会話を交わす。本人同士しかわからないやり取りに、他の三人は話を呑み込めずに訝しげにする。

「政次郎さん、何を？」

「“切り札”とやらがある」

「なんでちよつと曖昧な言い方なの？」

「僕は詳しく知らんからな」

「そんなんで大丈夫なのかよ」

何か手があると言うには今一要領を得ない政次郎の返答へ、三人が疑念を深める。ただ、政次郎が不確かで楽観的な手段に頼るような人間では無い事は周知の事実である為、疑念はそのままに深く聞く事はしない。

その時、煙の壁を貫いて複数の触手がさつきまで蓮達がいた場所へ殺到する。感触を覚えない触手が空間を探る様に振り回され、空と煙の壁を切り裂いていく。

「煙を吹き飛ばす。次に伊達が突つ込み注意を引きつけ、その隙に僕が近付く。いいな」
「あの腕ならともかく、触手なら殴れるしなんとかなるか……わかった、やってやんよ」

「ユーリヤ、ちよつと頼まれてくれるかしら」
「え？」

あらぬ所へ振り回され続ける触手を前に作戦はまとまり、再び政次郎と十三が前に出る。

政次郎と十三は少しでも身を軽くする為、背負う狙撃銃と軽機関銃をその場へ捨てる。そうした後、政次郎は懐からスイッチを取り出し、親指で押し込んだ。

「? αツ!？」

「行けッ!」

「承知!」

その瞬間にゴルⅡゴロスの前、煙の中に転がる政次郎の外套が爆発する。脱ぎ捨てられた時に包まれる形で中に仕込まれていた即席爆破装置が、爆風と共に煙を吹き飛ばす。

政次郎と十三が駆け出し、その前の視界が爆風によって晴れさせられる。突然の轟音に反応するゴルⅡゴロスの姿が映り、そこへ十三が政次郎よりも前に出て、右に少しずつ動きながら距離を詰めていく。

突然の爆発に驚くも、自身に対して被害が無い事を理解したゴルⅡゴロスは、近付いて来る巨漢に目を向ける。直ぐ様伸ばしていた触手を戻し、打ち付けようとそれらを撓しな

らせる。

「う、お、っだ、らアッ！」

大量に飛び交うそれらを可能な限り避け、体勢が崩れて避け切れなくなつた所で拳を構え、残る触手達に最低限のシャープな振りで拳を速く当て、上下左右へと跳ね飛ばして行く。

軌道を軽く曲げる程度であれば、魔力による反発力を得た今の拳であれば全力で殴る必要も無い。上体を大きく振らず、振り抜かない拳で飛来する触手を凌いでいく。

十三へ大部分の触手が使われている間に政次郎が十三の逆側から近付いて来る。そこからへも残つた触手や、十三が避けたことで素通りした触手が振られるも、先程よりも数を減っている以上さしたる障害にもならないと言つた風に政次郎は次々にそれらをすり抜けていく。

あと四足で刀が届くと言つた所で、グルグルロスが蹄を持つ手を動かす。右掌を僅かに上げ、左手は大きく振り上げる。先程の十三の様にこちらの攻撃を防ぎながら、左手で叩き潰すつもりなのだろう。

「……それは、先程と同じならの話だ……！」

政次郎は脚に力を込める。限界まで集中し、持てる力全てを次の一瞬に費やすつもりで前傾し、構えを取る。

次の瞬間、政次郎の影がその場に置いていかれる。持てる瞬発力全てを使い、一足で四足の距離を瞬時に詰める。目を見開くゴル||ゴロスが、右手を急ぎ構えようとした。それよりも速く、刀を振るう。

「シィッ！」

「?α!?!」

右手の防御が上がるよりも先に政次郎の刀が一閃し、両腕の間の腹部に当たる部分に切り込み傷が走る。相手からすれば「手痛い」程度で済む傷は、醜い体液を外へ放たせるも致命傷とはならない。

政次郎は前へと跳ぶ自身の勢いを着地する脚で殺すと、腰から棒状の物を取り出し、素早く体の向きを反転させてそれを開いた傷へと向けて突き刺す。そして、ゴル||ゴロスの体が一瞬強く脈打った。

「——ッ?αααッ!!」

政次郎が何かを突き刺した直後、ゴル||ゴロスが確かな悲鳴を上げながら大きくその場から退こうとする。十三を襲う触手の動きも止まり、何が起きたかを確認するべく十三は目の前を見る。

腹部に入った一筋の傷の中央へ、短剣が突き刺さっている。政次郎がいつも使う携帯性に優れる無骨な小刀ではなく、持ち手に古い装飾が入った西洋の意匠の短剣だった。

「ムハンマドによって清められた劍の遺された一振り、それにさらに魔術付与をした一品よ！アンタには、さぞ懐かしい痛みでしょうね！」

悶え叫び回るゴルⅡゴロスへ、蓮が得意げにその短劍の詳細を言い放つ。魔術師により聖化された、古来の劍。手遅れとなった場合に備えて蓮が仕入れていた、真正正銘の“切り札”だった。

ユーリヤの魔力を纏った武器が反発する火花ならば、その短劍は魔力そのものの杭、あるいは楔だった。短劍の中に宿る大量の魔力が直接ゴルⅡゴロスの体を蝕み続け、あまりの痛みに顔は歪み続ける。

「よくわかんねーけどチャンスだ！どけ政次郎！」

「わかった」

自由となった十三が再び足を前に動かし、それに合わせて自身のやる事を終えた政次郎が後ろへ飛び退く。

自身に絶え間ない痛みを齎し続ける、腹に突き刺さる短劍をどうにかしようとしてゴルⅡゴロスが手を動かす。それよりも一手早く、十三がゴルⅡゴロスの目の前へ辿り着いた。

「だあらアッ！」

脇を締めて握る手を解き、全ての指を引いて掌を固める。そのまま走り込んできた勢

いを乗せて、十三は目の前にある短剣へ向けて掌底を打ち込んだ。

腰によって打ち出される素早い打ち込みは、ゴルⅡゴロスの手は間に合わない。十三の怪力を受けた短剣は、体内の深くにまで突き刺さる。同時に、ゴルⅡゴロスがもはや聞き取ることすら難しい甲高い音を口から大きく飛ばした。

「蓮さん、受け取って下さい！」

「ナイスユーリヤ！十三さん離れて！」

「ぶちかますよー」

それと同時に、蓮達から離れた場所へ走っていったユーリヤが蓮へ、地面に転がっていたダゴン殺しを投げ飛ばす。放物線を描いて手元まで戻ってきたダゴン殺しを構え、蓮はレバーを引いて装弾を行う。

大きく隙を見せるゴルⅡゴロスを見て、攻め時と判断した真魚がエミュレータのプログラムの中で、最も規模の大きな魔術のセットアップを始める。待機状態にするだけで急激に精神力が吸われて目眩を覚えるも、すぐに意識を強く持ち直して目の前を見定める。

蓮の声に反応し、十三は急ぎその場を退く。痛みに喘ぐゴルⅡゴロスが、それまで十三のいた場所、自身の近く全てに怪腕と触手を叩き付けて暴れ回る。その場から逃げようとする十三の頭を暴れる触手が一本掠め、十三は顔を引き攣らせた。

「そのままだと痛いでしょ！ならその剣、無くしてあげるわ！」

蓮が自身の毒を宿した散弾をゴルⅡゴロスへ向けて発射する。開いた距離により大きく力を散らばらせて体全体へ降り注ぐ弾丸達は、いかに邪悪な存在を退ける硫化水銀を宿していると言っても、政次郎の突き刺した短剣に比べれば雀の涙ほどの影響も与えない。

蓮はゴルⅡゴロスの体の表面に取り付いた自身の毒を能力により支配下に置き、操作する。政次郎が突き立て、十三が穿った短剣のある場所へ向けて、体全体にある毒の性質を変容させながら、渦巻くように一点へと移動させていく。

短剣の埋まる傷へと辿り着いた毒は、傷口を通じて内側へと侵入していく。そして強力な酸毒へと変化させた全ての毒で、短剣を溶かしていく。溶かした剣は毒に混ざり、形が流体となっていく。

「——体全部に回すけどねっ！」

その状態で、蓮がゴルⅡゴロスの全身に行き渡すように毒を回す。剣の魔力を宿した毒が、体全体へ回っていく。巨体のあちこちからは血管が浮き出て、脈打っては体が跳ね、末端からは体液が吹き出す。

自身を拒絶する魔力が体全体へと染み渡り、ゴルⅡゴロスは体を痙攣させて苦しみ続ける。それでもまだ尚、その瞳は妖しく力に満ちた輝きを捨てない。

「太古の呪術にやられた、んだっけ」

十三が自身の魔術の範囲から離れたのを確認し、真魚が魔術プログラムの最終準備を終える。剣の魔力と蓮の毒にもはや体を動かすこともままならない、と言った風のゴルⅡゴロスを、真魚が冷たく見据える。

分析と情報からただ必要な魔術を選択し、適切に行う。最後の一押しがされる。

「……」コレ、以上に古いの、ないでしょ」

プログラムが起動し、一瞬世界が真っ赤に染まる。指定された範囲内へ、生きとし生けるものの原初・或いは終焉へと誘う呪詛が満たされ、空中を舞う塵すらも別の次元へと吸い込む無数の渦が顕れる。

ゴルⅡゴロスの体を、魂を、存在を。空間に顕れる次元の渦が、根底から削り取り、吸い込み、破壊していく。この世界に受肉された体が、渦を通じて別次元にある終点の混沌へ向けて入り混じる。

術が終わる頃には、ゴルⅡゴロスの瞳は一つ欠け、左腕は筋一本で繋がるのみとなり、触手の大部分は消失し、巨体は大きく削り取られていた。……が、残る瞳が血の涙を流し、術者である真魚を強く睨みつける。残された一本の触手が、ぴくりと動いた。

「まだ動けるか！」

「……っ！」

明らかな強い敵意をぶつけられ、真魚の体が思わず竦む。その場にいる誰もが終わったと確信する程の傷でありながら、ゴルⅡゴロスはなお動こうとしていた。

ゴルⅡゴロスから飛び退いていた政次郎と十三はカバーに入れる体勢になく、真魚や蓮の身体能力では飛来する触手を避けられるかは厳しい。四人に、緊張が走る。

「——やらせません！」

その時、蓮のダゴン殺しを拾う為にその場で最もゴルⅡゴロスの近くにいたユーリヤが、ゴルⅡゴロスへ向けて駆けて行く。気配によりまだ動く力が残されていると察知したユーリヤだけが、ゴルⅡゴロスが動くよりも先に行動していた。

背負うスレッジハンマーを両手に持ち、一気に詰め寄る。真魚へ攻撃する事だけに気を向けていたゴルⅡゴロスは、自身の左側から走り込んでくるユーリヤに反応出来ない。

「は、ああああっ!!」

そのままユーリヤは鉄槌を振り翳し、自身の魔力を最大まで込めて政次郎のつけた傷へと振り下ろす。先端に輝かんばかりの魔力が込められた鉄槌が、傷口へ突き刺さる。

叩き付けられた魔力の塊が、破裂して周囲を強く照らした。

「?、α、α、α——ツツ!!」

それまでで一番の悲鳴を上げながら、ゴルⅡゴロスが天を仰ぐ。その状態のまま暫く

動きを止めたかと思うと、その巨体は後ろへと倒れ込んだ。

ユーリヤは鉄槌を振り抜き、自身の前へと戻して構え直す。後ろへ倒れたゴルゴスをそのままの状態の数秒睨んだ後、ユーリヤは構えを解いて槌頭を地面に下ろす。

そのすぐ後に、ゴルゴスの体は黒い塵となり、地面へと落ちていく。その場に流れた一陣の風が、かつて巨体だった物を吹き飛ばし、空へと還した。

17. 最後の一枚

「——気配は完全に去りました。再びこの場で現界する事は無いでしょう」

「……ふいー、なんとかなかったか。死ぬかと思っただぜマジ」

ゴル||ゴロスの成れの果ての行く先を眺め、ユーリヤが確信を呟く。その言葉を受け、十三が構えを解いて肩の力を落とし、安堵の息を大きく吐いた。

しかし蓮・政次郎・真魚の三人は周囲に素早く目を配らせ、急いで付近の地面を捜す。未だ警戒を解かない三人の様子を見て、十三が何事かと三人へ声をかけた。

「何してんだ?……まさか、地面からなんか湧いてくるとかねーよな」

「阿呆。まだ肝心な物が残っているのを忘れたか」

「アツシユールバニパルの焰」と、十三さんが見た魔術エミユレータがどこかに転がってる筈よ。確保しない限り、安心は出来ないわ」

「あ、こつちにあつたよ蓮ちゃん」

ゴル||ゴロス呼び出した魔石と、その儀式を演算したエミユレータ。当初の目的である魔石は勿論、ゴル||ゴロスが現れてから一切動きを見せていないものの、邪神一柱を呼び出す儀式を遂行したエミユレータもまた確保が必要な代物だ。

三人がそれぞれの目線で地面を見やれば、真魚が最初にそれを見つける。戦闘の余波により土を被っているエミュレータの傍へ近付いた真魚は、両膝を曲げてその場にしがみ込む。軽く掌で土を払い、汚れたエミュレータを手を取った。

残る四人も真魚の座り込む場所へ近付き、エミュレータの転がつていた地面を見やる。蓮が転がる小石に何か違和感を覚えてそれに手を伸ばし、指で表面を軽く擦ると、付着した砂の下から赤黒い透けた結晶体が見えた。

「……これね。さつきまでの魔力は消えてるけど、間違いないわ」

「んー、このエミュレータ立ち上がらないや」

「さつきまで暴れ回ってたんだし、余波で壊れたんじゃねーの？」

「……外傷とは違う、かな。んー、出力過剰でエミュレータが過負荷オーバーロードしてドカン？ドライフ中身調

べないとわかんないけど、パツと見たしのより旧型だし」

「どちらにせよ、これ以上悪用出来なければそれで構わん」

自分のエミュレータに近いが幾分かモデルの古いタブレット型のエミュレータを、真魚があちこち触り起動を促すも、その画面は沈黙を続けている。

画面には罅ひびが走り、その背から伝わる残された熱と焦げた匂いから、エミュレータの壊れた原因を推測する。とはいえ、この場で確定出来る事はエミュレータが壊れ、起動する事が出来ないという事だけだ。

政次郎の意見に同意した真魚は、壊れたエミユレータを懐へしまふ。後に完全に破壊する事になるとしても、今すべき事ではない。このエミユレータの扱いは、帰還してから話し合えばいいだろう。

その間に蓮は一旦魔石を持ったまま場を離れ、森の影に置いてきていた弾薬などをしまうザックから掌大の箱を取り出す。箱と魔石を両手にそれぞれ持って大きさを見比べ、問題が無いことを確認しながら真魚達の場所へと戻ってきた。

「なんだその箱は」

「^{エルダーサイン}旧神の印」の刻まれた、封印用の箱よ。魔石は今力を失ってるけど、危険なものである事に変わりは無いからね。確保出来た時に備えて用意していたわ」

「単なる紙箱にしか見えねーけど、そんなんでいいの？」

「信頼に足る取引先からの物よ、まず問題ないわ」

蓮は箱を開き、歪んだ五芒星が内部に描かれたその中へ魔石をしまふ。箱の側面にある組紐を解き、それを十字に巻く様に箱の上下左右を引き締めて、最後に中央で結んだ。

強く締められた結び目は、自然に解けることはまず無いだろう。召喚に魔力を使い果たし休眠状態となった魔石には、内側に刻まれた印を破る力も残されていない。これだよやく、本当の一件落着だった。

「——よし。これでもう安心ね。皆、お疲れ様」

「ああ。やれやれ、この規模のバケモノが解き放たれていれば被害は相当だっただろうな。余計な手間が増えず、助かった」

「……悍ましい邪神でした。誰かを脅かす前で、本当に良かった……」

「しばらく蛙見たくねーわ俺」

「夢に見そー」

邪神は去り、魔術師の命は断たれ、魔石とエミュレータは確保出来た。事態が本当の決着を迎えた事を全員が理解し、一同の緊張の糸が緩められる。

念の為ユーリヤが最後に全員へ向けて治癒の魔術を一通りかけ直す。見えない怪我や邪神の威圧による後遺症、興奮状態にあった体を落ち着ける為の光が蓮達を暖かく包み、体を平常の状態へ戻していく。

治癒が終わり、全員がそれぞれの無事を改めて目配せで確認した。

「この魔石だけど、素人の手に置いておくには過ぎた物よ。今回はたまたま休眠状態だったみたいだから発掘品として回収されたみたいだけど、専門家の手に置いておかないわ」

「『専門家』と言うなら、その石で出来る事も知っているだろう。下手に誰かの手に渡さず、こんな事態を再び起こさないように破壊すべきじゃないのか」

「この石はズスルタンの手によって、多くの旧支配者へ存在を知らされているわ。云わ

ばアンテナね。そんな物を下手に破壊すれば、今度はそれを契機に何を引き寄せるかわからないわよ」

「またあのカエルが出るつてののか？」

「もつとヤバイのが出るかも知れないのよ。これの元の持ち主とか、ね」

「……危険、ですね。私達で対応出来る相手にも、限界があります」

「もうやだー」

旧支配者によつて生み出された魔石は、その身にズスルタンの呪詛を受けている。

それにより、下手に手を下す事で予想される最悪の事態を考えれば、蓮達が対応出来る事態を越えた大事になる可能性があつた。今回こそ正面勝負が出来る相手だったが、この世界の裏側に居る旧支配者やその他神性には、そもそも勝負にすらならない存在も多い。

ただ、“破壊”ではなく“封印”であれば、少なくとも適切な管理をし続ける限りは安全が確約される。人から見て永久に等しい時を生き続ける旧支配者からしてみれば、人間目線の百年単位の封印も瞬き程の刹那に等しい。

ただ封印が解けるのを待ち続けなければならない。人の世に永遠が無い事を、思考ではなく存在そのもので証明し続ける旧支配者達は、切っ掛けさえ与えられなければ眠り続ける。

「当てはあるのか。貴様が管理する、などと自惚れた事は言わんだろうな」

「オカルトシヨップのマスターに話は通してあるわ。〃疑わしいのならば、自由に監視をつけてもいいですよ」なんて言ってたわよ」

「……………わかった。監視はつけん、だが定期的に僕が邪魔しに行くときだけ伝えてくれ」
「わかったわ。儀式に使われたエミュレータはどうする？」

「中身はチエックしておきたい、かな。確認出来たら用済みだから、後でみんなの前ですとろーいする」

「いいのですか？」

「ん。別に複数あっても強くなれる訳でもないし……………こんなのは、わたしのだけでいいから」

そう言いながら真魚はいつも通りの無表情で、罅割れた魔術エミュレータの表面に向けてえいえい、と口にしながらパンチを打つ様な素振りを見せる。

その変わらぬ口振りと顔からは、何の感情の波も伺う事は出来ない。悪用されたエミュレータに対して思う所も、それを自ら壊す事に対する思いも、蓮達が悟れる事は無かった。そ、と一言だけ蓮が呟く。

「——それじゃ皆。帰りましょっか、唐館に」

◆ ◆ ◆
そして蓮は四人へ笑顔を向け、車のある方向へと歩き出した。

「どーもどーも蓮さん、ご無事で何よりですー♪」

「今回は助かったわマスター。あれ無かったら正直ヤバかったわ」

後日、“Rouge”を来店した蓮は、真つ先にルージユの笑顔に迎えられた。

軽く笑みと感謝を返し、蓮はルージユの座る場所へと寄つてくる。蓮は自身のバッグから魔石を取めた箱を取り出し、テーブルの上に静かに置いた。

「これが例のものよ。今は寝てるわ」

「ほうほう、なるほどなるほど。いやー、本物の“アッシュールバニパルの焰”、それもこのサイズの物をお目にかかるとは思いませんでしたねー」

ルージユは箱を手にとると組紐を解く事もせず、その重みと中で箱に当たる感触のみで魔石を確かめる。実際に目にしてもいないのに“お目にかかれる”というのはいさか妙な表現ではあるが、それは中身に対して疑いを持たないという、蓮に対する信頼の現れだった。

その言葉の中に含まれる一部の単語に、蓮が引っかけかかりを覚える。

「……待つてマスター。“このサイズ”って何？別にもあるの？」

「私は持つていませんけどねー。大蟾宮だいせんきゆうに眠るとされている、蛙の様に彫り込まれた緋色の宝玉なども、本質的にはコレと同じ物と言われています」

「こんなのがまだあるの……」

「これは“鍵”ですからねー。碑やこの宝玉は、かの墓がまの神へ通じる為の物です。“鍵”が一つだけでは、ほら、何かあった時に不安でしょう？」

「実際に相手した私からすれば、こんなのがいっぱいある方がよっぽど不安よ……」

蓮はげんなりとした顔で受けた苦勞を顔で表現する。それに対してもにこにこことルージュは朗らかな笑みを続けるだけで、それに同情を向ける事も言葉をかける事もしなかった。

一切の反応が返らないのを見て、いつまでもそうしていても仕方ないという事で蓮も表情を戻していく。またこんな事があるならあったで、まあその時は仕方ない。結局先の事は、その時にならないとわからない。それならば、今は今の事を考えるのを大事にする。

「政次郎くんから伝言よ、“定期的に邪魔しに来る”って。事実上の監視ね。……だからそれ、どっかに売らないでよね、マスター」

「勿論♪店主である前に、私は一人の蒐集家コレクターです。そこは弁えてますともー♪」

「まあ私も信じてるけど、一応ね」

笑顔を一切崩さず真意を悟らせないルージュへ、蓮は念押しをする。

出処不明な数々の魔術品を適切な知識で管理し続ける目の前の“蒐集家”の腕前は確かだ。魔術品の取扱いに関して、少なくとも蓮が知る中でルージュの右に出る者はい

ないし、素性こそ不明な所が多いものの個人的には信頼に足る人物だと思っている。

しかし今は魔石の管理についてよりも、蓮にとっては最も大事な話が残っていた。

「——で、マスター。約束、覚えてるわよね？」

「ええ♪『魔石が本物であれば相応の価格で買い取る』、そうでしたかね？」

「そうよ。政次郎くんの監視はついちゃったけど、私は約束を守ったわよ」

「監視など私にとつては些細なことですので構いませんよ。ではでは、報酬の話をし
ましようかー」

“アッシュールバニバルの焰”についての情報収集の際、もしそれが本物であれば蓮
が確保し、ルージユの手元へと流す運びとし、買い取りを行う。そういう約束を蓮はし
ていた。

仲間達には内緒にしているが、これは個人的な交渉の結果であり、この買い取り話が
無かったとしても適切な管理を行えて、尚且つ目の届く場所にいるルージユの手元へ魔
石を回す事になっていたのは間違いない。

そう、これは同じ結果でありながら最大の利益を得る為の、自分の交渉による対価な
のだ。なので一切やましい事などない。目の前のルージユがこの手の話に対して、金銭
の誤魔化しをしない事は確かだ。次に提示される自身への報酬に、蓮は内心胸を高鳴ら
せた。

「では、これをどうぞー」

そうして微かに笑みを溢れさせる蓮へ向けて、ルージユは封筒を一つ渡す。厚みの殆ど無い封筒を受け取り、小切手だろうか、そう蓮は考える。封のされていない折られただけの頭を上げ、中身を確認する。

「魔力を失った魔石の買取り、四千万円。そこから太古の聖剣、三千八百万円。魔術付与を施し直した魔術師の斡旋手数料、百万円。〃旧神の印〃の封印箱——」

蓮が中から取り出す紙に印字された文字を、ルージユが諳んじて読み上げていく。蓮が紙を取り出すことに姿を見せる文字列が、蓮の表情を強張らせていく。蓮が封筒から引き上げた紙の文字列が、最後の行に差し掛かる。

「——三百万円。計、二百万円のお支払いお願い致します♪」

「嘘でしょおおおっ?!?!」

〃請求書〃と太字で書かれた一枚の紙に書かれた、最終金額が蓮に突き付けられる。あまりの予想外の事に、蓮は大口を開けて絶叫する。入り口に取り付けられた鈴が僅かに揺れた。

「ちよつと待つてマスターー!き、聞いてないわよこんな事おー!」

「だって野曾木さん、これらを注文した時『悪いわねマスター、また来るから!』つて言つて値段については聞かなかつたじゃないですか。いざ来て受け取つた時も『ごめん急い

「でるから、帰ってからで！」って言つて、風みたいに去つて行つちやいましたし」
「う、ぐつ……！」

確かに、蓮は先日アッシュユールバニパルの焔、及びそこから連想されるグルーゴロスの存在を聞いた時、少しでも急いで情報を収集する為に駆け足で注文だけを済ませ、すぐにユーリヤや真魚達と合流していた。

自身も口にした覚えのある言葉を引き合いに出され、過去の記憶により言葉が止まる。今思い返してみれば、注文する際にルージュが「いいんですか？」と言つていたような覚えもあるし、最後に何かを口にしようとしていた様な素振りもあつた。あの時、値段について口にしようとしていたのだろう。

事態は理解出来ていた。だが、あまりの現実に関係がつかない。何かを口にしようにも、値段も聞こうとせずとその場を飛び出した自分の非が言葉を途切れさせる。

「これでも野曾木さん相手という事で、ギリギリまで抑えた価格設定なんですよー？ 短剣とはいえ、現存するムハンマドの聖剣なんて今はもう貴重ですからねー。売る所で売れば、下手すれば億届きかねませんし」

「う、ううつ……！」

邪神すらも苦しめたあの聖剣の効力を考えると、それにも確かに納得は行く。段々と頭の冷静な部分が、目の前の一つ一つの理由について納得していく。感情だけが、それ

を受け止められない。

嫌な汗が流れ続ける中、封筒から請求書を引き抜いた所ではらりと一枚の別の紙が封筒の中から落ちる。蓮は足元に落ちたそれを見る。

それは、“塔”が描かれたタロットカードだった。

「払って頂きますよね？」

「……………わ、かった、わよ……………」

「毎度、ありがとうございますー♪」

最後の最後に突き付けられたたった一枚の紙に、蓮は絶望した。

幕間・境界の狭間にて

月明かりが立ち込める雲に遮られ、明滅する街灯の光が照らす先の路地に、死体が転がっていた。

“いた”というのはその路地に死体があった事が過去にあつたと示す言葉ではなく、また今現在死体が転がっているという現状の確認でも無い。

首に傷をつけられた死体が、びくりと震える。開かれた目の瞳孔は開き切っており、既にその瞳には闇以外の何物も映してはいない。だがそれでも、体だけは不自然に痙攣を繰り返していた。

やがて痙攣が大きくなり、死体の男は見えない糸に引かれる様にゆつくりと、しかし不自然な動きで立ち上がる。体はあちこちが傷付けられており、左腕は何らかの力を受けて本来とは全く別の方向に折れ曲がっている。

男の顔は既に土気色となり、表情も折れた左腕の痛みを感じさせぬまま、瞳を虚空へと揺らし続ける。その幽鬼の如き姿は、男が闇を見つめているのではなく、ここには存在しない場所の闇が男を取り込んでいる様な印象すら見受けられる。

「——また一つ、駒が手に入ったなあ」

明滅する街灯がこれまでよりも強く輝き、路地の奥に居る存在に形ある影を与える。黒で染められた脚まで隠すトレンチコートを着た男が、不気味にゆらゆらと体を揺らし続ける死体を笑いながら見定める。

今こうして動いている死体は、つい数分前までは家に帰る途中の、ただの一般人だった。しかし、今はこうしてトレンチコートの男の手によつて物言わぬ傀儡と変えられている。

人気の少ない路地裏に潜み、通りがかつた一人きりの人間を手につけて、自らの手駒に変える。それがトレンチコートの男が最近始めた、“駒集め”の手口だ。

「……クク、ゾンビつてのはいいなあ、やっぱ。どんなヤツも、簡単にオレのモノに出来ちまう」

人を自らの手で殺したばかりの身でありながら、喜悦の表情を浮かべるこの男も、最近まではただの一般人だった。だが、裏サイトで見つけた“死隸術”というたつた一つのドキュメントファイルが彼を変貌させた。

やけに手の込んだ致死毒の精製の手順、それが齎す結果、簡単な呪いまじなの様な文章。冷静に考えれば狂人の妄想にしか過ぎないそれらは、男の気をどこか妙に惹きつけた。

ある日、上手くいかない生活へのストレスから、気分転換のつもりでそのファイルの中に書かれてある内容を実践し、ちよつとした悪戯のつもりで男は常に自身をしつこく

叱咤してくる上司に数滴毒を仕込んだ。

毒を取り込んでしまった上司はその直後、異様なまでに苦しみ直に死へ至った。それを見て男は気を動転させ、何かに縋るようにファイルに含まれていた“死人を動かす呪文”を唱えた。

冷静に考えれば生が死へと転ずる事があっても、死が生へ転ずる事などありはしない。実際、上司は動き出しこそのしたものの、体に命の熱を宿さぬまま虚ろに開かれた眼を見れば、死んだままである事は一目瞭然だった。

(別に、このままでもいいか)

力無く動く上司のゾンビを見た時、男の中で何かが失われた。

それは倫理だったのか、正気だったのか、理性だったのか。それはもはや知ることには出来ないし、男自身もそんな事はどうでも良かった。

その時から男は死体を操る魔術と、自身が求めるままに手駒を増やす事に情熱を燃やし始めた。気に入らない人間を自らの駒に加え、気に入った人間も自らの駒とする。

男はそれまで以上に高速で巡り続ける自分の思考と欲求に、自らを理性的と錯覚しているものの、既にその有り様は狂人のそこまで堕ちていた。

「……さて、と。誰か来る前にまた“しまう”か」

一通り笑い終えた後、男は呪文を唱え始め、目の前の死体に向け始める。ゾンビはゾ

ンビによつて増やすことが出来、作ること自体は元さえあれば誰でも出来る。

だがいくら増やすことが容易でも、隠すことは至難だ。動きの緩慢な死人はどれだけ急ぐように指示をしても素早く走る事は出来ず、元が生者である以上は行方不明者の捜索として動く警察の目から逃れ続ける事は難しい。

人払いの魔術を習得していれば、自身のホームとなる人気の少ない廃屋や地下空間を見定めてそこへ集める事も出来るが、結局の所それは自身の駒を一点へ留め、閉じ込めるだけの行為に過ぎない。

それを解決するべく、男は再び裏サイトを巡り、自身が動き回りながらもゾンビを自在に持ち運ぶ為の魔術を探して習得していた。

「……ん？」

呪文を唱え終えるより前、路地の方へと近付く靴音がする。男は呪文を止め、ゾンビの体を路地の壁に寄せ、動かないように指示する。

耳を澄まし、足音の数を確認する。こつ、こつ、こつと乾いた音が決まったりリズムで鳴り続ける。それ以外の種類の足音は聞こえず、閑散としたこの場に於いてその足音以外の物が隠れているとは思えない。

一人だ。そう確信した途端、男は口端を引き上げ顔を歪める。

しかしまだ動くには早い。動くなら、この路地前を抜けて背を向けた瞬間だ。息を潜

め、足音の主が路地前に通りかかるその瞬間を待ち続ける。

こつ、こつ、こつ。この先に何が待ち受けるとも知らず、足音が路地へと近付いて来る。男は笑い声を上げないようにするので心中必死だった。

こういった場所で待ち続け、“獲物”がかかる事はそうそう無い。人気の少ない場所というのは人が通りかからないからこそであり、待ち伏せをして一人も駒を得られないという事も往々にしてある。

だが、今一夜にして二つも駒が手に入りつつある。嬉しい誤算に、笑みを隠しきれない。なんとかそれを噛み殺しながら男は路地の闇に留まり続ける。

やがて路地へとその影が差す。今だ。動きを止めさせていた自らの駒ゾンビに向けて小声で呪文を向け、通りがかつた者を同類にしろと命令を下す。

ゾンビが動き出し、緩やかな動きで路地から出る。そしてそれに気付かぬ行人の背を盲めしいた瞳で確認すると、呻き声を上げながら襲いかかった。

「ア、アツ——」

今まさに行人の背にゾンビが覆い被さろうとした時、鈍く大きな音が響く。その音に次いですぐに、男の潜む路地の近くの壁に何か当たる音がした。

男がその音に驚いて体を竦めていると、自らの操ったゾンビがその壁を背で擦りながら力無く崩折れ、地面で弾む姿が目に入ってきた。

……今、何が、あった？

「——時代遅れのオヤジ狩りかと思つて蹴つてみりや……なんだこりや？えつ？死んでる？……ウツソちよちよ、ちよ待つて俺全力で蹴つてないんだけど！え、ツ！ぜ、前科、一、犯？」

地面に臥せて動かなくなっているゾンビを見つめていると、路地を抜けた先の道からどこか呑気さを感じさせる男の焦り声が聞こえてくる。

ゾンビに噛まれた、という様子はその声からは全く見られない。ただただ倒されたゾンビと、それに伴う自分の身の心配をしているらしい。そんなバカな。

普通、背後からゾンビに襲われたとなれば少なからず人間は動揺する。死者が動くという非現実、唐突に襲いかかれるという状況、ゾンビの持つ虚ろで生気の無い表情への恐怖。

それなのに道にいる男は、一切そういった物を見せず何も考えずにゾンビを蹴り飛ばした、と言つた。

「……ああん？ちよい待て、これ俺が殺したつて感じじゃねーな？あーよかつ……じゃねえや、なんだコイツ？ゾンビとか？え、なんでそんなんココにいんの？ゾンビつて自然発生するん？」

ふざけてるのか。呑気極まりない独り言に対し、トレンチコートの男は苛立ちのあま

り舌打ちを打ってしまう。それが不味い物と理解した時には、既に手遅れだった。

「あ？今の音——オイ。そこに居んの、誰だ」

「くそっ!!」

男が路地裏に潜む自分に気付き、警戒した低い声でこちらに呼び掛けてくる。即座にその場を離れる事を選択し、路地を逆に抜ける。

なんとか逃げ離れようとしたが、後ろから先程の男らしき足音がついてきていた。地理を把握している事を生かして路地から路地へと道を変えながら男を撒こうとするも、単純な速度の差か少し距離を離しても足音はすぐに差を詰めて追いかけてくる。

自身を追ってくる男がどういう人間かはわからないが、この状況で追ってくるという事は自分を捕まえるつもりで、それが出来ると確信するだけの身体能力を持っているのだろう。

そんな男と鬼ごっこを続けて撒ける程に、自分は体力に自信は持てない。こうなれば、下手な場所へ追い詰められるよりも、自分が有利な地点で迎撃する方が良い。男は路地から大きな道へと出て、最も近く迎撃に向いた場所へと足を向ける。

「待ちやーがれオラ！逃げれると思ってるのか！」

車一つ分程の幅の舗装路を全力で走っていると、男の声が真っ直ぐに背中に届く。それはつまり、自分の背が男の視界に完全に収められたという事で、この先の路地も無い

開けた道ではもはや撒く事は出来ない。

だが、それでいい。男は目的の場所に辿り着き、その最奥まで走ると即座に呪文を唱え始める。男の足を考えれば間に合うかどうかはギリギリの所だが、急いで目的の魔術を組み上げていく。

「待てつつつてんだろテメエー……あん？くつきーなんだここ、ゴミ捨て場？」

少し遅れて声の主が到着する。タンクトップ越しにも見える程に隆起した筋肉が上半身全体を覆う日本人離れた大男が、黒い手提げ袋を片手にこちらを見据える。

自分が選んだ場所——住宅地より離れた、広いゴミ捨て場——に漂う腐臭を受け、その大男は鼻を抑えて周りを見渡している。その迂闊にも大男が置いた時間により、魔術は完成した。

「……来い、駒どもー！」

「へっ？」

魔術の完成と同時に、ゴミ捨て場の地面から大男を囲む様にゾンビが湧いて出る。自身の影を介し、自分の影と繋がっている影から死人を出し入れする魔術。それが自分の持つ、ゾンビの大群を活用する為の魔術だった。

欠点としては出し入れする為にある程度以上の影の大きさと、“境界”を定める為に一定の光が照らしている事も必要とされるが、ある程度物が周囲に存在する屋外であれ

ば、この魔術は事実上無制限の召喚術となる。

自身の所持しているゾンビの十体が、大男を取り囲む。これだけの数で囲んでしまえば、どれ程大男が屈強であったとしても意味は無い。一齐に襲いかからせ、その内の誰かが動きを止めた隙に噛み付いてしまえば、どんなに噛み傷が浅くともそれだけで決着となる。

男は周囲を取り囲むゾンビを真顔で見渡し、溜息を吐きながら頭を掻いた。

「あー、もしかしてお前アレか、魔術師か何か？うわ、めんどくさ」

「……随分冷静じゃねえか。それともなんだ、この非現実的な状況に早くも現実逃避か？」

「いや現実逃避っつーか……あー、なんでもいいや。アレだろ、“目撃者は消す”とかそういうテンプレ的なやつだろ？言わんでいいぞ、時間勿体無えし」

「てめえ……自分の状況わかってんのか。こいつらはドラマや映画やセットとかじゃねえんだぞ、紛れもなくコイツらはオレの操っているゾンビだ。……それで、てめえもこの——」

「お前も仲間に入れてやるよ」、つてか？マジでそういう三下の台詞言おうとするヤツ初めて見たわ。すげー、ちよつと感動したまでである」

「——……」

顔を引き攣らせ、どこまでも呑気に振る舞う大男へ睨む力を強くしていく。

大男はこちらが睨みつけている事など何処吹く風といった顔で、今自身を取り囲んでいるゾンビ達の様子を再び見回した。

「あー、サブマシンガンでもありや楽出来たんだが……ま、しゃーねえ。いいぜ、来いよ」
「……なに？」

「来い」 つつってんだよ。俺を殺るつもりなら、くつちやべってねーでお前のコマだかタマちゃんだか動かすべきだろ。実は俺こう見えて忙しいの、さっさと終わらせてえの」

「……テ、メエ……ッ」

状況が見えないままに挑発してきているつもりとしか思えない程、大男は傲岸に振る舞う。準備でもする様に首を左右に振り、両手の指の背を交互に掌に当て、死人の集う場の空気にすぐわぬ軽快な音が鳴り響く。

まるで恐怖を見せない目の前の大男の様子に神経を逆撫でされて、ついに我慢の限界が訪れる。呼び出したまま制止させていたゾンビ達を支配下に置き、右手を胸の前まで上げる。

この状況で下すべき指示は、ただ一つしかない。

「——殺せエツ!!」

手を広げ、大声でゾンビ達全ての本能を解き放つ。肉を喰らい同族を増やそうとする本能のままに、ゾンビ達は大男へと殺到し——ようとした。

「だアらっ!!」

大男が瞬時に真後ろへ振り向き、体を回転させる勢いのままに後ろから襲いかかるゾンビへ跳び掛かり、空中で回し蹴りを放つ。

体を回す・前方へ跳ぶ・足を振る、三つの要素を一挙動に合わせて生み出された力が後ろにいたゾンビの胴体へ突き刺さり、蹴られたゾンビはくの字に体を曲げながら横へ吹き飛ばされた。

大男のあまりの蹴りの威力に、吹き飛ばされたゾンビの死して腐っていた体は蹴られた場所から中心に崩れ落ち、地面に打ち付けられる衝撃によりただ閉じ込められていただけの黒い血液が崩れた部分から吐き出される。

「げ、気持ち悪っ」

大男は反対の足を地面に打ち付け、それを軸にゾンビを蹴り飛ばした勢いを留める。着地して手提げ袋を後ろへと放り、足をこちらへ向け直す時間の間に、大男の前方からゾンビ三体が並び同時に近寄って行く。

大男は左真横に小さくステップを刻み、左側のゾンビの足を蹴手繰る。足の浮かし始めを鋭く蹴り飛ばされた事で左側のゾンビはバランスを崩し、そのまま地面に前のめり

に倒れた。

倒れ込んだゾンビの体が障害となり、大男を追う二体のゾンビの足が一瞬止まる。その瞬間を見定め、大男は体を傾けながら屈み、足を止めたゾンビへ目掛け体を一気に真横へ伸ばし、無防備な顎へ自身の右足底を打ち込んだ。

「つしやあ、うらッ！」

その力のままにゾンビの頭は空へ向けて吹き飛び、遅れて体が引かれて浮き上がる。蹴り飛ばされた体は隣にいるゾンビに当たり、二体はまとめて地に転がる。

蹴手繰りを受けたゾンビが大男の足元で蠢き、手を伸ばして地面に在る軸足の足首を掴もうとする。が、それよりも早く大男は瞬時に体の向きを直して右脚を地面へと引き戻しながら、それと同時に左足を上げる事でその手から逃れる。

右脚が地面に付くと共に、高く上げられた左踵の軌道が頂点に達した所で勢いを翻す。脚力に重力が合わさり、そのまま掴もうとしたゾンビの後頭部へ向けて踵が叩き込まれた。

辺りに不自然に高い音が響き、ゾンビの頭が不自然に凹む。倒れたゾンビは最後にびくりと体を大きく一度だけ痙攣させ、そのまま臥した。

「あー、そいや蓮がゾンビの対策とか教えてくれた事もあつたな。なんだっけ？」

大男がふと思ひ出した、とでも言うように訳の分からない独り言を漏らす。

その間にも倒れたゾンビ達を避けて、新たに二体ゾンビが大男の両側面から、一体が背中から回り込んで近付く。それを一瞥した大男は一步後ろへと下がり、体を右へ大きく捻る。

「ま、いつか。——つつおらアツ!!」

捻った体を逆方向に回転させ、その勢いのままに左から近付くゾンビを右脚で、後ろにいるゾンビを左脚で、右から近付くゾンビを右脚で。蹴り足と軸足を高速で切り替え、一回転が終わるまでの間にそれぞれの胴体を蹴り飛ばしていく。

腰を入れず勢いのままに外回し蹴りと内回し蹴りを交互にこなす事で、体の回転の失速を最低限に抑え、大男は一瞬にして近付いて来る三体のゾンビを一瞬の辻風の如く蹴散らした。

「……うそ、だろ」

「コオツ——オイオイどした、こつちは手も使わずにやってやっつてんだぞ。まあ触りたくねーだけなんだけど」

「て、めッー!」

余裕を表すように大男は片側の口角を上げながら、力を入れていない両手をひらひらと地面へ向けて横に振り、さらに挑発してくる。“自分の方が圧倒的に強い”とでも言いたげなその様子が、さらに神経を逆撫でていく。

目の前にいる大男は見た目以上に危険だ。ゾンビに一切臆さない事もさる事ながら、一流の格闘家の様にまるで隙が無い。まともにやるだけではダメだと確信し、自身のゾンビ達に再び指示を飛ばす。

無事なゾンビ三体を大男と自分の間に横に並ばせ、倒されていたゾンビが再び立ち上がる。

「……あん？ありや、浅かったか？」

「バカが、そいつらは元々死体なんだ！どれだけ殴っても動かせるに決まってるだろ……！」

「ああそつか、そりやそうだな。やべーどうしょ、さすがに木っ端微塵にすんのは抵抗あるなー」

大男を警戒しながら、傷の無いゾンビの足をその場に止め、地面より立ち上がった六体のゾンビを逃げ場を封じるように徐々に近寄らせていく。

先程の様に囲みながらも数を分散させては再び蹴散らされるだけだ。それを悟り、ゾンビ二体を三組に分けて動かし、片方は前に出ているゾンビの背面斜め後ろに配置させている。

近寄ってきた所を回し蹴り一つでまとめて吹き飛ばすなら、背面に位置しているゾンビを近寄らせる。前蹴りで大きく突き飛ばすなら、他の二組を近寄らせる。自身へ強行

突破を仕掛けてくるのなら、前に固めたゾンビ達を盾にして凌ぐ。

どれだけ男が屈強でこちらの襲撃を凌いだとしても、動きを止める事の無いゾンビ相手にいつまでも体力が持つ事は無い。絶えずゾンビを動かし続ける限り、いつか必ずその体は捉えられる。

このふざけた男は確実にここで殺し、駒にする。そのつもりで、口を歪める。

「あー！そうだそうだ、思い出した！」

「……？」

ゾンビの群れに躰り寄られながらも、それでも一切表情を険しくしていない大男が唐突に顔を明るくしながら、拳を掌に置いて軽い音を出す。

今度は何をする気なのか。大男の動向を見逃さない様にしながら、ゾンビの間合いに届いたなら一気に襲いかからせるつもりで、大男の行動を待った。

「いやさ、知り合いにこういうの変に詳しいヤツがいてさー。前に聞いたんだよ、『ゾンビってなんで動くの？死んでんなら体動かす脳も動いてねーじゃん』って」

「……はあ？」

「そしたら蓮の奴えらいウツキウキで解説し始めてなあ、ゾンビの成り立ちから生態までえらい早口で説明してきたんだよ。口挟む余裕も無かったんで、そんな時は黙ってテキトーに聞き流してたんだけど。まあちよつとも面白いって良かったわ」

「……………」

うんうん、と腕を組んで顔を縦に振る大男は、今にも襲いかかれそうという状況に全くそぐわぬ様子で過去を思い返している。というか、詳しい知り合いって何だ。まさか、この大男も魔術師なのか。

そう思い改めて注視しても、神秘を追う時間があるならばその全てをジム通いに費やしているのではないかと思わせる程に筋骨隆々な大男の見た目は、全く裏側へ身を置いている者には見えない。

こちらが怪訝に思っている間に、大男が言葉を継ぐ。

「転がったまんまのソイツ見て思い出したわ。『脳が指示を出すんじゃなくて、脳“へ”指示を出しているのよ。死にかけの状態のまま保持されている脳に対し、魔術によって付与された外付けの汚れた魂や、あるいは操る術者の指示を魔術により届け、それを受けた脳が体が動かす。まあ、簡単に言えばラジコンよ』——つてさ」

大男が指を立てながら「知り合い」の言葉を思い出すように、その図体に似合わぬ口調でかつて聞いただろう言葉を繰り返す。ゾンビの動く原理など特に気にもしなかった男にとって、それは初耳の事だった。

『脳が腐りかけているからそれに伴いゾンビは自然と動きも鈍くなるし、脳に破損があればその分体は動かさなくなっていくのよ』。まあ、つまりは——」

指を回して蘊蓄を自分のもののように語る大男へ、さらに一步周囲のゾンビがゆつくりと近付こうとする。その前に出された足が地面に触れた瞬間、大男はそれを見もしていないにも関わらず、自らの速度を瞬きする間にゼロからトップスピードへと変え、横から迫る一組のゾンビへ向けて弾かれた様に跳びかかった。

「——頭力チ割りやいいんだ！」

指示の魔術を出すよりも速く、巨軀が空を昇る。体が宙で左へと回り、右脚が顔面へ打ち込まれて吹き飛ぶよりも先に一瞬遅れて左の踵が傾いたこめかみへと届いた。

一つの音と錯覚する程の短い間隔で連続した鈍い音が響き渡り、重なる二つの衝撃がゾンビの首へと伝わり、そのまま押し折られる。曲芸染みた豪脚が地に付くと共に男は体を沈ませ、その勢いのまま手を地面に付いて体を回転させる。

後ろへ待機していたゾンビが被さるように襲いかかるも、それよりも早く男の体が屈んだまま回り、地を擦る右の水平蹴りがゾンビの足へと届く。蹴り飛ばされたゾンビの体が、踏ん張るという意志も見せずに逆へと倒れようとする。

「まだだっつの！」

大男は両手を地面へついて、倒れそうになるゾンビへ背を向けながら左脚を跳ね上げて胴へ打ち込む。それだけでゾンビの体は倒れる事すら許されなまま宙に浮き上がる。

そのまま大男は手を軸に体を起き上がらせながらも、その向きを浮いたゾンビの正面へ戻す。体が起き上がり切るよりも先に、姿勢を横にしたまま地に引かれるゾンビの頭部へ向けてミドルキックを放ち、頭部を捉えた脚をそのまま地面へ叩き付けた。

地面に杭の如く打ち込まれたゾンビの首はあつてはならない方向へと曲がり、少しして力を失った頭から下の体全てが地に沈む。死したまま動かされる体は直後に僅かに腕を痙攣させるも、すぐにその力すら失われた。

「フウウ——ツシ。たまにや足技も悪かねーな。今度館長と仕合う時まで練習するかね」

「あ……ああ……う？」

目の前の光景が信じられない。目の前の大男はゾンビや魔術にも一切物怖じせず、死者とはいえ人型である相手に対し、一切の迷いも容赦も見せないままに命を潰す程の暴力を振るっている。

それを可能とする膂力は確かに尋常では無いが、行動自体に不明瞭な所は無い。問題は、それを何食わぬ顔で自らの意志で行い続けるという大男の頭の中だ。

相手がゾンビとわかっているとはいえ、“人を自らの手で殺す”という行動に対して何も感じる所を見せていない。

狂っている。自分の事も柵に上げ、トレンチコートの男はそんな感想を抱いた。

「しっかしゾンビってーのは脆いな。頭砕くまで動くつつつても、組手相手にもなりやしねえ。……なんか萎えたな、こっからは練習相手にするか」

「ひ、ひいつ……い！」

「あ、そうだ、そこのお前。なんか魔術撃てるならそっちも頼むぜ、正直魔術対策って俺よく知らんからな。実戦形式で練習出来るんなら願ったりだし、ワンチャン俺も殺せるかもだし……これこそウインウイン、つて奴だな、ウン」

真顔でそんな事を言ってくる大男が怖くて仕方が無い。魔術師でも無いただの男が、こちらを完全にただの練習相手と見定めてこちらに軽く声を掛けていているというだけの事が、男の口を震えさせる。

頭を蹴り砕かれたゾンビ三体は、どれ程思念を飛ばしても既に動かせなくなっていた。包囲した状態でも指すら触れられなかった男を、手数が減った今の状況でどうにか出来る気がせず、何よりも既に大男の持つ、今この状況は日常の一コマに過ぎないとも言おうような穏やかな雰囲気、気圧されてしまっていた。

「……オイオイ、その調子じゃゾンビ以外手え無いの？はあ、それなら諦めんのもしやーねえか。多分内側に持つてるゾンビ毒のナイフなんざ、知ってりや当たるワケねーしな」

「ッ!？」

「お、マジで持ってたのか。さすが政次郎曰く、その内使えるムダ知識”。蓮のドヤ顔に付き合わされる手間と大体同じぐらいの価値はあんな。つーか情報のアドでマウント取んのちよつと気分いいかもしれん」

ゾンビを増やす為に懐に隠し持っているナイフへ藁を縋る様に手を伸ばした所で、男の指摘が突き刺さる。

ゾンビ毒とは魂の感染症の様な物であり、大元の毒を体に打ち込めるのならば、その手段が飲み物に仕込んだ物であっても、ゾンビの口内であっても、今手を伸ばそうとしたナイフであっても、等しく同様に相手をゾンビと化す事が出来る。

しかしそれは結局の所、ゾンビの手数で押すか不意を打つかの二つしか手が無い事を意味する。影の魔術を手に入れてからはひたすらゾンビを増やす事だけを考えていた自分に、それ以外の手は残されていない。

自身の手が全て見抜かれている以上、もはや勝機は万に一つよりも低い。逃げ出したくとも、自身の影をゴミ捨て場の影に繋げる為に自分の後ろは壁となっており、目の前には大男が立ち塞がっている。

「……ふーん、随分と逃げたそうだな。けどダメだぞ、まだ俺満足してねーんだから。俺の脚技の実験台を最後まで動かしてもらわなきゃ困るぜ。俺が困る」

「あ、あぁっ……」

「逃げたら殺す——のはちよつとめんどいし、その手前ぐらいの思いをさせる。まあ俺も政次郎^オじゃやねーからな、抵抗出来なくした上で指一つ一つ折るぐらいで勘弁してやるつもりだけど、アレめっちゃ痛いぞ？ オススメはしねーな」

もはやゾンビを動かす気すら折れそうになつていゝ所へ、大男はこちらを淡々と恐喝する。

口の震えはもはや歯を鳴らす程の大きさとなつており、人生で初めて感じる“狩られる立場”に対する恐怖が本能から湧き上がり続ける。もはや自分に、選択肢は残されていない。

万に一つを、神へ祈る。神などこれまで信じてもいなかったのに、この時だけは都合良く自分に味方する存在を信じたくて仕方なかった。

「ッ、やれえええっ!!」

「ッハ、上等おっ！」

自棄になり何も考えず、ただゾンビ全てを一斉に大男へ向け襲い掛からせる。

大男はそれに、玩具を与えられた様な顔で応えた。



「——終わりか。つたく、これじゃ館長んトコの道場に殴り込みかけた方が楽しめたかもな。……つつつても、今あの人館長辞めてるしな。流石にジョークで済みそうもない

し、素直に組手頼んだ方がいいかね」

周囲に自分以外の影が既に立っていないゴミ捨て場にて、大男——十三は、ゾンビを使ってきた魔術師の気絶した胸倉を片手で掴みながら、靴に付着したゾンビの体液や血を地面に擦って落としていく。

もはやゾンビはその場に居らず、辺りには頭を砕かれた死体のみが乱雑に転がされているだけとなっていた。ゴミの臭いと死体の放つ腐臭が混じり、その場には澱んだ死の空気が重く佇む。

既に意識を失っている魔術師の体へ向け、十三は一つ溜息をぶつけた。

「はあ。ったく、オイタするならもつとマシな術とか情報とか集めろよな。この辺で動くとなりや、ちつと調べりや政次郎とか蓮^ハが出るって知られてそうなモンだが……そういう意味じゃお前随分運が良かったな。ほれほれ」

十三は魔術師の胸倉を揺すりながら、強引に頭を前後に振らせる。何も聞こえてはいないだろうが、それでも無反応の相手に話し続けるのはちよつと寂しいので、ポーズだけでもそれらしくさせた。

「まあサンドバッグよりは蹴り甲斐あった、かねえ？動きはシヨボかったが形は良かったし、本気で蹴れたし。……あ、つーかここの処理どうしよ。政次郎——はダメだな、なんかネチネチ言われそう。蓮にでもメールしとこ」

左手でズボンのポケットから電話を取り出し、カメラで周囲の状況と魔術師の顔を写した後、今の位置情報と今撮った写真を蓮宛に開いたメール画面で添付する。『なんか遭遇した、処理頼む』と一言だけを打ち込んだ後、送信した。

蓮のセーフハウスからの距離を考えれば少し時間はかかるだろうが、夜が明けるまでには間違いなく辿り着けるだろう。自分は傭兵ていびであり、後処理は蓮や政次郎に任せる方が楽だし、それが筋というものだ。

人氣が少ないとはいえ誰かが通りかかることも考えると、この倒れたヒトガタしかない状況は大変目に悪い。十三は魔術師から手を離し、適当に地面に転がっている死者達を、出来る限り丁寧ていねいに蹴り転がして隅に寄せる。

その上に膨らんだゴミ袋を被せ、大型の粗大ゴミを動かして影を作る。腐臭も混ざり、余程の酔狂な人間でも無ければこの場を探ろうとは思わないだろう。一時凌ぎに過ぎないが、蓮が来るまでの間ならこれで十分な措置だ。

「ほい、これで終わりよ。……まあなんだ、散々暴れたんだし満足はしたろ。蓮がどうするか知らんけど、ド悪人がこの程度で済まされるんだから、ヤな世の中だぜ」

魔術師も同様にゴミ袋の海に沈め、その上から特に臭いゴミ袋を選んで被せていく。ついでに重めの家電を動かし、呼吸に支障を起こさせない程度の角度にしてゴミ袋の上へと乗せた。

人の営みの中から外れた者の身の程にはそれなりに合った有様だろう。こんな事をした所で何一つとして得られる事は無いし、死者の意志を代弁したと思えば上がるつもりも毛頭無いが、霧がかかりかけた心の気晴らしにはなった。

「……さて、と。やる事はやったし、急ぐか。被害者には悪いが、俺には俺の生活があるんでな。シスターじゃねえけど、道中で祈るだけはしといてやるよ」

最初に地面へ放った手提げ袋を背負い、何事も無かったかの様に十三は踵を返す。

ゴミ捨て場の腐臭より抜け出て、真つ当な道の空気と肺の中の空気を入れ替える。

雲に遮られた先の星々へと顔を向け、目を瞑りながら十三は道の先へと歩いていった。



「伊達さんですね、一時間遅れです。延滞料お願いします」

「いやその……スンマセン。その、ちよつとそこでオヤジ狩りに遭いまして……あ、ウソじゃないんです、マジなんです」

「……というか、なんですかこの匂い？……うつ」

「その、ゴミ捨て場まで連れ込まれまして……決して俺が不潔とかそういうんじゃないで、いつもはもつと隅々まで洗ってるんで。その、これもウソじゃなくて、決して俺の体臭じゃないという事だけは理解して欲しくて」

「……………」

「……………スンマセンした」

その後十三は、カウンターから身を離して鼻を摘み眉間に皺を寄せ続けるビデオシヨツプの店員に対し、体を小さくしてただ謝り続けた。